

六道頌 (Ṣaḍgatikārikāḥ) の研究
— 梵蔵漢巴 対照テキスト —

岡野 潔

南アジア古典学 第13号 別刷
South Asian Classical Studies, No. 13, pp. 1-164
Kyushu University, Fukuoka, JAPAN
2018年7月 発行

六道頌 (Ṣaḍgatikārikāḥ) の研究 — 梵蔵漢巴 対照テキスト —

九州大学 岡野 潔

第 I 部 SGK をめぐる諸問題

1 新たな SGK 研究の意義

梵文『六道頌』Ṣaḍgatikārikāḥ (略号 SGK) は全105偈から成る韻文の、小乗仏教に属する作品である。聖典たる三蔵に属さない、個人の著作であるが、アジア仏教における古典的4大言語、梵蔵漢巴による4種テキストがほぼ完全な形で伝わっている点で、珍重すべき作品である。その作者の名は、梵漢巴の伝承によれば Aśvaghoṣa (馬鳴, Pāli Assaghosa)、蔵訳の伝承では *Dhārmikasubhūtiḥoṣa (Chos ldan rab 'byor dbyangs) であるとされる。

梵文 SGK に関する唯一の総合的な研究は Paul Mus (1939) である。Mus は SGK の蔵漢巴 (チベット語・漢文・パーリ語) の訳を参照しながら、1本の梵文写本に基づき、SGKの校訂・仏訳・研究を行った。Musの研究の出版後、梵本 SGK についてまとまった研究は出ていない。

本論文はその Mus の研究を受けて、新たに梵文 SGK を中心とした文献研究を行うものであるが、そのわけは、次に述べる四つの点で Mus の研究を補える見通しがついたからである。第一に、Mus の梵文校訂をやり直すための材料として、新たな梵文資料が見つかったこと。それによって新たに梵文テキストを校訂することが出来る。第二に、SGK の蔵訳について Mus が行わなかった全文の校訂テキストを作成すべきである。Mus はナルタン版と北京版だけを見て、部分的に報告しているが、他の諸版を参照することにより蔵訳の全偈の校訂をすることが出来る。第三に、SGK には宋代に作られた二つの漢訳 — 日称等訳『六趣輪廻經』と法天訳『佛說六道伽陀經』 — があり、その二つは Mus も参照しているが、そのほかに二つの漢訳作品が SGK と密接な関係をもつ作品として重視されるべきことがわかったこと。その2本の漢訳の作品とは、漢訳『分別業報略經』と漢訳『仏說分別善惡所起經』の後半の韻文部分である。その2漢訳は SGK の姉妹版というべき作品を古い時代に訳したものであって、その2漢訳を参照することが SGK 研究に大きな意義をもつことを Mus は気づかなかった。Mus の研究では漢訳の調査が不十分であったので、『六趣輪廻經』・『佛說六道伽陀經』・『分

別業報略経』・『仏説分別善惡所起經』韻文部分の4漢訳の、SGKの偈との対応関係を明確にすることによって、新たな知見を得ることが出来る。また『大智度論』とSGKの関係もMusは気づいていない。第四に、新しいパーリ語訳の校訂テキストを作成すべきこと。Musの研究においてLéon Feer (1884)のパーリ語テキストを改善するために様々な写本の異読調査の努力が積極的になされたが、Musはパーリの読みを改善する提案を梵文に対する脚注として記すだけで、パーリの全文の校訂テキストを示さなかったことは、その研究に不便であった。梵文の新たな校訂に合わせて、新しいパーリ語の校訂テキストを作ることが必要である。

本論文は以上の四つの点からSGK研究に貢献を行う。私は第II部で梵文と蔵訳とパーリ語訳のそれぞれに校訂テキストを作成し、それに諸漢訳を加えて、比較しやすいように偈ごとに梵蔵漢巴を対照させた形でテキストを示す。また梵文からの和訳も付す。

2 Léviが見つけたSGK梵文写本

前述のMusの研究で梵文SGKの校訂に用いられたのは、Sylvain Léviがネパールで見つけた1本の梵文写本の写しである。仏典の中で特に馬鳴の著作に強い関心をもっていたLéviは、日本から帰仏の途中にあった1928年9月の短いネパール滞在において、写本調査のためにカトウマンドウのDurbar Libraryを訪れた時、とても小さな体裁の貝葉写本を見た。その写本は10葉で、中身は断片的な作品も含めると7つの小さな作品から出来ていた。そのうちの少なくとも6つの作品がどれも馬鳴に帰せられる短い梵文の作品であることをLéviはやがて気づくことになる。その6つの作品とは(1) *Gurupañcāśikā*、(2) *Sattvārādhā*、(3) *Mūlapattisaṃgraha*、(4) *Sthūlāpatti*、(5) *Daśākuśalakarmapaṭhāḥ*、(6) SGKである⁽¹⁾。第7の作品は韻文であるが最初の冒頭部分しか無いため、作品名は不明のままである。Léviが見たその「馬鳴小著作集」というべき写本は*Gurupañcāśikā*のテキストから始まっていたが、図書室で写本を広げて、その写本の中身を検討したLéviの最も注意を引いたのは、その「馬鳴小著作集」の最後の、SGKの梵文テキストであった。その馬鳴の作品についてすでに知識を持っていたLéviはその発見を喜び、さっそく手配して、その写本から写し(copie)を作らせた。写本のこの写しはLéviの弟子であったSherrilによって作られ、その複写はLévi自身によってチェックされて、写しの正確さが確認されたという⁽²⁾。

1 S. Lévi (1929), "Autour d'Aśvaghoṣa", *Journal Asiatique*, 1929, II, pp. 256-257.

2 Mus (1939), p. 215.

S. Lévi はパリに戻ると、SGK の梵文が発見されたことをさっそく1928年の『アジア協会誌』(*Journal Asiatique*) の論文に報じた。その SGK 写本の写しは、その論文が印刷される直前に Lévi の許に届いた。また同じ貝葉写本の前半を占めていた、*Gurupañcāsikā* から始まる他の馬鳴の諸作品も、写本からの写しが1929年11月末に届き、Lévi はすぐにそれら 5 つの小作品の梵文テキストと仏訳を、1929年の『アジア協会誌』に公表している。

このように SGK の梵文写本の写しは Lévi の計らいによって1928年にパリに届いたものの、そのテキストの本格研究には他の馬鳴の小作品よりも時間がかかった。Lévi が見つけた SGK 写本にはテキストが大きく欠けている部分があり、欠けていない部分についても、写本の写しをローマ字に転写し仏訳するだけでその研究をすませるわけにはゆかなかった。きちんと SGK の梵文を校訂する必要がある、そのためにはその作品のパーリ語とチベット語と漢文の翻訳を注意深く検討する必要があった。特に SGK のパーリ語訳 (*Pañcagatidīpanī*, *Chagatidīpanī*) のテキストについては、入手可能な限りの多くの写本を見て調べ直す必要があった。その研究は弟子の Paul Mus に託された。Lévi が1935年に亡くなった後、Mus はついに1939年に SGK の研究を完成させて公刊した。この研究が今に至るまで唯一の梵文 SGK の研究となっている。その Mus の著作には『六道を照らす光』というタイトルが付けられた³⁾。

さて Lévi がネパールで発見したその唯一の SGK の梵文写本には、作品全体の 5 分の 1 に及ぶテキストの欠損があった。写本の最初の部分が大きく欠けており、第22偈までの部分が失われている。そのため Mus (1939) は、唯一の写本に欠落していたその部分については、梵文の代わりに、相当するパーリ語訳の偈頌のテキストを示すしかなかった。SGK 写本はそうのように冒頭部が大きく欠けていたばかりか、全体的にかなり傷んだものであったようだ。Mus のテキストを見ると、第50偈の箇所も梵文を得ることができずに、相当するパーリ文で代替している。また第45偈や第47偈の箇所なども、偈頌の大部分の文面が不明であるため、カッコをつけて梵文を推測している。

このように Lévi の見つけた写本が欠損本であったため、Mus の本で SGK の梵文テキストが開始されるのは23偈以降である。その後今に至るまで、これまで公刊された種々のネパール写本目録を見る限り、Lévi が Durbar Library で見つけたその 1 写本以外に、別の新たな SGK のネパール写本は発見されていない。そのためこれまで学界は

3 Mus の本のタイトル *La Lumière sur les Six Voies* は SGK のパーリ語伝承テキストの作品名である *Chagatidīpanī* を仏訳したものである。*Chagatidīpanī* を梵語に戻すと **Ṣaḍgatidīpanī* になる。梵文 SGK の研究でありながら *Chagatidīpanī* を研究書のタイトルにしたわけである。Mus はその作品名を梵文 SGK の別名と見なしたのであろう。**Ṣaḍgatidīpanī* という名称がインドでも使われていたかどうかは不明である。

SGK の梵文テキストを、Lévi が見つけた写本からの写しに基づいて Mus が校訂した限りでの、欠損したかたちでしか知ることが出来なかった。

3 新たな梵文資料の発見

SGK 梵文の新たな校定を中心にした今回の私の研究のきっかけになったのは、新たな梵文資料の発見である。私は2017年6月に SGK ではない別の作品のネパール写本を読んでいる時に、その作品の中に SGK の梵文テキストがそっくり伝承されており、その作品から SGK のほぼ完全な梵文テキストを得ることが出来る事に気づいた⁴⁾。Lévi 写本の欠損によって失われたと思われていた SGK の冒頭の22偈までの箇所も、第1偈以外は、それによって埋めることが出来ることが判明した。

その私が読んでいた別の作品とは、ネパール撰述の梵文アヴァダーナ集成『善説・大ラトナ・アヴァダーナマーラー』*Subhāṣitamahāratnāvadānamālā* (略号 SMRAM) であった⁵⁾。そのSMRAMの第21章として、232偈から成る *Pāñcālarāja* という名のアヴァダーナがあり、そのアヴァダーナの中では、釈尊が長い説法をなされる。その説法は業報についての話であるが、読んでみるとその説法の中身が SGK のほぼ全文のテキストの引用で出来ていることがわかった。

このように意外な分野に属するテキストからの発見であったが、梵文 SGK が其処に埋もれているというこの事が、これまでなぜ学界で気づかれずにきたのか、少し不思議でもある。なぜなら私が読んでいた SMRAM の第21章であるその *Pāñcālarāja-avadāna* の梵文テキストは、高島寛我が1954年に出版した *Ratnamālāvadāna* というローマ字転写本の中にある第28章（京大の *Ratnāvadānatattva* 写本 A' の第16章）と同一のテキストだからである。つまりローマ字にした形で高島寛我が64年前に日本で出版した本の中に、すでに帰敬偈以外のすべての SGK のテキストが含まれていた。高島自身は——彼は Lévi の活躍した時代にパリに留学した人物で、フランスの仏教学をよく知っていた——自分が転写したのがまさしく Lévi の見つけた SGK のテキストであったことに、遂に気づけなかったようである。彼の出版本にその事の指摘はない。そしてその高島の本が出版されてからも64年の間、これまで学界の誰もがその事に気づかずに来た（私を知る限り）。それはネパールの *avadānamālā* 文献という研究ジャンルが学界で長らく

4 「ほぼ完全な」というのは、最初の第1偈（帰敬偈）だけを除いて、という意味である。この第1偈だけは SMRAM の中に無い。SMRAM における SGK の引用は SGK 第2偈から始まり、最後の偈に及ぶ。合計 104 偈が引用されている。

5 私はこの SMRAM という写本に注目して、これまでその作品の各章の研究成果を『南アジア古典学』の第1号から誌上に発表してきている。*Pāñcālarāja* アヴァダーナの全テキストは次年度の『南アジア古典学』に掲載する予定である。

等閑視されてきた故かも知れない。ただ、過去にもしそこにあるのが SGK のテキストであることに或る学者が気づいたとしても、高畠が利用した京大の *Ratnāvadānatattva* 写本がひどく誤りの多い写本であったので、SGK のきわめて劣悪な読みの伝承を知るに留まり、それだけで SGK の再校定に着手するならば、かなり困難な作業になったことであろう。高畠が利用した京大の *Ratnāvadānatattva* 写本 (Goshima & Noguchi, No. 87; 略号 A') よりもはるかに誤りが少なく信頼できる、SMRAM という別の作品の写本を用いることによって、ネパールのアヴァダーナの中に伝えられた SGK のテキスト伝承を精確に知ることができる。

Ratnāvadānatattva と SMRAM の写本から知り得る *Pāñcālarāja-avadāna* の中の SGK のテキストを、Lévi の写本の写しに基づき Mus が校訂した梵文テキストと比較することにより、SGK の新たな校訂を行うことが、今回の研究の第一の目的である。私は Mus の梵文テキストに欠損している部分を埋めるだけではなく、残りの全テキストについても、校訂をやり直した。この校訂においては、Mus と高畠の出版本のテキストを参照しながら、私は高畠が利用しなかった *Ratnāvadānatattva* の別の 1 ネパール写本 NGMPP E1343/4 (略号 N) と、SMRAM の唯一の写本 (略号 Ms.) を用いた。

校訂を行いながら私が気づいたのは、Mus が利用した Lévi 写本の SGK の伝承と、*Pāñcālarāja-avadāna* の中に組み込まれた SGK の伝承は、同じカトウマンドウ盆地内での写本伝承ではあっても、単純に全く同じ伝承というわけではないということである。両者は確かに或る時代に一つの写本伝承から分かれ出たものであろうが、ネパールで SGK の一つの写本伝承が *Pāñcālarāja-avadāna* の製作に用いられた後、長い間そのアヴァダーナは SGK とは別に、独立の作品として伝承されてきた。20ほどの偈において⁶⁾、両者の伝承は読みが相当違っていることを指摘できる。どちらの読みをとっても、それなりに意味は通じる場合が多いので、その場合は蔵訳・パーリ語・漢訳も参照して、どちらの伝承の読みがより古い読みであるかを校定者は判断することになる。Lévi 写本と *Avadāna* 写本の、梵文の両伝承が食い違う場合、全体的な傾向としては Lévi 写本の読みのほうが蔵訳・パーリ語と一致する形を示すことが多い⁷⁾。

6 SGK 第23偈、27偈、30偈、31偈、41偈、51偈、53偈、54偈、63偈、66偈、67偈、69偈、71偈、76偈、83偈、86偈、96偈、104偈、105偈。

7 しかし判断が難しいケースもある。SGK 第63偈の場合、蔵訳とパーリ語訳が Lévi 写本の読み *yo hi hartā* の方を支持するのに対して、2本の漢訳は否定辞 *na* があるアヴァダーナ写本の読み *yo na hartā* の方を支持する。また第62偈でも、蔵訳とパーリ語訳が Lévi 写本の読み *kṛtair bhūteṣu* の方を支持するのに対して、漢訳 Ch-1 の「鬼魅所著」はアヴァダーナ写本の読み *bhūtaprayuktais* の方を支持する。SGK のネパールでの Lévi 写本とアヴァダーナ写本との読みの違いが、すでにネパール以前に、インドにあった段階から始まっていた可能性を示唆する事例である。

慎重を期すならば *Pāñcālarāja-avadāna* の中の SGK と、Lévi 写本の SGK とは切り離して、それぞれを半ば独立した recension と見なして、それぞれに校訂本を作るべきであるという意見もあろう。理想的には、アヴァダーナの中にある SGK の recension は、もしそのアヴァダーナの写本だけを用いて十分に独立して校訂ができるならば、そうなるべきであろう。しかし実際に作業してみると、それは難しい。両者の伝承にはそれぞれ不完全な読みが多数あるため、両方のテキストを別々に独立的に校訂しようとする立場に固執すると、双方に読みの問題がある箇所が多数残ってしまう結果になる。どちらの現存する写本伝承も、長年の伝承の間に生じた相当数の読みの劣化を免れていないのである。そのため、Lévi 写本とアヴァダーナ写本の両系の写本伝承を用いて、最大限に相互に補い合わせることで、なんとか校訂するしか方法はない。*Pāñcālarāja-avadāna* の中の SGK と、Lévi 写本 SGK との両者の写本伝承の相違は、*Udānavarga* に見られる二つの recension の問題ほどに深刻な性格のものではない。本来は古い一つの伝承から分かれたものであると想定し、両者を用いて古いテキストを可能な限り再現してゆくことは、SGK の校訂において実現可能な目的である。そのため私は二系統の梵文伝承のどちらの読みも公平に扱い、慎重に判断した上で、その読みのどちらかを採った。ただし梵文写本の伝承のどちらの読みを採用すべきかは、蔵訳とパーリ語の校訂テキストも同時に作成しながら、判断されなければならない。梵文の二つの写本伝承がそれぞれ異なる読みを示す箇所では、パーリ語訳と蔵訳がどちらの読みに近いのが判断の根拠となる。また4本の漢文資料も確認した上で、判断した。結果的には Lévi 写本の写しの読みのほうが蔵訳やパーリ語訳に支持されるケースが多かった。2本の漢訳（法天訳と日称等訳）は相当に自由な訳であるので、蔵訳やパーリ文ほどには梵文の校訂に役に立たなかったが、『分別業報略経』は翻訳として質が高く、相当する梵文箇所の理解のためにかなり参考になった。

今回の梵文の校訂に際しては、すべての偈について、パーリ語訳とチベット語訳と諸漢訳の全文を、梵文と一緒に提示することにした。わかりやすく4言語のテキストを対照させて、相互に比較することが可能した形にすることが、梵文校訂のデータ提示のためにも必要であるからである。Mus の出版本では、梵文に問題がある箇所のみ、脚注で蔵漢巴のテキストを挙げて説明しているが、その書き方では調べるのに時間がかかる。パーリ文については全偈で Mus は異読を報告しているが、蔵訳と漢訳のテキストについては、少ししかその文面を脚注から知ることが出来なかった。今回の研究では Mus 本の不便を解消することにした。

4 SGK のパーリ語訳

SGK のパーリ語訳テキストは、ミャンマーで11～12世紀頃に梵文 SGK から翻訳されたと推測される。SGK のパーリ語訳である *Chagatidīpanī* という作品に、学界で初めて

注目したのはロシアの仏教学者 Minayeff であった。彼は Candragomin の *Śiṣyalekhā* に関する論文の中で⁸⁾、このパーリ語の作品について初めて言及した。彼はミャンマーのマングレーで *Chagatidīpanī* の 1 写本の写しを入手し、そのパーリ語の作品が実は梵文から翻訳されたものであることを指摘し、その元の梵文作品の作者は、その写本によれば、Asmughosa もしくは Asamaghosa であると報告した。

Chagatidīpanī の写本からこのように知られた元の梵文の作者名たる Asmughosa もしくは Asamaghosa は *Assaghosa の誤りで、梵語の Aśvaghōṣa (馬鳴、*Buddhacarita* 等を作った 2 世紀頃の詩人の名) のことであることは容易に推測されるため、Sylvain Lévi は、この *Chagatidīpanī* というパーリ語訳の元の梵本が馬鳴菩薩集『六趣輪廻經』(北宋の日称等による訳、大正 No. 726) として漢訳された作品であることを、またチベット大蔵経の中にある蔵訳からその梵語の作品名は *Saddharmasmṛtyupathāna-ṣaḍ-gatikārikā* (『正法念処の六道頌』) であることが知られることを、1925 年の『アジア協会誌』の論文に記した⁹⁾。このように SGK という梵文テキストには漢訳とチベット語訳とパーリ語訳 *Chagatidīpanī* が存在することを指摘した Lévi は、3 年後の 1928 年のネパール旅行でとうとうその SGK の梵文写本を見つけたわけである。

Minayeff によってマングレーで得られたと報じられた *Chagatidīpanī* という SGK のパーリ語の作品は、ロンドンのインド省図書館 (India Office Library) にも 1 写本が存在した。Lévi (1925) の論文を読んで興味をもった F. W. Thomas はその 1 本のミャンマー写本 (B 写本) をパリに送ってあげた。またパリの国立図書館 (Bibliothèque Nationale) には *Pañcagati* という写本があったが、この写本 (M.2 写本) もその中身は *Chagatidīpanī* そのものであった。これら 2 本のほかに、さらにプノンペンに *Pañcagati* という写本があり、その写本 (m.2 写本) も中身は *Chagatidīpanī* であり、Lévi から SGK の研究を託された Mus はその写本の写しを入手した。Mus は彼の梵文 SGK の研究において、こうして合計 3 本の *Chagatidīpanī* 写本を利用することが出来た。

また *Chagatidīpanī* と本来は同一の作品であるが、後に編集の手が加えられて成立した 1 recension として、*Pañcagatidīpanī* というパーリ語の作品がある。この作品はすでに Leon Feer により 1884 年に *Pañcagatidīpana* という作品名で、JPTS 誌上にローマ字転写されたテキストが発表されていた。その Feer (1884) が公表した *Pañcagatidīpana* テキストは、専らパリの国立図書館の写本 (M.1 写本) だけに依拠して作られたものである。*Pañcagatidīpana* という作品名は、後で Mus によって *Pañcagatidīpanī* と修正されることになる。*Pañcagatidīpanī* と *Chagatidīpanī* との recension としての目立つ違いは、前者で

8 *Zapiski vostočnago otdelenija imperatorskago archeoločeskago obščestva*, IV, pp. 29-52.

9 Lévi (1925): "Notes Indiennes", *Journal Asiatique*, 1925, I, pp. 39-40.

は作品の構成が、六道 (chagati) から五道 (pañcagati) に変更されていることにある。パーリ上座部の教理に合わせるため、編集の手によって道 (gati 趣) の数が減らされたのであろう。ただし両者の違いはそれだけではない。*Chagatidīpanī* の写本は註釈がついている (というより、註釈に本文が付いている)¹⁰⁾が、*Pañcagatadīpanī* の写本には偈頌本文のテキストしかない。また本文の偈頌テキストの読みが両者で微妙に違うことが多い。また *Chagatidīpanī* の現存する写本からは本文の偈頌テキストの全部を得ることは出来ず、本文全体の三分の二しか得られないが、*Pañcagatadīpanī* の写本からは偈頌テキストの全部が得られる。Mus によれば、*Pañcagatadīpanī* の写本としては、Feer の利用した M.1 写本のほかに、プノンペンにも *Pañcagatadīpanī* の 1 写本がある。Mus は S. Karpelès の助けによりそのプノンペン写本の写しも利用することが出来た。

このように Mus (1939) の研究は 2 本の *Pañcagatidīpanī* (M.1, m.1) と 3 本の *Chagatidīpanī* (B, M.2, m.2) のパーリ語写本や写しを用いて、それらのパーリ語テキストの異読を報告することで、先に Feer (1884) が *Pañcagatidīpana* という (誤った) 名称の作品として発表した SGK のパーリ語訳テキストの読みを大きく改善しようとした。Mus がこのようにパーリ語の諸写本を丁寧に読んで、異読の報告を行ったことは、パーリ語版の新校定を作るための礎石となるものである。

Pañcagatidīpanī の英訳を行った Hazlewood (1987) は実際にその Mus (1939) のパーリ語写本の異読報告を根拠にして、Feer 本を修正しながら読んで見せた¹¹⁾。ただし Hazlewood は *Pañcagatidīpanī* という 1 recension の読みだけにこだわってその英訳を作成した

10 *Chagatidīpanī* への註釈 *Chagati-aṭṭhakathā* は、パーリ文 *Lokapaññatti* (『立世阿毘曇論』の梵語原典からのパーリ語訳、11-12世紀頃) よりもやや後にミャンマーで成立したと思われる作品で、六道を地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人・神の順で各節で説明し、各節の最後に *Chagatidīpanī* の偈を出して解説する。この註釈においては *Lokapaññatti* から — ただし現存の諸写本のものと少し異なる *Lokapaññatti* の 1 ヴァージョンからか、あるいはその梵語の原本からかは不明だが —、長文のテキストを借用している。Denis, I, pp. XL-XLI を参照。この *Chagati-aṭṭhakathā* は、*Lokapaññatti* の中に付加挿入されているパーリ語の六道輪廻に関するテキストを、*Lokapaññatti* のものと全く同じではないが、有している。その六道輪廻に関するテキストは『立世阿毘曇論』には無いので、ソースが不明であり、一体 *Lokapaññatti* のパーリ訳の作成者 Saddhammaghosa が自ら編集者として、『立世阿毘曇論』の梵語原本に基づく「地獄品」のパーリ語訳 (*Lokapaññatti*, XIV (1) 章) の後に追加する形で、その六道輪廻論のテキスト (XIV (2) ~ (6) 章) を付加したのか、あるいは、そのパーリ文 *Lokapaññatti* が出来る以前にすでに『立世阿毘曇論』の梵文写本が、その六道輪廻論のテキストが付加された形に変わっていたのかは不明である。*Chagati-aṭṭhakathā* の内容梗概は Denis, II, pp. 303-307 にある。今後この浩瀚な註釈に対する本格的な写本研究が望まれる。

11 この Hazlewood の英訳の百年前に、*Pañcagatidīpanī* の仏訳が L. Feer (1883) pp. 514-528 によってなされている。その仏訳は蔵訳からではなくパーリ文に基づいている。

ため、Mus (1939) 中にある *Chagatidīpanī* 写本の読みの報告をほぼ無視する結果になった。このようなパーリ語テキスト内部の新旧の recension の違いにこだわる態度を、梵文 SGK の研究にもちこむことは出来ない。両方の recension のどちらにも、梵本のテキストに極めて近い古い読みを発見できる可能性があるからである。

私は本論文でパーリ語テキストを示すにあたって、*Pañcagatidīpanī* と *Chagatidīpanī* の二つの recension の違いを超えて、それらが提供するパーリの読みがどれほど元の梵文に近いかで新古を判断し、梵文に近いほうの読みを積極的に採用しながら、両テキストを本来一つの伝承から派生したものとして扱った。両テキストの伝承は本来ミャンマーの Thatōn の Saddhammaghosa という僧によって11～12世紀頃に梵本からパーリ語訳された同一のテキストに遡るものと推定されるから、その Saddhammaghosa が作ったパーリ語訳の原テキストは、現行のどのテキストよりも、梵本 SGK のテキストに近いものであったはずである。そのため *Pañcagatidīpanī* と *Chagatidīpanī* の二つの写本伝承のどちらかの読みが、梵本 SGK の読みに一層の近さを示す場合、その梵文に近い形を示すほうの読みを優先させて採ることによって、本来あった Saddhammaghosa のパーリ語訳の原テキストに近づけてゆく努力が積極的になされるべきである。SGK の場合、梵本とその翻訳であるパーリ本は驚くほど似ている。パーリ訳化は無理をせずに自然になされている。両者は言語的な綴り方の違いを除けば、逐語的によく合致することが多い。そのため、パーリ本の校訂のために絶えず梵本が参照されなければならないし、逆に梵本の校訂においても、蔵訳・漢訳と一緒に、パーリ本が絶えず参照されなければならない。つまり梵本とパーリ本においては、両者の校訂作業を同時に行う必要がある。Mus (1939) はせつかく *Pañcagatidīpanī* と *Chagatidīpanī* の両方の写本の異読を苦労して集めながら、両者の写本の古い読みの伝承を統合した一つの新たなパーリの校訂テキストを示すことはせずに、それらの貴重な異読を註に記すだけにとどまったが、それは他の研究者にとって不便であったといわざるをえない。やはり Mus は梵文と対照させて、新たなパーリ語校訂テキストを全偈にわたって示すべきであったと思う。また Piromanukul (2007) が出した *Pañcagatidīpanī* の版は、せつかくタイの多数の写本の異読調査を行いながら、校訂の一手手前で止まっている感がある。そのことを残念に思う気持ちから、梵文の校訂作業と並行して作成した新たなパーリ語テキストの全文を示すことにした。私が今回示すパーリ語のテキストは、Feer (1884) と Mus (1939) と Hazlewood (1987) と Piromanukul (2007) に基づき、それらの異読の報告を丹念に検討して、パーリ本のどの異読が古いものであるか、梵文の表現と近いものであるかを考慮し、自分なりの異読の取捨選択の作業を行った結果、作られたものである。本論文ではそれらの先学の業績から知られるパーリ語のすべての異読を書き出すことはしなかった。特に Piromanukul の報告する異読について、その詳細は彼のタイ語の論文を直接参照してほしい。Mus が利用したミャンマーとカンボジアの写本と Piromanukul が利用し

たタイの写本の両者の報告から、現時点でパーリ語訳の異読のおおよそをつかむことができるが、今後も東南アジアの写本の調査はさらに進められるべきであり、より豊富な異読のデータに基づいて、パーリ語訳の校訂をより完全なものにする必要がある。

なお現行の *Pañcagatidīpanī* のテキストでは、梵文 SGK には相当する偈が見当たらないパーリ本独自の偈として、5, 22-27, 69, 114 偈がある。これらはパーリ語訳の原テキストになかった、後から付加された偈であると思われる。それらの偈を有するため、パーリ本は梵文 SGK よりも偈の数が9偈多く、114 偈ある。つまり 梵文 105 偈 + 付加 9 偈 = 114 偈であり、梵文にあるのにパーリ本に欠けている偈は無い。

またパーリ本で注意されるのは、梵本 SGK と八大地獄の記述の順番が違っていることである。SGK では、等活 (5-6) ・黒縄 (7-8) ・炎熱 + 大炎熱 (9-12) ・衆合 (13-14) ・叫喚 + 大叫喚 (15-18) ・無間 (19-20) の順で並ぶ。それに対してパーリ本では、等活 (6-7) ・黒縄 (8-9) ・衆合 (10-11) ・叫喚 + 大叫喚 (12-15) ・炎熱 + 大炎熱 (16-19) ・無間 (20-21) の順で偈が並ぶ。パーリ本では炎熱 + 大炎熱の位置が無間の前に移動している⁽¹²⁾。

5 SGK のチベット訳

SGK の蔵訳は、偈頌の数や順序が梵本と全く一致する。SGK 蔵訳の訳者は Dharma-kara と Devendrarakṣita である。

12 八大地獄について、パーリ上座部の教学の伝統を見ると、*Nettipakaraṇa-tīkā* は「等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・炎熱・大炎熱・無間、これらが八大地獄である」(sañjīvo kālasuttaṃ saṅghāto roruvo mahāroruvo tāpano mahātāpano avīcīti ete aṭṭha mahānirayā) と説く (Burmese ed., p. 94)。また *Vibhaṅga-tīkā* (Burmese ed., p. 211) の散文の説明でも、八大地獄はその通りの順序である (なおパーリ Jātaka 530話, PTS ed., V, 266 や *Abhidhānappadīpikā* 657 にも八大地獄の羅列があるが、韻文なのでその順番は韻律の都合で入れ替えられており、考慮に入れない)。それらの *ṭīkā* 類の記述から、中世に確立したパーリ上座部の教義学の伝統——その伝統では特に宇宙論の分野は他部派よりも関心が薄かったためにその方面の教義の確立が遅れ、他部派から輸入した宇宙論に頼らざるを得なかった——における八大地獄の順序は、俱舍論世間品58偈釈に見られるような有部が伝承する八大地獄の順番や、法蔵部が伝承する『長阿含』世記經地獄品 (T 1 121c5-8) の八大地獄の順番 (想・黒縄・推圧・叫喚・大叫喚・焼炙・大焼炙・無間) と同じであると見なしうる。一方、梵文 SGK では衆合地獄が出てくる順番が、俱舍論等の伝承に代表される八大地獄の順番とは違っている点に注意される。SGK の八大地獄の並べ方は、*Kathāvatthu* 第23品第3章「自在欲行論」に出てくる八大地獄の順序となぜか、同じである。その文は次のとおり : bodhisatto [...] (1) sañjīvaṃ gacchati, (2) kālasuttaṃ gacchati, (3) tāpanaṃ gacchati, (4) mahātāpanaṃ (v.l. pratāpanaṃ) gacchati, (5) saṅghātaṃ gacchati, (6) roruvaṃ gacchati, .. pe ..., (8) avīciṃ gacchatīti. (*Kathāvatthu*, Issariyakāmakārikākathā, PTS ed., Vol. 2, p. 623).

蔵訳テキストの末尾のコロフォンにある蔵訳タイトルは *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhag pa'i 'gro ba drug gi tshig le'ur byas pa* である。この蔵訳により梵語の作品名は **Saddharmasmṛtyupasthāna-ṣaḍgati-kārikā* (正法念処・六道頌) となる。ただし蔵訳の冒頭の文で掲げる作品名では *ṣaḍgati* (六道) の語が抜けていて、*Saddharmasmṛtyupasthāna-kārikā* と記すが、それでは末尾のコロフォンの蔵訳と合わないので、間違いである⁽¹³⁾。

蔵訳のコロフォンは SGK の作者について、軌範師・大徳・ダールミカ・スプーティ・ゴーシャ *slob dpon btsun pa chos ldan rab 'byor dbyangs* (= Skt. **ācārya-bhadanta-Dhārmikasubhūti*ghoṣa) と記す。Lévi が見つけた梵語写本ならびに漢訳とパーリの伝承は共に作者を *Aśvaghoṣa* 馬鳴とするのに対して、チベットの伝承はこのように *Dhārmikasubhūti*ghoṣa を作者とする点で、独自である。S. Lévi は *Dhārmikasubhūti*ghoṣa の名を馬鳴の別名とみなすことで、この作者の問題を解決しようとする。それはその名を馬鳴の八つの名の一つとする *Tāranātha* の意見⁽¹⁴⁾に基づくものであるが、しかし16世紀の *Tāranātha* のその意見の信憑性を裏付けるための確かな証拠はまだないと言ってよい。馬鳴は龍樹のように、その名で後代に多くの偽作や疑作が作られた作家である。馬鳴を崇拝するあまりに、作品を積極的に馬鳴の名に結びつけたい心情はわからないでもないが、チベット訳では馬鳴 *Aśvaghoṣa* の名を記さずにわざわざ *Dhārmikasubhūti*ghoṣa を SGK の作者として伝えていることは軽く扱われるべきではない⁽¹⁵⁾。

13 蔵訳テキストの末尾のコロフォンの全文を示すと、次のとおりである： *|| dam pa'i chos dran pa nye bar gzhag pa'i 'gro ba drug gi tshig le'ur byas pa | slob dpon btsun pa chos ldan rab 'byor dbyangs kyis mdzad pa rdzogs so || || rgya gar gyi mkhan po dharmā ka ra dang || zhu chen gyi lo tsā ba gt-sang de ben tra rakṣitas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o ||* またその蔵訳テキストの冒頭の文を示すと、次のとおりである： *|| rgya gar skad du | saddharma smṛ ti u pasthā na kā ri kā | bod skad du | dam pa'i chos dran pa nye bar gzhag pa'i tshig le'ur byas pa || dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo ||*

14 Lin Li-kouang (1949), p. 105 及び Appendice VIII "Sur une tradition tibétaine relative à *Aśvaghoṣa*" (pp. 307-313) を参照。また寺本婉雅 (1928)：『ターラナータ印度佛教史』、147頁。

15 SGK の中には *Buddhacarita*, *Saundarananda* などの既知の馬鳴の著作中の詩節と共通するものは無いようである。また馬鳴の詩的な著作に見られる多様な韻律の使用が SGK には見られない。SGK はすべての詩節が *anuṣṭubh* 韻律で作られている。華麗に韻律を使いこなす馬鳴がこのような地味な韻律の作品を作るであろうか。作ったとすれば、SGK が教団の教育用に作られたテキストであるからか。ただ、*Dhārmikasubhūti*ghoṣa (= *Dharmasubhūti*) の方も、馬鳴と同じ様に美文体の詩を作る詩人であった可能性があるため、彼のほうが詩人の馬鳴よりも SGK の作者として適しているとは簡単に言えない。世親が俱舍論世間品釈で引用している **Dharmasubhūti* (法善現) の作った詩節 (ed. Pradhan, p. 124, ll. 11-12; なお 1. 8 の *Dharmasūtra*- とある綴りは *Dharmasubhūti*- の名に訂正する必要がある) は *Rathoddhatā* という華麗な韻律で作られており、その詩節は他の論師たちによって「これは *kāvya* (美文体詩) である」とみなされている。

Mus (1939) の研究は「黒のテンギュル」と「赤のテンギュル」の二つの版を利用して
いる。それぞれナルタン版と北京版のテンギュルのことである。Mus は梵本に問題があ
る箇所では脚注で時々蔵訳を示しているが、蔵訳の全テキストを示すことはしなかった
ので、私は今回校訂した蔵訳の全テキストを初めて示すことにした。

私が利用したのはデルゲ版・北京版・ナルタン版・ガンデン版である⁽¹⁶⁾。またチョー
ネ版は、系統的にデルゲ版を見れば十分と思われるので、私は用いなかった。

チベット大蔵経には SGK の翻訳は 1 種類しか存在しないが、しかしその蔵訳は大蔵
経テンギュルの中では 2 箇所に置かれている。北京版やナルタン版やガンデン版では、
一つは書簡部にあり、もう一つは中観部にある。デルゲ版では、蔵訳は一つは書簡部
にあり、もう一つはアティーシャ小法にある。ただし私はデルゲ版は台北版を用いたた
め、デルゲ版のアティーシャ小法にある次の蔵訳テキストを見ることができなかった。

Derge 版 Jo bo'i chos chung, 82a3-86a3 (Tohoku No. 4502)

この Tohoku No. 4502 以外の、七つの SGK の蔵訳テキストを校訂に用いた。七つの
蔵訳テキストの略号は D, G, H, N, P, O, Q である。

D	Derge 版	Spring yig, Nge 35b3-39a7	(Tohoku No. 4179)
G	Ganden 版	Spring yig, Nge 338b6-344a2	
H	Ganden 版	Dbu ma, Gi 112b5-118b1	
N	Narthang 版	Spring yig, Nge 273a4-277b4	(Mibu No. 3670)
P	Peking 版	Spring yig, Nge 276b3-281a	(Otani No. 5679)
O	Narthang 版	Dbu ma, Gi 89b1-94a1	(Mibu No. 3406)
Q	Peking 版	Dbu ma, Gi, 100b5-105a4	(Otani No. 5415)

私が見たこれら 7 本のうち、Spring yig (書簡部) に属する 4 本 (DGNP) はどれ
も、テキストの第 9～12 偈の箇所が完全に欠けているので、注意が必要である。

6 SGK の二つの漢訳と翻訳者

梵文 SGK に対する二つの漢訳として、日称等訳『六趣輪廻経』馬鳴菩薩集 (大正
No. 726) と法天訳『佛説六道伽陀経』 (大正 No. 725) があり、現存している。Mus も
時々それら 2 本の漢訳を参照している。北宋の時代に日称と法天が同じ作品を別々に
漢訳したのであるが、年代的には法天の訳 (982-1001年) のほうが日称の訳
(1058-1072年) よりも古い。日称によればその作品は馬鳴菩薩の集成によるものであ
るが、法天はこの作品を「仏説」と見なす立場を取ったため、作品の作者名を記さな

16 一応私は中華大蔵経丹殊爾 96 巻も参照したが、96 巻のこの経では、諸版の異読報告の精度は
相当に低いといわざるをえず、そのため中華大蔵経の利用はあくまで参照に留めた。

い。法天が用いた梵文写本には作者の名が記していなかったか、あるいは名が記してあったとしてもそれを編者の名と考えて、最終的な作者を釈尊に求めたのであろうか。

日称等訳『六趣輪廻経』は梵文の各偈を一律に5言4句で訳してゆく方針で作られているので、梵文の偈との対応関係がわかりやすい。漢文の偈の並びを梵文の偈番号の数字で示すと、『六趣輪廻経』は次のような順序で梵文の偈を並べている：

1, 2, 3, 4, 5, ～ 34, 35, 36, 37 (地獄趣竟), 45, 48, 49, 50, ～ 58, 59, 60 (餓鬼趣竟), ??, ??, ??, ?? (畜生趣竟), 61, 62, 63, ～ 69, 70, 71, 76(?), 73, ??, 74, ??, 75(?), 77, 78, ??, 79, 80, 81, ～ 91, 92, 93 (人趣竟), 94 (修羅趣竟), 95, 96, 97, ～ 103, 104, 105 ([天趣竟]).

(注意：ここで～の記号は、規則的に1ずつ数字が増えているので途中の数字を省略したことを示す。また??の記号は梵文の偈と対応しない内容をもつ1偈の存在を示す。また例えば(地獄趣竟)とある表示は、その偈で『地獄の節』が終わったことを示す。)

この数字の並びを見ながら『六趣輪廻経』を説明すると、次のことがわかる。

○ 第1～37偈（梵文の偈番号）の地獄趣の節と、第95～105偈の天趣の節では、梵文と漢訳は順序が全く一致し、漢訳に偈の抜けは無い。

○ この漢訳では梵文と違い、地獄趣の直後に餓鬼趣の節が来るので、第37の直後に第45が来る。第45から餓鬼趣が始まるが、餓鬼趣では第46と第47の偈が欠けている。

○ この漢訳では第60で餓鬼趣の節が終わるが、その後に畜生趣の節が来る。畜生趣は四つの五言四句の偈から成るが、それら4偈はどれも梵文と対応しない独自の偈である。梵文は畜生趣として第37から第44までの合計7偈をもつが、それらは全く訳されず、その代わりに別の抽象的な内容の4偈が置かれているのである。このように畜生趣では漢訳と梵文は全く対応しない¹⁷⁾。

○ 第61偈から人趣の節が始まり、第71までは偈が規則的に並んでいるが、その後、76(?), 73, ??, 74, ??, 75(?), 77, 78, ??, 79, と、混乱がある。この箇所では漢文の元の梵文は恐らく現存する梵文と少し違っていて、若干再編集の手が入ったテキストであったと思われる。私が??の記号で示した、梵文と対応しない偈がここに3偈あり、また第76(?)と第75(?)の箇所は偈の内容の半部分が梵文と合致しない。

○ 修羅趣が第94偈としてあり、それがこの漢訳では人趣と天趣の間に置かれているのは、梵文の通りである。

以上が日称等訳『六趣輪廻経』の、梵文との対応関係である。

17 私はこの『六趣輪廻経』の畜生趣の節の箇所が、漢訳の元の梵文で違っていたとは思わない。むしろ漢訳者が何らかの事情により梵文の7偈を忠実に訳すことを放棄し、代替の4偈を作成したのではないかと推測する。

次に法天訳『佛説六道伽陀經』を見てみよう。この『佛説六道伽陀經』の場合は、梵文の1偈を5言4句で訳すとは限らない。基本的には1偈は4句で訳すが、しかし1偈を5句、6句、7句や8句で訳したと思われる箇所もある。これは4句で訳す形式を守っていると偈の内容が十分に伝えられないことがあるため、形を破っても梵文の偈の内容をよく伝えるために句数を追加して訳したと考えるべきであろう。しかし4句で訳す規則を時々破る自由さでは、偈をどこで切って読むのかが所々問題になる。資料で私が示した偈の切り方も自分の解釈によるもので、解釈により別の切り方もありうるであろう。

『佛説六道伽陀經』の漢文の偈の並びを、梵文の偈番号の数字で示すと、次のような順序でその漢訳は梵文の偈を並べている：

1, 2, 3, 4, 5, ～ 34, 35, 36, 37 (地獄品頌竟), 38, 39, ??, ?? (傍生品頌竟), 45, 47, 48, 49, 50, ～ 58, 59, 60 (餓鬼品頌竟), 61, 63, 65, 66, ～ 74, 75, 76, 78, 79, 80, ～ 88, 89, 91, 92, 93 (人趣品頌竟), 94 (修羅品頌竟), 95, 96, 97, ～ 102, 103, 105 ([天品頌竟]).

この数字の並びを見ながら『佛説六道伽陀經』を説明すると、次のようにいえる。

○ 第1～37偈の地獄趣の節は梵文と漢訳は順序が全く一致し、漢訳に偈の抜けは無い。

○ この漢訳は『六趣輪廻經』と同様、畜生の節をきちんと訳していない。傍生品頌は梵文の第38と第39の2偈を訳した後、第40～44偈の合計5偈については翻訳を丁寧に行うことを放棄し、その位置に??, ??の記号で示した2偈（梵文の5偈を圧縮した内容をもつ）を置いて、それをもって代替する。

○ 餓鬼品頌の節においては、第46偈が抜ける。また人趣品頌の節においては、第62, 64, 77, 90偈が抜ける。天品頌の節においては第104偈が抜ける。そのようにこの翻訳では時々、偈の落ちがあるが、梵文の順序どおりに漢訳の偈が並んでいる。この点が先に見た『六趣輪廻經』との大きな違いである。『佛説六道伽陀經』の元の梵文は恐らく現存する梵文 SGK とほとんど変わらないものであったろう。偈の落ちが起こるのは何かの都合によるのだろう。偈の落ちの幾つかのケース（62, 77, 104偈）では、その偈の意味が直前か直後にある偈の訳に吸収されてしまった疑いが濃厚である。

○ 修羅趣が第94偈としてあり、その偈が人趣と天の間に置かれているのは、梵文・蔵訳ならびに『六趣輪廻經』と合致する。

以上、日称と法天による SGK の2漢訳を検討した。どちらの訳も翻訳の質はよくない。ピントが合っていないような訳が多い。これは韻文訳のせいというより、宋代の翻訳者の梵語の語学力不足によるものであろう。梵文と照らしてみれば、相当数の誤訳を指摘することが出来る。

なお馬鳴に関連する作品として梵文 *Nairātmyaparipṛcchā* という作品があるが、日称と法天はそれに対しても、同じ様にそれぞれ別に漢訳を作成している。その二つの漢訳

とは、日称による馬鳴菩薩集『尼乾子問無我義經』（大正 No. 1643）と、法天による『外道問聖大乘法無我義經』（大正 No. 846）である。日称によればこの作品は馬鳴に帰せられるが、法天はやはり仏説の経である立場を取り、作者は記さない。日称はこのほか梵文 *Daśākuśalakarmapathāḥ* の漢訳もしており、それが馬鳴菩薩集の『十不善業道經』（大正 No. 727）である。

馬鳴の作品の飽くなき探求者であった S. Lévi はその *Nairātmyaparipṛcchā* の梵文写本も1922年のネパール旅行で発見して、1928年の『アジア協会誌』にその転写テキストと仏訳を出した¹⁸⁾。Lévi はその1928年の同じ論文において、彼がネパールで SGK などの馬鳴の小作品集の性格をもつ1束の貝葉写本を見つけたことを初めて報じている（p. 207）。同時にその論文で Lévi は日称が「馬鳴菩薩集」として漢訳したこれらの馬鳴の小作品の漢訳に注目して、情報をまとめている。

前述のようにネパールには馬鳴の小作品ばかりを集めた一束の貝葉写本が存在し、それを Lévi が1928年9月に見つけたわけであるが、恐らく同じような性格をもつ、馬鳴の小作品集というべき一束にまとめられた写本が10世紀以前にすでにインドで存在し、それが宋代の中国に将来された故に、日称はそれを用いて、馬鳴に帰せられるこれらの小作品をいくつか漢訳した可能性がある。日称が馬鳴菩薩集『十不善業道經』（大正 No. 727; = *Daśākuśalakarmapathāḥ*）や馬鳴菩薩集『事師法五十頌』（大正 No. 1687; = *Gurupañcāsikā*）も漢訳していることは偶然ではないであろう。

7 SGK の成立年代

もし SGK の蔵訳・漢訳・パーリ語訳などの翻訳年代だけを根拠にして梵文 SGK の成立年代を推測するならば、梵文 SGK がインドで遅くとも9世紀初頭までに成立していたということしか言えない。SGK の蔵訳は、チベット最古の経録『デンカルマ目録』に載っているのも、遅くとも西暦824年までにチベット語に翻訳されていたことがわかる¹⁹⁾。『パンタンマ目録』でも作品名は確認できる。蔵訳は漢訳やパーリ訳より早い。中国で法天や日称等によって漢訳されたのは宋代であり、また SGK のパーリ語訳も11～12世紀にミャンマーでなされたものと推測される。

梵文 SGK の作品の成立年代の議論においては、9世紀初頭という、蔵訳の訳出年代から導き出されたその下限よりどれだけ古く遡らせるかが問題になる。それに関して新

18 Lévi (1928): "Encore Aśvaghoṣa", *Journal Asiatique*, 1928, II, pp. 209-215.

19 SGK の蔵訳の記録は、『デンカルマ目録』（dkar chag ldan dkar ma）では Lalou (1953) No. 312、芳村 (1974) No. 312 にある。『パンタンマ目録』（dkar chag 'phang thang ma）では川越英真 (2005) No. 250 にある。

たに議論の材料を提供すると思われるのが、次に述べる2つの漢訳仏典の存在である。その2つの漢訳仏典に Mus の研究は気づいていない。

劉宋元嘉11年～19年 (A.D. 434～442) の間に僧伽跋摩 (*Saṅghavarman) によって漢訳された大勇菩薩撰『分別業報略経』(大正 No. 723) は、SGK より一回り大きいテキストであるが、その作品の内容を検討してみた結果、SGK に極めて近い作品であることがわかった。この作品は SGK と同じように韻文のみで作られ、SGK と同じ様な構成をもち、SGK と内容的に合致する偈が多数、ほぼ同じ順序で並んでいる作品なのである。つまりこの作品は恐らく SGK と同じソース (Ur-SGK) から派生し、SGK とコアの部分とを共有しながら、別の作品として編集された、SGK の姉妹版たる作品であるように思われる。SGK が六道の立場を取る「非-有部」の部派に属すると考えられる作品なのに対して、この『分別業報略経』は、五道の立場を取ることから判断しても、また訳者が僧伽跋摩であることから判断しても⁽²⁰⁾、有部に属するものと見なすことが出来る。その経は明らかに SGK とは別の編集を受けており、所属部派も SGK と異なると考えられる以上、別の作品として扱う必要がある。

またこの『分別業報略経』に関連して、『仏説分別善惡所起経』(大正 No. 729) という別の漢訳の作品にも注意を払う必要がある。その経は前半部分が散文、後半部分が韻文から成るが、その二つは全く異質で、まるで木に竹を接いだような有様の作品である。前半の散文部分については中国で製作された偽経の疑いが濃く、敦煌本『提謂経』(提謂波利経) 卷下の文面との合致を指摘した、牧田諦亮の研究がある⁽²¹⁾。牧田は『仏説分別善惡所起経』のテキストの前半と後半の異質性を全く問題にしていなくて、その経の前半の散文だけを見て『提謂経』と比較して、『提謂経』のほうが『仏説分別善惡所起経』よりも古い(オリジナルである)と判断している⁽²²⁾。この牧田によ

20 僧伽跋摩は他に『雜阿毘曇心論』(大正 No. 1552) や『薩婆多部毘尼摩得勒伽』(No. 1441) や『勸発諸王要偈』(No. 1673) を訳している。慧皎の高僧伝によれば彼はとりわけ『雜阿毘曇心論』に精通していたという。有部の人であることがわかる。

21 牧田諦亮(2014)、170-238頁(提謂経と仏説分別善惡所起経 — 真経と偽経 —)を参照。牧田諦亮(1968)はそれと同じ内容の論文である。

22 牧田(2014)は『仏説分別善惡所起経』と『提謂経』とが同一の教説内容をもち、文辞も全く等しい表現をもつものでありながら、前者は真経で、後者は中国人曇靖撰述の偽経であると、『開元釈経録』が判断を下したため、その結果、後者の『提謂経』はそれ以後の筆写大蔵経や宋以後の印刷大蔵経から完全に姿を消すに至ったことを述べ、二つの経の運命を決定づけた『開元釈経録』の判断こそが中国仏教の歴史の上での重大な誤謬であった、と見なす(186-187頁)。牧田は、『提謂経』からの模造経にすぎない『仏説分別善惡所起経』が真経と見なされたことの不公平に怒り、歴史に対して抗議するかのようである。しかし『提謂経』が完全な偽経であるのに対し、『仏説分別善惡所起経』は少なくともその後半の韻文はインド撰述の真経であることが本

る『提謂經』との比較研究の結果を受けて、私は『提謂經』を借用・模倣して作られた『仏説分別善惡所起經』の前半の散文部分が、より古い訳經である後半部分の韻文の前に付加されて、現在の姿が出来たのではないかと推測する。『仏説分別善惡所起經』の前半の散文は後半の韻文とは内容があまりに違っているので、両者が起源が異なることは明白である。前半部分は中国撰述の『提謂經』から派生した偽經であり、そのように本来は別々のテキストであったものが、ある時期に意図的に1本の經として合体させられたのであろう。これは真經に寄生することによって偽經が生き延びようとしたケースであると考えられる。それゆえ両者を切り離し、後半の韻文の部分だけを、一つの独立した作品と見るべきである。

『仏説分別善惡所起經』の後半を占める韻文部分は、大勇菩薩撰の『分別業報略經』（大正 No. 723）の梵文原典とほぼ同じ内容をもつ梵文原典から、別の時代に別の訳者によって漢訳された作品と認定することができる。本論文の Appendix 3 で詳細に偈の対応関係を示したとおり、その後半の韻文部分（T 17 520a1-523b26）はほぼ『分別業報略經』と内容的に合致することを、私は各偈の文を検討して確認した。疑いなく『仏説分別善惡所起經』の韻文部分（T 17 520a1-523b26）は『分別業報略經』の異訳であると見てよい⁽²³⁾。

論文の研究によって証明されたことにより、この牧田の意見は正す必要がある。『開元釈經錄』は正しい判断をしたのであり、そのおかげで『仏説分別善惡所起經』の後半の真經の部分が、歴史から失われないで済んだのである。

23 日本の仏教学の諸研究で『分別業報略經』と『仏説分別善惡所起經』の両經の関係が指摘されている文を読んだことが無かったので、私はこれまで自分が最初にそれに気づいたように思っていたが、Lin Li-kouang (1949) を読んでいたら、彼が既に『分別業報略經』・『仏説分別善惡所起經』と SGK の2漢訳との、4本の漢訳の密接な関係を指摘していたことがわかった。彼はこれら4本の漢訳を、「同一の作品の幾つかのヴァージョン」（des versions d'un même ouvrage）であると見なしている。彼は言う：「これら4本の經典は、一見すると互いにかなり違っているように見えるが、実は同一の作品の幾つかのヴァージョンである」（Ces quatre sūtra, qui paraissent, à première vue, assez différents les uns des autres sont, en réalité, des versions d'un même ouvrage.）と（p. 102）。しかしそれらの4作品の同一性の問題について、彼は直感的な意見を述べただけで、学問的にそれを証明することをしていない。その文に続いて、林藜光は「この作品はほとんど同程度の割合で散文と韻文をもって書かれていて（Cet ouvrage était rédigé en prose et en vers, dans une proportion à peu près égal,）その割合はそれらすべての漢訳で明白に同じままで残っている（cette proportion restant sensiblement pareille dans toutes les versions chinoises.）」と、理解困難な、的外れのことを述べた、その数行の文のみで、その肝心の説明を済ませてしまっている。その文で林藜光が「この作品」と言っているのは、4本の漢訳經典の原本のことであるが、その作品が「ほとんど同程度の割合（proportion）で散文と韻文をもって書かれている」と言っていることは、理解しがたい。私は『仏説分別善惡所起經』を扱うにはまず前半の散文部分を除去した上で、後半の韻文の部分だけを問題にしなければならないと考えているが、それに反して林藜光

これら両漢訳をよく比較すると、両漢訳のどちらかの作成時にどちらかを参照していることが感じられる。例えば、SGK 61偈に相当する箇所での、『分別業報略経』（Ch-3）と『分別善惡所起経』韻文（Ch-4）の訳文は次の如くである：

Ch-3：天人阿修羅 欲求長壽者 不害生爲本 慧者應當知（T 17 448b10-12）

は『仏説分別善惡所起経』を二つに分離することをどうやら考えておらず、「同程度の割合で散文と韻文をもって書かれている」と表現しているので、韻文だけから成る私が想像する原本のイメージとは全然違う理解で、彼のこの理解しがたい説明は書かれたように思われる。その文での林藜光の根本的な間違いは、4本の漢訳のうち、『仏説分別善惡所起経』には前半に散文が付加されているが、それを除く他の3本の漢訳とSGKはどれも全文が韻文であることがなぜか認識されていないことである。そのような根本的な勘違いの上にどうやら彼が立っているらしいにしても、それでも今から70年も前に、4本の漢訳を「同一の作品の幾つかのヴァージョン」とあると言い切った彼の眼力に私は深く感心する。深く感心しつつも、彼のその直感的な表現は極めて曖昧であるといわざるを得ないので、私はその文の表現に対して、ある点では賛成しつつも、反対せざるを得ない。私もこの4本の漢訳の原本となった諸作品が本来は一つのソース（Ur-SGK）から生み出されたものであると考えているので、その点では林藜光に賛成なのであるが、しかし彼の「同一の作品の幾つかのヴァージョンである」というその表現では、私の現在の認識——すなわち4漢訳は決して同一の作品からの訳ではなく、近い関係にある2作品からの漢訳であること、またその2作品は異なる部派伝承に属していてそれぞれがソース（Ur-SGK）から分岐して独立した作品として編集された歴史をもつものであるということの認識——とは違っているので、それゆえ彼のその大まかな表現に私は反対する。五道と六道の立場の違い、また八大地獄のパート全部の偈の内容に注目すれば、『分別業報略経』・『仏説分別善惡所起経』と、SGKの2漢訳・梵文との両者は、明らかに別の系統の伝承に属する作品であり、簡単に「同一の作品」と見ることは出来ない。またこれらの作品は個人の著作であって、経典ではないので、もし林藜光がこれら4本の漢訳を同一の作品であるとみなすなら、その作品の著者は大勇菩薩なのか、馬鳴／法善現なのかを決めなければならなくなる。彼はあくまで大勇とは Āryaśūra（聖勇）でありそれは馬鳴であり法善現である、という同一作者の立場を取るのであろうか。彼の説明（pp. 105-106）を読むとどうやらそのようである。しかし Āryaśūra の *Jātakamālā* を読むと、明らかにその著者は有部の人でなく、有部の聖典伝承をソースに用いていない。それは古代インドの僧団の人々も敏感によくわかっていたはずである。それ故 Āryaśūra と大勇（有部に属する師）とを同一人物と見なす立場を、Tāranātha が示すチベットの伝承だけを根拠にして安易に主張することは、現在の学問では到底受け入れられない。私の考えでは、『分別業報略経』と『仏説分別善惡所起経』後半の韻文は確かに同一の作品のやや違ったヴァージョンと違ってよく、その作品は大勇が少し大きめに有部で古く伝わる "Ur-SGK"（法善現か馬鳴の作?）を新たに作り直した作品なのではないかと考えられる。その作品は非-有部の現存する梵本 SGK にとっての姉妹的な作品とみなしてよいが、SGK と同じ作品ではない。それゆえ私は SGK と4本の漢訳をどれも「同一の作品」の異なるヴァージョンであると見るような林藜光の意見に反対する。SGK（ならびにその2漢訳の原本）と、『分別業報略経』・『仏説分別善惡所起経』韻文の原本とは、異なる二つの recensions であって、それぞれ作品の著者（編集者）は区別しなければならない。前者の著者は法善現／馬鳴かもしれない。後者の著者は大勇とすべきであろう。

Ch-4: 天人阿須羅 欲求長壽者 内意當自省 無害一切生 (T 17 521c12-13)

あるいはSGK 36偈に相当する箇所、両漢訳は：

Ch-3: 悲憎不善行 心常樂惡法 見他苦隨喜 死作閻羅卒 (447b26-27)

Ch-4: 懷恨意忿怒 果敢爲非法 見人窮苦喜 死爲閻獄鬼 (521a6-7)

あるいはSGK 66偈に相当する箇所、両漢訳は：

Ch-3: 常不盜他物 兼復廣行施 所生輒大富 得財常不失 (448b22-24)

Ch-4: 既不取彼物 常自樂布施 累世有財富 得利甚弘廣 (521c24-25)

ここに3偈の例にあげたが、後の2偈の両漢訳で、字を太字で示したように、句の始まりの字か終わりの字で、両漢訳が合致していることを見ると、いくら両漢訳が同じ梵文作品から訳されたものであると言っても、このような訳の合致の仕方は偶然ではありえない。後の時代になされた漢訳が、梵本を見るだけではなく、前になされた漢訳も同時に参照しながら作成されたため、このような訳文の類似が生じたに違いない。

ではどちらがどちらを利用したのだろうか。どちらの訳が古いのか。『分別業報略経』(Ch-3)と『分別善惡所起経』韻文(Ch-4)の訳を比較すると、後者のほうが翻訳の精度が上がっていることがわかる。その具体例として、例えば『餓鬼の節』から、餓鬼の名に注目して、両漢訳の訳語をピックアップしてみると、

SGK45偈の kaṭapūtana を： Ch-4は「溷餓鬼」、Ch-3は「富單那鬼」と訳す。

46偈の kaṭapūtana を： Ch-4は「臊餓鬼」、Ch-3は「富提鬼」と訳す。

51偈の ulkā mukha を： Ch-4は「焦餓鬼」、Ch-3は「焰口餓鬼」と訳す。

53偈の kumbhāṇḍa を： Ch-4は「鬼形醜大」、Ch-3は「鳩槃荼」と訳す。

54偈の rākṣasa を： Ch-4は「魅魍」、Ch-3は「羅刹」と訳す。

55偈の gandharva を： Ch-4は「天伎人」、Ch-3は「乾闥婆」と訳す。

56偈の piśāca を： Ch-4は「白注鬼」、Ch-3は「毘舍闍」と訳す。

これらの訳語の変化を観察すると、『分別業報略経』(Ch-3)のほうが固有名詞としてわかりやすく、翻訳の精度が上がったといえよう。疑いなくその漢訳のほうが新しい時代に作られたことがわかる。

上記の箇所以外も、両漢訳を並べて丁寧に比べてみると、5世紀前半の『分別業報略経』の訳者僧伽跋摩が、梵本からの翻訳に際して、古い『仏説分別善惡所起経』の訳文を絶えず参照しながら、時代遅れの訳語は変え、批判的な態度でよりわかりやすい新訳を作成した態度が明らかに見える。

さて『仏説分別善惡所起経』は『出三蔵記集』巻四の「失訳雑経録」に失訳經典の一つとして挙げられ、また法經の『衆経目錄』でも「衆経失訳」に挙げられているが、費長房『歴代三宝紀』以降の目録では、安世高の訳であるとされる。そのため通常は費長房の記述の信憑性を疑い、後代に安世高に仮託された、訳者不明の作品(失訳)と見なされるべきであろうが、しかしこの作品の後半の韻文部分については、訳語を

検討してみると、本当に安世高の訳である可能性も皆無というわけではないようである。費長房の目録は信頼できないが、結果的にまぐれ当たりということもありうる。先に示した餓鬼の名の訳語以外にも、『仏説分別善惡所起經』の韻文部分にはあちこちに古めかしい訳語が使用されていて、宋の文帝の時に僧伽跋摩に訳出された『分別業報略經』よりも相当に時代の距たりがある古い訳であることは疑いない⁽²⁴⁾。『仏説分別善惡所起經』の（前半の付加された散文を含まない）韻文部分だけの翻訳年代は、古訳時代の3（±1）世紀、遅くとも4世紀後半あたりが下限と、大まかに見当をつけることができるであろう⁽²⁵⁾。しかしその韻文部分の漢訳が本当に2世紀後半の安世高まで遡れるかどうかは、現時点での簡単な調査では判断が難しく、今後に漢訳語の詳細な調査を行うことが必要となる。

このように、SGKに極めて内容が近い文献として『仏説分別善惡所起經』後半の韻文と『分別業報略經』とが存在していて、その二つの漢訳は原典においては、ほぼ同一の作品であると判断できる⁽²⁶⁾。両者はSGKより少し大きな作品で、SGKと同一の作品

24 『仏説分別善惡所起經』の韻文部分の訳語が『分別業報略經』よりはるかに古いと感じられるのは、例えば『分別業報略經』は、六欲天の第3天から第6天までの名を、夜摩天・兜率天・化樂天・他化天と訳すのに対して、『仏説分別善惡所起經』はそれぞれを豔天・兜術天・不驕樂天・尼密天と訳している。また色界天の箇所では、『分別業報略經』が光音天・遍淨天・廣果天・無想天・五淨居天・色究竟と訳している語を、『仏説分別善惡所起經』はそれぞれ阿波蘇天・遍淨天・墮苛頗天・無有想天・五淨天・阿迦膩天と訳している。

25 『仏説分別善惡所起經』の韻文箇所が古訳の時代、遅くとも4世紀後半までに訳されたことを感じさせる理由として、例えば、その經の韻文部分にある不驕樂天の訳語は、他に漢訳大藏經では『佛說轉法輪經』（安世高）と『佛說齋經』（支謙）と『大明度經』（支謙）に見られるだけである。夜摩天を意味する豔天という訳語は他には『增壹阿含經』（僧伽提婆）と『佛說彌勒下生經』（竺法護）に使われる。また兜術天の訳語は『佛說轉法輪經』（安世高）、『佛說齋經』（支謙）、『大明度經』（支謙）、『義足經』（支謙）、『佛般泥洹經卷』（白法祖）、『六度集經』（康僧會）、『放光般若經』（無羅叉）、『生經』（竺法護）、『普曜經』（竺法護）、『甘露味論』（曹魏代、失訳）、『增壹阿含經』（僧伽提婆）、『鞞婆沙論』（僧伽跋澄訳）などに見られる。また阿鼻摩（520b19）の訳語は『大樓炭經』（法立・法炬）と『佛說鐵城泥犁經』（竺曇無蘭）と『佛說泥犁經』（竺曇無蘭）と『佛說方等般泥洹經』（竺法護）と『修行道地經』（竺法護）と『佛說罵意經』（安世高）に見られる。——なお安世高の語彙の研究として宇井伯壽（1971）：『譯經史研究』、岩波書店があるが、その書を繙くと『仏説分別善惡所起經』に見られる語彙が見つかる。例えば、地獄を意味する泥犁の訳語は同書33頁と497頁を、兜術天の訳語は同書490頁を、不驕樂天の訳語は同書31頁を、遍淨天の訳語を同書104頁を、無有想天の訳語は同書108頁を、阿迦膩天の訳語は同書496頁を参照。これらの訳語の使用から判断して、『仏説分別善惡所起經』の韻文は古訳時代の訳業と考えられ、安世高の訳かどうかは不明としても、早ければ本当に2～3世紀の訳である可能性もあろう。

とはいえないが、しかしその偈頌の多くが SGK と共通し、その共通する偈の順序もほぼ同じで、作品全体の構成の仕方も類似するなどの特徴をもつことから、その漢訳の原典は SGK の姉妹版ともいうべき、SGK と近縁関係にある 1 作品であると私は考える。その三者の作品の密接な関係を証明するために、私は偈頌どうしの対照表を作成した。それを本論文の最後の Appendix 2 と 3 に示す。

『仏説分別善惡所起經』の韻文部分（失訳, or 安世高訳）と『分別業報略經』（劉宋の僧伽跋摩訳）の原典であるところの梵文の作品は、前述の『仏説分別善惡所起經』の訳出年代から推測して、遅くとも 4 世紀後半、早ければ 2～3 世紀には、西北インドで成立していたはずである。その原典は付加や変更等による細部の違いはあるものの、同じ作品であったろう。その作品は有部に属すると見てよい。

有部の教団は、律藏を増広しながら、過去世の業報を強調したアヴァダーナを前 1 世紀頃から 4 世紀までの間におびただしく熱意をもって製作しており、業に関する種々の阿含聖典⁽²⁷⁾や多数のアヴァダーナに基づきながら、生類の業の因果の規則を詳細に分析した性格の作品を作ることその数百年の間に盛んに行っていたのであろう⁽²⁸⁾。阿含聖典『鵬鵠經』（中阿含 170）の業報分別（*karmavibhaṅga*）に関する内容を大きく拡大させて、いわゆる「鵬鵠經類」第二類に属する業分別の文献を作ることが有部でも行われていた時代に⁽²⁹⁾、韻文の書として『分別業報略經』と『仏説分別善惡所起經』の梵語原

26 『仏説分別善惡所起經』韻文と『分別業報略經』の両者には、SGK には対応偈がない場合でも、内容的によく一致する偈が多数存在する。両者ではその意味的に一致する偈の順序が少し前後することがあるが、ぶれは大きくない。全体的に見て、両者の違いは、同一の作品の時間的変化の範囲に収まる程度のものである。両者は有部が伝持した、大勇という師が作った一つの作品の異訳であると認めてよい。

27 業に関する種々の阿含聖典に関しては、Lin Li-kouang (1949), pp. 100-101 が大まかに三つのグループに分けて紹介している。また工藤順之 (2005) は第一類と第二類に分けて説明する。

28 SGK に見られる、餓鬼の種類のカatalog化と業報の分析（すなわち業報分別）の手法を、悪の業報のみに対象を絞って詳しく行っているテキストとして、後漢・安世高訳（正しくは失訳）『仏説鬼門目連經』（No. 734）、東晋・法顯訳『仏説雜藏經』（No. 745）、失訳附東晋録『餓鬼報應經』（No. 746）、*Lokapaññatti* の 14 章（12 種類の餓鬼の業報解説；Denis, I, pp. 116-124）などがあり、それらのかなり素朴な段階の種々の餓鬼の業報分析がインドの諸部派で盛んに行われた時代に、同じ手法をもって六道における業報を説明した SGK のようなテキストも生まれたと考えるとよい。このような輪廻界の生類のカatalog化と業報の分析の作業は、素朴な段階から出発して、やがて『正法念處經』（No. 721）のような極端なまでに詳細化を果たした論書を作成する段階に行き着いたと考えられるので、『正法念處經』を有部系の業報研究の流れの終着点と考える時、その『正法念處經』の成立年代（4 世紀？ただし水野弘元によれば 2 世紀）より前に SGK のようなテキストが位置すると見てよい。

本が、大勇という有部の師の著作として成立したと思われる。西北インドの有部以外の上座部系部派も、有部での業報研究の流行の影響を受けて、有部がもつ韻文作品とよく類似した作品を伝持していたとしても不思議ではない。そのようにして有部の部派の内外に、大勇の著作以外にも、梵文 SGK のようなそれと近縁関係にある（本来同一のソースから派生した）作品が伝持されていたと考えられる。

SGK とその姉妹版（大勇の作品）という、相互に内容がよく似た 2 作品は、ほぼ同じ時代の、有部を中心にした諸教団の流行の産物であるように思われる。そのため、漢訳の『仏説分別善惡所起經』韻文部分の訳出年代は、梵文 SGK の成立年代を大まかに推測する重要な手がかりとなる⁽³⁰⁾。

29 「鸚鵡經類」の第二類の文献群に関しては工藤 (2005) を参照。その一つ、『分別善惡報應經』（大正 No. 81）は有部に属するものであろう。

30 SGK と、その姉妹版である 2 漢訳（Ch-3 大勇菩薩撰『分別業報略經』および Ch-4 『仏説分別善惡所起經』韻文）の原本とを、部派所属の違い等を考慮せずに、純粹にテキストとして比較した時に、私は SGK のほうがその姉妹版よりも、古い形（言い換えれば、原形に近い形）を示していると思う。そう考える理由として、第一に、量的に SGK よりもその姉妹版のほうが一まわり大きな韻文作品であるということ、第二に、SGK が欲界の六欲天で天界の業の説明を終えるのに対して、その姉妹版である 2 漢訳が六欲天の後に更に色界・無色界の各天界に生まれる業も説明していることが、SGK の内容に対する拡張・増広と理解できること、第三に、SGK と姉妹版の両作品の全体構造を考察すると、姉妹版のほうが全体的に詳細化していること（これに関しては Appendix 3 を参照）。第四に、SGK が 1 偈で表現したものを、姉妹版では 2 偈をもって表現していると思われる箇所が幾つかあるということを指摘できる。この第四の点について説明すれば、例えば SGK 87 偈は、偈の前半で不飲酒を説き、偈の後半で不妄語を説くが、その 87 偈に相当する姉妹版の両方の漢訳では、1 偈で不飲酒を、次の偈で不妄語を説く（Ch-3 449b4-7; Ch-4 522b22-25）。つまり 2 偈に分けて表現している。また SGK 43 偈は、偈の前半でナーガ（龍）を説き、偈の後半でガルダ（金翅鳥）を説くが、その 43 偈に相当する姉妹版の両漢訳では、1 偈でナーガを、次の偈でガルダを説くことで、やはり 2 偈に分けて表現している（Ch-3 447c17-21; Ch-4 521a24-27）。同様に SGK 83 偈でも、偈の前半で他人の妻に近づかないことを、偈の後半で自分の妻に対しても性交を慎むことを説くが、その 83 偈に相当する姉妹版の両漢訳では、それぞれの場合をやはり 2 偈に分けて表現している（Ch-3 449a26-29; Ch-4 522b16-19）。また SGK 59 偈では、虚空を飛ぶ、天車（天宮）を有するヤクシャを 1 偈で表現するが、両漢訳（Ch-3 448b2-6; Ch-4 521c2-5）では、虚空を飛ぶヤクシャと天車に載るヤクシャを別々に扱い、異なる種類として、二つの偈に分けて表現している。— このような現象を説明する時、2 偈であったものを SGK が 1 偈にしたと考えるより、SGK で 1 偈であったものが 2 偈になったと考えるのが自然である。1 偈を 2 偈に分割したほうが聴き手にわかりやすいし、註釈も付けやすい。2 偈を 1 偈に圧縮するのは困難であるが、1 偈を 2 偈に広げるのは容易である。それ故、SGK のほうがその姉妹版よりも古い形を残しているのではないかと考えることが出来る。そしてその姉妹版の 1 漢訳である『仏説分別善惡所起經』韻文が遅くとも 4 世紀後半に訳出されたものであるならば、SGK とその姉妹版が分岐する前の共通のソースとしての原形テキスト（Ur-SGK）の成立年代

インドの有部を中心にした上座部系部派で、それらの業報分析を主題とする韻文作品の製作が行われた時代は『仏説分別善惡所起經』韻文部分の訳出年代（3±1世紀）よりも前であることは確実であると思われるが、それを支持する別の論拠を見つけることは可能であろうか。

SGKの蔵訳が、SGKの著者を馬鳴ではなく Dhārmikasubhūtiḥoṣa であると伝えることは上述のとおりであるが、5世紀の世親は、彼の『俱舍論』世間品の第59頌釈において地獄の獄卒は有情かどうかという議論のために、bhadanta Dharmasubhūti（大徳・法善現）が説いたものと世親自らが記す anuṣṭubh 韻律の1偈を引用している。その世親に引用された1偈のテキストを見ると、それは現存する梵文 SGK の第36偈にあたるものと判断できる。

『俱舍論』で世親に引用された1偈は次のとおり。

krodhanāḥ krūrakarmāṇaḥ pāpābhirucayaś ca ye /

duḥkhiteṣu ca nandanti jāyante yamarākṣasāḥ // (Pradhan ed., p. 164, ll. 15-16)

梵文 SGK の第36偈は次のとおり。

atyantakrodhanāḥ krūrāḥ śathāḥ pāpābhikāṅkṣiṇaḥ /

paravyasanahrṣṭāś ca jāyante yamarākṣasāḥ //

両偈の梵語の文面は微妙に違って完全に一致するとはいえないが、その微妙な違いは恐らく、現存する梵文 SGK が世親が属する有部ではない部派によって伝持されたものであり、世親が利用した有部の作品そのものではないためであろう。最盛期の西北インドなど、多くの部派が競合する地域において、異なる部派が隣接しあって相互に影響を与え合っていた時代には、同じ韻文作品が多少異なる recension として、異なる上座部系部派の間で伝持されることが起こることはありえた。例えば H. Bechert が研究したように、Anavataptagāthā（無熱惱池頌）という本来有部で作られた韻文作品がパーリ上座部に伝えられて受容されている事実は³¹⁾、上座部系の諸部派間にかなり自由な作品の移動と借用があったことを示している。そのようにして、有部から他部派に同じテキストが移動した結果として、有部の外に本来は有部起源の作品が微妙に姿を変え

は、その訳出年より半世紀以上、恐らく百年位は古いであろうし、その原形 (Ur-SGK) から派生した SGK の成立も、より発達した形を示す姉妹版の成立よりも遅れるとは思えないため、『仏説分別善惡所起經』韻文の訳出年代が、SGKのテキストの成立年代の推測の下限を考える1根拠になるであろう。（なお『大智度論』の製作年代もその下限を推測する別の根拠になるが、それは次の8節で説明する。）

31 岡野潔 (2006): 「Anavataptagāthā の釈尊の業の残滓を説く因縁話の形成」、『論集』（印度学宗教学会）、131頁を参照。

ながら存在したことは想定されてよい。現存する SGK の梵文はそうように有部から他部派に流出したテキストではないかと私は考える（この点は後述する）。

さて俱舍論で世親に引用された上述の偈は、大毘婆沙論卷172でも、大徳法善現の頌として、同様の議論の中で引用される。

心常懷忿毒 好集諸惡業 見他苦生悦 死作琰魔卒 (T 27 866b16-17)

現存する梵文 SGK と近い位置にある、大勇の姉妹的な作品の漢訳『分別業報略經』は、その漢訳者から判断して有部に属するものと思われるが、やはり作品中に世親の引用に相当する 1 偈をもつ。それは次のとおり。

恚憎不善行 心常樂惡法 見他苦隨喜 死作閻羅卒 (T 17 447b26-27)

また漢訳『分別善惡所起經』の韻文部分は、『分別業報略經』とほぼ同じ梵語原典からの異訳と見なしうる作品であるが、やはりそれに相当する偈を有する。それは次のとおり。

懷恨意忿怒 果敢爲非法 見人窮苦喜 死爲閻獄鬼 (T 17 521a6-7)

世親が引用する Dharmasubhūti (法善現) の偈に相当する偈が、このように『仏說分別善惡所起經』と『分別業報略經』にもある以上、両漢訳經のその梵語の原本から世親がその偈を引用した可能性も考えておく必要があるが、しかし『分別業報略經』の作者は大勇菩薩とされており、法善現ではないから、世親が 1 偈を引用したのはその大勇の作品からではないと私は思う（ただし Lin Li-kouang のように大勇は法善現と同一人物であると考えられる可能性も無いわけではない）。大勇の作品にも世親が引用したその偈が見つかるわけは、大勇の作品が有部の古い師である法善現の作品をベースにして増広し再編集した作品であるからではないだろうか。

Dharmasubhūti および SGK の蔵訳が SGK の作者とする *Dhārmikasubhūtiḥoṣa は、『大毘婆沙論』の議論の中で相当の尊敬をこめた扱いをされている有部の師として時々言及されている「大徳・法善現」と同一人物と見なしてよいと思うが、『大毘婆沙論』の編纂の時期（2～4 世紀）には、有部においてその師が作った韻文作品が尊ばれていたようだ。その人気のため、彼の作品がその頃に有部から他部派に流出して、現存する非-有部の SGK の作品が出来たのであろう。一方、法善現の作品をベースに、有部内で更に偈数を追加した（あるいは偈によっては韻律を長いものに変えた）作品として、『分別業報略經』の原本たる大勇の作品が後で生じたのかもしれない。有部系の一派に属していたであろう 2 世紀頃の馬鳴がもしその法善現と同一人物であるなら³²⁾、

32 俱舍論世間品や大毘婆沙論卷七十に見られる、法善現による菩薩入胎時の六牙白象を表現した Rathoddhātā 韻律で作られた 1 詩節 (Abhidharmakośa, Pradhan ed., p. 124, ll. 11-12; 漢訳 T 17 361c1-2) をめぐる有部での議論では、法善現 (Pradhan, loc. cit., l. 8 で Dharmasūtra- を Dharmasubhūti- に訂正) が作ったその詩節を「これは kāvya (美文体詩) である」といい、単な

SGK（厳密には有部の Ur-SGK）の成立年代は 2 世紀にまで遡ることになる³³。もし馬鳴が法善現とは別人であったとしても、両者は SGK の原著者と二次的 version の著者という関係であることも想定することは可能なので、SGK の最終的な著者が法善現であるか馬鳴であるかはとりあえず不明のままに留めておくべき問題であろう。

作者がどうであれ、私は西北インドで有部の創造的な生産活動が最も盛んであった時期の 2～4 世紀頃に、漢訳『仏説分別善惡所起經』韻文や『分別業報略經』の原典たる大勇菩薩作の梵文テキストや、それに内容が近似する近縁関係にある作品たる SGK の梵文テキスト、またはそれらのソースである原テキスト (Ur-SGK) が、成立したのではないかと考える。

現存する梵文 SGK は、六道説を唱える点から、「非-有部」の部派に属した作品であろうが、本来は五道説を唱える有部において、SGK の原形たるテキスト（つまり最初に存在した、有部の詩人の手による Ur-SGK）が作られたのではないかと私は推測する。現存する SGK の「阿修羅の節」はわずか 1 偈しかもない。この「阿修羅の節」のあまりの短さは、この作品の原形においては、「阿修羅の節」が「天界の節」と独立した形で存在していたのではなく、本来、阿修羅の 1 偈は「天界の節」に属するものとして作られたものであろうことを示唆する。SGK の「天界の節」では各天界に 1 偈ずつを割り当てているので、その天界の節の中では阿修羅がいる天界も 1 偈のみしか説かれなければならないことになるのは当然である。実際に『分別業報略經』では阿修羅の 1 偈（450a20-23）は四大王天と三十三天の偈の間に置かれた形になっているのである。

また SGK の原形のテキスト (Ur-SGK) がもともと有部で出来た作品であったという私の推測を補強する、もう一つの理由を挙げると、SGK は作品の中で、神々のほかの超自然的な存在として、ナーガ（43偈）・ガルダ（43偈）・カタプータナ（45, 46 偈）・クンバーンダ（53偈）・ラクシャサ（54偈）・ガンダルヴァ（55偈）・ビシャーチャ（56偈）・ブータ（57偈）・ヤクシャ（58, 59, 60偈）・阿修羅（94偈）に生まれる業を個別に説明しているが、SGK の作者が示すそれらの超自然界の生き物たちについての関心の範囲は、『根本説一切有部律毘奈耶』（T 23 676c25-27; 774b15-16）や『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』（T 23 928a27-28）や『根本薩婆多部律攝』（T 24 539c3-5）などの、根本有部の律典中に名を列挙して示される超自然的な種族の名、す

る文学作品として片付けようとする意見が見られる。つまり法善現がカーヴィヤの作者であると人々に認識されていることがその意見からわかる。法善現が有部系部派の著名な詩人であったとすれば、それは馬鳴である可能性は確かに無いわけではない。しかしその法善現の詩節は、白象の姿をもつ菩薩の入胎を描いた *Buddhacarita* I 4 の詩節と同じではない。

33 なお『分別業報略經』の原作者と馬鳴とを学問的に直接結びつける、わずかな手がかりとしては、SGK 44偈に対応する Ch-3 の「身三口四過」の偈につけた脚注の私の説明を参照のこと。

なわち天 (deva) ・ 龍 (nāga) ・ 藥叉 (yakṣa) ・ 健達婆 (gandharva) ・ 羯路荼 (garuḍa) ・ 緊那羅 (kinnara) ・ 莫呼洛伽 (mahoraga) ・ 阿蘇羅 (asura) ・ 畢麗多 (preta) ・ 鳩槃荼 (kumbhāṇḍa) ・ 羯吒布單那 (kaṭapūtana) ・ 畢舍遮鬼 (piśāca) という名と、大体対応している (ラークシャサとブータの名が無いが)。また根本有部の Divyāvadāna の Supriyāvadāna には、yakṣa-rākṣasa-preta-piśāca-kumbhāṇḍa-pūtana-kaṭapūtana という複合語の表現が2度出てくるが³⁴⁾、その有部が用いる定型的な複合語にある七つの種族の名が SGK の『餓鬼の節』にある超自然界の種族の範囲とほぼ合致する (ラークシャサは有るがブータの名が無い)。これらのことは、有部の伝統と SGK のテクストとの間の強い親近性の根拠となろう。SGK は2偈にわたって (45, 46偈) カタプータナという名の鬼を取り上げるが、カタプータナは小乗の文献では特に有部系の文献に出る鬼であり、有部の伝承と関わりが深いと見てよい³⁵⁾。

8 SGK と『大智度論』

SGK の成立年代を考察する時に、『分別業報略経』『分別善惡所起経』のほかに、龍樹の『大智度論』が貴重な資料を提供する。『大智度論』巻十二には、明らかに作者が SGK に極めて近い文献を利用して書いたと思われる1節がある³⁶⁾。その箇所 (T

34 Divyāvadāna, ed. Cowell & Neil, pp. 119, 123.

35 カタプータナ (kaṭapūtana) については、漢訳仏典で迦吒富單那・羯吒布單那・羯吒布旦那・羯吒部哆那・伽羅富單那などと音写され、また「奇臭鬼」等とも意識される。『望月』445頁参照。カタプータナという餓鬼の名は根本説一切有部律の文献だけでなく、『大毘婆沙論』巻百七十二でも確認できる。元々は西北インドと、マトゥラーを中心とした中部インドなどの、有部が栄えた地域で民衆にその鬼の存在が信じられていたと考えられる。このカタプータナという奇妙な鬼の名はパーリ文献には見当たらず——パーリ Lokapaññatti の12種の餓鬼の名称 (Denis, I, p. 117) の中にもこの餓鬼の名は無い——、有部の律蔵やアヴァダナなどから、その名が北伝の小乗仏典に出現し始めたものと思われる。有部で用いられた超自然の種族をまとめた定型的な表現が、大乘經典でも受け継がれて用いられるようになったため、大集経などの大乘經典や密教經典でも、形式的に諸種族を列举する文の中でその鬼の名が伝承されるようになったと考えられる。——なおカタプータナは『マヌ法典』12.71でも言及される。SGK にはあちこちの偈で『マヌ法典』との親近性が感じられる。SGK 45偈、58偈、74偈を参照。それは SGK (Ur-SGK) の成立が『マヌ法典』が成立した時代 (2世紀) に近いためであろう。『マヌ法典』の12.52-82は「人がもし……の行為をするなら、次世に……として生まれる」という輪廻の規則をまとめており、SGK と同じ時代精神の雰囲気の中かで編集されたことを感じさせる。

36 『大智度論』のこの巻十二の箇所の散文が SGK や『分別業報略経』『分別善惡所起経』韻文に類似することはこれまで学者に指摘されずにきた。Lamotte の『大智度論』の仏訳は、文献学的に詳細な注を付けることで知られるが、この箇所では (Tome II, pp. 766-769) SGK 等との関係を注で指摘していない。また Gelongma Karma Migme Chödrön による仏訳からの英訳で

25 152c11-153a14) では以下のように15の業報が説かれている。(角カッコ内の太字の文字は私が補ってつけた見出し語である。)

復次に、菩薩布施する時は能く分別して知る。

〔(1) 象馬牛等の畜生の業：〕 戒を持たざる人の、若し鞭打・拷掠・閉繫し、法を枉げ財を得て、布施を作せば、象馬牛の中に生まれ、畜生の形を受けて、重を負い、鞭策・羈絆・乗騎せらると雖も、而も常に好屋好食を得、人の爲に重んぜられ、以て人供給す。

〔(2) 龍の業：〕 又知る、惡人の多く瞋恚を懷き、心曲つて端しからざるも、而も布施を行ぜば、當に龍の中に墮して、七寶の宮殿・妙食・好色を得べきことを。

〔(3) 金翅鳥の業：〕 又知る、憍人の多慢・瞋心にして布施すれば、金翅鳥の中に墮して、常に自在を得、如意寶珠有り、以て瓔珞と爲し、種種の須ゆる所、皆自ら恣なるを得て、意の如くならざる無く、變化・萬端・無事として辨ぜざる無きとを。

〔(4) 鳩槃荼鬼の業：〕 又知る、宰官之人の、枉げて人民に濫り、治法に順ぜず、財物を取つて以て布施に用ふれば、鬼神の中に墮して、鳩槃荼鬼と作り、能く種種に五塵を變化して自ら娛しむとを。

〔(5) 地の夜叉鬼の業：〕 又知る、多瞋狼戾にして、酒肉を嗜好するの人の、而も布施を行へば、地の夜叉鬼の中に墮ち、常に種種の歡樂・音樂・飲食を得ることを。

〔(6) 虚空の夜叉の業：〕 又知る、人有り、剛愎強梁にして而も能く車馬を布施し、代つて歩せしめば、虚空の夜叉の中に墮ち、大力有つて至る所風の如くなることを。

〔(7) 宮觀飛行夜叉の業：〕 又知る、人有り、妬心にして諍を好めども、而も能く好き房舍・臥具・衣服・飲食を以て布施するが故に、宮觀飛行の夜叉の中に生じ、種種の娛樂便身之物有るとを。 — 是の如く種種に當に布施する時、能く分別して知るべし。是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。

〔(8) 飲食を施した業：〕 復次に、飲食を布施すれば力色命樂の瞻を得。

〔(9) 衣服を施した業：〕 若し衣服を布施せば、生れて慚愧を知ることを得、威徳端正にして身心安樂なり。

〔(10) 房舍を施した業：〕 若し房舍を施せば、則ち種種の七寶宮觀を得、自然にして五欲を自ら娛むこと有り。

〔(11) 井池・泉水等を施した業：〕 若し井池・泉水・種種の好漿を施せば、生ずる所則ち飢無く、渴無きことを得、五欲備さに有り。

〔(12) 橋船・履屐を施した業：〕 若し橋船及び諸の履屐を施せば、生れて種種の車馬を有し具足す。

も (pp.604-605)、M. Saigusa (1962) の『大智度論』研究の第1章でもそれは言及されない。

〔(13) 園林を施した業：〕 若し園林を施せば、則ち豪尊なることを得、一切の依止と爲り、身を受くること端政に、心樂んで憂無し。 — 是の如き等の種種の、人中の因縁は布施の得る所なり。

〔(14) 四天王に生まれる業：〕 若し人布施して福德を修作し、有爲の作業、生活を好まざれば、則ち四天王の處に生ずることを得。

〔(15) 他の六欲天に生まれる業：〕 若し人布施し、加ふるに父母及び諸の伯叔・兄弟姉妹の供養を以てし、無瞋無恨にして諍訟を好まず、又喜んで諍訟を見ざるの人は、忉利天上・焰摩・兜術・化自在・他化自在に生ずることを得。 — 是の如く種種に分別して布施する、是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。

以上の『大智度論』巻十二の箇所（152c11-153a14）で私が(1)～(15)の数字をつけた文のそれぞれに対する SGK の相当偈の和訳と『分別業報略経』における相当箇所の書き下し文を、以下に対照表として示したい：

大智度論	SGK 和訳	分別業報略経
(1) 戒を持たざる人の、若し鞭打・拷掠・閉繫し、法を枉げ財を得て、布施を作せば、象馬牛の中に生まれ、畜生の形を受けて、重を負い、鞭策・羈絆・乗騎せらると雖も、而も常に好屋好食を得、人の爲に重んぜられ、以て人供給す。	41 殺害・束縛（監禁）・慳貪によって、人々は、牛や馬などに生まれる。残忍な行為をした者たちは、蜘蛛や蠍に生まれる。	無智にして打縛を好むは、象馬の中に報生せん。或は復た牛羊、麋鹿、諸野獸と作らん。 (T17 447c5-6)
(2) 又知る、悪人の多く瞋恚を懷き、心曲つて端しからざるも、而も布施を行ぜば、當に龍の中に墮して、七寶の宮殿・妙食・好色を得べきことを。	43ab 布施をするが、冷酷で怒りっぽい人々は、大神力あるナーガ（龍）になる。	大布施を修行するも、急性にして瞋怒多く、正憶念に依らざれば、後に大力龍と作らん。 (447c17-19)
(3) 又知る、憍人の多慢・瞋心にして布施すれば、金翅鳥の中に墮して、常に自在を得、如意寶珠有り、以て瓔珞と爲し、種種の須ゆる所、皆自ら恣なるを得て、意の如くならざる無く、變化・萬端・無事として辨ぜざる無きとを。	43cd また布施する者であつて驕慢により、あるいは怒りにより、ガルダ（金翅鳥）王となる。	能く大布施を修するも、高心もて欸ち人を蔑すれば、斯業行に由りて、大力金翅鳥に生れん。 (447c20-21)

(4) 又知る、宰官の人の、枉げて人民に濫り、治法に順ぜず、財物を取って以て布施に用ふれば、鬼神の中に墮して、鳩槃荼鬼と作り、能く種種に五塵を變化して自ら娛しむとを。	53 村のかしらとして、〔自ら〕布施を与えるが、〔村人たちを〕圧迫した（横暴に苦しめた）者は、〔後世に〕醜い姿をしながら尊重される、クンバーンダ（鳩槃荼鬼）に生まれる。	若し聚落の主と爲りて、他の財施を逼取すれば、死して鳩槃荼と作らん。飲食常に意に随ふ。 (448a17-19)
(5) 又知る、多瞋狼戾にして、酒肉を嗜好するの人の、而も布施を行へば、地の夜叉鬼の中に墮ち、常に種種の歡樂・音楽・飲食を得ることを。	54 与える者であっても、食物のために無慈悲に生き物たちを殺したなら、必ず死後に、彼らはラクシャサとして〔生まれ〕、軟食・硬食を獲得する。	若し多く衆生を殺し、肉を以て施恵と爲せば、餘罪もて羅刹と作らん。常に衆の美食を得。 (448a19-21)
(6) 又知る、人有り、剛愎強梁にして、而も能く車馬を布施し、代つて歩せしめば、虚空の夜叉の中に墮ち、大力有つて至る所風の如くなることを。	59 車で父母や師長たちを望まれた通りに運んであげる者たちは、〔死後に〕安樂を具えて、天車（天宮）で〔空を〕移動するヤクシャに生まれる。	輿乗を父母に獻じ、親善の人に給施すとも、稟性慳吝多からんものは、生れて遊空神と作らん。 (448b2-4)
(7) 又知る、人有り、妬心にして諍を好めども、而も能く好き房舎・臥具・衣服・飲食を以て布施するが故に、宮觀飛行の夜叉の中に生じ、種種の娛樂便身之物有るとを。		宅舎もて飲食を乗せ、此を以て惠施を修すれば、生れて虚空神と作りて、常に宮殿と俱ならん。 (448b5-6)
(8) 復次に、飲食を布施すれば力色命樂の瞻を得。	67 この世で食物を布施する人は、〔後に〕長寿・美貌・力をそなえ、榮譽あり、病に罹らず、いつも幸せな者になるだろう。	若し飲食を以て施せば、長壽好色力にして、辯慧財寶多く、無病にして心安樂ならん。 (448c1-3)
(9) 若し衣服を布施せば、生れて慚愧を知ることを得、威徳端正にして身心安樂なり。	68 衣を布施するならば、〔後に〕羞恥心をそなえ、見目良く、享樂し、美しく、人々から愛され、衣服を得る者になる。	衣を施せば慚愧を得て、神儀高勝尊となり、人相悉く具足し、観る者欣ばざる莫く、其身は常に安隱にして、心適恒に喜歡ならん。(448c3-6)
(10) 若し房舎を施せば、則ち種種の七寶宮觀を得、自然にして五欲を自ら娛むこと有り。	69 この世でもし淨い喜びの心をもって住居を布施するなら、〔後に〕その人にはあらゆる感覺的享樂（欲樂）をそなえた豪邸が生じる。	屋を施せば舎宅を得、宮殿極めて嚴麗にして、寶藏悉く盈滿し、衆具所欲に随はん。 (448c7-8)

(11) 若し井池・泉水・種種の好漿を施せば、生ずる所則ち飢無く、渴無きことを得、五欲備さに有り。	71 水飲み場や井戸や池などの給水場を作らせたなら、〔後に〕熱苦をのがれて、快適であり、喉の渇きに苦しめられない。	若し井浴池、及與び淨水漿を施さば、生生に渴乏無く、所欲常に意に隨はん。 (448c9-10)
(12) 若し橋船及び諸の履屣を施せば、生れて種種の車馬を有し具足す。	70 履き物や橋などを布施した人々は、〔後に〕いつも快適であり、種々の乗物を得る。	橋船もて未渡を濟ひ、履屣もて徒跣に施せば、常に象馬車を得ん、是れ則ち人中の天なり。(448c11-12)
(13) 若し園林を施せば、則ち豪尊なることを得、一切の依止と爲り、身を受くること端政に、心樂んで憂無し。	72 園林を布施した者は、〔後に〕花々で敬意を示され、榮譽をもち、あらゆる人々が帰依し頼りにする人となり、常に繁榮するだろう。	若し園林を以て施せば、常に勝妙の果を獲て、一切所依の蔭、心安らかに熱惱無く、衆人に愛樂せられ、眷屬悉く具足せん。(448c13-15)
(14) 若し人布施して福德を修作し、有爲の作業、生活を好まざれば、則ち四天王の處に生ずることを得。	95 自ら進んで安樂を願ひ求めることなく、また所有財によつて心悅ぶことがないなら、その者は〔後生に〕惑星たちの首長としての、マハーラージカ天（四天王）になる。	若し人、名聞を慕ひ、及び生天の樂を求むるに、善師に依憑して學し、身口意清淨にして、所有の諸の財物を、愛樂もて守護を加へん、斯の業縁に由るが故に、後に四王家に生ぜん。(450a16-19)
(15) 若し人布施し、加ふるに父母及び諸の伯叔・兄弟姉妹の供養を以てし、無瞋無恨にして諍訟を好まず、又喜んで諍訟を見ざるの人は、忉利天上・焰摩・兜術・化自在・他化自在に生ずることを得。	96 父母と一族の長老たちを大切にし、喜捨をなし、よく堪忍し、諍いに喜悅することがないなら、三十三天に生まれる。 97 ……ヤーマ天に至る。 98 ……トゥシタ（兜率）天に行く。 99 ……ニルマーナ・ラティ（化樂）天に行く。 100 ……パラ・ニルミタ（他化自在）天に行く。	孝順もて淨く、父母諸の尊長を供養し、忍辱にして瞋恨少く、鬭訟を觀んことを樂はざれば、斯の業縁に由るが故に、後に忉利天に生ぜん。 (450a24-26) ……夜摩天…… (450a27-28) ……兜率天…… (450a29-b2) ……化樂天…… (450b3-5) ……他化天…… (450b6-8)

この表中の『分別業報略經』のすべての文に対して、『分別善惡所起經』韻文にもそれに相当する文がある。そのためこの表は、さらに『分別善惡所起經』を加えて、4本対照の形にすることが可能である。ただ表の見やすさを考えて、3本対照とした。

さてこの表を見ると、『大智度論』のこの一連の文は散文でありながら、現存する梵文 SGK ならびに『分別業報略經』と実に似ていることがわかる。内容も、出てくる順序も、ほぼ同じである。『大智度論』の作者は SGK 系統のテキストか、或いは『分

別業報略経』の梵語の原本 — それは大体『分別善惡所起経』韻文の原本でもある — の系統のテキストかの、どちらかを見ながらこの文を作ったものと思われる。

表を細かく比較して見ることで、『大智度論』の該当文は、SGK よりも『分別業報略経』に近いと判断できる。その判断の根拠として次の3点が挙げられる。

[1] 『大智度論』の(7)の文に相当する偈がSGKには欠けているが、『分別業報略経』(と『分別善惡所起経』521c4-5)にはそれが有る。

[2] 『大智度論』の(2)と(3)の文に相当する偈は、SGKでは第43偈だけである。つまり第43偈の前半(pāda ab)は龍に生まれる業を説く『大智度論』の(2)に相当し、第43偈の後半(pāda cd)は金翅鳥に生まれる業を説く『大智度論』の(3)に相当する。ところが『分別業報略経』と『分別善惡所起経』の相当箇所を見ると、2偈に分かれていて、1偈が龍の業、次の偈が金翅鳥の業を説いている。このように別々に分けている点で、SGKよりも両漢訳のほうが『大智度論』の(2)と(3)の文に近い。

[3] 『大智度論』の(10)(11)(12)(13)の四つの文に相当するSGKの偈は、それぞれ第69偈、71偈、第70偈、第72偈である。ここでSGKは69-71-70-72と、相当する偈の順番が少し狂うのに対して、『分別業報略経』と『分別善惡所起経』の相当箇所では、『大智度論』のその四つの文と全く同じ順番で文が出てくる。つまり(10)(11)(12)(13)に対して、『分別業報略経』ではそれぞれ448c7-8の偈、448c9-10の偈、448c11-12の偈、448c13-15の偈の順番であり、『分別善惡所起経』でもそれぞれ522a5-6の偈、522a7-8の偈、522a9-10の偈、522a11-12の偈の順番である。

以上の三つの理由から、『大智度論』の作者はSGKではなく、『分別業報略経』系の梵文の原本を、『大智度論』を執筆する時の材料に用いたことがわかる。この結論は、『大智度論』では小乗の経や論を用いる時に主に有部が伝承する経や論に依っているという事実と照らしてみても、納得のゆく結論といえるであろう。また逆に、梵文SGKが非-有部の所属で、『分別業報略経』系が有部の所属であることを支持する、有力な根拠を、ここ『大智度論』において見出し得たともいえる。

『大智度論』を仏訳して研究したE. Lamotteは、『大智度論』が西北インドの説一切有部に属した学僧により4世紀初めに作られたと推測した(Tome III, pp. XL, L)。その意見に従えば、『分別業報略経』系の梵語原本の成立の下限を『大智度論』より前、4世紀初め以前に置くことができよう。私自身は『大智度論』の龍樹を『中論』の龍樹と同一視する学的立場に賛成しないが、もしその意見に従うなら、その下限は更に百年以上古くまで移動する。つまり馬鳴の時代にまで下がる可能も出てくる。

なお『大智度論』に利用されたのは確かに『分別業報略経』系の(有部系)テキストであると思われるが、そのテキストは現存する漢訳の『分別業報略経』とほとんど同じテキストではなく、それよりもっと偈数が少ない、SGKに近い短さをもつよう

な、1段階古いテキスト（有部の Ur-SGK）であったのではないかと私は推測する。そのわけは、『大智度論』の作者がこの箇所ですべて15の文をそのテキストから適当に選び出したわけであるが、15の文のうち14の文は SGK にもある偈である。これほどの高確率で、SGK にも対応する偈が見つかる偈ばかりが選ばれたのは、『大智度論』の作者が利用したテキストは、まだ SGK に近い偈の量をもつにすぎない素朴な段階に留まっている古いテキストだったからではないか。もし現存する漢訳『分別業報略経』と同じくらい多くの偈の量をもつテキストから適当に15の文を選び出したなら、15分の14という高確率で、SGK とも合致する偈ばかりが選ばれることはありえない。漢訳『分別業報略経』は大勇によって再編集を受けた拡大版と考えられるから、『大智度論』が利用したのはその拡大がなされる前の、有部の Ur-SGK なのではないか。

また『大智度論』の(15)の文は天界の六欲天で記述を終えている点が注意される。漢訳『分別業報略経』（と『分別善惡所起経』）では天界の記述は六欲天で終わらずに、更に色界・無色界の諸天まで偈が増広されているのに対し、SGK は六欲天だけで天界の記述を終える。もし『大智度論』の作者が漢訳『分別業報略経』と同じ程度に発達したテキストを用いたならば、『大智度論』の(15)の文は六欲天で終わることなく、無色界までを簡略に紹介したのではないだろうか。このことから、『大智度論』の作者が利用したテキストは、まださほど増広されていない段階にある有部の SGK の原形テキスト（Ur-SGK）ではなかったかと考えられる³⁷⁾。

9 SGK の部派

現存する梵文 SGK は確実に小乗の作品であるから、インドではどこかの小乗部派の教団の中で伝持されていたはずである。梵文 SGK の所属部派は、どこであろうか。現存する SGK が六道説の立場に立つ点を考慮すると、五道説に立つパーリ上座部と有部

37 『大智度論』の作者は巻十二の最後の箇所、「どのように菩薩の布施は般若波羅蜜を生じるのか」という問に対して、「菩薩は布施する時に、種々分別して布施すること、それが菩薩の布施が般若を生ずることだ」と答えるため、その「種々分別」、つまり業報分別の理解の例として、上記の15の業報（152c11-153a14）を説く。作者は、大乘の菩薩の布施について説明するために、小乗の作品からの文の引用であることを明かすことなく、有部で伝承される SGK に近い文献を利用したわけである。SGK の韻文がここで散文として漢訳されているのは、文意を明解にするための羅什の筆の働きであろうが、この箇所の説明全体が羅什の創作であるとは思えない。たとえ『大智度論』があちこちで羅什によって註釈的に加筆されているとしても、この箇所では、大乘の菩薩の布施を説明するために、小乗が伝持する韻文の業報文献をそのまま利用して記事を作り上げる大胆な書き方は、大乘の般若経の教義が小乗の有部が伝持する経の伝統と完全に両立することを確認する『大智度論』の原著者の立場でなければ、出来るものではない。またもし羅什の加筆なら、羅什は中国で手元に SGK に近い作品の梵本を持っていたことになる。

は、その候補から自然に除外されることになる。六道説に立つ部派としては、大衆部のアンダカ派と北道派ならびに犢子・正量部がある³⁸⁾。その中から候補を選ぶならば、大衆部系の部派よりも犢子・正量部である可能性が高いと私は考える。大衆部よりは、上座部系の部派である犢子・正量部のほうが、同じ上座部系の有部のように、業報の威力の強調に熱心であったと思われるからである。また私は上述のように SGK の原形テキスト (Ur-SGK) は有部系の部派で作られたものであると考え、その作品が犢子・正量部を含めた上座部系の部派で共有されていた時代があったと推測するが、大衆部と有部の間では距たりが大きすぎて、あまりそのような共有関係は考えにくい。

この、現存する梵文 SGK の部派が犢子・正量部である可能性について、六道説以外に、その根拠理由として、次の3点をあげたい。

[根拠 1] SGK の漢訳は2種類あるが、どちらも宋代の訳である。北宋の時代になって SGK の写本が中国にもたらされ、初めて漢訳された。義浄の報告によれば、7世紀後半以降にインドで生き残っていた小乗部派は四つだけであった。有部、大衆部、正量部、パーリ上座部である。宋代にインドから写本がもたらされて漢訳された小乗の典籍は、この四つの部派のどれかに属する可能性が高い。実際に、宋代に法天によって漢訳された小乗の阿含経『七佛経』(大正 No. 2) は、正量部の伝承に属する經典である³⁹⁾。SGK の漢訳の一つ『佛説六道伽陀経』もその同じ法天による翻訳である。正量部は玄奘が渡印した7世紀前半には有部をも上回る、小乗部派の最大勢力となっていた部派であり、13世紀にインドで仏教が減じる時まで存続していたため、宋代

38 六道説を唱える部派は、*Kathāvatthu* (第8品第1章 *Gatikathā* 趣論) のアッタカターによれば大衆部のアンダカ派と北道派、また大毘婆沙論 (T27 8b24) と大智度論巻第十 (T 25 135c24) によれば犢子部である。実際に犢子部から分派した正量部の『三彌底部論』(T 32 466b23, 470a12) や『立世阿毘曇論』(T32 216a14, 217c19, 219c5) の作品中に六道説が確認できる。— なお私がここで犢子・正量部という表現を使う理由は、犢子部から生まれた正量部は勢力を増すにつれ次第に親部派である犢子部を呑み込んでしまったと考えられるので、特にその過渡期は犢子部か正量部かを分けることが困難でもあり、無理に分けることは学問的に危険でもある。そこで両部派の一体性・連続性を強調した呼び名として、犢子・正量部 (*vātsīputrīya=sāmmītiyāh*) という言い方を用いたい。— SGK は内容から判断して小乗の作品であるから、私はここで六道説を唱える小乗部派を考察したが、大乘仏教徒も多くは六道説に従うことはよく知られている。現存する SGK がもし大乘の信徒であるグループによってある時期に大乘經典とみなされて、五道(有部などの立場)から六道(大乘の標準説)にするための編集の手が加えられたという、極めて特殊な事情をもつものであるならば、SGK が小乗部派のいずれかに属するかというこのような議論は無意味になる。しかしインドではすべての僧は、大乘を信奉してもいずれかの小乗の僧団に属していたから、所属する小乗部派の伝統に逆らうかたちで、その小乗部派内で既に広く共有されているテキストを、一部の者が勝手に五道から六道に変更することが認められるとは思えない。

39 『七佛経』の所属部派については岡野(2004) 177頁以下を参照。

の中国にその部派の典籍の写本がもたらされることは容易に起こりえたはずである。また、次の二つの事実、すなわち正量部は有部よりも隆盛期が五百年遅れて、7世紀頃になってやっとインドで最大の隆盛期を迎えたという事実と、SGKの蔵漢巴の3言語への翻訳がやっと8世紀後半頃（蔵訳の年代）から12世紀の間に行われたのに対して、有部に属するSGKの姉妹的作品の漢訳である『分別業報略経』と『仏説分別善惡所起経』の翻訳はそのおよそ五百年も前に相次いで中国で行われていた事実とは、符合するように思われる。現存するSGKの作品そのものは2～4世紀の頃に有部から流出して他部派にも採用されて伝持された作品として⁽⁴⁰⁾、既に早くからインドに存在していたが、その当時はSGKの所属部派（犢子・正量部）の勢力が弱かったために、有部の作品のように異国に伝わることはなく、やがてその所属部派が有部を超える勢力をもつ時代に至ってSGKはインドで広く流布したため、インド周辺の国々にも伝わり、翻訳が行われたのではないか。

〔根拠2〕 SGKは11～12世紀に梵語からパーリ語訳されて *Chagatidīpanī* が出来たと推測される⁽⁴¹⁾。そのパーリの翻訳者は Thatōn の Saddhammaghosa という人物である⁽⁴²⁾。その同じ僧は別の作品も梵語からパーリ語に訳しており、それはパーリ語の

40 Giuseppe Tucci が1948年にチベットの Kong dkar chos grva 僧院でその貝葉写本を得た、正量部のアビダルマ綱要書の *Abhidharmasamuccayakārikā* という Saṃghatrāta 作の550偈から成る作品は世親の俱舍論の影響を極めて濃厚に受けていることが、彼の写本の報告により知られる。そのことは大衆部よりも上座部系の正量部のほうが、有部との知的交流が活発であったこと、正量部は上座部系の別部派でありながら有部の教理を積極的に学び、有部の論師たちの影響を強く受けていたことを示すと思われる。G. Tucci (1956b): 「チベット及びネポールにおいて新たに発見せられた佛教典籍について」、『大谷学報』36-1、1-3頁を参照。またその写本の発見の経緯については G. Tucci (1956a): *To Lhasa and Beyond. Diary of the Expedition to Tibet in the Year 1948*, Roma, p. 179 を参照。

41 パーリ語訳の成立年の下限について言えば、(1) *Chagatidīpanī* の名がミャンマーの Pagan の1寺のモン碑文に記されていて、その碑文が西暦1448年であること、(2) また Phramahachatpong (2013) が報告したように14世紀の Lopappadīpakasāra に Pañcagatidīpanī の偈が多数引用されていること、——以上の(1)(2)の事実から、パーリ語訳の成立の下限を設定できる。14世紀以前の成立であることは確実であるといえる。

42 Bode, M.H. (1909): *The Pāli Literature of Burma*, p. 104 において、No. 118 *Chagatidīpanī* に対し footnote 8に「By Saddhammaghosa of Thatōn. See Forchhammer, *List*, p. xxvi.」と記述され、また No. 114 *Lokapaññatti* に対して footnote 7に「By Saddhammaghosa of Thatōn.」と記述される。この碑文については *Inscriptions of Pagan, Pinya and Ava. Translation, with Notes*, 1899, Rangoon, pp. 37-47 も参照のこと。——なおこの Saddhammaghosa という人名はパーリ語に訳した人の名ではなく、作品の作者の名であるという解釈もありえる。つまり馬鳴 Aśvaghoṣa (or Dhārmikasubhūtiḥoṣa / Dharmasubhūti) の名称が誤ってそう伝えられた、という推測に基づく解釈である。その場合、梵

Lokapaññatti という作品であるが、その梵語の原本は、真諦が558年に漢訳した『立世阿毘曇論』（大正 No. 1644）とほぼ同一の作品で、それは犢子・正量部に属する論書であった⁴³。つまり *Saddhammaghosa* という人が犢子・正量部の作品をパーリ語する活動をしたのは『立世阿毘曇論』だけではない可能性があるので、SGK もそれと同じ部派のものではないだろうか。*Chagatidīpanī* の註釈である *Chagati-atthakathā* には *Lokapaññatti* の中にある六道輪廻論のテキストとほぼ同じテキストが利用されているから、*Lokapaññatti* と *Chagati-aṭṭhakathā* のそれぞれのパーリ語訳と編集は、宇宙論に強い関心をもつ同じ人か同じグループが関わっている可能性が濃厚であり、*Lokapaññatti* を訳した人物（*Saddhammaghosa*）が *Chagatidīpanī* も訳したと見なすことに、何ら不自然さは無いように思える。その人（か同じグループの人々）にとって、両作品はもともとインドの同じ部派（犢子・正量部）の伝承であったから、*Chagati-aṭṭhakathā* の訳訳と編集のために *Lokapaññatti* の中にあるものと同じテキストを用いることに躊躇が無かったのではないだろうか。なおその時代の、パーリ上座部が支配的になる前の東南アジアにおいて、勢力をもっていた部派教団は、根本説一切有部と正量部であった。

[根拠3] SGK が36偈で「とても怒りっぽく、…… 他人の不幸を喜ぶ者は、ヤマのラクシャサ（羅刹）たちとして生まれる」と、地獄の獄卒たる羅刹たちの誕生を説いている点は注意される。基の『唯識二十論述記』に「諸部中、大衆・正量説、獄卒等是有情」（T 43 987a17-18）という記述があり、大衆部と正量部が「地獄の獄卒は生物（有情）と見なされるべきである」と主張したことが知られる。実際、犢子・正量部に所属する文献 *Mahāsaṃvartanīkathā* 5.1.5 や立世論（T 32 222b6-19）やLP（I, p. 194）、また犢子部のアビダルマである三法度論（T 25 27c18）と四阿含暮抄解（T 25 13a23-24）から、犢子・正量部では地獄の獄卒たちが生き物であるとする立場を取っていることを確認できる。なおこの SGK 36偈（にほぼ相当する 1 偈）は、Bhadanta Dharmaśubhūti（大徳・法善現）が説いたものとして、『俱舍論』世間品の第59頌釈で、地獄の獄卒は有情かどうかという議論に引用されていて、有部の中に大徳・法善現に代表される、獄卒有情の立場を取る人々がいたことがわかる。このように SGK 36偈に見られる見解は SGK の犢子・正量部所属の可能性を補強するものである。

語の『立世阿毘曇論』までも馬鳴によって作られたことになってしまう。また *Thatōn* の語はどう説明するのが問題になる。そのため私はここではその解釈は取らない。

43 『立世阿毘曇論』の所属部派が犢子・正量部であることについては岡野（1998）の論文を参照。また『立世阿毘曇論』とパーリの *Lokapaññatti* との関係は、Mus（1939）, Chapitre VI（pp. 117 ff.）を参照。

以上の理由から、現存するそのテキストは、本来有部の師である Subhūtiḥoṣa もしくは有部系の馬鳴が作った原 SGK から派生して「非-有部」で伝持された 1 recension としての、犢子・正量部が伝持した SGK である可能性が高いと私は考える⁽⁴⁴⁾。

これまでの様々な考察から、SGK が出来たプロセスについては、「本来有部で作られたテキスト (Ur-SGK) が出来た後、その作品の主要部分はある期間、上座部系の諸部派で共有されていた。そして Ur-SGK からそれぞれ有部の recension (『分別業報略経』『分別善惡所起経』の原本) と正量部の recension (現在の梵文 SGK) のテキストが成立した」、と私は考える。これは工藤順之 (2005) が業報を説く文献群「鸚鵡経類」の第二類の諸テキストを研究して出した結論と、かなりよく似ている⁽⁴⁵⁾。SGK 系の諸テキストと「鸚鵡経類」の第二類の諸テキストは、性質が似ているためか、歴史的にも同じ様な道を辿ったということであろうか⁽⁴⁶⁾。

10 SGK と正法念処経の関係

Lévi が見つけたネパールの SGK の梵文写本のコロフォンには、この作品が「聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である」と記されている。

āryasaddharmasmṛtyupasthāna-mahāyānasūtrāntāt samākṛṣṭā
mahāpaṇḍitāśvagoṣena ṣaḍgatikārikāḥ samāptāḥ //

44 もし SGK が私が推測するように、そのテキストのおおもと（原形）は有部系の部派で作られたものの、後に犢子・正量部の部派内で、六道説化などの若干の修正を受けつつ伝持されたテキストである場合、最初から純粋に犢子・正量部の内部で作られたテキストではないので、作品としては「二重の所属性」という特殊な性格が残り、作品内容の細かな点までが犢子・正量部の伝統と合致しているとは思えない。そのため『立世阿毘曇論』などの犢子・正量部の伝統から自然に生まれた作品と、SGK とを、地獄界や餓鬼界についての語句表現において細かく比較する研究を行ったとしても、この SGK の場合はあまりうまくゆかないと思われる。

45 工藤 (2005) は、「鸚鵡経類」の第二類の諸文献の分出のプロセスに関して、彼が得た結論を次の様に表現する：「部派に共有されていた或る程度発展したテキストがかつては存在し (Ch-5, Tib2?)、それから有部系 (MS [C], Ch-6, Tib3?)、その後正量部系テキストがより増広されて成立した (KV, Tib1)、というのが今のところ資料的に裏付けがとれる伝承過程である。対応関係が一律ではないので一つの伝承内でも異なる段階にあるテキストが複数存在していたものと思われる。」 (868 頁)

46 このように二つのテキスト、梵文 SGK と「鸚鵡経類」の第二類の代表である梵文 (Mahā-)Karmavibhaṅga とが、今やどちらも犢子・正量部所属の可能性が出て来ている時、Sylvain Lévi によって相次いでどちらの作品の写本も発見されたことには、偶然以上の要素が多少は絡んでいる可能性が考えられる。

（聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である、偉大な学者 Aśvaghōṣa による、『六道頌』終わる。）⁴⁷⁾

このコロフォンの文をそのまま受けとめるなら、SGK の作者とは、ソースである經典から単に偈頌を抜き出して編集を行ったにすぎないこととなる。ここで言及される『正法念処』(Saddharmasmṛtyupasthāna) という謎のテキストは、我々がパーリ聖典やチベット訳（東北 No. 287）や漢訳（大正 No. 721, 722）で知る『正法念処経』とは全く違うテキストであることになる。我々が知る『正法念処経』には SGK の偈が見出せないからである。

SGK の源泉としての『正法念処』という謎の經典に関して、*Chagatidīpanī* の註釈が記す説明文によれば、その経の名は『聖なる正法大念処』(Āryasaddhamma-mahāpati-

47 「聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である……」と記した SGK 梵文写本のコロフォンの文に関して、それに相当する文の訳が、SGK の蔵訳には存在しないので、この文は或る時代に写本に付け加えられたものであろう。『正法念処経』は小乗の作品であるのにわざわざ「大乘経から」とするそのコロフォンの文は、大乘を信仰するネパールの写経生 — 彼は『正法念処経』の写本をネパールで見たことがなく、作品名しか知らなかったのをそれを大乘経と思い込んだ — の手が、SGK の写本に加わったことを示すものと私は考える。このコロフォンの文は散文であるが、もともと偈の形で伝わっていた文を後から強引に書き直した結果、散文に出来上がった文ではないだろうか。想像を逞しくするならば、その元にあった文は、パーリ *Chagatidīpanī* の冒頭に記されていると Minayeff によって報告された、次のパーリの偈 (Mus, p. 19) に近いような文面をもつ偈ではなかったろうか。

saddhammasatipatṭhānasuttato jinavuttato / paṇḍitena saghoṣena dīpitā (cha)gatidīpanī //

このパーリ語で伝わる偈は pāda d を dīpitā chagatidīpanī と読むと 9 音の hypermeter になるが、cha を省くのも変である。偈のその箇所元の梵文はそもそも dīpitā *śaḍgatidīpanī ではなかったであろう。パーリの偈を元にして想像するなら、例えば、元は次のような梵文の偈文であったと考えることは出来ないだろうか。

saddharmasmṛtyupasthāna-sūtrād jinena *bhāṣitāt / paṇḍitenāśvaghōṣena *kṛtāḥ *śaḍgatikārikāḥ //

これは私が憶測で作った梵文にすぎない。*bhāṣitāt の箇所は *darśitāt かもしれない。SGK の Lévi 写本のコロフォンの文が、もし本来は偈であって、*Chagatidīpanī* の上記のパーリ偈に近い梵文であったものが崩れて散文に変わったものであるとするならば、韻律的に考えて、その元の梵文の偈には「大乘経」(mahāyānasūtra) という語が入る余地は無かったことになるだろう。『正法念処経』が大乘経であるという思い込みから、写経生が無理に「大乘経」の語を押し込んで、その文からの抜粋であることを示そうとした結果、出来上がったコロフォンの文かも知れない。なお Lévi がネパールで梵文 SGK と同じ写本の中にあるのを発見した馬鳴の作らしい梵文テキスト『十不善業道 [説示]』*Daśakuśalakarmapathāḥ* に次の文が記されている：uktaṃ ca bhavagatā āryasaddharmasmṛtyupasthāna-mahāyānasūtre ime daśakuśalāḥ karmapathāḥ mahānarakahetavaḥ [...]. Lévi (1929), p. 269. つまり、この馬鳴のテキストにも「聖なる『正法念処』大乘経」とある。ネパールで写経生の手によって、これらの写本に「大乘経」という語が書き込まれた疑いが濃くいえるであろう。

saṭṭhānaṃ nāma suttaṃ) といひ、『小部』(Khuddaka-nikāya) に属し、182 誦分の所撰 (bhāṇavara-saṃgahita) であり、[テキストの] 分量 (pramāṇa) が偈頌 (gāthā) として 125 ある経で、その経の内容は業 (kammaṃ) と業異熟 (kammaṇipāko) と趣 (gati) と趣の分類 (gatippabheda) という 4 つのパート (koṭṭhāsa) から構成されている⁽⁴⁸⁾。そして詳細な形では (vitthārena) 完全に学び知ることが出来ない頭の悪い弟子たちのため、憐れみから (その教義を) 簡略な形で (saṃkhepena)、教師である馬鳴がこの *Chagatidīpanī* (= SGK) という論書を説示した、と註釈は語る。

その *Chagatidīpanī* 註の説明から、その源泉たる經典が125偈分の大きさをもつテキストであったことが知られるが、しかし125偈分の程度の大きさしかない經典から、105偈から成る SGK を「抜き出した」とは到底考えられない。その註釈の説明によれば、馬鳴は詳細な形では弟子達が学習しきれないため、テキストを簡略化する形で、この SGK という論書を作ったというのであるから、恐らく『正法念処』という業報に関する経をベースにして、或る浩瀚な業報分別のアビダルマ文献が作られ、それをとても学びきれない弟子達のために、要点だけを述べて105偈の作品を作ったのであろう。つまり謎の經典『正法念処』→それを簡略化したSGK、という2段階ではなく、『正法念処』→詳細化した業報分別のアビダルマ文献→簡略化したSGK、という3段階で作品の形成を考えなければ、*Chagatidīpanī* 註の説明は納得ができない。SGK という作品が、詳細に議論を発達させた論書から、その教義の簡略化のために要約 (saṃkṣepa) として作られた論書であることは、SGK の姉妹文献というべき『分別業報略』の題名に、わざわざ「略」(*saṃkṣepa) という語が付けられていることが、一つの重要な証拠になる。

SGK の作品そのものから推測すると、一人の著書がよく作品全体の構成を考えた上で1偈ずつ創作した作品である。決して他文献の「抜粋」で作れる作品ではない⁽⁴⁹⁾。要約 (saṃkṣepa) という仕事は、『俱舍論』のように、先行するアビダルマの沢山の議論をよく消化した上で、創造的に行われる創作行為である。その作品に馬鳴や法善現のような著名の詩人の名が冠されたのは、それが容易には作れない高度な創作行為であることをインド僧たちも理解していたからであろう。

なお Lévi がネパールで貝葉写本を発見して1925年に報じた、2684頌（実際は2680頌）から成る *Dharmasamuccaya* 梵文テキスト — これは宋の日称等が漢訳した観無畏尊者集の『諸法集要經』（大正 No. 728）にあたる — も、『正法念処經』こそが作品の偈頌のソースであるとコロフォンで自ら語る。すなわちその *Dharmasamuccaya* の写

48 Mus (1939), p. 20 を参照。

49 一人の詩人によって創造された作品であると判断する別の根拠は、69偈の訳注を参照。

本のコロフォンには、「私は『正法念処経』の広大な大海から偈頌を抜き出そう」と記されている⁵⁰⁾。その作品の場合は、実際に『正法念処経』（No. 721）の中の多数の偈と密接な関係があることが確認できるので、『正法念処経』（Saddharmasmṛtyupasthānasūtra）から偈を抜粋して作られたという文は正しいものと見なして差し支えない。宇宙論の書である『正法念処経』からの二次的な産物として、そこから善説（subhāṣita）の詩集を作るという作業がインドで行われたのであろう。なお *Dharmasamuccaya* の中には SGK と関連しそうな内容をもつ章として、第15品：説罪品（pāpavargaḥ）、第16品：地獄品（Narakavargaḥ）、第17品：餓鬼品（Pretavargaḥ）、第18品：畜生品（Tiryagvargaḥ）、第19品：飢乏業法品（Kṣudhāvargaḥ）、第31品：福行品（Puṇyavargaḥ）、第32品：生天品（Devavargaḥ）などがある。しかし *Dharmasamuccaya* に SGK と共通する偈は無い。

11 梵文 SGK の内容

以下に梵蔵漢巴対照テキストを示す前に、まず梵文 SGK の作品としての内容構造を示せば、次のとおりである。（『分別業報略経』等の構造は Appendix で示す。）

(a) 帰敬偈の後、仏の教えである業報分別を要約して説くことを告げる

第1～4偈

(b) 八大地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く

第5～20偈 (20で八大地獄終わる)

(c) 増地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く

第21～37偈 (37で『地獄の節』終わる)

(d) 畜生の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く

第38～44偈 (44で『畜生の節』終わる)

(e) 餓鬼の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く

第45～60偈 (60で『餓鬼の節』終わる)

[本来的な餓鬼類のグループは第45～52偈、妖怪的な存在のグループは第53～59偈]

(f) 人間に生まれて幸・不幸の様々な状態になる前世の業を説く

第61～93偈 (93で『人間の節』終わる)

[(f) のより詳細な内容：]

50 *Dharmasamuccaya* の帰敬偈の後に出てくる第2偈は次の様に記される。
saddharmasmṛtyupasthānasūtravaipulyasāgarāt / gāthāḥ samuddhāriṣyāmi lokalocanataparāḥ // また作品
のコロフォンには vaipulyamahāgambhīrodadhisūtravarād bhikṣv-avalokitasimhenoddhṛtaṃ iti とある。
Cf. Lin Li-kouang (1946), p. 4; Lin Li-kouang (1949), p. 158.

- (f 1) 人界で短命と病氣を得る因となる業を説く 第61～62偈
 (f 2) 貧富の状態をもたらす、盗みと施の業因の四句分別 第63～66偈
 (f 3) 具体的にどんな物を布施すると人界でどんな果を得るか 第67～77偈
 (f 4) 布施する人の心構えや布施の仕方によって果が異なること 第78～82偈
 (f 5) 戒論としてその他の種々の善悪の行いはいかなる業果を得るか 第83～93偈
- (g) 阿修羅と六欲天のそれぞれに生まれるための善業を説く
 第94～100偈 (94で『阿修羅の節』終わり、100で天界終わる)
- (h) 結びの語
 第101～105偈 (105で『神々の節』終わる)

略号 Abbreviations

【梵文 *Ṣaḍgatikārikāḥ* と和訳に関連する略号】

Aps (ed. Matsumura) = Hisashi Matsumura (1989).

DBI = Lokesh Chandra (1999-2005).

ex conī = ex coniectura (校定者の推測に基づく訂正)

Lévi = Sylvain Lévi's ms. of SGK (copied by Sherril).

Mus = Mus (1939).

SGK = *Ṣaḍgatikārikāḥ*

Skt. = Sanskrit

本庄『ウパーイカー』 = 本庄良文 (2014).

中村大辞典 = 中村元 (1976): 『佛教語大辞典 縮刷版』、東京書籍。

望月 = 望月信亨 (1909-1936): 『望月仏教大辞典』

【梵文 SMRAM と *Ratnāvadānamālātattva* に関連する略号】

A' = ms. of *Ratnāvadānatattva* (Kyoto University Library), used by Takahata (1954). Goshima & Noguchi No. 87.

Ed. = Takahata (1954).

Ms. = ms. of SMRAM (National Archives of Nepal), NGMPP B101/3.

N = ms. of *Ratnāvadānatattva* (National Archives of Nepal), NGMPP E1343/4.

SMRAM = *Subhāṣitamāratnāvadānamālā* (= Ms.).

【パーリ文に関連する略号】

Cha-g = *Chagatidīpanī*.

Cha-g-A = Chagatidīpanī-aṭṭhakathā.

de Jong = de Jong (1990), a review of Hazlewood (1987).

Feer = Léon Feer (1884).

Hazlewood = Ann Appleby Hazlewood (1987).

Pāli = Pāli text of the Chagatidīpanī / Pañcagatidīpanī.

Pañca-g = Pañcagatidīpanī.

〈Mus が用いたパーリ写本の略号 : 〉

B = Burmese ms. of the Chagatidīpanī in India Office Library (used by Mus).

M.1 = Thai-Cambodian (mūl script) ms. of the Pañcagatidīpanī (used by Mus).

M.2 = Thai-Cambodian (mūl script) ms. of the Pañcagati[dīpanī] (used by Mus).

m.1 = Pañcagatidīpanī, Royal Library of Phnom Penh (used by Mus).

m.2 = Pañcagati[dīpanī] with commentary, Royal Library of Phnom Penh (used by Mus).

〈Piromanukul (2007)⁽⁵¹⁾ のタイ国パーリ写本の略号 : 〉

BNL = 5 manuscripts of Pañcagatidīpanī in the Bangkok National Library

BNL.1 = 3646/ka/1; BNL.2 = 3636/ka/1; BNL.3 = 3658/ka/1; BNL.4 = 6221/ka/1;

BNL.5 = 6758/kha/1

Pg-ṭīkā = 2 manuscripts of Pañcagatidīpanīṭīkā

Pg-ṭīkā.1 = 3656/kha/1-3; Pg-ṭīkā.2 = 3658/gha/1-3

MV = 2 manuscripts of Mahāvīpāka

MV.1 = 3704/1-2; MV.2 = 6404/ka/1-2

【漢訳に関連する略号】

Ch-1 = 『六趣輪廻経』 日称等訳 (Taisho No. 726) *Liù qù lún huí jīng*

(= C.1 of Mus's ed.)

Ch-2 = 『佛説六道伽陀経』 法天訳 (No. 725) *Fó shuō liù dào qié tuó jīng*

(= C.2 of Mus's ed.)

Ch-3 = 『分別業報略経』 大勇菩薩撰、僧伽跋摩訳 (No. 723) *Fēn bié yè bào lüè jīng*

Ch-4 = 『佛説分別善惡所起経』 安世高訳 (No. 729) *Fó shuō fēn bié shàn è suǒ qǐ jīng*

Ch-5 = 『大智度論』 鳩摩羅什訳 (No. 1509) *Dà zhì dù lùn*

51 This Piromanukul's Pañca-g version has been edited by using 5 copies of Pañca-g manuscripts from the Bangkok National Library as the main document, and compared with 2 copies of Pañca-g ṭīkā, 2 copies of *Mahāvīpāka* or "the second version commentary of Pañca-g".

なお Ch-1 と Ch-3 は清水恭順による訓読文が『国訳一切経 経集部 十四』（1933年、大東出版社）にある。

また Ch-1 は中華蔵69冊1640番（底本：高麗蔵）。Ch-2 は中華蔵63冊1227番（底本：高麗蔵）・磧砂蔵（台北32冊；北京105冊）。Ch-3 は中華蔵52冊1130番（底本：高麗蔵）・磧砂蔵（台北28冊；北京91冊）。Ch-4 は中華蔵36冊873番（底本：金蔵）・磧砂蔵（台北20冊；北京63冊）・高麗蔵（初彫36冊；再彫20冊810番）。

【蔵訳テキストの校訂に用いた諸版の略号】

Tib. = Tibetan text of the *Ṣaḍgatikārikāḥ*.

D = Derge, Spring yig, Nge 35b3-39a7 (Tohoku No. 4179).

G = Ganden, Spring yig, Nge 338b6-344a2.

H = Ganden, Dbu ma, Gi 112b5-118b1.

N = Narthang, Spring yig, Nge 273a4-277b4 (Mibu No. 3670).

P = Peking, Spring yig, Nge 276b3-281a (Otani No. 5679).

O = Narthang, Dbu ma, Gi 89b1-94a1 (Mibu No. 3406).

Q = Peking, Dbu ma, Gi, 100b5-105a4 (Otani No. 5415).

〈蔵訳の目録の No. : 〉

Mibu No. = No. of Mibu's catalog of Narthang Bstan 'gyur. Cf. 壬生台舜 (1967): 『大正大学所蔵チベット大蔵経ナルタン版論疏部目録』、東京。

Tohoku No. = No. of Tohoku catalog of Derge Bstan 'gyur. Cf. 宇井伯寿 et al.(1934): 『西藏大蔵経総目録』、仙台。

Otani No. = No. of Otani catalog of Peking Bstan 'gyur. Cf. 西藏大蔵経研究会 (1961): 『影印北京版西藏大蔵経総目録』、東京；大谷大学図書館 (1965 -): 『大谷大学図書館蔵西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』、京都。

参考文献 Reference Works

De Jong, J.W. (1990): Review of Hazlewood (1987), *Indo-Iranian Journal*, 33, pp. 235-236.

Denis, Eugène (1977): *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du Bouddhisme ancien*, Lille. 2 Vols.

Feer, Léon (1884): "Pañcagati-dīpanaṃ", *Journal of the Pali Text Society*, 1884, pp. 152-161.

Feer, Léon (1883): *Fragments Extraits du Kandjour*, *Annales du Musée Guimet*, Tome 5.

Hazlewood, Ann Appleby (1987): "Pañcagati-dīpanī, Translated", *Journal of the Pali Text Society*, 1987, pp. 131-159.

Hopkins, E. Washburn (1915): *Epic Mythology*, Strassburg.

- Kirfel, Willibald (1920): *Die Kosmographie der Inder — Nach den Quellen dargestellt*, Bonn.
- Kudo, Noriyuki (2004): *The Karmavibhaṅga, Transliterations and Annotations of the Original Sanskrit Manuscripts from Nepal*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VII, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, Tokyo.
- Lalou, M (1953): "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan", *Journal Asiatique*, 1953, pp. 313-353.
- Lamotte, Étienne (1944-1980): *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra)*, 5 Vols. Louvain.
- La Vallée Poussin, L. de (1911): "Cosmogony and Cosmology (Buddhist)", in: Hastings, James (ed.): *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, IV, pp. 129-138.
- Lévi, Sylvain (1932): *Mahākarmavibhaṅga, la grande classification des actes, et Karmavibhaṅgopadeśa, discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga, Textes sanscrits rapportés du Népal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pali, en tibétain, en chinois et en koutchéen*, Paris.
- Lévi, Sylvain (1929), "Autour d'Aśvaghoṣa", *Journal Asiatique*, 1929, II, pp. 255-285.
- Lin Li-kouang (1946): *Dharma-Samuccaya. Compendium de la Loi*, 1ère partie, Paris, p. 4.
- Lin Li-kouang (1949): *Introduction au Compendium de la Loi (Dharma-Samuccaya). L'Aide Mémoire de la Vraie Loi (Saddharma-Smṛtyupasthāna-Sūtra). Recherche sur un Sūtra développé du Petit Véhicule*, Paris.
- Lokesh Chandra (1999-2005): *Dictionary of Buddhist Iconography*, Aditya Prakashan, 15 vols.
- Matsumura, Hisashi (1989): "Āyuhparyantasūtra: Das sūtra von der Lebensdauer in den verschiedenen Welten. Text in Sanskrit und Tibetisch, nach der Gilgit-Handschrift herausgegeben", *STBK*, 1, pp. 69-100.
- Mus, Paul (1939): *La Lumière sur les Six Voies*, Paris, Institut d'ethnologie (Travaux et mémoires de l'Institut d'ethnologie, 35), 1939.
- Pāsādika, Bhikkhu (1989): *Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu, Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 1, Göttingen.
- Phramahachatpong, Chaitongdi (2013): 「Lokappadīpakasāraの源泉資料に関する一考察 — Saddhammopāyana, Pañcagatidīpanīの引用を中心として —」、『印度学仏教学研究』61-2, pp. 824-826.
- Piromanukul, Rungroj (= รุ่งโรจน์ ภิรมย์อนุกูล) (2007): "การตรวจชำระคัมภีร์ปัญจคติปิณี (A Critical Edition of Pañcagatidīpanī)", *Damrong Journal*, Vol 6, No.2, 2007, 18-39.
- Saigusa, Mitsuyoshi (1962): *Studien zum Mahāprajñāpāramitā(upadeśa)śāstra*, Inaugural-Dissertation (Ludwig-Maximilians-Universität zu München), Hokuseido Verlag, Tokyo.
- Śākya, Jñānāditya (2016): *Pañcagatidīpanī: pāñca gatiyoṃ kā pradīpana*, Saṃjñāna Prakāśana, Nāga-pura. (Original Pali text with Hindi translation and annotated notes in Hindi.)
- Senart, Émile (1882, 90, 97): *Le Mahāvastu. Texte sanscrit pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*, 3 vols. Paris.

Straube, Martin (2006): *Prinz Sudhana und die Kinnari*, IeT 46, Marburg.

Takahata, Kanga (1954): *Ratnamālāvadāna. A Garland of Precious Gems*, Tokyo.

岩本裕 (1974): 『初期經典』、佛教聖典選第 1 卷、読売新聞社。(258-335 頁の「業の分類」は Lévi 本 *Mahākarmavibhaṅga* の現代語訳)

岡野潔 (1998): 「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」、『中央学術研究所紀要』27号、55-91頁。

岡野潔 (2004): 「正量部の伝承研究 (2): 第九劫の問題と『七佛経』の部派所属」、『佛教文化学会十周年・北條賢三先生古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』、山喜房、2004年3月、173-196頁。

岡野潔 (2012): 「世界の成り立ちをめぐる外教との論争—『大いなる帰滅の物語』第 1 章第 4 節読解—」、『哲学年報』71輯、2012年3月、1-46頁。

丘山新・神塚淑子・辛嶋静志・菅野博史・末木文美士・引田弘道・松村巧 (2005): 『現代語訳「阿含經典」—長阿含経』第 6 卷、平川出版社。(『世記経』の現代語訳)

金倉圓照 (1966): 『馬鳴の研究』、平楽寺書店。

川越英真 (2005): 『*dKar chag 'Phang thang ma*』、東北インド・チベット研究会、仙台。

工藤順之 (2005): 「サンスクリット本『カルマ・ヴィバング』テキスト形成の一考察」、『印度学仏教学研究』53-2, (134)-(139) [= 866-871] 頁。

工藤順之 (2008): 「『カルマ・ヴィバング』における節付加の問題」、『創価大学国際仏教学高等研究所年報』11号、343-372頁。

工藤順之 (2014): 「(Mahā-)Karmavibhaṅga 所引經典類研究ノート (4): Nandikasūtra, Devatāsūtra 追補」、『創価大学国際仏教学高等研究所年報』17号、487-496頁。

本庄良文 (2014): 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上下、大蔵出版。

佐藤密雄・佐藤良智 (1933): 『論事 附覚音註』、1933年、大東出版社。

菅原泰典 (2000): 『経集部小経解題』、私家版、仙台。

田枝幹宏・伊東照司 (2015): 『インドネシアの古代芸術』、柏書房。

浪花宣明 (1987): 『在家仏教の研究』、法蔵館。

牧田諦亮 (2014): 『牧田諦亮著作集第 1 卷 偽経研究』、臨川書店。(初出 1976年、京都大学人文科学研究所)

牧田諦亮 (1968): 「敦煌本提謂経の研究 (上) — 安世高訳分別善惡所起経との類似 —」、『佛教大学大学院研究紀要』1号、137-185頁。

芳村修基 (1974): 「The Denkar-ma」、『インド大乘仏教思想研究』、百華苑、99-199頁。(初出 1950)

Ṣaḍgatikārikāḥ 六趣輪廻経 / 佛説六道伽陀経

SGK 1 (<i>guṇino jitajeyasya samyagjñānāvabhāsinah / parārthakāriṇo nityaṃ trilokaguruṇo namaḥ //</i>)	Pāli 1 <i>guṇino jitajeyyassa sammāññānāvabhāsino / paratthakārino niccaṃ tilokagaruṇo namo //</i>
Tib. 1 ⁽⁵³⁾ yon tan ldan zhing dbab bya phebs yang dag ye shes snang ba ldan rtag tu gzhan gyi don mdzad pa 'jig rten gsum gtso phyag 'tshal lo	Ch-1 Text of the <i>Liù qù lún huí jīng</i> 六趣輪廻経 (T. No. 726), vs. 1 : 歸命三世尊 正等覺所説 常行於利他 積集諸功德

SGK 1 梵文の異読 Variants of the Skt Text — 〔以下、この欄に梵文写本の異読の情報を挙げる。なお帰敬偈である第1偈だけは、Pāñcālārāja Avadāna の写本にも無いため、梵文の写本伝承は失われている。そのため蔵訳も参照しながらパーリ文から還梵を試みて、仮に作った第1偈が上記の SGK 1 の梵文である。〕
Pāli 1 パーリ文の異読 Variants of the Pāli Text (Chagatidīpanī / Pañcagatidīpanī) — 〔以下、Feer (1884), Mus (1939), Hazlewood (1987), Piromanukul (2007) に基づき、パーリ文の異読の情報を挙げる。ただしそれら総ての異読をここに挙げているわけではない。〕
Tib. 1 蔵訳の異読 Variants of the Tibetan Text — 〔以下、この欄に DGHNOPQ の7本の異読を挙げる。異読の箇所に例えば <u>DNP</u> のように下線がある場合は、その異読の読みも誤りではなく、採用が可能であることを示す。〕
Ch-2 Text of the <i>Fó shuō liù dào qié tuó jīng</i> 佛説六道伽陀経 (T. No. 725) : 歸命一切佛 及諸菩薩眾 願開正智慧 憶念佛功德 歸依三界尊 T17 452c8-10

52 以下に挙げる梵語・チベット語・パーリ語のテキストはそれぞれ私が作成した critical edition による。漢文テキストについては、韻文作品である Ch-1～Ch-4 は異読が少なく、重要な異読がないため、『大正蔵』の本文をほぼそのまま用いた。和訳は梵文テキストからの訳である。

53 蔵訳で第1偈が始まる前に置かれている文は次のとおり：

| rgya gar skad du | saddharma smṛ tyu¹⁾ pa sthā na²⁾ kā ri kā | bod skad du | dam pa'i chos dran pa nye bar gzahg pa'i tshig³⁾ le'ur byas pa || dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo |

1) tyu] HOQ: ti u DGNP. 2) sthā na] DHOQ: sha nā GNP. 3) tshig] DGHONP: tsig Q.

Cf. Ch-3 Text of the <i>Fēn bié yè bào lüè jīng</i> 分別業報略經 (T. No. 723) : 最勝無上尊 知見悉具足 是故稽首禮 及法應真僧 T 17 446b26-27
Cf. Ch-4 Text of the <i>Fó shuō fēn bié shàn è suǒ qǐ jīng</i> 佛說分別善惡所起經 (T. No. 729) : 佛尊覺第一 已現慧具足 當前禮法眾 恩德若江海 T 17 520a1-2
Cf. Ch-5 Text of the <i>Dà zhì dù lùn</i> 大智度論 (T. No. 1509) [第 I 部の 8 節を参照]

[SGK 訳] 1 徳性をそなえ、打ち勝つべき [魔] に打ち勝ち、正しい智に輝いており、常に他者に利益をなすために行動する、[かの] 三界の師（釈尊）に帰命したてまつる。

SGK 2 (= SMRAM 21.77) ⁽⁵⁴⁾ kāyavāgmānasam karma kṛtaṃ yac ca śubhāśubham / lokas tasya phalaṃ bhuñkte kartā nānyo 'sti kasya cit //	Pāli 2 kāyādīhi kataṃ kammaṃ attanā yaṃ subhāsubham / phalaṃ tass'eva bhuñjanti kattā añño na vijjati //
Tib. 2 gang la byed ¹⁾ po gzhan med pa lus dang ngag dang yid kyi las dge dang mi dge rang byas gang de ²⁾ yi 'bras bu 'jig rten spyod ³⁾	Ch-1, vs. 2 若自身口意 所作善惡業 感果定非差 無別造作者

SGK 2 b) ca śubhā°] Ms. Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'); cāśubhā° A' N. c) bhuñkte] corr.: bhukte Ms. N Ed. Note: Lévi's manuscript lacks the whole stanzas 1-22. Ms., N and Ed. have all stanzas except the 1st stanza.
Pāli 2 b) subhāsubham] Mus p. 216: subhāsubba(ṃ) Feer. c) bhuñjanti] B M.1 M.2 (cf. Mus p. 216): bhuñjati Feer.
T2 1) byed] DGHNP: byid OQ. 2) de] GHNOPQ: 'di D. 3) spyod] DGONPQ: skyong H.
Ch-2 身口意三業 所作善不善 為彼作分別 彼人受果報 無有主宰者 452c10-12

54 例えば SGK 2 (= SMRAM 21.77) とあるのは、SGK の第 2 偈が SMRAM 21 章 Pāñcālārāja Avadāna の第 77 偈と同一であることを示す。以下の偈も同様である。

Cf. Ch-3 非自在所作 果報非無因 亦非自性起 亦不從時生 自在天無因 自性及與時 以果有勝劣 當知彼非因 446c13-16
Cf. Ch-4 亦非神所化 令禍福無緣 亦非性自然 又非時可傳 在天豈無緣 時與性亦然 殊勝與不勝 其實非無行 520a17-18

〔SGK 訳〕 2 善と不善の、身口意の（身体・言語・心意の）業が作られた時、その果を生類は味わう。〔業の〕何れについても他の作者は存在しない。

Note 2 本作品では「善と不善の、身口意の業」とは、具体的に十善と十不善の業道意味する。十(不)善業道は身業・語業・意業の三種に分類される。すなわち殺生・偷盜・邪淫の三が身業であり、妄語・兩舌・惡口・綺語の四が語業であり、貪欲・瞋恚・邪見の三が意業である。また業をつくる原因は自分の他に存在しない。これに関連して異教徒には誤った見解があるので、『分別業報略経』Ch-3 は、(a) 自在天（主宰神）が作る所ではない・(b) 果報は無因 (ahetu) ではない・(c) 自性 (svabhāva) から起こるのではない・(d) 時 (kāla) に従って起こるのではない、と説明し、自在天・無因・自性・時の四つの原因の見解を批判する。(c) の「自性から起こるのではない」という見解の詳細については岡野 (2012), 6-14頁を参照のこと。

SGK 3 (= SMRAM 21.78) iti sarve kṛpāviṣṭās trailokyaguravo jināḥ / uktavantas tathā tad dhi karmaṇo yasya yat phalam //	Pāli 3 iti mantvā dayāpanno tilokekagaru satthā / hitāyāvoca sattānaṃ kammuno yassa yapphalaṃ //
Tib. 3 de ltar mkhyen ¹⁾ pa ²⁾ thugs brtses non 'jig rten gsum gtso gcig pu nyid ³⁾ 'gro ba'i don du las gang dang 'bras bu gang dag yin gsungs pa ⁴⁾	Ch-1, 3 最勝之導師 現證垂慈愍 普為諸有情 說隨業受報

SGK 3 b) °lokyaguravo] Ms. N: °lokye guravo Ed. c) tathā tad dhi] Ms. N Ed.
Pāli 3 b) tilokekagaru] M.1 (cf. Mus p. 218): tiloke kataru Feer: sabbahitāvaho B M.2 (cf. Mus p. 219). cd) hitāyāvica [...] yapphalaṃ] M.1 Feer: yassa yassa kammuno yaṃ yaṃ phalaṃ avoca lokahitāya B M.2 Pg-ṭīkā.1-2.

Tib. 3	
1) de ltar mkhyen] GHNOPQ: de ltar 'jig rten mkhyen D.	
2) pa] D: nas GHNOPQ. 3) pu nyid] HOQ: po nyid <u>DNP</u> : pa nyid G.	
4) gsungs pa] GHNOPQ: gsung ba D.	
Ch-2 三界天中尊 願起於悲智 廣為世間說 452c13-14	
Cf. Ch-3 無上人中尊 說苦業果報 從是轉相生 煩惱及諸業 446c7-8	
Cf. Ch-4 從行有苦果 人雄之所演 是本為從心 勞行從是有 520a11-12	

[SGK 訳] 3 憐れみに満ちた、三界の師である、あらゆる勝者たち（諸仏）は〔釈尊と〕同様に、いかなる業にはいかなる結果があるのかを、お説きになった。

Note 3 本偈の pāda c で梵文は蔵訳やパーリ語と合わないが、蔵訳はパーリ訳とよく一致し、蔵訳の元の梵文は恐らく *hitāyocāva sattvānām であったろう。

SGK 4 (= SMRAM 21.79) tad vakṣāmi samāsenā śrotuṃ yuktaṃ bhavārthibhiḥ / karma kartuṃ vihātuṃ ca sadasadgatihetukam //	Pāli 4 taṃ vakkhāmi samāsenā sutvā sambuddhabhāsitaṃ / subhaṃ vā asubhaṃ kammaṃ kātuṃ hātuṃ ca vo 'dhunā //
Tib. 4 l de ni bdag gis mdor bshad kyis ¹⁾ l khyod kyis nyon la dam pa dang ²⁾ l dam pa min pa'i rgyu yi las l bya ba ³⁾ dang ni spang ba'i ⁴⁾ rigs	Ch-1, 4 此相應正理 聞已當領受 作業皆自心 為因馳六趣

SGK 4	
ab) Ed. lacks pāda ab. c) karma] corr.: karmaṃ Ms. N Ed.	
Pāli 4	
d) vo 'dhunā] Mus p. 218: vo dhunā Feer.	
Tib. 4	
1) kyis] GHQNOP : kyī D. 2) dam pa dang] GHQNOQ: om. P	
3) bya ba] DGHNOP: bya bra Q. 4) spang ba'i] GHNOPQ: spangs pa'i D.	
Ch-2 我今聞彼說 如依於輪迴 觀察業果報 佛說惡道因 452c14-16	
Cf. Ch-3 種種相煩惱 無量諸業行 次第略分別 隨順大仙說 契經所顯示 不違諸法相 真實決定義 慧者當受持 446c9-12	

Cf. Ch-4 眾勞除愈者 是行之妙要 故為次第說 誠如大聖尊 是故著經典
令世觀摸法 合應正無疑 智者所宜取 520a13-16

[SGK 訳] 4 それ故 [その教えを] 要約して私は語ろう。安寧を求める者たちは聴聞するがよい。そして善趣・悪趣（善惡の報いとしての六道の諸世界）の原因である業を作ること（行為をなすこと）を捨離するがよい。

梵文に相当偈なし No corresponding verse in SGK.	Pāli 5 (<i>additional stanza</i>) sañjīvo kāḷasutto ca saṅghāto roruvo tathā / mahāroruvo tapo ca mahātapo ca avīcayo // (<i>This verse occurs only in M.I.</i>) Cf. <i>Jātakatthavaṇṇanā</i>, Fausbøll ed., <i>The Jātaka</i>, vol. 5, p. 266, vs. 15 (<i>saṃkiccajātaka</i>).
--	--

[パーリ Pañca-g 5偈の訳] [八大地獄の名は] 『生き返り』（等活）・『黒縄』・『圧殺』（衆合）・『叫喚』・『大叫喚』・『炎熱』・『大炎熱』・『無間』である。

Note 後から追加されたものらしいこのパーリ語の1偈はパーリ上座部が伝承する八大地獄の名称と順序を示す。SGK では5偈～20偈が八大地獄を、21偈以降が『増』地獄の種々を説明するが、SGK における八大地獄の順序はこのパーリ語の偈が示す順序とは異なる。

SGK 5 (= SMRAM 21.80) lobhamohabhayakrodhā ye narā naraghātinah / *saṃvadhyānyāṃś ca hiṃsanti sañjīvaṃ yānti te dhruvam //	Pāli 6 lobhamohabhayakkodhā ye narā paṇaghātino / vadhayitvāna hiṃsanti sañjīvaṃ yanti te dhuvam //
Tib. 5 chags dang¹⁾ gti mug 'jigs dang khro²⁾ mi gang mi ni gsod pa dang gzhan yang bskyed nas gsod byed pa de dag nges par yang sos 'gro	Ch-1, 5 由三毒怖畏 販賣諸物命 養已殺於他 當墮等活獄

SGK 5	
c) *saṃvadhyañyāṃś ca] ex conī: saṃvaddhyañyāñ ca Ms. N Ed. hiṃsanti] Ms.: hinsaṃti N: hi santi Ed.	
Pāli 6	
a) °bhayakkodhā] Feer: °bhayakodhā BNL.2-4 Pg-ṭikā.1-2: °bhayākodhā MV.1-2.	
b) ye narā paṇaghātino] Feer: ye narānaraghātino M.1 Pg-ṭikā.1-2.	
c) vadhayitvāna] Feer M.2: vaḍḍhayitvāna Mus p. 218 (= Hazlewood): vaḍhayitvāna BNL.4-5: vadhitvā hiṃsanti B.	
Tib. 5	
1) dang] GHNOPQ: sdang D. 2) khro] DHONPQ: 'khro G.	
Ch-2 貪瞋癡為本 若人行殺害 彼業隨纏縛 決定墮等活 452c16-18	

[SGK 訳] 5 強欲・痴愚・恐怖・怒りによって、人を殺し、他の[生き物]たちを殺し、殺傷するなら、その人々は確実に『生き返り』（サンジーヴァ、等活）[という地獄]に行く。

Note 5 本偈のように、SGKでは「行く」という動詞として yanti (語根 i)ではなく yānti (語根 yā)の動詞を使う。yānti は SGK で6回出る。

SGK 6 (= SMRAM 21.81) saṃvatsarasahasrāṇi bahūny api hatā hatāḥ / saṃjīvanti yatas tatra tena saṃjīva ucyate //	Pāli 7 samvaccharasahassāni bahūni pi hatā hatā / sañjīvanti yato tattha tato sañjīvanāmakō //
Tib. 6 l gang gi phyir na lo stong phrag l l mang por yang ni de dag tu l l btags shing btags shing yang 'tsho bas l l de phyir yang sos yin par bshad l	Ch-1, 6 彼壽百千歲 加刀杖捶打 死已更復生 受如是苦報

SGK 6 —
Pāli 7 —
Tib. 6 —
Ch-2 五百歳方出 彼彼等活者 重重受生死 是故説等活 452c18-20
Cf. Ch-3 等活死復生 經歷億千劫 今聞結怨憎 互相傷害故 447a8-9

〔SGK 訳〕 6 幾千年もの間、其処で殺され、殺されては、また生き返る故に、それで『生き返り』（サンジーヴァ）といわれる。

Note 6 『較量寿命経』の第29と30偈の梵文は、SGKの本偈のほか、『分別業報略経』や『分別善惡所起経』の文とも近い。『較量寿命経』の梵文は Aps (ed. Matsumura), p. 78, [20]を参照。また本庄『ウパーイカー』上、455頁の(29)と(30)偈も参照のこと。— なお Ch-3 と Ch-4 の八大地獄の箇所は詩節が全体的に SGK のそれと似ていないのは、原本が元は SGK と近似していたのに、或る時期に有部の聖典にある別の八大地獄の詩節によって差し替えられたためか。

SGK 7 (= SMRAM 21.82) mātāpitṛsuhṛdbandhu- mitradrohakarāś ca ye / paīśunyānṛtavaktāraḥ kālasūtrābhigāmināḥ //	Pāli 8 mātāpitūsuhajjādi- mittadosakarā narā / pesuññāsaccavādā ca kālasuttābhigāmino //
Tib. 7 pha ma dang ¹⁾ ni grogs dang gnyen bshes gnyen ²⁾ la ³⁾ ni 'khu byed dang phra ma brdzun ⁴⁾ ni smra ba'i mi thig nag tu ni 'gro bar 'gyur	Ch-1, 7 於父母朋屬 而生於損害 起妄語欺誑 當墮黑線獄

SGK 7 c) °vaktāraḥ] Ms. N: °vattāraḥ Ed.
Pāli 8 c) °saccavādā] Feer M.1 M.2: °tucchavādā B (cf. Mus p. 221): °saccavādāya BNL.1.
Tib. 7 1) pha ma dang] DGNP: pha dang ma HOQ. 2) bshes gnyen] DNP: bshas gnyen: G: gnyen bshes HOQ. 3) la] GHNOPQ: dang D. 4) brdzun] DHNOQ: rdzun GP.
Ch-2 父母及親姻 眷屬善知識 欺慢若憎嫌 墮落於黑繩 452c20-22
Cf. Ch-3 陷人以非道 兩舌離親友 譏謗及妄語 死墮黑繩獄 447a10-11
Cf. Ch-4 生妄挈無過 離敗人朋友 常喜譏惡人 死入黑繩獄 520b26-27

〔SGK 訳〕 7 父母や心友や親族や友人たちを裏切り、両舌や妄語（嘘をつくこと）をした者たちは、『黒繩』（カーラーストラ）〔地獄〕に行く。

Note 7 両舌 (paiṣunya) とは、他の者を分離させるために染汚心により語る行為である。『俱舍論』業品76頌を参照。

SGK 8 (= SMRAM 21.83) kālasūtreṇa saṃsūtrya pāṭyante dāruvad yataḥ / jvaladbhiḥ krakacais tatra kālasūtras tataḥ smṛtaḥ //	Pāli 9 kālasuttānusārena phālyante dāru vā yato / kakacehi jalantehi kālasuttaṃ tato mataṃ //
Tib. 8 gang phyir de la ¹⁾ shing bzhin du thig nag btab nas sog le dang ²⁾ 'bar ba yis ni gshog ³⁾ byed de de phyir thig nag yin par bshad ⁴⁾	Ch-1, 8 黒線絁其身 如世間解木 鋸發焰熾然 受如是苦報

SGK 8 a) saṃsūtrya] Ms. N: saṃsūḍya Ed. — Note: Cf. BHSD, s.v. sūtrayaṭi. d) kālasūtras] N Ed.: kālasūtraḥ Ms.	Pāli 9 b) phālyante] Feer: phāḷenti Pg-ṭīkā.1-2: phāḷento BNL.1-2 vā yato] Mus: va yato Feer. c) kakacehi jalantehi] Mus p. 220 (= M.1 M2.): kakkaccehi jalantehi Feer: jalakacchakudhārīhi B (cf. Mus p. 221): jalakaccadhārehi Pg-ṭīkā.1-2.
Tib. 8 1) de la] DGNP: de ni HOQ. 2) dang] DHONQ: dag GP. 3) yis ni gshog] DHOQ: yi ni shog GNP. 4) DGNP lack the following stanzas 9-12.	
Ch-2 熾焰龐澁繩 纏縛有情體 如鋸解樹木 是故名黒繩 452c22-24	

[SGK 訳] 8 其処では黒繩をもって[体に]墨の線を引かれてから、燃え輝くノコギリで、木材のように断ち割られるので、『黒繩』といわれる。

SGK 9 (= SMRAM 21.84) dāvādaḥ dahanair dāhaṃ dehināṃ vidadhāti yaḥ / sa tīvrair jvalanair jantus tapyate tapane raṭan //	Pāli 16 dāvādidahane dāhaṃ dehinañ ca karoti yo / so jalajjalane jantu tappate tāpane rudam //
Tib. 9 nags la sogs pa mes *gdung ¹⁾ dang *lus *can ²⁾ dag la 'jug byed gang skye dgu de ni me 'bar ba'i tsha bar ngu zhing sreg pa snang	Ch-1, 9 以火焚山川 林木及原野 燒害諸有情 當墮炎熱獄

SGK 9 b) yaḥ] Ms.: ye Ed. c) tīvrair jvalanair] Ms.: tīvrājvalanair Ed.: tīvrājvalanai N.
Pāli 16 c) jalajjalane] M.1 P-ṭikā.1-2: jālajjalane M.2; jalañjalane B (cf. Mus p. 227): jalaṃ jalane Feer. — Note. jalajjalane = Skt. <i>jvalat-jvalane</i> ; jalaṃ jalane = Skt. <i>jvalan jvalane</i> .
Tib. 9 1) *gdung] ex coni: gtong HOQ. 2) *lus *can] ex coni: las de HOQ.
Ch-2 若墮於炎熱 猛火競來燒 452c24-25
Cf. Ch-3 父母賢善人 沙門婆羅門 犯忤令憂惱 死入熱地獄 447b2-3
Cf. Ch-4 今生惱父母 沙門婆羅門 燒故令鬱毒 後身被熱炙 520c7-8

[SGK 訳] 9 森などを焼くことにより、生き物たちを火で焼かれるに至らしめるなら、その人は『炎熱』（タパナ）[地獄]の中で泣き叫びながら、激しい焰火によって焼かれて苦しむ。

Note 9 本偈について、『分別業報略経』や『分別善惡所起経』の相当する文は、むしろ『較量寿命経』の第40偈の梵文と合致する。Aps (ed. Matsumura), p. 82, [35]を参照。また本庄『ウパーイカー』上、458頁の(40)偈も参照のこと。なおこの地獄の名、タパナはターパナと同じで、ここは韻律の都合でタパナである。

SGK 10 (= SMRAM 21.85) tīvraṃ tapanasaṃtāpaṃ tanoty eva nirantaram / yat tato *'nvarthayā loke khyātas tapanasaṃjñayā //	Pāli 17 tibbaṃ tapanasaṃtāpaṃ tanot'eva nirantaraṃ / yato tato ca lokasmiṃ khyāto tāpanasaññito //
Tib. 10 gang phyir rtag tu mes gdung ba drag po skye ba de yi phyir 'jig rten du ni tsha ba'i ming don dang mthun par grags pa yin	Ch-1, 10 火焰遍燒然 苦叫聲不絕 兩目無有明 受如是苦報

SGK 10 c) tato *'nvarthayā] ex coni: tatonvarthamā Ms. N Ed.	
Pāli 17 a) tapanasaṃtāpaṃ] BNL4-5: tappanasaṃtāpaṃ M.1: tāpanasaṃtāpaṃ Mus p. 226. d) tāpanasaññito] M.2 Pg-īkā.1-2: tāpananāmako Mus p. 226 Feer .	
Tib. 10 —	
Ch-2 火焰相接續 令彼罪業人 奔聚都一處 燒燃苦惱深 是故說炎熱 452c25-27	

〔SGK 訳〕 10 〔それは〕 激しく炎熱をもって焼いて苦しめることを間断なく続けるので、それ故、世間において〔それは〕『炎熱』と、意味どおりの名で呼ばれる。

SGK 11 (= SMRAM 21.86) dharmādharmaviparyāsaṃ nāstiko yaḥ prakāśayan / saṃtāpayati cānyāṃś ca tapyate sa pratāpane //	Pāli 18 dhammādharmavipallāsaṃ natthiko yo pakāśati / santāpeti ca satte yo tappate so patāpane //
Tib. 11 med par lta ba gang zhig gis chos dang chos min log ston cing gzhan dag la ni nyon mongs byed de ni rab tu tsha bar sreg	Ch-1, 11 謂法說非法 無根而誹謗 令他生熱惱 墮極炎熱獄

SGK 11
b) prakāśayan] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): prakāśayat A'.
Pāli 18
d) so] Mus p. 228 BNL.2, 5 Pg-ṭikā.1-2: sa Feer.
Tib. 11 —
Ch-2 修習非法行 惱亂於大眾 說彼無有盡 墮彼極炎熱 452c28-29
Cf. Ch-3 父母賢善人 沙門婆羅門 惡心加苦痛 死入大熱獄 447b4-5
Cf. Ch-4 或適擊父母 仁賢奉道者 及他所當敬 後世更煮治 520c9-10

〔SGK 訳〕 11 断滅論者（ナースティカ）として、法と非法を取り違えた顛倒〔した見解〕を説きながら、他の者たちを苦しめた者は、『極炎熱』（プラターバナ）〔地獄〕において焼かれて苦しむ。

SGK 12 (= SMRAM 21.87)	Pāli 19
pratāpayati tatrasthān	patāpayati tatraththe
sattvāṃs tīvrena vahninā /	satte tibbena vuṇhinā /
tapanātiśayenāsau	tapanātisayenāyaṃ
proktas tasmāt pratāpanaḥ //	tasmā vutto patāpano //
Tib. 12	Ch-1, 12
me ni rab tu drag ¹⁾ po yis	是諸罪眾生 為大火逼切
de 'khor sems can rab tsha byed	燒然不暫停 受如是苦報
tsha ba phrul du byung bas de	
de phyir rab tu tsha bar gsungs	

SGK 12
b) sattvāṃs] corr.: satvāns Ms. N Ed. c) °śayenāsau Ms. N: °śayano 'sau Ed.
Pāli 19
a) tatraththe] B (cf. Mus p. 229) BNL.4-5: tattha te Feer.
b) vuṇhinā] Feer: vuyhinā M.1 BNL.1-2 Pg-ṭikā.1-2.
Tib. 12
1) drag] OQ: grags H.
Ch-2 入此惡道已 熾極火燒煮 熱苦受長時 是名極炎熱 453a1-2

〔SGK 訳〕 12 〔それは〕激しい火によって、其処にいる有情たちを焼く。その炎熱の甚だしさの故に、その〔地獄〕は『極炎熱』といわれる。

SGK 13 (= SMRAM 21.88) ajaiḍakaśṛgālāṃś ca śasākhumṛgasūkarān / anyāṃś ca prāṇino ghnanti saṃghātaṃ yānti te narāḥ //	Pāli 10 aj-eḷakasigālādi- sasākhumigasūkare / aññe ca pāṇino hantā saṃghātaṃ yanti te narā //
Tib. 13 ra dang lug dang wa dag dang ri bong byi ba ri dags phag gzhan yang bskyed nas gsod ¹⁾ byas na ²⁾ lus can bsduś 'joms 'gro bar 'gyur	Ch-1, 13 於猪羊狐兔 及餘生類等 殺害彼無邊 當墮眾合獄

SGK 13 —
Pāli 10 a) aj°] B M.1 M.2 (Mus p. 221): ath° Feer °sigālādi°] corr. (Mus p. 222): °singālādi° B M.2 (metre!); °līngālādi° Feer M.1. c) aññe ca pāṇino hantā] B (cf. Mus p. 221): aññe ca pāṇino hanti Pg-ṭikā.1-2: hananti pāṇino 'ññe ca Feer M.2 (cf. Mus p. 221).
Tib. 13 1) gsod] D: gsad GHNOPQ. 2) na] DGHOPQ: nas N.
Ch-2 猪羊狼兔等 及餘諸物命 如是行殺害 而墮於眾合 453a3-4
Cf. Ch-3 屠捕及餘殺 死入眾合獄 諸山所磨切 身碎血髓流 447a12-13
Cf. Ch-4 為人好殺生 馬牛鹿羊豕 鷄犬及諸蟲 亦更山機迹 520c1-2

[SGK 訳] 13 山羊・羊・ジャッカル・兎・モグラ・鹿・豚、またその他の生き物たちを殺した人は、『圧殺』（サンガータ、衆合）[地獄]に行く。

Note 13 『較量寿命經』の第34偈には本偈とよく似た偈頌がある。それは次のとおり：balākān ajimahiśān mṛgān kukuṭasūkarān / tathānyān prāṇino hatvā saṃghāte upapadyate // – Aps (ed. Matsumura), p. 80, [26]. また本庄『ウパーイカー』上、456頁の(34)偈を参照。

SGK 14 (= SMRAM 21.89) saṃhatās tatra ghātyante samyag vā *hananaṃ yataḥ / tasmāt saṃghāta ity evaṃ vikhyāto 'nvarthasaṃjñayā //	Pāli 11 saṃghātā tattha ghātyante sammāhananato yato / tasmā saṃghātanāmena sammato nirayo ayaṃ //
Tib. 14 gang phyir bsdus nas der 'dor nas ¹⁾ yang dag sreg par byed pas na de yi phyir na ²⁾ bsdus 'joms te de ltar ming ni don mthun grags ³⁾	Ch-1, 14 生彼地獄已 備受諸楚毒 拷掠滅還生 受如是苦報

SGK 14 b) samyag vā *hananaṃ yataḥ] ex conī (cf. Pāli pāda b): samyag vā hainanaṃ yataḥ Ms.: samyagvāhaiva vaṃyataḥ N: samyagvāhaiva vaṃyayaḥ Ed.	
Pāli 11 a) saṃghātā] Mus p. 222 (= B M.2): saṃghātā M.1 Feer tattha] Feer: tatra BNL.4-5 ghātyante] Mus p. 222 BNL.4-5: ghātyante Feer: ghātyante M.1.	
Tib. 14 1) nas] DN: dang GHOPQ. 2) phyir na] HOQ: phyir ni DGNP. 3) grags] GHNOPQ: drag D.	
Ch-2 墮彼惡趣已 眾山合身碎 痛苦不可當 故得名眾合 453a5-6	

[SGK 訳] 14 其処で一緒に打ち合わされて (saṃhatāḥ) 殺される (ghātyante) 故に、
或いは完全に (samyag) 打ち殺されること (hananaṃ) の故に、意味どおりの名称とし
て、『圧殺』(サンガータ) (saṃghāta) という。

Note 14 この偈の pāda b の読みは蔵訳と合致しない。蔵訳は、samyag *dāhanato yataḥ と読んだの
かもしれない。

SGK 15 (= SMRAM 21.90) kāyavāgmānasaṃ tāpaṃ ye kurvantīha dehinām / kaṭukāpatikā ye ca rauravaṃ yānti te narāḥ //	Pāli 12 kāyamānasasantāpaṃ ye karontīha dehināṃ / kūṭakappanakā ye ca roruvaṃ yanti te narā //
---	--

Tib. 15 'dir ni lus can gang dag gis¹⁾ lus dang ngag yid nyon mongs byed gang dag lhad²⁾ 'jug gzhan g.yo byed mi de dag ni ngu 'bod 'gro	Ch-1, 15 起惡身語意 讒構相離間 如是罪眾生 當墮號叫獄
---	---

SGK 15 c) kaṭukāpaṭikā] Ms. N: kaṭukyapaṭikā Ed.	
Pāli 12 b) karontīha] corr. Mus p. 225: karonti ha Feer M.1: karontīdha B; karontidha BNL.5 Pg- ṭikā.1-2. c) kūṭakappanakā] corr. Mus p. 224 (tr. "les falsificateurs") : kūṭakāpanakā M.1 M.2: kuṭakāpaṇakā Feer: kūṭakāpaṭikā yo ca B.	
Tib. 15 1) gis] DNOQ: gi GP. 2) lhad] GOPQ: lhang DHN.	
Ch-2 若起身口意 而發諸煩惱 欺誑於有情 墮落於號叫 453a7-8	
Cf. Ch-3 逼迫多人眾 令彼大呼泣 死墮叫呼獄 舉身常洞燃 447a22-23	
Cf. Ch-4 迫脅從受取 證入無辜民 然後身長燒 喚呼獨痛呻 520c11-12	

[SGK 訳] 15 この世で身口意の（身体・言語・心意の）苦痛を生き物たちに与えたなら、また酷く人を欺いた者なら、『叫喚』（ラウヴァナ）[地獄]に行く。

Note 15 本偈の内容と関連する偈頌として『較量寿命經』の第35偈がある。Aps (ed. Matsumura), p. 81, [29] を参照。また本庄『ウパーイカー』上、457頁の(35)偈を参照のこと。

SGK 16 (= SMRAM 21.91) tīvreṇa vahninā tatra dahyamānā nirantaram / raudraṃ ravaṃ vimuñcanti yatas tasmāt sa rauravaḥ //	Pāli 13 tibbena vuṇhinā tattha dayhamānā nirantaram / ghoraṃ ravaṃ vimuñcanti yato tasmā sa roruvo //
Tib. 16 der¹⁾ ni drag po'i me dag gis rgyun mi 'chad par sreg²⁾ pa³⁾ na gang phyir skad ni drag 'byin pas⁴⁾ de phyir de dag ngu 'bod yin	Ch-1, 16 彼熾猛火焰 燒然無休息 常發大惡聲 受如是苦報

SGK 16
d) rauravaḥ] Ms. N: rauravaṃ Ed.
Pāli 13
d) yato tasmā sa roruvo] B BNL5 Pg-ṭīkā.1-2 MV.1-2 Mus p. 224: tasmā sa roruvo mato Feer.
Tib. 16
1) der] GHNOPQ: da D. 2) sreg] D: bsregs GHNOPQ.
3) pa] HOQ: pas <u>DGNP</u> . 4) pas] D: pa <u>GHNOPQ</u> .
Ch-2 入彼惡道已 暴惡火燒身 叫苦聲不絕 是故名號叫 453a9-10

[SGK 訳] 16 其処では激しい火によって絶え間なく焼かれ、凄まじい叫喚の声を発するため、それは『叫喚』といわれる。

SGK 17 (= SMRAM 21.92)	Pāli 14
devadvijaguror dravyaṃ	devadvijagurudabbam
hṛtaṃ yair duḥkhināṃ iha /	hataṃ yehi pi dukkhato /
te mahārauravaṃ yānti	te mahāroruvaṃ yanti
ye cānyasvāpahāriṇaḥ //	ye ca nikkhepahāriṇo //
Tib. 17	Ch-1, 17
gang gis ¹⁾ lha dang bram ze ²⁾ dang	若於佛法僧 及諸貧乏者
bla ma'i rdzas phrogs ³⁾ sdug bsngal byas	剽竊彼財物 墮大號叫獄
gang dag gtams pa 'phrog ⁴⁾ byed pa	
de dag ngu 'bod chen por 'gro	

SGK 17 —
Pāli 14
b) dukkhato] B M.2: rakkhato M.1 (cf. Mus p. 225) Feer.
Tib. 17
1) gis] GHNOPQ: gi D. 2) ze] GHNOPQ: za D.
3) phrogs] GHNOPQ: 'phrog D. 4) 'phrog] DGNP: 'phrogs HOQ.
Ch-2 聖賢淨行師 所有財寶等 若貪若偷盜 而墮大號叫 453a11-12
Cf. Ch-3 斗秤欺誑人 心惡而口善 言行無誠實 入大叫呼獄 447a24-25
Cf. Ch-4 侵人以益己 受寄而直抵 後燒在火室 大呼無誰救 520c13-14

〔SGK 訳〕 17 この世で神やバラモンや師長（グル）たちの、苦しむ人々の、財産を奪うことをなした者、他人の財の掠奪者たちは、『大叫喚』（マハーラウヴァナ）に行く。

Note 17 *Mārkaṇḍeya-purāṇa* では『叫喚』と『大叫喚』が7地獄の第1と第2の地獄の名として、12章3偈に出てくる。ヒンドゥー教文献の地獄名については、赤沼智善(1939):『原始佛教之研究』、法蔵館、573-577頁を参照。また『ウッタラージャヤー』『スーヤガダンガ』に見られるジャイナ教の古聖典における地獄の描写は、『スッタニパータ』や『マハーバーラタ』や『マヌ法典』の地獄の描写に極めて類似している。それらの「地獄の共通表現」に関しては、山崎守一(2018):『古代インド沙門の研究』、大蔵出版、478-488頁を参照のこと。

SGK 18 (= SMRAM 21.93) raudratvād vahnidāhasya ravasya ca mahattayā / rauravo hi mahāms tasya mahattvarauravād api //	Pāli 15 ghorattā vūṇhitāpassa ravassāpi mahattato / roruvo ti mahā tassa mahattaṃ roruvā api //
Tib. 18 l mes sreg ¹⁾ pa ni drag phyir dang l l ngu 'bod pa yang che phyir dang l l lci zhing ²⁾ che ba nyid kyi phyir l l de ni ³⁾ ngu 'bod chen po yin l	Ch-1, 18 為火所燒炙 受最極熱惱 出大猛惡聲 受如是苦報

SGK 18 d) mahattva°] Ms.: mahatva° N: mantva° Ed.	
Pāli 15 a) ghorattā] Mus p. 226 (= B?): ghoratā Feer M.1 M.2. c) roruvo ti mahā] Feer M.1 M.2 (cf. Mus p. 226): *mahāroruvo ti Hazlewood (ex coni). d) mahattaṃ *roruvā api] ex coni Mus p. 226: mahattaṃ roruvo api Feer: mahattaṃ roruvo api M.1 M.2: mahantaṃ roruvaṃ dasseti B; mahattaṃ roruvaṃ api Piromanukul. — Read *mahatta-roruvā (cf. SGK 18d)?	
Tib. 18 1) sreg] DHQ: bsregs GNOP. 2) zhing] DGNP: zhig HOQ. 3) nyid kyi phyir ll de ni] DGHNOP: om. nyid ~ ni Q.	
Ch-2 若諸偷盜業 感大火燒身 叫喚出大聲 是名大號叫 453a13-14	

[SGK 訳] 18 火に焼かれることの凄まじさ (raudratva) の故に、また叫び声 (rava) の大きさの故に、それには大なる性質 (mahattva) と叫喚 (raurava) がある故に、『大叫喚』[という名]である。

Note 18 パーリ文の pāda d で Mus は *roruvā api と修正して読むが、比較の ablative とすると、「叫喚よりも (roruvā api) それは大なる性質をもつ」という意味になる。梵文の rauravād は理由の ablative であり、蔵訳もそのように訳している。

SGK 19 (= SMRAM 21.94) kṛtvā guṇādhike tīvram apakāraṃ nihatya ca / mātāpitṛgurūn kalpam avīcau pacyate dhruvam //	Pāli 20 katvā guṇādhike dosaṃ ghātayitvāna sāvake / mātāpitugarū cāpi avīcimhi bhavanti te //
Tib. 19 yon tan dag gis che ba la gnod pa ¹⁾ drag po byas pa 'am ²⁾ pha ma bla ma ³⁾ bsad byas na ⁴⁾ nges par bskal par mnar med 'tshed	Ch-1, 19 於父母師長 及有德賢者 起増上殺害 定墮無間獄

SGK 19 c) gurūn] Ms. N: gurun Ed.
Pāli 20 c) mātā°] corr. Hazlewood: matā° Feer Mus (p. 228) °garū] Feer: °garu Piromanukul.
Tib. 19 1) pa] DHONPQ: par G. 2) 'am] GHNOPQ: las D. 3) pha ma bla ma] DGNP: bla ma pha ma HOQ. 4) byas na] GHNOPQ: byas pa D.
Ch-2 作大功德人 及與父母等 毀謗而返恩 決定墮無間 453a15-16
Cf. Ch-3 非法言是法 見法言非法 邪見無因果 侮傲謗賢聖 如是諸人等 死入無擇獄 447a28-b1
Cf. Ch-4 非法言是法 是法言非法 饒毀誰無聖 後生阿鼻獄 520c15-16

[SGK 訳] 19 徳性が勝れた者 (仏・聖者) にひどい害をなしたり、父や母や師長を殺したなら、1 劫の間、『無間』(アビーチ) 地獄で煮られる。

Note 19 『無間』地獄に墮ちる業としての「五無間業」は母を殺す、父を殺す、阿羅漢を殺す、僧伽を分破する、悪心をもって如来の身体から出血させる、の五業である。その五業のほか、

『俱舍論』業品106-107頌によれば、阿羅漢である母を汚辱する、必定に住する菩薩と有学を殺す、僧伽に納められるものの集合場所から奪う、卒塔婆を破壊する、の五業も、有部では無間業の同類として認められる。

SGK 20 (= SMRAM 21.95) asthīny api viśīryante raudrāgnau tatra dehinām / yato na vīciḥ saukhyasya tenāvīcir udāhṛtaḥ //	Pāli 21 atthīni pi vilīyante tattha ghoraggitāpato / yato na vīci sukhassa tenāvīcīti sammato // aṭṭhamahānarakā //
Tib. 20 me drag ¹⁾ der ni lus can gyi ²⁾ rus pa dag kyang lhag ³⁾ par 'gyur gang phyir bde ba'i skabs med pa de phyir mnar med yin par bshad	Ch-1, 20 炎熾大火聚 洞然徹骨髓 長時受極苦 決定無暫樂

SGK 20 cd) saukhyasya tenāvī°] corr.: saudhyasya tenāvī° Ms.: saudhyasya nāvī° N: saukhyasya nāvī° Ed. Note: pāda c is Ra-ma Vipulā.
Pāli 21 —
T20 1) me drag] DGHOPQ: me dag N. 2) lus can gyi] HOQ: lus dag gi D: lus dag gis GNP. 3) lhag] GHNOPQ: lhags D.
Ch-2 持罰骨髓碎 受苦純無間 身命報等爾 是故名無間 453a17-18

〔SGK 訳〕20 猛烈な火をもつ其処では、生類たちの骨すらも粉碎されてしまう。安楽のための間（ヴィーチ、休止時間）がないので、それ故に『無間』（アヴィーチ）と呼ばれる。

Note 20 『無間』という名称をめぐる有部での議論については、福田琢 (2007): 「有部論書における地獄」、『東海佛教』52輯、212-215頁を参照。

梵文に相当偈なし No corresponding verses in SGK.	Pāli 22 (<i>additional stanza</i>) nirayass' ekamekassa cattāro nirayussadā / miḥhakūpo kukkulo ca asipattavanam nadī //
	Pāli 23 (<i>additional stanza</i>) mahānirayato sattā nikkhantā miḥhakāsuyam / patanti ye te ghorehi kimivyūhehi vijjhare //
	Pāli 24 (<i>additional stanza</i>) nikkhantā miḥhakūpamhā kukkule ca patanti te / patitā tattha te sattā sāsapā viya paccare //
	Pāli 25 (<i>additional stanza</i>) kukkulamhā ca nikkhantā dume passanti sobhaṇe / harite pattasampanne te upenti sukhaththino //(55)
	Pāli 26 (<i>additional stanza</i>) tattha kākā ca gijjhā ca sunakh-olūkasūkarā / bakakākādayo bhesmā lohatuṇḍā subheravā //
	Pāli 27 (<i>additional stanza</i>) te sabbe parivāretvā tesam maṃsāni khādare / puna sañjātamamṣā te utṭhahanti patanti ca //

[パーリ Pañca-g 22～27偈の訳]

Pāli 22 それぞれの [大] 地獄には、四つの『増』地獄（追加的な別地獄）がある。
糞坑、熱灰、刀葉林、河である。

Pāli 23 大地獄から出て、糞坑に落下した有情たちは、恐ろしい虫の群に [体を] 食
い破られる。

55 このパーリ偈 25 は *Lokapaññatti* に由来するものらしいが、*Mahāvastu* にも類似偈がある。
Cf. Denis (1977): *Lokapaññatti*, I, p. 109 (also p. 113): kuṇapāpi ca uttiṇṇā dume passanti sobhaṇe / harite
pattasampanne te upenti sukhaththino // (= 立世阿毘曇論卷八 「已渡糞屎獄 見可愛樹林 具鬱茂枝
條 往彼欲求樂」 T 32 212a15-16); Senart (1882): *Le Mahāvastu*, I, p. 11, ll. 9-10: kuṇapāto ca uttīrṇā
drumā paśyanti śobhanā / haritān patrasaṃchannās tām āyanti sukhārthināḥ //. この偈の和訳は『渡辺照
宏 仏教学論集』、筑摩書房、1982年、94頁にある。 — Chagatidīpanī と *Lokapaññatti* と立世阿毘
曇論と *Mahāvastu* が地獄に関する偈で関連し合うことについては、Denis (1977), Chapitre IV, pp.
XXIX ff. および Mus (1939), Chapitre V, pp. 93 ff. を参照。

Pāli 24 糞坑から出た彼らは、熱灰に落ちる。其処に落ちたそれらの有情は、芥子のように焙られる。

Pāli 25 熱灰から出た彼らは、美しく輝く、緑の、葉の生い茂った樹々を見て、安らぎを願って、近づいてゆく。

Pāli 26 其処で烏や鷺ども、また犬・梟・豚ども、鉄の嘴をもった怖く恐ろしい青鷺・鴉などの〔鳥〕がいる。

Pāli 27 彼らは皆〔それらに〕取り囲まれて、彼らの肉は食われる。しかし再び肉が生じ、起き上がって、落下する。

SGK 21 (= SMRAM 21.96) mithodroharatā ye 'tra raṇe ghnantīva dehinaḥ / pāpād asinakhās te tu jāyante duḥkhabhāginaḥ //	Pāli 28 aññamaññaṃ vināsāya paharanti raṇe ca ye / pāpenāsinakhā te tu jāyante dukkhabhāgino //
Tib. 21 lus can gang dag gcig la gcig gnod par dga' ¹⁾ bas g.yul ngor gsod sdig can de dag sdug bsngal dang ldan pa'i ral gri'i ²⁾ sen ³⁾ can skye	Ch-1, 21 起冤敵鬪諍 戈戟相殘害 死墮銅爪獄 其狀極鋒利

SGK 21 a) mitho°] Ms. Ed.: mithyā N. ab) ye 'tra raṇe] Ms. N: ye traṇe Ed.
Pāli 28 c) te tu] Feer M.1: tena B M.2 Mus p. 228: tesu BNL.1: te MV.1-2.
Tib. 21 1) dga'] DHONQ: dka' GP. 2) gri'i] D: gri GHNOPQ. 3) sen] HOQ: sems DGNP.
Ch-2 互相愛憎嫉 并及相殺害 感彼惡趣身 手生鋒刃甲 453a19-20

〔SGK 訳〕 21 この世で相互に傷害することを好み、鬪諍において人々を殺害する者たちは、〔その〕悪罪によって『刀の爪をもつ者』に生まれ、苦しみの運命を受ける。

Note 21 前偈で八大地獄の説明が終わり、本偈から『増』地獄（小地獄）が始まる。第21～36偈の合計16偈がその説明であると見なすなら（第36偈の扱いが微妙で、それを外すと計15偈になるが）、全部で16種類が1組をなす『増』地獄がそこで説明されていると見なしうる。つま

り「八大地獄と十六の各種の増地獄」という枠組で SGK は地獄の全体の仕組みを説明している。十六増地獄については有部の『大毘婆沙論』巻百七十二にも説明があるが（T 27, 866a22-b11）、それは俱舍論世間品59頌釈の説明と同じ見解であり、そこでは16種類の地獄を説くわけではなく、四門かける四増地獄（kukūla, kuṇapa, kṣuramārgādika, vaitaraṇī-nadī）で、計16とするだけであって、4種の『増』が4度繰り返されるにすぎない。『瑜伽師地論』巻四も同様の見解である。他方、『長阿含經』巻十九「世記經地獄品」は「十六小獄」として、全部異なる16種類の小地獄名を挙げる点で、SGKのように別々に16種を分ける立場であるといえる。しかし『長阿含經』は法蔵部の所伝なので、その16種を詳細にみれば SGK の記述とあまり一致しない。その『長阿含經』は次のように16種を説く：「第一小獄名曰黒沙。二名沸屎。三名五百丁。四名飢。五名渴。六名一銅釜。七名多銅釜。八名石磨。九名膿血。十名量火。十一名灰河。十二名鐵丸。十三名鋤斧。十四名豺狼。十五名劍樹。十六名寒氷」（T1 121c8-13）。このような、16種の小地獄が全部別々の個性をもつという考え方は、やがて有部系の部派に属する『正法念處經』地獄品において、各「別処」地獄の記述として、最大の詳細化に至る。―― さて SGK のテキストと、『分別業報略經』・『分別善惡所起經』の相当文とは、この『増』地獄から後の内容においては、偈の内容が互いに似ているものが顕著に多くなる。その点で、八大地獄の箇所は違っている。八大地獄の箇所では、『分別業報略經』と『分別善惡所起經』の文は SGK からやや遠くて、むしろ『較量壽命經』に近い、別のソースを依用している印象をもつ。しかしそれは八大地獄のみに見られる局所的な問題であり、その限られた部分で奇妙にも伝承の疎遠性が見られるにすぎず、全体的には『分別業報略經』と『分別善惡所起經』はこの『増』地獄以降では、SGKとの文の親近性が強く感じられる。ただし両經を見ると、『増』地獄の記述では、『増』地獄の数が SGK より少ないことがわかる。

SGK 22 (= SMRAM 21.97) nakhā evāsayas teṣāṃ āyasā jvalitāḥ kharāḥ / tair anyonyaṃ nikṛṇtanti yat tenāsinakhāḥ smṛtāḥ //	Pāli 29 nakhā yevāsiyo teṣaṃ āyasā jalitā kharā / teh'aññoññaṃ nikantanti yan tenāsinakhā matā //
Tib. 22 gang phyir de yi sen mo ni lcags byas 'bar rno de dag gis gcig gis gcig gsod gang yin des ral gri rtse mo can du bshad	Ch-1, 22 互相而擘裂 或變為刀杖 競斫刺其身 受如是苦報

Pāli 29
Note. Cha-g-A: ettha nakhā yevāsiyo ti tesam sattānaṃ nakhā asirūpā āyasā (mss ayasā) ti lohamayā. (cf. Mus p. 230)
Tib. 22 —
Ch-2 For vss. 22-23: 如是鐵爪甲 甲長十六指 暴惡熾焱身 抓攫相損害 故名鋒刃甲 愚癡邪姪者 登彼鐵叉樹 453a21-24

[SGK 訳] 22 彼らは燃え輝く鋭い鉄の刀を、爪としてもつ。それらを使ってお互いに切り裂き合うので、それ故『刀の爪をもつ者』と呼ばれる。

SGK 23 (= SMRAM 21.98) lohajvalitatīkṣṇāgrāṃ (or °grāḥ) ṣoḍaśāṅgulikaṇṭakām (or °kāḥ) / balād ārohyate krandan śālmālīm (or °līḥ) pāradārikah //	Pāli 30 lohajalitattikkhaggam soḷasaṅgulikaṇṭhakam / balenāropayanti taṃ simbalīm *pāradārikā //
Tib. 23 byi bo byed pa shal ma li ¹⁾ lcags kyi rtse mo rtse mo 'bar sor ni bcu drug yod pa la ngu zhing stobs kyis 'dzeg ²⁾ par 'gyur	Ch-1, 23 強暴侵他色 後墮鐵刺獄 刺長十六指 削肉而穿骨

SGK 23 a) °grām] Mus: °grāḥ Ms. N Ed. b) °kaṇṭakām] Mus: °kaṇṭakāḥ Ms. N Ed. c) ārohyate] Mus: ārohyata Ms. N Ed. krandan] Ms. Mus: hramdan N Ed. d) śālmālīm] Mus: śālmālīḥ Ms. N Ed. pāradārikah] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): pāradārakah Lévi: pāladārikah Ms. N Ed.
Pāli 30 a) °tikkhaggam] corr. Hazlewood: °tikkhattam Feer. Cf. Mus pp. 230-231. d) *pāradārikā] ex coni: pāradārikam Feer.
Tib. 23 1) li] HOQ: ri DGNP. 2) 'dzeg] GHNOPQ: 'dzegs D.
Ch-2 —
Cf. Ch-3 於他婦女身 摩觸深染著 驅上劍枝樹 往還貫身體 447b18-19
Cf. Ch-4 好樂於姪姪 放意於人婦 斯常與苦會 身攀抱刺樹 520c29-521a1

〔SGK 訳〕 23 鉄で出来た燃えあがる鋭い先端があり十六指の長さの刺をもつシャールマリ樹（鉄刺林）を、他人の妻と通じた男は、泣き叫びながら無理やり登らせられる。

SGK 24 (= SMRAM 21.99) lohadamṣṭrā mahākāyā jvalitās tivrabhairavāḥ / āśliṣya bhakṣayanty enam paradārāpahāriṇam //	Pāli 31 lohadāṭhā mahākāyā jalitā bheravitthiyo / taṃ āliṅgiya bhakkhanti paradārāpahāriṇam //
Tib. 24 bud med shin tu 'jigs 'jigs lta mchu rnon ¹⁾ lus chen 'bar ba yis gzhan gyi bud ²⁾ med 'phrog pa la 'jus nas za ba kho nar 'gyur	Ch-1, 24 復有大鐵女 焰牙甚可怖 瞰頂至其踵 受如是苦報

SGK 24 b) jvalitās] Ms. N Ed.: jvatatā Mus p. 232. c) āśliṣya] Ms. N: aśliṣya Ed. d) dārāpahāriṇam] Ms. N: dāropahāriṇam Ed.
Pāli 31 —
Tib. 24 1) rnon] HOQ: rno <u>DGNP</u> . 2) bud] GHOPQ: lus D: bus N.
Ch-2 大身鐵牙鬼 醜惡身炎熾 逼惱恒無盡 453a24-25
Cf. Ch-3 長身百足虫 貌像端正女 纏身啖髓腦 由彼邪姪故 447b16-17
Cf. Ch-4 犯人婦女者 巨軀有百足 容貌似美女 與友便攫之 520c27-28

〔SGK 訳〕 24 鉄の牙をもち、巨軀で、燃え輝き、凄まじく恐ろしい女たちが、他人の妻を奪ったその男を抱擁して、食らう。

SGK 25 (= SMRAM 21.100) āraṭanto 'pi khādyante śvagṛdhrolūkavāyasaiḥ / asipattravane chinṇā narā viśvāsaghātinaḥ //	Pāli 32 *ārudante pi khādanti sāgijjholūkavāyasā / asipattavane chinne nare viśāsaghāṭino //
---	--

Tib. 25 bag phab pa la gnod byed mi nags tshal ral gri 'dab can du gtubs byas ngu zhing bya rgod khyi 'ug pa bya rog za bar 'gyur	Ch-1, 25 若陰謀害他 墮彼劍葉林 獠狗及鷗鷺 奔逐競分食
--	---

SGK 25 a) āraṭanto] Ms. Ed.: āratanto N: [*ārudanto] ex conī Mus. c) asipattravane] Mus, confirmed by Tib. (<i>nags tshal ral gri 'dab can du</i>): aśipa[m]kurvati Ms.: aśivaṃ kurvate N Ed. d) narā viśvāsaghātinah] Ms.: viśvāsaghāṭino narāḥ Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): ~ naraḥ A' N.	
Pāli 32 a) *ārudante] ex conī Hazlewood: ārulhanti B (cf. Mus p. 234): āradante Feer M.1 M.2. — Note: If this Pāli stanza is a passive sentence, read *ārudantā (or *āraṭantā) pi *khajjanti [...] *chinnā *narā [...]. b) °gijjholūka°] M.1 (cf. Mus p. 234): °gijjhe luka° Feer.	
Tib. 25 —	
Ch-2 復有鐵烏鳥 獠狐諸惡獸 食啗彼有情 復生劍葉林 割截於罪人 叫喚出惡聲 痛苦不可忍 453a26-29	
Cf. Ch-3 誘取諸眾生 詐親害其命 烏鴉群餓狗 競來食其肉 447b12-13	
Cf. Ch-4 陰賊親厚者 軀為利刀刺 啄鳥鐵耳狗 宛轉共食之 520c23-24	

[SGK 訳] 25 仲間への裏切りをなした人々は、泣き叫びながら、犬や鷺や梟や鴉に食われ、劍の葉の樹林（劍葉林）で切られる。

Note 25 本偈の「劍葉林」（asipattravana）は、23偈の「鉄刺林」（ayaḥśalmalivana）とは区別される別の地獄である。「劍葉林」の表現は古くは Suttanipāṭa 673 にある。

SGK 26 (= SMRAM 21.101) ayoguḍāni *bhojyante prataptāni punaḥ punaḥ / pāyyante kvathitaṃ tāmraṃ ye parasvāpahāriṇaḥ //	Pāli 33 ayoguḷāni bhuñjanti te tattāni punappunaṃ / pivanti kuṭṭhitaṃ tambaṃ ye paratthāpahārino //
---	--

Tib. 26 gang dag gzhan gyi nor 'phrogs¹⁾ pa de dag lcags kyi thu²⁾ lum ni tsha ba dag kyang za ba dang yang dang yang du zangs bskol 'thung	Ch-1, 26 若劫奪他財 當受其極苦 常吞熱鐵丸 復灌以銅汁
--	---

SGK 26 a) *bhojyante] ex conī: bhuḥjante Ms. N Ed.: bhokṣyante Mus. c) pāyyante] Ms. N: yāpyante Ed.: pāsyante Mus.	
Pāli 33 —	
Tib. 26 1) 'phrogs] N: 'phrog DGHOPQ. 2) thu] D: tho GHNOPQ.	
Ch-2 諂誑妄言者 吞食熱鐵丸 而復飲洋銅 重重無暫住 453a29-453b2	
Cf. Ch-3 吞食熱鐵丸 融銅灌其口 鐵釘釘其身 盜竊他財故 447b22-23	
Cf. Ch-4 借貸不歸者 身常被鐵鉤 剛鐵燒灼然 洋銅以飲之 521a4-5	

[SGK 訳] 26 他人の財を奪った者たちは、焼けた鉄丸を幾度も食べさせられ、また溶けた銅を吞ませられる。

SGK 27 (= SMRAM 21.102) krūraiḥ śvabhir ayodaṃṣṭraiḥ khādyante vivaśā bhr̥ṣam / varṣakoṭī raṭanto 'pi ye sadākhetake ratāḥ //	Pāli 34 soṇā bheravāyodāṭhā bhusaṃ khādanti te nare / vassakoṭī *rudante pi ye sadākhetake ratā //
Tib. 27 rtag tu rñgon la dga' ba gang lo ni bye bar ngu zhing yang khyi ni lcags kyi mche ba can mi srun shin tu dbang med za	Ch-1, 27 無辜害眾生 當墮鐵鷹獄 利爪而搏擊 長時受苦惱

SGK 27	
a) °damṣṭraiḥ] Ms. Mus: °dramṣṭraiḥ N Ed.	
b) khādyante] Mus, confirmed by Tib. (za): kṛtyante Ms. N Ed.	
c) varṣakoṭī] Ms. N Mus: varṣakoṭi Ed. raṭanto] Ms. N Ed. Lévi (!): *rudanto ex conī Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi). d) sadākheṭake] Mus, confirmed by Pāli and Tib. (rtag tu rñgon la): narāḥ kheṭake Ms. N Ed. Cf. Cone, DOP, s.v. ākheṭaka "hunting".	
Pāli 34	
b) khādanti] corr. Hazlewood: khadanti Feer.	
c) vassakoṭī *rudante] ex conī Mus p. 236 (de Jong, p. 235): vassakoṭi rudantaṃ B: vassagonaṃ nadante Feer M.1: vassabbo pi nadantaṃ M.2: vassaṇṇe pi nadantaṃ Pg-ṭīkā.1-2: vassakoṭi rud-dhante MV.1-2. d) sadākheṭake] corr. Hazlewood: sadā kheṭake Feer.	
Tib. 27	
1) rñgon DHOQ: mñgon GNP. 2) srun DHOQ: bsrñ GNP.	
Ch-2 輕慢若欺他 鐵牙惡獸等 來食身上肉 受苦俱胝歲 453b2-4	

[SGK 訳] 27 いつも狩猟を愉しんだ者たちは、数千万年にわたって、泣き喚きながら、鉄の牙をもった獐猛な犬たちに、抗するすべもなく、激しく〔体を〕食われる。

SGK 28 (= SMRAM 21.103)	Pāli 35
matsyādīñ jalajān hatvā	macchādi jalaje hantvā
jvalattāmradravodakām /	jvalattambadravodakaṃ /
yāti vaitaraṇīm śaśvad	yāti vetaraṇiṃ ghoram
vahninā dahyate naraḥ //	vaṇhinā ḍayhate ciraṃ //
Tib. 28	Ch-1, 28
chu skyes nya la sogs bsad na	若人好傷殺 水族諸物命
chu bo rab med 'bar ba yi	後墮鎔銅河 為業火燒煮
zangs kyi khu ba'i ¹⁾ chur 'gro zhing	
mi de mes kyang bsreg ²⁾ par 'gyur	

SGK 28	
b) jvalattāmra°] Ms. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): jvalantāmra° Lévi: jvalantyamra° N Ed. °dakām] Ms. Ed.: °dakam Mus N. c) vaitaraṇīm] Mus Ms. Ed.: vaitaraṇiṃ N.	
Pāli 35	
b) jalat°] corr. Hazlewood: jali° Feer. c) yāti] corr. Hazlewood (cf. SGK, yāti): yanti Feer BNL.1-3. d) vaṇhinā] Feer: vantinā BNL.4-5: vunhinā BNL.3.	

Tib. 28	
1) khu ba'i] GHNOPQ: chu bo'i D.	2) bsreg] D: sreg GHNOPQ.
Ch-2 愛行非法行 墮入洋銅河 大熾洋銅汁 燒煮或浮沈 453b4-6	
Cf. Ch-3 種種設方便 殺諸水虫類 死入沸灰河 舉身悉糜爛 447b20-21	
Cf. Ch-4 若為諸巧便 殺水所生蟲 殺後墮沸湯 灰河之中生 521a2-3	

[SGK 訳] 28 魚などの水生の生物たちを殺したなら、燃え輝く銅の流れを河水としてもつ、ヴァイタラニー河に人は行き、[そこで] 絶えず火によって焼かれる。

Note 28 ヴァイタラニー河は『俱舍論』世間品59頌に説かれる「四増」(catvāra utsadāḥ)の一つである。その河は大叙事詩や Purāṇa などのヒンドゥー教文献でも死者の国にある河とされる。Hopkins (1915), pp. 110-111. を参照。わが国の「三途の川」にあたるが、岩本裕は、この死者の国に流れる河と西アジアの「死後の審判の思想」との関わりについて、文化史的な考察を行う。岩本裕(1979):『佛教説話研究第四巻 地獄めぐりの文学』、開明書院、312頁以下。

SGK 29 (= SMRAM 21.104) yaḥ svārthalavasamṃmūḍho vyavahāram adhārmikam / karoti narake krandan sa cakreṇābhipīḍyate //	Pāli 36 lañcalobhena sammūḷho yo vohāram adhammikaṃ / karoti narake kandaṃ so cakkena vihaññate //
Tib. 29 gang zhig rang don tsam rmongs nas chos dang mi ldan shags ¹⁾ 'gyed na ²⁾ sems can dmyal bar de ngu zhing 'khor los mngon par gzir bar 'gyur	Ch-1, 29 若自貪盛事 而掩斥他善 墮彼鐵磨獄 悲號無救度

SGK 29	
a) yaḥ] Ms. Mus: ye N Ed. b) adhārmikam] Ms. N Ed.: adharmikam Mus.	
c) narake] Ms. Mus Ed.: narakaṃ N.	
d) °ṇābhipīḍyate] Ms. N Ed., confirmed by Tib. (mngon par gzir bar 'gyur): °ṇātipīḍyate Mus.	
Pāli 36	
c) kandaṃ] Mus p. 236: kaṇḍaṃ Feer.	
Tib. 29	
1) shags] DGNP: bshags HOQ. 2) na] GHNOPQ: nas D.	
Ch-2 又復自愚迷 勸作非法行 往彼鐵輪獄 而被鐵火輪 453b6-8	

〔SGK 訳〕 29 わずかな自分の利益のために愚かに迷って、非法の行いをする者は、地獄において泣き叫びながら車輪（チャクラ）によって苦しめられる。

SGK 30 (= SMRAM 21.105) pīḍā bahubhir ākāraiḥ kṛtā yair dehinām iha / pīḍyante te ciraṃ taptair yantraparvatamudgaraiḥ //	Pāli 37 pīḷā bahuvidhākārā katā yehīdha dehinam / pīḷenti te ciraṃ tattā yantapabbatamuggarā //
Tib. 30 l 'di na ¹⁾ gang gis gzugs can la l gnod pa rnam pa mang byas pa l de dag yun ring ²⁾ 'khor lo dang l ri dang tho ba 'bar bas gzir	Ch-1, 30 若人不饒益 當受多種形 兩山夾其身 逼切復加捐

SGK 30 b) dehinām] Mus, confirmed by Tib. (<i>gzugs can</i>): duḥkhinām Ms. N Ed. c) te ciraṃ taptair] Ms. N Ed., confirmed by Tib. (<i>de dag yun ring</i>): ciraṃ santaptair Mus. d) yantra°] Ms. Mus: yatra N Ed. °parvatamudgaraiḥ] Mus, confirmed by Tib.: °mudgara-parvataiḥ Ms. Ed.: °dgaraparvataiḥ N.	
Pāli 37 —	
Tib. 30 1) 'di na] OQ: 'di ni H: 'di la <u>DGNP</u> . 2) ring] DHONQ: rings GP.	
Ch-2 碾拶身無數 或以鐵磨磨 或上刀山等 453b8-9	

〔SGK 訳〕 30 多様なあり方で生き物たちを虐げ苦しめた者たちは、灼熱した機械仕掛けの山々のハンマーによって久しい間押し潰されて苦しめられる。

Note 30 蔵訳は「燃える機械と山とハンマーによって」と解釈する。

SGK 31 (= SMRAM 21.106) bhedakā dharmasetūnām ye cāsanmārgavādinah / kṣuradhārācitaṃ mārgaṃ gatvā krāmanti te narāḥ //	Pāli 38 bhedakā dhammasetunaṃ ye cāsammaggavādino / khuradhārāpitaṃ maggaṃ gantvā kandanti te narā //
--	---

Tib. 31 gang zhig chos kyi stegs 'jig cing yang dag ma yin lam smra ba'i mi de dag ni spu gri'i sos gtams pa'i lam du 'gro bar 'gyur	Ch-1, 31 若人說非法 破壞於橋梁 鋒刃以為路 驅彼而來往
--	--

SGK 31 a) bhedakā: Ms. N Ed.: bhedikā Mus. b) °mārgavādinah] Mus, confirmed by Pāli and Tib. (<i>lam smra ba'i</i>): mārgavāhinah Ms. N Ed. c) kṣuradhārācitaṃ] Ms. N Ed., confirmed by Tib. (<i>spu gri'i sos gtams pa'i</i>): khuradhārārcitaṃ Lévi: *khuradhārārpitaṃ ex conī Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi). d) krāmanti] Ms. N Ed.: kramanti Mus.	
Pāli 38 c) khuradhārāpitaṃ] M.1 (≡ khuradhārappitaṃ): khuradharā pi taṃ Feer: khuradhārāṭṭhita B: khuradhārāvita M.2 (cf. Mus p. 239) Pg-īkā.1-2. Read *khuradhārācitaṃ?	
Tib. 31 —	
Ch-2 若人說邪道 破正法為非 滿道排鋒刃 令彼往來行 453b10-11	
Cf. Ch-3 毀壞正法橋 導人非法行 死經利刀道 截足斷肌骨 447b14-15	
Cf. Ch-4 若有壞法橋 謗訕至德者 墮獄蹈踐越 履刀刃之道 520c25-26	

[SGK 訳] 31 教え（法）という橋を破壊し、不正なる道を説く者であった人々は、剃刀の刃先によって覆われている道へと行き、[そこを] 歩む。

Note 31 この偈は「剃刀の道」（kṣuramārga）と呼ばれる地獄にあたる。『俱舍論』世間品ではこの地獄を「劍葉林」と「鉄刺林」と合わせて、三者を一つの地獄の連続とみなし、「剃刀の道など」（kṣuramārgādi）という名のその『増』を「四増」の一つとする。

SGK 32 (= SMRAM 21.107) nakhaiḥ saṃcūrṇya yūkādīṃś cūrṇyante meṣaparvataiḥ / bhūyo bhūyo mahākāyāḥ krandantas te śaracchatam //	Pāli 39 nakhacūṇṇitayūkādi te kandanti ciraṃ narā / punappunaṃ mahākāya- mesaselehi cūṇṇitā //
---	--

Tib. 32 sen mos¹⁾ shig la sogs bcom na de dag lus ni cher 'gyur la ston brgyar yang dang yang ngu zhing²⁾ brag sgor po yis 'joms par 'gyur	Ch-1, 32 以甲傷蚤虱 墮二羴頭山 相擊死還生 展轉而受苦
---	---

SGK 32 a) yūkādīṃś] Mus: yūkādīn Ms. N Ed. b) meṣaparvataih] Ms. N Mus (cf. Pāli <i>mesaselehi</i>): meṣaparvatai Ed.	
Pāli 39 a) °yūkādi] de Jong p. 235, Hazlewood (-y-ūkādi or yūkādi): °yukādi Feer. b) te kandanti] Piromanukul: kandanti Feer (metre!).	
Tib. 32 1) sen mos] GHNOPQ: son mos D. 2) ngu zhing] GHQO: du ni DNP.	
Ch-2 業力令身大 驅逐聚一處 四面山石合 如指甲搗虱 453b12-13	

[SGK 訳] 32 爪によって虱など [の虫] を潰したなら、百年の間、羊たちの [如き] 山々によって、大きな身体をもつ彼らは泣き喚きながら何度も、粉々に潰される。

Note 32 「羊たちの [如き] 山々によって」と梵文どおりに私は訳したが、蔵訳は「羊の山によって」とは訳さずに「丸い岩によって」(brag sgor po yis) と訳す。この「羊」の解釈は難しいが、Mus は二頭の羊が額をぶつけあうように衝突しあう山々、と解している。その解釈は Ch-1 の漢訳から支持されるが、また *Bodhisattvāvadānakalpalatā* 64章 *Sudhanakinnary-avadāna* の第274偈の yantrameṣau (機械仕掛けの二頭の羊) の語表現によっても支持されるであろう。その章のその箇所が恐らく地獄の情景を真似て表現されていることは、第272偈に、人を自動的に押し潰す仕掛けである yantraparvatau (機械仕掛けの二つの山) という言葉があることから伺い知ることが出来る。その64章の偈の校訂テキストと独訳は Straube (2006), S. 151, 200 を参照。

SGK 33 (= SMRAM 21.108) vratam yas tu samāśritya samyag no parirakṣati / sa śīryamānamāṃsāsthīḥ kukūle pacyate dhruvam //	Pāli 40 sīlaṃ yo ca samādāya sammā no parirakkhati / vilīyamānamāṃsaṭṭhī kukkule paccate ciraṃ //
--	--

Tib. 33 gang zhig brtul zhugs bzang mnos nas legs par srung¹⁾ bar mi byed na de ni nges par sha dang rus 'jig²⁾ pa'i me mar mur du bsreg³⁾	Ch-1, 33 依止出離道 而不護禁戒 墮燄煨獄中 肢體皆消爛
--	---

SGK 33 b) samyag no parirakṣati] Mus, confirmed by Tib. (<i>legs par srung bar mi byed na</i>): sampanno parirakṣati Ms. N Ed. c) sa] Ms. N Mus: <i>om.</i> sa Ed. °āsthiḥ] Ms. Ed. Mus (corrigenda, p. xxx): °āsthi Lévi: °āsthī Mus (p. 240). d) kukūle] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): kakūle Lévi: kukule Ms.: kukumle N Ed.	
Pāli 40 —	
Tib. 33 1) srung] DGNP: bsrung HOQ. 2) 'jig] GHNOPQ: 'jigs D. 3) bsreg] D: sreg HOQ: bsregs GNP.	
Ch-2 若壞修習行 遠離正等因 僻執心意邪 定入由增獄 453b14-15	
Cf. Ch-3 出家修淨行 虧犯律儀戒 展轉相形毀 死入熱土獄 447b6-7	
Cf. Ch-4 學居廟堂淨 而為過失行 由是令謗賢 從是入深獄 520c17-18	

〔SGK 訳〕 33 暫戒に依って〔僧として〕暮らしながら、正しく〔戒を〕守らなかった者は必ずや、〔両足の〕肉も骨は壊滅して落ちつつ、『熱灰』（ククーラ）〔という名の地獄〕において、焙られるだろう。

Note 33 この地獄は『俱舍論』世間品59頌釈によれば、熱灰が膝を没するだけあって、そこに足を沈めた時、皮膚と肉と血が潰滅するが、足を挙げた時、皮膚と肉と血が再生する。この地獄は「四増」の一つである。

SGK 34 (= SMRAM 21.109) aṇunāpi hi yaḥ kaścīn mithyājīvena jīvati / bhakṣyate kṛmibhiś caṇḍaiḥ sa magno gūthamṛttike //	Pāli 41 aṇunā pi hi yo ko ci micchājīvena jīvati / gūthamutte nimuggo so kimivyūhehi khajjate //
--	---

Tib. 34 gang du 'tsho ba log pa ni cung zad kyis kyang 'tsho byed pa de ni rkyag¹⁾ 'jim nub gyur nas²⁾ srin bu³⁾ rnams kyis⁴⁾ za bar 'gyur	Ch-1, 34 矯現諸威儀 苟求邪活命 墮屍糞獄中 為蛆虫啞食
---	---

SGK 34 c) bhakṣyate] Mus Ms. Ed.: bhakṣate N kṛmibhiś] Mus: krimibhiś Ms. N Ed. d) sa magno] Mus Ms. : saṃmagno N Ed.	
Pāli 41 a) aṇunā] corr. Hazlewood: anunā Feer. pi hi] Mus p. 240: pi Feer: pi hiti Pg-ṭikā.1-2 yo ko ci] Mus Pg-ṭikā.1-2: yo-m-eko Feer. c) gūthamutte] Mus p. 240: gūthamugge Feer.	
Tib. 34 1) rkyag] D: skyag <u>HOQ</u>: skyags GNP. 2) nas] DGHNOP: na Q. 3) srin bu] GHNOPQ: srin po D. 4) kyis] DHOQ: kyi GNP.	
Ch-2 暴惡蛆蟲類 恒居糞穢中 罪者遊履時 食啗於雙足 453b16-17	
Cf. Ch-3 越禁捨正命 邪諂營穢生 死入熱糞池 毒虫貫骨髓 447b8-9	
Cf. Ch-4 棄捐正善業 從邪樂得生 後身沒溺中 啖溺蟲為食 520c19-20	

[SGK 訳] 34 少しでも邪な生計によって生活した者は、誰であっても糞の泥の中に沈み、凶暴な虫どもに食われる。

Note 34 この偈は「屍糞」kuṇapa と呼ばれる地獄を表現する。『俱舍論』世間品59頌釈によれば、この地獄は糞の泥沼であり、そこに nyaṭkutā という名の、全身が白く頭が黒く嘴が針である生き物がいて、有情たちの身体を骨に至るまで食い破る。「四増」の一つである。

SGK 35 (= SMRAM 21.110) dr̥ṣṭvāpi vr̥himadhyasthān prāṇinaś cūrṇayanti ye / āyasair muṣalais taptaiḥ kṣobhyante te punaḥ punaḥ //	Pāli 42 disvā vīhimajjhagate pāṇino cuṇṇayanti ye / tatr'ayomusaleh'eva te cuṇṇanti punappunaṃ //
--	--

Tib. 35 'bru yi nang na¹⁾ 'khod pa yi²⁾ srog chags³⁾ mthong nas⁴⁾ 'joms pa gang de ni lcags kyi gtun shing gis yang dang yang du brdung⁵⁾ bar 'gyur	Ch-1, 35 見五穀中虫 不擇而斲伐 墮鐵碓獄中 常為彼舂擣
---	---

SGK 35 a) vr̥hi°] Mus Ms. Ed.: vr̥hi° N. b) cūrṇayanti] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): cūrṇayamnti Lévi. c) āyasair] Ms.: āyasai N Ed. muṣalais] N: musalais Mus: mukhalais Ms. Ed. cd) taptaiḥ kṣobhyante te] Ms. N Ed.: taptais te *<cūrṇ>yante Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): taptais te skonyante Lévi.	
Pāli 42 a) disvā v̥hi°] corr. Hazlewood: disvāv̥hi° Feer.	
Tib. 35 1) na] GHNOPQ: du D. 2) yi] DHONPQ: yis G. 3) srog chags] GHNOPQ: srog D. 4) nas] GHNOPQ: nas ni D. 5) brdung] DGNP: btung HOQ.	
Ch-2 種植壓油等 蠕動多傷殺 重重臥鐵槽 熱鐵棒捶打 453b18-19	

[SGK 訳] 35 米の中にいる生き物（虫）を、見ただけで [それらを] つぶしていた者たちは、熱した鉄の杵をもって何度も搗かれる（かき混ぜられる）。

SGK 36 (= SMRAM 21.111) atyantakrodhanāḥ krūrāḥ śaṭhāḥ pāpābhikāṅkṣiṇaḥ / paravyasanahr̥ṣṭās ca jāyante yamarākṣasāḥ //	Pāli 43 kurūraccantakopana sadā himsaratā narā / paradukkhapaṭṭhā ca jāyante yamarakkhasā //
Tib. 36 shin tu khro zhing gtum pa dang g.yo byed brdzun¹⁾ du smra ba dang gzhan la gnod byed dga' ba ni gshin rje'i²⁾ srin por³⁾ skye bar 'gyur	Ch-1, 36 見他苦生喜 諂曲多疑惑 常懷忿惡心 作焰摩羅卒

SGK 36 c) hr̥ṣṭāś ca] Mus, confirmed by Tib. (<i>dga' ba</i>) and Pāli haṭṭhā ca: kṛṣṭāś ca Ms.: kṛṣṭvāś ca N: kṛṣṭvā ca Ed.
Pāli 43 a) kurūra°] corr. Hazlewood: kururā° Feer. Note. accanti kopanāti ye krurā Pg-ṭīkā.1-2.
Tib. 36 1) brdzun] DHOQ: rdzun GNP. 2) rje'i] DGNP: rje HOQ. 3) srin por] DGNP: srin bur HOQ.
Ch-2 若起極瞋怒 造彼諸惡罪 死墮焰魔剎 具受一切苦 453b20-21
Cf. Ch-3 恚憎不善行 心常樂惡法 見他苦隨喜 死作閻羅卒 447b26-27
Cf. Ch-4 懷恨意忿怒 果敢為非法 見人窮苦喜 死為閻獄鬼 521a6-7

[SGK 訳] 36 とても怒りっぽく、残忍であり、欺き、悪を欲し、他人の不幸を喜ぶ者は、ヤマ（閻魔）の〔獄卒たる〕ラクシャサ（羅刹）たちとして生まれる。

Note 36 この詩節に相当する、bhadanta Dharmasubhūti（法善現）の説いた1偈頌が世親の『俱舍論』世間品第59頌釈の文中において（Pradhan ed., p. 164, ll. 15-16）、地獄の獄卒は生き物かどうかという議論のために引用される。

SGK 37 (= SMRAM 21.112) sarveṣāṃ eva duḥkhānāṃ bījaṃ *mṛdvādibhedataḥ / kāyavāgmānasam pāpam yat tad aṇv api varjayet // narakakāṇḍam samāptam //	Pāli 44 sabbesam eva dukkhānaṃ *bījaṃ *muddādibhedato / kāyavācādi pāpam yaṃ taṃ aṇv api na kāraye // narakakaṇḍam pathamaṃ //
Tib. 37 sdug bsngal kun gyi sa bon ni chung ngu la sogs dbye ba yis lus ngag yid kyi sdig pa ste de ni phra ¹⁾ yang spang bar bya sems can dmyal ba'i rabs ²⁾ rdzogs so	Ch-1, 37 諸苦果種子 少略而分別 清淨身語心 畢竟常遠離 地獄趣竟

SGK 37	
b) bījaṃ *mṛdvādheda°] ex coni (de Jong p. 235), inferred from Tib. (<i>sa bon ni chung du la sogs dbye ba yis</i>): bījaṃmṛdvādheda° Mus: bījaṃ mṛdvābhibheda° Ms. N Ed.	
c) kāyavāgmānaṣaṃ pāpaṃ] corr.: kāyavāgmānaṣaṃ karma pāpaṃ Ms. N Ed. (hypermetre!): kāyavāgmānaṣaṃ pāpaṃ Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): kāyavāgmānaṣaṃ tāpaṃ Lévi.	
d) varjayet] Mus, confirmed by Tib. (<i>spang bar bya</i>): varttayet Ms. N Ed.	
narakakāṇḍaṃ] Mus Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): narakāṇḍaṃ A' N.	
Pāli 44	
a) sabbesam eva] Feer: sabbesampi ca Pg-ṭikā.1-2.	
b) *bījaṃ] ex coni (cf. Mus pp. 242-243): bhijja° Feer M.1 Pg-ṭikā.1-2 *muddādi°] or *mud'ādi° (= mudu-ādi) ex coni (cf. de Jong p. 236): muddhādi° Feer: muddhāhi M.1.	
c) kāyavācādi pāpaṃ] Feer: kāyavācādikāṃ pāpaṃ MV.1-2.	
cd) yaṃ taṃ aṇv api] ex coni Mus (cf. de Jong p. 235): yat tad aṇv api Hazlewood (ex coni): yaṃ taṃ daṇḍāpi M.1 Feer: taṃ aññaṃ pi B (cf. Mus, p. 242).	
Tib. 37	
1) phra] GHNOPQ: pha D. 2) rabs] DGHNOP: rab Q.	
Ch-2 破結善種子 身口意俱罪 智者勿作罪 地獄相如是 地獄品頌竟 453b22-24	

[SGK 訳] 37 身口意の（身体・言語・心意）悪業は、「微弱」から始まる区分に従って、あらゆる苦しみの種子である。だからそれはわずか（微少）であっても捨離しなければならない。『地獄の節』終わる。

SGK 38 (= SMRAM 21.113)	Pāli 45
haṃsapārāvatādīnāṃ	haṃsapārāpatādīnaṃ
kharāṇāṃ api rāgiṇāṃ /	*kharāṇaṃ atirāgiṇaṃ /
yonau rāgeṇa jāyante	jāyante yoniyāṃ rāgā
mūḍhāḥ kīṭādiyoniṣu //	mūḍhā kīṭādiyoniṣu //
Tib. 38	Ch-1
'dod chags kyis ni rmongs pa dag	—
ngang pa phug ron la sogs dang	
bong bu 'dod chags can ¹⁾ rnam kyī ²⁾	
skye gnas ³⁾ srin sogs skye gnas skye ⁴⁾	

SGK 38	
b) kharāṇaṃ] Ms. N Ed. Mus (corrigenda, p. xxx), confirmed by Tib. (<i>bong bu</i>): narāṇaṃ Mus (p. 244). c) yonau] Ms. Mus: yena N Ed.	
Pāli 45	
a) °tādīnaṃ] B M.2 (Mus. p. 244): °tādīnaṃ Feer (metre!).	
b) *kharāṇaṃ atirāgināṃ] ex conī: khaggānaṃ atirāgināṃ M.1 (cf. Mus p. 244) BNL.1: khattānaṃ atirāgināṃ Feer.: gadrabhānaṃ ca yonisū B M.2 Pg-ṭīkā.1-2.	
c) jāyante yonīyaṃ rāgā] Feer M.1 (cf. Mus p. 244): jāyante kāmarāgena B M.2.	
Tib. 38	
1) chags can] DGHOPQ: cha can N. 2) kyi] DGNP: kyis HOQ.	
3) skye gnas] D: skyes nas GHNOPQ. 4) skye] GHNOPQ: te D.	
Ch-2 牛驢猿猴等 鳩鵲鵲鴨身 行恚與貪婬 獲報斯如是 453b25-26	
Cf. Ch-3 多欲生鵲鵲 孔雀鴛鴦鳥 愚癡業所生 蛆蟻飛蛾等 447c3-4	
Cf. Ch-4 若多婬欲態 後生為癡蟲 鴈鵲鳩鴛鴦 孔雀亦蜚蛾 521a14-15	

[SGK 訳] 38 [人々は] 食欲の故に、食欲をもつ [生き物たちである] ハンサ鳥や鳩などの胎に、また驢馬たちの胎に、生まれる。痴愚の者たちは、[死後に] 虫などの胎に生まれる。

Note 38 畜生に生まれ変わる業について、梵文 [*Mahā-】Karmavibhaṅga* の説明は、Lévi (1932), pp. 44-46 (XVI); Kudo (2004), pp. 70-75 を参照。『正法念処経』巻十八はより詳しい説明を行う。『大毘婆沙論』巻百七十二も傍生趣を説明する。またパーリ *Lokapaññatti* の14章における畜生界の説明は独自であり、無足・四足・他足・鳥類に4分類した上で説明を行う (Denis, I, pp. 124-129)。この箇所は『立世阿毘曇論』に相当文が無い。

SGK 39 (= SMRAM 21.114) sarpāḥ krodhopanāhābhyāṃ mānastabdhā mṛgādhipāḥ / abhimānena jāyante gadbhaśvādiyoniṣu //	Pāli 46 sappā kodhopanāhehi mānatthaddhā migādhipā / atimānena jāyante gadbhasaṇayonisū //
Tib. 39 khong khro 'dzin pas sbrul du skye ¹⁾ nga rgyal khengs sems seng ger 'gyur che ba yi ²⁾ ni nga rgyal gyis ³⁾ khyi dang bong bu'i skye gnas skye ⁴⁾	Ch-1 —

SGK 39	
b) mānastabdhā] Ms. Mus (p. 244): mārastabdhā N Ed.	
d) gardabhaśvā°] Mus, confirmed by Tib. (<i>khyi dang bong bu</i> [= Skt. *gardabha-śva-]) and Pāli gadrabha-soṇa°: gardabhāśvā° Ms. (= gardabha-aśva-): gadāmāśvā° N Ed.	
Pāli 46	
a) kodhopanāhehi] Feer: kodhupanāhehi Pg-ṭīkā.1-2.	
b) migādhīpā] corr. Hazlewood: miggādhīpā M.1: mittādhīpā Feer BNL.4, 5.	
Tib. 39	
1) skye] DHONPQ: skyes G. 2) yi] D: yis GHNOPQ.	
3) gyis] DGNP: gyi HOQ. 4) skye] GHNOPQ: te D.	
Ch-2 豺狼猛虎豹 蝮蝎及毒蛇 瞋忿我慢深 獲報斯如是 453b27-28	
Cf. Ch-3 瞋恨作虺蛇 蜂蠍毒虫類 憍慢自矜高 惡心密懷害 報生合羅婆(八脚獸) 及作虎師子 虛傲踈嶮報 猪狗驢狐狼 447c7-11	
Cf. Ch-4 憍傲常慢人 後生為猛獸 輕易者後世 為猪犬狐驢 521a18-19	

[SGK 訳] 39 怒りと恨みによって蛇に [生まれ]、また尊大で倨傲の者たちはライオンに [生まれ]、また高慢によって驢馬や犬などの胎に生まれる。

SGK 40 (= SMRAM 21.115)	Pāli 47
mātsaryerṣyādidoṣeṇa	maccherosuyako cāpi
vānarāḥ pretya dehinaḥ /	hoti vānarajātiko /
jāyante mukharā dhr̥ṣṭāś	mukharā capalālajjā
capalātmāś ca vāyasāḥ //	jāyante kākayonisū //
Tib. 40	Ch-1
ser sna phrag dog la sogs pa'i	—
skyon gyis ¹⁾ lus can shi nas spre'u	
mu cor ²⁾ smra dang spyi brtol ³⁾ che	
rang bzhin mi brtan ⁴⁾ khrar skye'o	

SGK 40	
b) pretya] Mus, cf. Tib. (<i>shi nas</i>): preta Ms. N Ed.	
c) mukharā dhr̥ṣṭāś] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): mukharāṣṭā Lévi.	
d) capalātmāś] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): capalātmānaś Lévi Ms. N Ed. (hypermetre!)	
Pāli 47 —	

Tib. 40	
1) gyis] DGNP: gyi HOQ.	2) cor] DHOQ: chor GNP.
3) brtol] DHOQ: btol GNP.	4) brtan] DGHOPQ: rtan N.
Ch-2 For vss. 40-44: 烏鵲鵬鷺等 蜈蚣路多蟲 熊熊貓牛馬 龍魚孽路荼 如是傍生等 增益惡三業 墜墮焰魔界 獲報斯如是 傍生品頌竟 453b29-453c4	
Cf. Ch-3 慳悋不惠施 疾忌多憎惡 輕躁心不住 死墮猿猴中 強顏少羞恥 無節多言說 隨業獲果報 後受烏鳥身 447c11-15	
Cf. Ch-4 常內懷嫉妬 心亦不一住 後世為獼猴 強面目成鳥 521a20-21	

[SGK 訳] 40 慳貪と嫉妬などの悪徳によって、人々は死んで猿猴に生まれる。おしゃべりな者、傍若無人の者、輕佻な心の者たちは鴉として生まれる。

SGK 41 (= SMRAM 21.116) vadhabandhanamātsaryair gavāśvādiṣu dehinaḥ / jāyante krūrakarmāṇo lūtāḥ khajjāravṛścikāḥ //	Pāli 48 vadhabandhanamiddhehi hatthassamahisādinam / honti kurūrakammantā lūtā khajjaravicchikā //
Tib. 41 gsod dang 'ching dang ser sna yis lus can ba lang ¹⁾ khyi la sogs ²⁾ 'gyur ro mi srun ³⁾ las kyis ni sdom dang sdig pa mi sdug skye	Ch-1 —

SGK 41	
a) °bandhanamātsaryair] Ms. N Ed., confirmed by Tib. ('ching dang ser sna yis): °bandhanatāḍanair Mus.	
b) gavāśvādiṣu] Mus Ms. N Ed. Cf. Tib. ba lang khyi la sogs (= Skt. *gava-śva-ādiṣu).	
d) °vṛścikāḥ] Mus: °vṛścikāḥ Ms. N Ed.	
Pāli 48	
a) °middhehi] M.1: °middhāhi Feer: °middhādī ms. (cf. Mus p. 246): °piḷāhi BNL.1-3 MV.1-2. — Note: middhehi is m.c. of midhehi? Cf. PTSD, s.v. midha "to hurt at (himsana)".	
d) lūtā] Mus p. 246: sukā Feer khajjara°] Feer: khajjura° BNL.4-5.	
Tib. 41	
1) ba lang] DHOQ: pa yang GNP.	
2) la sogs] DGNP: sogs so HOQ.	
3) srun] DHOQ: bsrn <u>GNP</u> .	

Ch-2 —
Cf. Ch-3 無智好打縛 報生象馬中 或復作牛羊 麀鹿諸野獸 447c5-6
Cf. Ch-4 喜縛撻捶者 後世多受惱 自為象馬牛 瞋恚死成蛇 521a16-17
Cf. Ch-5 不持戒人，若鞭打拷掠閉繫，枉法得財而作布施，生象、馬、牛中，雖受畜生形，負重鞭策，羈絆乘騎，而常得好屋好食，為人所重，以人供給。 T 25 152c12-14

〔SGK 訳〕 41 殺害・束縛（監禁）・慳貪によって、人々は、牛や馬などに生まれる。残忍な行為をした者たちは、蜘蛛や蠍に生まれる。

SGK 42 (= SMRAM 21.117) vyāghramārjāragomāyu- ṛkṣagrḍhravṛkādayaḥ / jāyante pretya māṃsādāḥ krodhanā matsarā narāḥ //	Pāli 49 vyagghamajjāragomāyu- acchagijjhavakādayo jāyante pecca maṃsādā kodhanā maccharā narā //
Tib. 42 khro dang ser sna can gyi mi shi nas sha ni za byed pa stag dang spre'u wa dang dom bya rgod spyang ki la sogs skye	Ch-1 —

SGK 42 ab) °gomāyu-ṛkṣa°] Ms. N Ed. Mus (corrigenda, p. xxx): °gomāyu-m-akṣa° Mus (p. 246). b) °vṛkādayaḥ] Mus, confirmed by Tib. (<i>spyang ki la sogs</i>): °vṛgādayaḥ Ms.: °vṛgādāyaḥ Ed. c) °pretya māṃsādāḥ] Mus, confirmed by Tib. (<i>shi nas sha ni za byed pa</i>): °pretamānsādāḥ Ms.: °pretamānsādoḥ N Ed. d) narāḥ] Mus Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): naraḥ A'.
Pāli 49 b) °vakādayo] B M.1 M.2 (cf. Mus pp. 246-247): °vākādayo Feer. c) maṃsādā] Mus pp. 246-247: maṃsadā Feer.
Tib. 42 —
Ch-2 —
Cf. Ch-3 邪貪無厭足 兩舌離親友 後受猫狸身 或作熊羆身 447c15-17
Cf. Ch-4 慳貪而邪誑 多行盜賊人 死後為猫豺 虎狼肉食獸 521a22-23

〔SGK 訳〕 42 肉食をした、怒りっぽい慳貪な人々は、死んでから虎・猫・ジャッカル・熊・鷲・狼などに生まれる。

SGK 43 (= SMRAM 21.118) dātārah krodhanāḥ krūrā narā nāgamaharddhikāḥ / bhavanti tyāgino darpāt krodhāc ca garuḍeśvarāḥ //	Pāli 50 dātāro kodhanā krūrā narā nāgā mahiddhikā / bhavanti cāgino kodhā dappā ca garuḍissarā //
Tib. 43 mi srun ¹⁾ khro gnyer sbyin byed mi rdzu 'phrul chen po'i klur skye'o gtong zhing khro dang dregs pa yis nam mkha' ²⁾ lding gi dbang phyug skye ³⁾	Ch-1 —

SGK 43 b) nāgamaharddhikāḥ] Ms. N Ed.: rāgamaharddhikāḥ Lévi: *nāgā maharddhikāḥ Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): Tib. <i>rdzu 'phrul chen bo'i klu</i> . c) bhavanti tyāgino] Ms. Mus: bhavāntatyāgino N Ed.
Pāli 50 —
Tib. 43 1) srun] DHOQ: bsrūn GNP. 2) nam mkha'] DGOQ: namkha' HNP. 3) skye] GHNOPQ: che D.
Ch-2 —
Cf. Ch-3 修行大布施 急性多瞋怒 不依正憶念 後作大力龍 能修大布施 高心欸蔑人 由斯業行生 大力金翅鳥 447c17-21
Cf. Ch-4 布施多瞋怒 持心不質直 然後墮龍中 乃有大神力 廣施有恚心 輕人而自大 後作迦留鳥 致有大威猛 521a24-27
Cf. Ch-5 又知惡人多懷瞋恚，心曲不端而行布施，當墮龍中，得七寶宮殿，妙食好色。 T 25 152c15-16 又知憍人多慢、瞋心布施，墮金翅鳥中，常得自在。有如意寶珠以為瓔珞，種種所須，皆得自恣，無不如意，變化萬端，無事不辦。 152c17-19

[SGK 訳] 43 布施をするが、冷酷で怒りっぽい人々は、大神力あるナーガ（龍）になる。また布施する者であって驕慢により、あるいは怒りにより、ガルダ（金翅鳥）王となる。

Note 43 Dīgha Nikāya の Mahāsamayasutta (II, p. 259) によれば、ガルダはナーガの天敵であったが、ブツダの働きにより、両者は対立を捨てて共にブツダに帰依した。両者がここで一対のごと

く扱われているのはそのためであろう。— ボロブドゥールの地中に埋まる旧基壇の160枚の浮彫は、現存しない何らかの SGK に似た内容をもつ業報分別のテキストに基づいて作られたと思われるが、その中の94番（Krom 本）の浮彫は、1枚の横長のパネルを二つに分割して左右にナーガとガルダに生まれ変わる業報をそれぞれ描いている。恐らくこのパネルの彫刻に基づいたテキストは、SGK のこの43偈のように、一つの偈の中にナーガとガルダに生まれ変わる業報をそれぞれ表現していたため、それを浮彫に表現する時にも1パネルに両者の業報を描いたのであろう。つまり旧基壇の元になったテキストは韻文で作られていたと考えられる。旧基壇94番の浮彫については田枝・伊東 (2015)、99頁を参照。

SGK 44 (= SMRAM 21.119) kṛtaṃ yat pāpakaṃ karma svayaṃ vākkāyamānasam / tiryāñcas tena jāyante tan manāg api mā kṛthāḥ // tiryakkāṇḍaṃ samāptam	Pāli 51 kataṃ yaṃ pāpakaṃ kammaṃ mānasādikaṃ attanā / tiracchānesu jāyante tena taṃ parivajjaye // tiracchānakaṇḍaṃ dutiyaṃ //
Tib. 44 rang gi lus dang ngag yid kyis sdig pa'i las ni gang byas pa de ni dud 'gror skye bas na de ni chung yang ma byed cig dud 'gro'i rabs rdzogs so	Ch-1 —

SGK 44 d) manāg api mā kṛthāḥ] Ms.: manāg api ma (sic!) kṛthāḥ Mus: manogatim ākṛthāḥ N Ed. tiryakkāṇḍaṃ] Mus: iti tiryakkāṇḍaṃ Ms. N Ed.
Pāli 51 d) tena taṃ parivajjaye] Feer: tasmā taṃ pi vivajjaye B (cf. Mus p. 247) Pg-ṭīkā.1-2.
Tib. 44 —
Ch-2 —
Cf. Ch-3 身三口四過 及意三不善 此業若非增 死墮畜生趣 447c1-2⁽⁵⁶⁾

56 この「身三口四過 及意三不善」という Ch-3 『分別業報略経』の句は、Lévi がネパールで見つけた馬鳴作『十不善業道 [の説示]』 *Daśakuśalakarmapathāḥ* 梵文にある次の1偈とよく一致する：

[SGK 訳] 44 身語意の（身体・言語・心意の）、自ら作った悪業（自らなした悪い行為）により、畜生に生まれる。それ（悪業）をわずかでも、作ってはならない（なしてはならない）。『畜生の節』終わる。

Note 44 SGK は畜生の節を地獄と餓鬼の節の間に置く。つまり地獄・畜生・餓鬼の順序で説く。それは有部を含むインドの諸部派の多くの経・論は五道を説く時には「地獄・畜生・餓鬼・人・天」の順序に従う伝統があるからであり、SGK は六道説であるが、その五道の順序に従いながら阿修羅を途中に挿入した形を取る。SGK の原形テキスト (Ur-SGK) では五道として構想されたのかもしれない。五道の順序については、壬生台舜「六道説に関する二、三の問題について」、『地獄の世界』（坂本要編）、北辰堂、1990年、255頁を参照。大乘の『瑜伽師地論』巻四も同様の順序で五道を説明する。五道説に従う『分別業報略経』と『分別善惡所起経』韻文も、また SGK のパーリ語版である Pañca-g も、この「地獄・畜生・餓鬼・人・天」の順序を取る。— SGK と Cha-g は六道なので、五道に阿修羅を加える。SGK は「地獄・畜生・餓鬼・人・阿修羅・天」の順であるが、Cha-g はその順を変えて、「地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人・天」の順にする。また Ch-2 『六道伽陀経』のテキスト六道の順は SGK と同じであるが、Ch-1 『六趣輪廻経』は SGK の漢訳であるにもかかわらず、SGK とは 畜生の節の位置を違えて、「地獄・餓鬼・畜生」の順にしている点に注意される。奇妙なことにこの Ch-1 は SGK の畜生の節の偈を全く訳さず、以下のごとく、出典不明の別の 4 偈 (Ch-1, 52-55) をもって代替している。つまりこの Ch-1 に見られる六道の順序の違いは、梵本に基づくものではなく、翻訳の際に生じたものと思われる。

梵文に相当偈なし No corresponding verses in SGK.	Ch-1, 52-55			
	人天三惡趣	唯自能救拔	奔馳六趣中	如夢境和合
	觀自他眷屬	傷嘆豈長久	如彼俳優人	數數易形色
	受地獄苦畢	或生於天中	福盡復沈淪	墮彼畜生趣
	受種種形色	後得生人間	貧苦極艱辛	譬車輪旋轉 畜生趣竟

kāyikaṃ trividhaṃ karma vācikaṃ tu caturvidhaṃ /

mānaṣaṃ triprakāraṃ ca daśaite 'kuśalāḥ smṛtāḥ // Lévi (1929), p. 268.

和訳：「身業は三種、口業は四種、意業は三種、これらが十不善といわれる。」

この 1 偈と十不善業道の説明である散文から、この短い作品は成り立っている。大乘や密教の教理は説明から感じられず、小乗の作品である。散文は偈文への註釈であろうから、少なくともこの偈だけは馬鳴の真作である可能性がある。Ch-3 や Ch-4 のその漢訳 2 句の元の梵文の偈がこの *Daśākūśalakarmapaṭhāḥ* の 1 偈と同じである可能性があるから、この可能性はその原本（大勇が編集した）のコア部分が元は馬鳴に由来するという憶測に一つの根拠を与えるであろう。

SGK 45 (= SMRAM 21.120) bhakṣyabhojyāpahartāro ye kṣudrā dānavarjitāḥ / bhavanti kuṇapāhārāḥ pretās te kaṭapūtanāḥ //	Pāli 52 khajjabhojjāpahattāro ye janā dānavajjitā / bhavanti kuṇapāhārā petā te kaṭapūtanā //
Tib. 45 rtseg ¹⁾ log can gang sbyin pa spangs bza' dang bca' ba ²⁾ 'phrog ³⁾ byed pa de dag yi dags lus srul po ro rnams za bar byed par skye	Ch-1, 38 若人不樂施 復盜眾飲食 墮大癭鬼中 常噉諸糞穢

SGK 45 b) ye kṣudrā dānavarjitāḥ] Ms. N, confirmed by Tib.: ye kṣudrā dānavarji Ed.: <*ye cāpy utthā- navarjitāḥ> ex conī Mus p. 248. — Note: Here many akṣaras of Lévi's manuscript seem to to be illegible.
Pāli 52 b) ye janā dānavajjitā] B (Mus p. 248): yehi dānavajjhatā Pg-ṭikā.1-2: yehi utthānavajjitā Feer. (Mus emends <i>yehi</i> to <i>ye hi</i> in the text of Feer, i.e. M.1.) c) kuṇapāhārā] Mus p. 248: kuṇapāhārā Feer.
Tib. 45 1) rtseg] HOQ: rtse DGNP. 2) ba] DGNP: la HOQ. 3) 'phrog] GHNOPQ: spong D.
Ch-2 障他布施福 偷盜於飲食 墮在布怛那 飢虛為餓鬼 453c5-6
Cf. Ch-3 劫盜賢善人 飲食諸餽餽 墮富單那鬼 食糞及死屍 447c21-23
Cf. Ch-4 身自食甘美 以惡施與人 死為溷餓鬼 常食臭中蟲 521a28-29

[SGK 訳] 45 布施をしないで、卑しく、硬い食物や軟かい食物を盗んだ者たちは、カタプータナという、死体を食物とする餓鬼になる。

Note 45 カタプータナ (kaṭapūtaṇa) については、漢訳仏典で「奇臭鬼」「臭極臭鬼」「短臭鬼」とも訳されるから、臭い鬼なのであろう。その名は『マヌ法典』12.71 でも言及される。『マヌ法典』の註釈によればそれは Piśāca の一種であり、墓場を徘徊する鬼とされる。Cf. Gan-ganath Jha: *Manusmṛti. With the 'Manubhāṣya' of Medhātithi, English Tr.*, second ed., 1999, Vol. 7, p. 603.

SGK 46 (= SMRAM 21.121) viheṭṭhayanti ye bālān vañcayanty api tṛṣṇayā / te 'pi garbhamalāhārā jāyante kaṭapūṭanāḥ //	Pāli 53 viheṭṭhayanti ye bāle lobhena vañcayanti ca te pi gabbhamalāhārā jāyante kaṭapūṭanā //
Tib. 46 gang zhig byis pa rnam la 'tshe sred pas 'drid par byed pa de khong gi dri ma za byed pa'i lus srul por ni skye bar 'gyur	C —

SGK 46 a) bālān] Mus, confirmed by Tib. (<i>byis pa rnam la</i>) and Pāli (<i>bāle</i>): bālā Ms. N Ed.	
Pāli 53 c) °āhārā] corr. Hazlewood: °āharā Feer.	
Tib. 46 —	
Ch-2 —	
Cf. Ch-3 欺怖愚阇劣 疾病諸貪乞 後作富提鬼 常食諸胎網 447c23-25	
Cf. Ch-4 好調嬈老小 乞兒與病人 後為臊餓鬼 食產乳惡露 521b1-2	

[SGK 訳] 46 子供たちに危害を加えたり、渴愛によって[彼らを]欺したりした者たちは、子宮の排泄物を食べるカタプータナに生まれる。

SGK 47 (= SMRAM 21.122) hīnācārātīdīnās ca matsarā nityakāṅkṣiṇaḥ / jāyante ye narāḥ *pretya pretās te galagaṇḍakāḥ //	Pāli 54 hīnācārātīhīnā ca maccharā niccalobbhino / ye narā pecca jāyanti petā te galagaṇḍakā //
Tib. 47 mi gang spyod pa dman pa dang ¹⁾ shin tu zhum dang ser sna ldan ²⁾ rtag tu 'dod byed de shi nas yi dags wa ba can du skye	Ch-1 —

SGK 47	
cd) jāyante ye narāḥ *pretya pretās te] ex coni (cf. Pāli): jāyante ye rā pretāḥ pretās te Ms.(ante corr.): jāyante ye narā duṣṭā pretās te Ms.(post corr. marg.): jāyante ye narāḥ pretā duṣṭās te N: jāyante ye narāḥ pretā 'ṣṭās te Ed. — Note: In pāda abc Lévi's manuscript seems to be damaged. Mus reads <*ye narāḥ pretya jāyante pretā>s te.	
Pāli 54	
d) galagaṇḍakā] M.1 (cf. Mus p. 248): galakaṇṭakā Feer.	
Tib. 47	
1) dang] GHNOPQ: gang D. 2) ldan] GHNOPQ: dang D.	
Ch-2 愚癡慳鄙人 我慢乏禮樂 求食又無慚 死為大瘦鬼 453c7-8	
Cf. Ch-3 顰蹙鄙陋行 慳惜多貪求 死作賤餓鬼 形體甚黑瘦 447c25-27	
Cf. Ch-4 雖與心慳悔 恒自懼不足 後為黑餓鬼 從下掣得食 521b3-4	

[SGK 訳] 47 下劣な行動により甚だ下賤であり、慳貪で、いつも[物を]欲しがっている人々は、死後に、喉に大きな腫瘤をもつ餓鬼（ガラガンダカ）になる。

SGK 48 (= SMRAM 21.123)	Pāli 55.
dānaṃ nivārayaty eva na ca kiṃcid dadāti yaḥ / kṣutkṣāmo 'sau mahākukṣiḥ pretāḥ sūcī mukho bhavet //	paradānaṃ nisedheti na ca kiñci dadāti yo khuppipāsikapeto so sūcivatto mahodaro //
Tib. 48	Ch-1, 39
gang zhig ci yang mi ster la sbyin pa zlog ¹⁾ par byed pa de ²⁾ yi dags bkres pas rnyongs pa yi ³⁾ gsus che kha ni khab ⁴⁾ tsam 'gyur	若障人布施 於已物生悵 墮針口鬼中 腹大常飢渴

SGK 48	
b) na ca] Mus: na hi Ms. N Ed.	
c) kṣutkṣāmo 'sau] Ms. Mus: kṣutkṣāmāsau N Ed.	
d) sūcī mukho] Ms. N Ed.: sūcī mukho Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): sūcāmukho Lévi.	
Pāli 55 —	

Tib. 48	
1) zlog] DGNP: ldog HOQ.	2) de] DGNP: ste HOQ.
3) yi] GHNOPQ: zhes D.	4) khab] DGHNOP: kham Q.
Ch-2 自不行檀度 勸他作慳貪 而墮餓鬼中 腹大咽如針 453c9-10	
Cf. Ch-3 抑止他人施 有財不肯捨 生作巨身鬼 腹大咽如針 448a12-14	
Cf. Ch-4 禁止人布施 身亦不自與 後為大身鬼 其口若針鼻 521b17-18	

〔SGK 訳〕 48 〔他人の〕 布施を妨げ、何一つ布施しない者は、〔死後に〕 大きな腹をもち、針の口をもつ、飢えのために痩せ細った餓鬼となる。

Note 48 *sūcīmukha* というこの餓鬼の種類は、パーリ *Lokapaññatti* の14章における餓鬼の説明 (Denis, I, pp. 116-124) — この説明の文は漢訳『立世阿毘曇論』には相当文が存在しない — の中にも、その名称が出てくる。*Lokapaññatti* は12種類の餓鬼の名称を挙げて餓鬼界を説明するが、その12種類とは、(1) *vantāsā*, (2) *kuṇapa-khādā*, (3) *gūtha-khādā*, (4) *aggijālamukhā*, (5) *sucimukhā*, (6) *taṇhaṭṭitā*, (7) *sunijjhāpitā*, (8) *satthaṅgā*, (9) *pabbatāṅgā*, (10) *ajagaraṅgā*, (11) *vemanikā*, (12) *mahid-dhikā* である。すなわち、(1) 吐瀉を食べる、(2) 死体を食べる、(3) 糞を食べる、(4) 火焰の口をもつ、(5) 針の口をもつ、(6) 渴に苦しむ、(7) 〔飢餓に〕 焼尽した、(8) 刀剣の肢体をもつ、(9) 山のような肢体をもつ、(10) 大蛇の肢体をもつ、(11) 天宮をもつ、(12) 大神通力をもつ、の12種の餓鬼たちである。この12種類を SGK の偈に対応させると、(5) の餓鬼が本偈、SGK 48偈にあたる。(1) と (3) の餓鬼が SGK 50偈にあたる。(2) の餓鬼が SGK 45偈の *kuṇapāhārāḥ* と表現されるカタプーナ餓鬼にあたる。(4) の餓鬼が SGK 51偈にあたる。(8) の餓鬼は SGK 22偈の「刀の爪をもつ」地獄の亡者に似ている。この *Lokapaññatti* の12種餓鬼の記事は正量部の文献からパーリ語に訳して借用されたものなのかどうかは確かではない。『正法念処經』卷十六には36種類の餓鬼が挙げられるが、全体的にはよく合致しない。*Mahāvvyūtpatti* 4755-4767 には餓鬼の13種類の名が挙げられる。

SGK 49 (= SMRAM 21.124)	Pāli 56
dhanam rakṣati vaṃsārtham	dhanam rakkhati vaṃsattham
na bhuñkte na dadāti yaḥ /	na bhuñjati na deti yo /
dattādāyī tataḥ pretah	dattādāyī tato peto
śrāddhabhoktā sa jāyate //	saddhabhogī sa jāyate //

Tib. 49 gang zhig spyod dang sbyin mi byed rigs kyi don du nor srung¹⁾ na de ni yi dags *mtshun²⁾ gtor spyod³⁾ shi dus⁴⁾ bsngos za⁵⁾ der skye *ba'o⁶⁾	Ch-1, 40 無嗣慳財物 不捨不受用 墮匱乏鬼中 得他享殘棄
--	---

SGK 49 a) vaṃśārthaṃ] Mus: vaṃśārthe Ms. N Ed. b) bhuñkte] Mus Ms. Ed.: bhukte N.	
Pāli 56 a) rakkhati] M.1 (cf. Mus p. 250): bhuñjati Feer. d) saddha°] corr. Hazlewood (cf. Mus pp. 250-251): laddha° M.1 M.2 Feer: siṭṭha° B: sāṭṭha° MV.1: heṭṭha° MV.2.	
Tib. 49 1) srung] D: bsrung GHNOPQ. 2) *mtshun] ex coni: mtshan DGHNOPQ. 3) spyod] DGNP: brjod HOQ. 4) shi dus] HNOQ (= *pretya?): shin dus GP: shin tu D. 5) za] GHNOPQ: sa D. 6) skye *ba'o] ex coni: skye bo HOQ: skye'o DGP.	
Ch-2 慳貪深厚者 護財如眼睛 貧病與佛僧 不能施少分 亦復不自用 父母莫能得 死墮餓鬼身 漿飲永不遇 453c11-14	
Cf. Ch-3 不施不自食 積聚為子孫 以此業緣故 後生輕餓鬼 子孫為修福 因是得信食 448a14-17	
Cf. Ch-4 擁財以遺子 不食亦不施 其死屬閻界 子祭乃得食 521b19-20	

[SGK 訳] 49 一族のために財産を守り、消費もせず布施もしない者は、与えられたものだけを受けとる [だけの]、祖霊祭のお供えを食べる餓鬼に生まれる。

SGK 50 (= SMRAM 21.125) yaḥ parasvāpahārepsur dattvā caivānutapyate / bhoktā viṣṣeṣmavāntānām pretya pretaḥ sa jāyate //	Pāli 57 yo paratthāpahāriccho datvā c'ev'anutappati / so gūthasemhavantānaṃ peto jāyati bhakkhako /
---	--

Tib. 50 gang zhig gzhan gyi nor 'phrog 'dod byin nas 'gyod par byed pa de shi nas mchil ma skyugs pa la za bar byed pa'i yi dags skye	Ch-1, 41 希望他施惠 自少施生悔 墮下劣鬼中 常食於涎吐
---	--

SGK 50 Note: This whole stanza is lacking in Lévi's manuscript.	
Pāli 57 d) bhakkhako] Mus p. 254: bhakkako Feer.	
Tib. 50 —	
Ch-2 若盜他財物 施已心生悔 亦墮餓鬼身 常食於膿唾 453c15-16	
Cf. Ch-3 慳貪不布施 或施還自毀 死墮食吐鬼 唯膳膿涕唾 447c27-29	
Cf. Ch-4 謂施為無福 未嘗肯少施 後為鄙餓鬼 主食人所吐 521b5-6	

[SGK 訳] 50 他人の財を奪うことを欲し、また与えてから後悔する者は、死後に糞・痰・吐瀉物を食べる餓鬼となる。

Note 50 この偈の箇所では Lévi 写本は欠損し、梵文を得られなかったため、Mus (p. 254) はパーリ語訳と藏訳を参照して、偈の梵文を次のように推定した：[yaḥ parasvāpahār'icchur datvā caivānutaṭṭhate / guthasleṣmavāntānāṃ preto jāyati bhakṣakaḥ //]. 今回 *Pāñcālarāja-avadāna* から得られた梵文と比較してみると、この偈の場合、還梵という作業が特に同義語の選択や語の順序に関しては限界があることを示す結果となっている。

SGK 51 (= SMRAM 21.126) apriyaṃ vakti yaḥ krodhād vākyaṃ marmāvaghaṭṭanam / bhavaty ulkā mukhaḥ pretaḥ suciraṃ tena karmaṇā //	Pāli 58 yo vadaty appiyo kodhā vākyaṃ mammāvaghaṭṭanam / bhavat'ukkā mukho peto so ciraṃ tena kammaṇā //
Tib. 51 gang zhig khros pas mi snyan smra mtshang 'bru ¹⁾ ba ni smra byed pa las des shin tu yun ring bar ²⁾ yi dags kha 'bar skye bar 'gyur	Ch-1, 42 樂聞他過失 加惡語宣傳 墮焰口鬼中 長受諸苦惱

SGK 51	
b) marmāvaghaṭṭanam] Mus, confirmed by Pāli and Tib. (<i>mtshang 'bru ba</i>): marmavibhedanam Ms.: marmavibhedataṃ N Ed.	
c) bhavaty] Mus Ms.: bhavanty N Ed. ulkā mukhaḥ] Mus Ms. Ed.: ulkā mukha N.	
d suciraṃ] Ms. N Ed., confirmed by Tib. (<i>shin tu yun ring bar</i>): sa ciraṃ Mus p. 254.	
Pāli 58	
b) vākyaṃ mammā°] corr. Hazlewood (cf. Mus p. 254): vākyaṃ ammā° Feer °ghaṭṭanam] Mus p. 254: °ghatanam Feer.	
Tib. 51	
1) 'bru] DHONQ: 'dru GP. 2) ring bar] DGNP: ring por HOQ.	
Ch-2 口出惡言語 謗毀於賢善 墮彼餓鬼中 口生於火炬 453c17-18	
Cf. Ch-3 麤言觸惱人 好發他陰私 剛強難調伏 生焰口餓鬼 448a7-9	
Cf. Ch-4 麤言以惱彼 中傷說人短 後為焦餓鬼 常吞食火烟 521b13-14	

[SGK 訳] 51 怒りによって[相手の]急所を突く、不快な言葉を語る者は、その行為によって久しい間、かがり火のような口をもつ餓鬼（焰口餓鬼）となる。

SGK 52 (= SMRAM 21.127)	Pāli 59
kurute kalaham yas tu niṣkṛpaḥ krūramānasah / kṛmikīṭapaṭaṅgādaḥ preto 'sau jyotiko bhavet //	kurūramānasaso yo tv adayo kalahakārako kimikīṭapaṭaṅgādo peto so jotiko bhavet //
Tib. 52	Ch-1, 43
gang zhig 'thab mo byed pa dang ma chags sems ni khro byed pa de ni yi dags me 'bar ma srin dang sdig sbrul phyed leb za	好起諸鬪諍 無少慈愍心 墮疲極鬼中 食蝸蠕虫類

SGK 52	
c) °pataṅgādaḥ preto] Ms. Mus: °pataṅgādeḥ prete N Ed.	
d) jyotiko] Ms. N Ed., confirmed by Pāli and Tib. (<i>me 'bar ma</i>): kṣobhito Mus.	
Pāli 59 —	
Tib. 52 —	
Ch-2 慳貪與諍訟 惡意窺他財 墮彼餓鬼中 微獲祭祀食 453c19-20	

Cf. Ch-3 熾然他鬪訟 積財常恐盡 無慈性剛強 後作食虫鬼 常噉諸蛾蟻 舉身皆火然 448a9-12
Cf. Ch-4 勸訟好會鬪 酷虐恐熱人 後為焰火鬼 食於蜚蛾蟲 521b15-16

〔SGK 訳〕 52 憐れみなく、冷酷な心をもち、鬪争をなす者は、〔死後に〕蛆虫や虫や蛾を食べる、火と燃える餓鬼（炎光餓鬼）になる。

Note 52 SGKの『餓鬼の節』は、この52偈までが「本来的な餓鬼類のグループ」、次の53偈から59偈まではそれとは性格が異なる「妖怪的な存在のグループ」として分けられるであろう。後者のグループの特徴は、前世で布施を行っていることである。

SGK 53 (= SMRAM 21.128) grāmakūṭo dadāty eva yo dānaṃ pīḍayaty api / kumbhaṇḍo vikṛtākāraḥ pūjyamānaḥ sa jāyate //	Pāli 60 gāmakūṭo dadāty'eva yo dānaṃ pīḷayaty'api / kumbhaṇḍo vikaṭākāro pūjjamāno sa jāyate //
Tib. 53 gang zhig grong bca ¹⁾ 'bebs ²⁾ shing ster byin zhing ³⁾ gnod par byed pa de grul bum byad ni mi sdug pa mchod par 'os pa ⁴⁾ skye bar 'gyur	Ch-1, 44 恐憎取他財 得已或少施 墮極醜鬼中 他怖獲微祀

SGK 53 a) °kūṭo] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): °kūṭe Lévi: °kūṭau Ms. N Ed. b) dānaṃ] Mus: janaṃ Ms. N Ed. pīḍayaty] Ms. Mus: pīḍayaṃty N: pīḍayanty Ed. d) pūjyamānaḥ sa] Mus, confirmed by Pāli and Tib. (<i>mchod par 'os pa</i>): pūyāhāraś ca Ms. N Ed.
Pāli 60 a) gāmakūṭo] Hazlewood (cf. Mus p. 258): gamakūṭo Feer. d) pūjjamāno] corr. (cf. de Jong p. 236): pūjamāno Feer sa] Piromanukul: so Feer (metre!).
Tib. 53 1) bca'] GNP: bcas DHOQ. 2) 'bebs] DHOQ: 'beb GNP. 3) zhing] DHOQ: zhig GNP. 4) 'os pa] HOQ: 'os par DGNP. Note: <i>bca'</i> 'bebs means "to lay the (bad) law" or "to impose (heavy) tax (on village)"?

Ch-2 或入聚落處 見彼遺棄食 嘔吐涎唾等 而恒為美饌 自行慳障礙 離間他行施 為鬼恭榮茶 453c21-24
Cf. Ch-3 若為聚落主 逼取他財施 死作鳩槃荼 飲食常隨意 448a17-19
Cf. Ch-4 生為隘陬長 侵人以行患 為鬼形醜大 所欲終不得 521b21-22
Cf. Ch-5 又知宰官之人，枉濫人民，不順治法而取財物，以用布施，墮鬼神中，作鳩槃荼鬼，能種種變化，五塵自娛。 T 25 152c20-22

[SGK 訳] 53 村のかしらとして、[自ら] 布施を与えるが、[村人たちを] 圧迫した(横暴に苦しめた)者は、[後世に] 醜い姿をしながら尊重される、クンバーンダ(鳩槃荼鬼)に生まれる。

Note 53 クンバーンダに生まれる業報を説く本偈の pāda ab では、Ch-5『大智度論』の記事(本論文の第1部8節の(4)の文)、ならびに次の3経の文を参照して、私は「村主として布施を与えるが、[村人たちを横暴に] 苦しめた者」と解釈した。(1)『餓鬼報應經』(No. 746)：「一鬼問言。我受此身。腹大如甕。餘身分皆小。咽如細針孔。不得下食。何罪所致。答言。汝為人時。作聚落主。自恃豪強。欺人民。常以無道。索人飲食。以苦百姓。今受花報果在地獄」(T 17 561b16-20)。(2)『仏説雜藏經』(No. 745)に同じ内容の記事がある：「復有一鬼。白目連言。大德我腹極大如甕。咽喉手脚。甚細如針。不得飲食。何因緣故。受如此苦。目連答言。汝前世時。作聚落主。自恃豪貴。飲酒縱橫。輕欺餘人。奪其飲食。飢困衆生。由是因緣。受如此罪。此是華報。地獄苦果。方在後也」(T 17 557c15-20)。(3)同様に『鬼問目連經』(No. 734)：「一鬼問言。我一生已來。腹大如甕。咽細如針孔。不得下食。何罪所致。目連答言。汝為人時。作聚落主。自恃豪強。輕欺百姓。強打拍人。索好美食。今受花報果入地獄」(T 17 535c2-5)。—なおクンバーンダ(本来は「瓶の如き形の擲丸をもつ者」の意味か?)という名の鬼についてはDBI, vol. 6, s.v. kumbhāṇḍa, pp. 1756-1757; 『密教大辞典』(法蔵館、縮刷版、1983年)の「鳩槃荼」348頁; 中村大辞典「鳩槃荼」272bを参照。Dīgha Nikāya の Mahāsamayasutta (II, p. 257)によればクンバーンダたちの指導者は増長天である。

SGK 54 (= SMRAM 21.129) nirdayāḥ prāṇino ghnanti bhakṣyārthaṃ ye dadaty api / bhakṣyabhojyāni te 'vaśyaṃ labhanti pretya rākṣasāḥ //	Pāli 61 niddayo pāṇino hantvā bhakkhituṃ yo dadāti ca / khajjabhojjāni so 'vassaṃ labhate pecca rakkhaso //
--	---

Tib. 54 zas kyi ched du brtse med pas srog chags bsad cing sbyin byed ¹⁾ gang de dag shi ²⁾ nas nges par ni srin po'i ³⁾ bza' dang bca' bar 'gyur	Ch-1, 45 若人多謙樂 廣殺諸物命 自食復與他 後墮羅刹鬼
--	--

SGK 54 b) dadaty] Mus: dadanty Ms. N Ed. c) bhakṣyabhojyāni] Mus., confirmed by Tib. (<i>bza' dang bca' bar 'gyur</i>) and Pāli (<i>khajjabhojjanī</i>): māṃsāhārās ca Ms. N Ed. d) labhanti] Mus, confirmed by Ch-3 (得): bhavanti Ms. Ed. pretya] Mus, confirmed by Tib. <i>shi nas</i> (cf. Pāli, pecca): preta Ms. N Ed.
Pāli 61 c) 'vassaṃ] ex coni Hazlewood (cf. Pañca-g 107c, 'vassaṃ): vassa Feer.
Tib. 54 1) byed] GHNOPQ: med D. 2) shi] DGHNOP: gshi Q. 3) srin po'i] DGNP: srin bu'i HOQ.
Ch-2 惡形生膿血 傷殺群生類 自食與他食 墮鬼羅刹娑 453c24-26
Cf. Ch-3 若多殺眾生 以肉為施惠 餘罪作羅刹 常得眾美食 448a19-21
Cf. Ch-4 殺蟲以為餌 鉤生蒙其利 取殺而食之 後世為魅魍 521b25-26
Cf. Ch-5 又知多瞋恨、嗜好酒肉之人而行布施、墮地夜叉鬼中、常得種種歡樂、音樂、飲食。 T 25 152c23-24

[SGK 訳] 54 与える者であっても、食物のために無慈悲に生き物たちを殺したなら、必ず死後に、彼らはラクシャサとして [生まれ]、軟食・硬食を獲得する。

Note 54 この偈はもし pāda cd で *Pāñcālārāja-avadāna* が伝承する読み *māṃsāhārās ca te 'vaśyaṃ bhavanti *pretya rākṣasāḥ* を採用した場合、意味が大きく変わることになる：「必ず死後に、彼らは肉食をするラクシャサになる。」しかしその読みは蔵漢巴によって支持されない。Ch-3 は明らかに *labhanti* の読みを支持する。— なおラクシャサ（羅刹）については DBI, vol. 10, s.v. *rākṣasa*, p. 2796；『密教大辞典』の「羅刹」「羅刹天」2231-2232頁；中村大辞典「羅刹」1402aを参照。

SGK 55 (= SMRAM 21.130) gandhamālāratā nityaṃ mandakrodhāḥ pradāyakāḥ / gandharvāḥ pretya jāyante devānāṃ ratihetavaḥ //	Pāli 62 gandhamālāratā niccaṃ mandakodhā padāyakā / gandhabbā pecca jāyante devānaṃ rativaddhanā //
Tib. 55 rtag tu dri dang phreng la dga' sbyin byed khro ba chung ba ni lha rnam dga' ba'i rgyur 'gyur ba dri za rnam su skye bar 'gyur	Ch-1, 46 於供養香花 或嗅或私取 由起少貪心 後作尋香鬼

SGK 55 a) °mālāratā] Ms. N Ed.: °mālyāratā Mus. d) devānāṃ] Mus Ms. Ed.: devānā N.
Pāli 62 a) gandhamālāratā] Feer: mālāgandharatā Pg-ṭīkā.1-2: mālāgandharalā BNL.1. b) padāyakā] Piromanukul: ca dāyakā Feer BNL.1-2, 5 Pg-ṭīkā.1-2. d) rativaddhanā] Feer: rativaḍhanā Piromanukul.
Tib. 55 —
Ch-2 愛食鬘香秣 雖然施飲食 少分懷瞋恚 墮鬼健闥婆 作樂諸天愛 453c26-28
Cf. Ch-3 微恚少憂惑 常作修布施 香華自嚴身 好作諸伎樂 後作乾闥婆 為天執樂神 448a21-24
Cf. Ch-4 好欲而懈怠 喜以華香施 後為天伎人 遊戲自恣心 521c6-7

〔SGK 訳〕 55 いつも香と花環を愉しみ、あまり怒らず、布施をする者は、死後に神々の快樂の因となる者として、ガンダルヴァに生まれる。

Note 55 「神々の快樂の因となる者」とは、帝釈天等のために音楽を奏でる仕事をなす、という意味であろう。ガンダルヴァ（乾闥婆）は地上の山中に棲む地上神で、時に三十三天に昇って帝釈天に侍して、音楽を奏し、また香を尋ねて食すという。DBI, vol. 4, s.v. gandharva, pp. 1214-1216；『密教大辞典』の「乾闥婆」480頁；中村大辞典「乾闥婆」325b；望月の「乾闥婆神」978-980頁を参照。Dīgha Nikāya の Mahāsamayasutta (II, p. 257) によればガンダルヴァたちの指導者は持国天である。

SGK 56 (= SMRAM 21.131) krodhanaḥ piśunaḥ kaś cid arthārthaṃ yaḥ prayacchati / sa piśācaḥ praduṣṭātmā jāyate vikṛtānaḥ //	Pāli 63 kodhano pisuno koci lobhatthaṃ yo payacchati / piśāco duṭṭhacitto so jāyate vikaṭānāno //
Tib. 56 gang zhig ¹⁾ kha cig phra ma tshe ²⁾ khro zhing dgos pa'i ched sbyin na de ni sha za ma rungs nyid bzhin mi sdug par skye bar 'gyur	Ch-1, 47 若人相崇奉 於已有所求 怒色希彼財 後作猛惡鬼

SGK 56 a) krodhanaḥ] Ms. N Mus: krodhanāḥ Ed. kaś cid] Mus, confirmed by Tib. (<i>kha cig</i>): kiñcid Ms. N Ed. c) piśācaḥ] Mus: piśācaṃ Ms. N Ed.
Pāli 63 —
Tib. 56 1) zhig] D: dag <u>GHNOPQ</u> . 2) tshe] GHNOPQ: che D.
Ch-2 若愛於兩舌 鬪亂行瞋恚 墮鬼畢舍佐 頭面而醜惡 453c29-454a1
Cf. Ch-3 為利而行施 多瞋好兩舌 後作毘舍闍 其身甚醜陋 羣髮而赤眼 利爪長牙齒 448a24-27
Cf. Ch-4 布施望其後 不誠多忿怒 後成白注鬼 顏貌極醜惡 521b27-28

〔SGK 訳〕56 怒りっぽく、誹謗中傷をなし、〔自分の〕利益のために布施をする者は、誰でも、邪惡な心をもち顔が醜異であるピシャーチャ（食肉鬼）に生まれる。

Note 56 ピシャーチャは屍肉を食らう惡鬼。それについては DBI, vol. 9, s.v. piśāca, pp. 2632-2635; 『密教大辞典』の「毘舍遮」1849頁; 中村大辞典「ピシャーチャ」1119dを参照。— 本偈では piśunaḥ (誹謗中傷をなす人) という語と関連づけて piśācaḥ という鬼種の名を説明する。

SGK 57 (= SMRAM 21.132) nityapraduṣṭāś capalāḥ parapīḍākarā narāḥ / saṃpradānaratā nityaṃ bhūtāḥ pretya bhavanti te //	Pāli 64 niccappaduṭṭhā capalā parapīḷākarā narā / saṃpadānaratā niccaṃ bhūtā pecca bhavanti te //
Tib. 57 rtag tu rab sdang rtabs bag can gzhan la gnod pa byed pa dang rtag tu sbyin la dga' ba ni de dag shi nas 'byung por skye	Ch-1, 48 若人於他娶 常樂作媒伐 後懷惡相離 死作步多鬼

SGK 57 a) nityapraduṣṭāś] Ms. N Ed. (cf. Pāli <i>niccappaduṭṭhā</i>): nityaṃ praduṣṭāś Mus. — This pāda a is Ra-bha Vipulā.
Pāli 64 b) °pīḷākarā] corr. Hazlewood: °pīḷakarā Feer.
Tib. 57 —
Ch-2 雖愛行檀施 而恒苦惱人 墮彼惡趣中 為彼母馱鬼 454a2-3
Cf. Ch-3 逼他取財物 而以廣行施 性樂心輕躁 生為負多鬼 448a27-29

〔SGK 訳〕 57 常に邪悪で、心落ち着かず、他者を悩害するが、いつも布施することを喜ぶ人々は、死んでブータになる。

Note 57 ブータ（化け物）については『密教大辞典』の「部多」1926頁、また斎藤昭俊（1984）：『インドの民俗宗教』、吉川弘文館、175-178頁を参照。— 本偈の記述から、ブータは落ちつきなくうろろうして（capala）、常に悪心をもって人間に害を与える、危険な存在というイメージを持たれていることがわかる。

SGK 58 (= SMRAM 21.133) krūrāḥ kruddhāḥ pradātāraḥ priyāsavasurāś ca ye / jāyante pretya yakṣāś te krūrātmānaḥ surāpriyāḥ //	Pāli 65 ghorā kuddhā padātāro piyāsavasurā ca ye / jāyante pecca yakkhā te ghorācārā surāpiyā //
--	--

Tib. 58 ma rungs¹⁾ khro zhing sbyin byed la chang zhim dag la dga' ba'i mi shi nas gnod sbyin ma rungs pa chang la dga' ba rnams su skye	Ch-1, 49 若人樂飲酒 過量復顛酗 或持勸他人 後作藥叉鬼
--	---

SGK 58 a) kruddhāḥ] Ms. Mus: krūddhāḥ N Ed. b) priyāsavasurāś] Ms. N Mus: priyā sarvasurāś Ed. c) yakṣās te] Mus: yakṣās tu Ms. N Ed.
Pāli 65 d) ghorācārā] m.1 m.2 (i.e. "les mss. de Phnom Penh", cf. Mus p. 259): ghorāhārā Feer.
Tib. 58 1) rungs] DHOQ: rung GNP.
Ch-2 自行猛利殺 教他猛利殺 墮彼藥叉身 亦復惡猛利 454a4-5
Cf. Ch-3 多瞋性難滿 好樂修布施 嗜酒喜歌舞 後生作地神 448a29-b2
Cf. Ch-4 既以恚且貪 好施而嗜酒 喜於鼓樂舞 死為守地神 521b29-c1

〔SGK 訳〕 58 布施をするが、残忍で、激しく怒り、アーサヴァ酒やスラー酒を愛するならば、死後に、残忍な心もちスラー酒を好むヤクシャに生まれる。

Note 58 ヤクシャ（夜叉、薬叉）はアショーカ王以前は地上神の一種と見なされたが、時代を経て恐ろしく危険な存在と見なされた。神に近い存在と、鬼に近い存在という相異なる二つの表象をもつために、前者の性格をもつヤクシャは次の59偈のような天宮に居る種類になった。ヤクシャを Ch-4 が「守地神」と訳し、Ch-3 が「地神」と訳しているのは、神としての表象が残っている証拠であって興味深い。ヤクシャについては DBI, vol. 15, s.v. yakṣa, pp. 4422-4425；『密教大辞典』の「夜叉」2181頁；望月の「夜叉」4895-4896頁を参照。また中村元(1994)：『原始仏教の思想Ⅱ』（選集46巻）、春秋社、632-652頁を参照。中村の同書652頁、註67によれば、ブッダゴーサはヤクシャをピシャーチャと同義に解する。— 『マヌ法典』11.96によれば、スラー酒・アーサヴァ酒は、ヤクシャ・ラクシャス（羅刹）・ピシャーチャの飲物である。本偈はこの『マヌ法典』の説明によく合致する。

SGK 59 (= SMRAM 21.134) mātāpitṛgurūn yānair ye nayanti yathepsitam / vimānacāriṇo yakṣā jāyante te sukhānvitāḥ //	Pāli 66 ye nayantīdha yānehi mātāpitugurujane / vimānacārino yakkhā te honti sukhasaṃyutā //
Tib. 59 gang dag pha ma bla ma rnam ji ltar 'dod par ¹⁾ bzhon pas ²⁾ 'degs de dag gzhal med khang rgyu ba'i gnod sbyin bde dang ³⁾ ldan par skye	Ch-1, 50 於父母師長 所欲相違背 後生藥叉宮 勇健多卒暴

SGK 59 d) te sukhānvitāḥ] Mus., confirmed by Tib.: susukhānvitāḥ Ms. N Ed.
Pāli 66 d) saṃyutā] Mus p. 259 (<i>metri causa</i> for saṃyuttā): saṃyuttā M.1 Feer.
Tib. 59 1) par] GNP: pas HOQ: pa'i D. 2) bzhon pas] GNP: bzhon par D: bzhon pa HOQ. 3) bde dang] HOQ: bde ba DGNP.
Ch-2 父母師長等 所欲多違背 墮彼藥叉宮 勇健行暴惡 454a6-7
Cf. Ch-3 興乘獻父母 給施親善人 稟性多慳悋 生作遊空神 448b2-4
Cf. Ch-4 於家內外親 無惡亦無嫉 後為有力神 乘雲風而行 521c2-3
Cf. Ch-5 又知有人剛愎強梁而能布施，車馬代步，墮虛空夜叉中而有大力，所至如風。 T 25 152c24-26 又知有人妬心好靜，而能以好房舍、臥具、衣服、飲食布施，故生宮觀飛行夜叉中，有種種娛樂便身之物。 152c26-28

[SGK 訳] 59 車で父母や師長たちを望まれた通りに運んであげる者たちは、[死後に] 安樂を具えて、天車（天宮）で[空を] 移動するヤクシャに生まれる。

Note 59 SGK の本偈は虚空を飛ぶ、天車（天宮）を有するヤクシャを 1 偈で表現するが、Ch-5 『大智度論』の記事（本論文第 1 部 8 節の (6) (7) を参照）、ならびに『分別業報略経』（448b2-6）『分別善惡所起経』（521c2-5）では、虚空を飛ぶヤクシャと天車に載るヤクシャを別々に扱い、異なる種類として、二つの偈に分けて表現している。

SGK 60 (= SMRAM 21.135) tr̥ṣṇāmātsaryadoṣeṇa pretya pretā bhavanty amī / yakṣādayaḥ śubhaiḥ kliṣṭair atas tān parivarjayet // pretakāṇḍaṃ samāptam	Pāli 67 taṇhāmaccheradosena pecca petā subhehi tu / yakkhādāyo kiliṭṭhehi tasmā taṃ parivajjaye //
Tib. 60 sred dang¹⁾ ser sna'i skyon gyis ni shi nas yi dags skye bar 'gyur ²⁾ nyon mongs can dges³⁾ gnod sbyin sogs de phyir de ni spang bar⁴⁾ bya yi dags kyi rabs rdzogs so	Ch-1, 51 彼慳貪過失 常生餓鬼中 苦樂隨自因 是故勿復造 餓鬼趣竟

SGK 60 b) pretya pretā bhavanty amī] Ms. Mus: pretā bhavanty amī sadā N Ed. d) atas tān] Ms. N Ed.: atas tat Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): Lévi atas tan. pretakāṇḍaṃ] Mus: iti pretakāṇḍaṃ Ms. N Ed.
Pāli 67 b) petā subhehi tu] corr. Hazlewood: petā 'subhehi tu Mus, p. 260: petāsubhehi tu(m)Feer.
Tib. 60 1) sred dang] DGNP: sred pa HOQ. 2) GNP lack the pāda c (yon mongs ~ sogs). 3) dges] D: dag HOQ. 4) spang bar] GHNOPQ: spab bar D.
Ch-2 慳貪瞋果報 餓鬼藥叉等 苦樂隨自因 諸惡不須作 餓鬼品頌竟 454a8-10

[SGK 訳] 60 渴愛・慳貪の過罪により、死後にそれらの者たちは餓鬼になる。また染汚ある善業により、[死後に] ヤクシャなどになる。それ故、それら[の行為]を避けるべきである。『餓鬼の節』終わる。

Note 60 この『餓鬼の節』において、「妖怪的なグループ」としてのクンバーンダや羅刹やガンダルヴァやピシャーチャやブータやヤクシャなどの、地上に棲む様々な超自然的な存在は、「本来的な餓鬼類のグループ」とはやや性格が異なるものの、「餓鬼界」の分類に入れられている。これは『大毘婆沙論』巻第一百七十二にある「諸の地上に依りて住する神の、クンバーンダ・ヤクシャ・ラークシャサ・カタブータナの如きは、皆餓鬼道（鬼趣）に摂せられる」という見解（T27 869a22-24）とほぼ合致している。ただしピシャーチャ（畢舍遮）は、『大毘婆沙論』のそ

の文によれば餓鬼道でなく畜生道（傍生趣）に属する存在である。— SGK の本偈は、餓鬼に生まれる業とヤクシャ等に生まれる業の違いを説明する。本偈が「染汚された善業による」（*subhaiḥ kliṣṭaiḥ*）存在と見なすのは、「妖怪的なグループ」である神通力をもつ魔身の鬼たちである。それらの様々な魔的な種族が悪業を有しつつも、人間を超えた力をもつわけとして、前世で常に布施をしたという理由づけがされている。鬼や魔たちを分類する場合、自在力を多くもつ場合は餓鬼道、わずかしかもたない場合は畜生道に入れるしか、選択肢がない。阿修羅については、五道の天界か、もしくは餓鬼道に入れるのが『大毘婆沙論』巻百七十二や『雜阿毘曇心論』などの見解であるが、新しい時代の意見を代表する『正法念處經』巻十八では、阿修羅を二種に分けて、魔身餓鬼と阿修羅に分け、前者は餓鬼道、後者は畜生道の所摂とする（T 17 107a12-15）。実際に『正法念處經』では実に詳細な阿修羅の説明を畜生品で行っている。

SGK 61 (= SMRAM 21.136) devāsuraṃaṇuṣyeṣu dīrgham āyur ahiṃsayā / jāyate hiṃsayālpāyur ato hiṃsāṃ vivarjayet //	Pāli 70 devāsuraṃanussesu dīgham-āyu ahiṃsako / hiṃsā appāyuko hoti tato hiṃsaṃ vivajjaye //
Tib. 61 mi 'tshe ba yis ¹⁾ lha dang mi ²⁾ lha min rnam su ³⁾ tshe ring 'gyur 'tshe bas thung ngur skye bar 'gyur de phyir 'tshe ba rnam ⁴⁾ par spang ⁵⁾	Ch-1, 56 彼人趣壽命 分量本長遠 多造殺生因 由此而減少

SGK 61 c) hiṃsayālpāyur] Mus.: hiṃsayā svalpam Ms.: hinsayā svalpām N Ed.
Pāli 70 b) dīgham-āyu ahiṃsako] corr. ⇐ digham-āyu ahiṃsako B M.2 (Mus p. 179): hiṃsāyappāyuko naro M.1 Feer. c) hiṃsā appāyuko hoti] B M.2: dīghāyuko tv'ahiṃsāya M.1 Feer. d) tato] B M.2: tasmā M.1 Feer hiṃsaṃ] B M.1 M.2: hiṃsā Feer vivajjaye] M.1 Feer: kāraye B M.2.
Tib. 61 1) yis] HOQ: yi DGNP. 2) mi] DGNOPQ: ni H. 3) rnam su] DGONPQ: rnam su H. 4) rnam par] DHONPQ: rnam phar G. 5) spang] GNP: spangs DHOQ.

Ch-2	天及修羅人	福壽有差等	樂求生天者	堅持八齋戒	快樂壽命長	
	遠離疾病苦	於禁若破犯	少分樂生天	而墮於修羅	部多為眷屬	454a11-15
Cf. Ch-3	天人阿修羅	欲求長壽者	不害生為本	慧者應當知		448b10-12
Cf. Ch-4	天人阿須羅	欲求長壽者	內意當自省	無害一切生		521c12-13

〔SGK 訳〕 61 不殺生（アヒンサー）により、天界・阿修羅界・人界において長い寿命がある。殺生によって、短い寿命をもつ者として生じる。それ故、殺生を避けるべきである。

Note 61 この61偈から『人間の節』が始まる。生類の業を説明する時に、十(不)善業道の項目に従って説明するのがアビダルマ論書と業報經典の一般的な伝統なので、この『人間の節』も、最初は殺生・不殺生の業の説明から始まる。十不善業道の第一の、殺生の業について、梵文 *Karmavibhaṅga* (= Lévi's *Mahākarmavibhaṅga*) における説明は Lévi (1932), p. 78 (LII); Kudo (2004), p. 173 を参照。また五戒の一の殺生の業についての *Upāsakajānāṃkāra* の説明は浪花 (1987), 265-266頁を参照（そこでは21の業果が説明されている）。— なお梵文 *Karmavibhaṅga* は第1～14節において、短寿・長寿、多病・無病、端正・不端正、権勢・無権勢、有財・無財、貴族・卑俗、有智・無智という7種の観点から、それらの果報をもたらす業について説いているが、工藤 (2008) p. 344 の説明によれば、それら7種の観点を業報の説明は「鸚鵡經類」（MN 135 經 *Cullakammavibhaṅgasutta* に代表される經類）として分類される11種の經に共通して見られるものである。SGK の「人間の節」の業果の説明も、それらの「鸚鵡經類」の經の伝統を受け継いで作られており、SGK では短寿・長寿は61偈、多病・無病は62偈、端正・不端正は68偈や90偈、権勢・無権勢は72偈や86偈や89偈、有財・無財は63～66偈、貴族・卑俗は90偈、有智・無智は73偈や92偈で、その業果が説明される。工藤は「鸚鵡經類」を分類して、未発達の第一類（五つのテキスト）と、発達した第二類（六つのテキスト）に大別する。私が思うに、SGK は「鸚鵡經類」が第一類から第二類へ発達してゆくその途中の段階（第二類の基本的な項目が形成された頃）において、その発展の影響を受けた可能性があるのではないだろうか。SGK は「鸚鵡經類」の第一類よりは遥かに多く業の観点を増やしているが、しかし第二類の最終形ほどに多くの観点数をもたないテキストである。「鸚鵡經類」が第二類に発展しつつあった事と、SGK のテキストの成立とはある程度パラレルな現象であり、SGK の成立はその第二類の基本的項目が出来て更に増広されつつあった時代に位置づけられるのではないか。「鸚鵡經類」の第二類と SGK の内容の間のかなりの共通性はそれによって説明できる。

SGK 62 (= SMRAM 21.137) kuṣṭhakṣayajvaronmādā ye cānye vyādhayo nṛṇām / bhavanti kṛtair bhūteṣu vadžabandhanatāḍanaiḥ //	Pāli 71 kuṭṭhakkhayajjarummādā ye caññe rogā pāṇinaṃ / vadhatālanabandhehi honti katehi jantusu //
Tib. 62 mdze dang smon pa zad byed rims ¹⁾ mi nad gzhan yang gang dag yin 'byung po rnam la bsad ²⁾ dang bcings ³⁾ brdeg ⁴⁾ par byas pa rnam kyis 'byung	Ch-1, 57 縈纏諸病苦 癰瘦時疫等 為鬼魅所著 及王法捶打

SGK 62 a) kuṣṭhakṣayajva°] Mus, confirmed by Tib. und Pāli: kuṣṭharogajva° Ms. N Ed. c) kṛtair bhūteṣu] Mus., confirmed by Tib.: bhūtaprayuktais te Ms. (hypermetre!); bhūtaprayuktes te N Ed. — Note. The reading <i>bhūtaprayuktais</i> seems to correspond to 鬼魅所著 of Ch-1.
Pāli 71 b) ye caññe] Pg-ṭīkā.1-2: ye[ca]ññe Feer: caññe MV.1-2. d) honti katehi] BNL.3-4: honti katesu Piromanukul: honti ha tesu Feer: hontīha tesu Hazlewood (corr.).
Tib. 62 1) rims] GHNOPQ: mi D. 2) bsad] DHOQ: gsad GNP. 3) bcings] D: bcing GHNOPQ. 4) brdeg] DGHNOP: brteg Q.
Ch-2 —
Cf. Ch-3 於諸群生類 不捶打繫縛 由斯不惱業 所生常無病 448b14-16
Cf. Ch-4 若以不施勞 不縛捶燒彼 恒發安群生 為人則無病 521c14-15

[SGK 訳] 62 レプラ・消耗病（肺結核）・熱病・狂気、その他の疾病に人々が罹るのは、[前世に] 殺害や束縛（監禁）や打擲を生き物たちに行ったことによってである。

Note 62 SGK は 61-62 で殺生・不殺生の業果を説いたので、次の63以下で業道の第二である偷盗・不偷盗の業果を説いている。— なお偷盗・不偷盗の業果についての *Upāsakajanālaṃkāra* における説明は浪花 (1987), 272頁を参照。それぞれ10種の業果があると説く。

SGK 63 (= SMRAM 21.138) yo hi hartā parasvānāṃ na ca kiṃcit prayacchati / mahatāpi prayatnena sa dravyaṃ nādhigacchati //	Pāli 72 hārako yo paratthānaṃ na ca kiñci payacchati / mahatā viriyenāpi dhanam so nādhigacchati //
Tib. 63 gang zhig gzhan gyi nor 'phrog cing ci yang sbyin par mi byed pa de ni 'bad pa chen pos kyang rdzas ni rnyed par mi nus so	Ch-1, 58 若人於財利 勞役廣希求 無少惠施心 後作守財鬼

SGK 63 a) yo hi hartā] Mus, confirmed by Tib. and Pāli: yo na hartā Ms. N Ed., confirmed by Ch-2 (雖不盜他財) and Ch-3 (亦不盜他財). b) na ca kiṃcit] ≡ na ca kiñcit Ms. Mus: na vañcavit Ed.: na vaṃnvavit N.
Pāli 72 —
Tib. 63 —
Ch-2 雖不盜他財 纖毫不行施 悋惜廣慳貪 而為守財鬼 454a16-17
Cf. Ch-3 未曾修布施 亦不盜他財 所生常短乏 多求而少獲 448b16-18
Cf. Ch-4 未嘗有少施 頗受於幾微 然後身極苦 求少得或不 521c18-19

[SGK 訳] 63 他人の財を奪い取り、何一つ〔布施を〕与えなかった者は、大変な努力をしても蓄財をなしえない。

Note 63 梵文 Pāñcālarāja-avadāna 系の写本では yo na hartā 「奪わない」と読むので、その場合は「他人の財を奪うことはしないけれども、何一つ〔布施を〕与えなかった者は……」という文意になる。2本の漢訳（Ch-2『六道伽陀經』と Ch-3『分別業報略經』）には「不」の否定辞があるので、その梵文の読みを支持する。他方、Mus の Lévi 写本では yo hi hartā と否定辞がなく、藏訳とパーリ本もそれを支持するが、その読みに従うなら「奪う」の意味になる。「奪わない」のか「奪う」のか、どちらの読みを採るべきか。この1偈のみを取り上げるなら、「奪わない」の文意でもよさそうだが、後続の偈との関係から「奪う」と読むのがよい。そう読めば 63～66 の4偈は四句分別（catuṣkoṭika）になり、〈盗む＋与えない〉は63偈、〈盗む＋与える〉は64偈、〈盗まない＋与えない〉は65偈、〈盗まない＋与える〉は66偈である。もし63偈で「奪わない」と読むなら、65偈と内容が重なることになって、四句分別は成立しない。SGK に対応して Ch-3『分別業報略經』も、この 63～66 偈に相当する4偈（448b16-24）は四句分別の形式になっ

ているはずである。しかしその四句分別の第1偈の、63偈相当の偈（448b16-18）で、漢訳の「亦不盜他財」の句に「不」の否定辞があるので、それを「亦*常(?)盜他財」と修正して、否定文を肯定文にしなければ、四句分別の形式が成立しない。その句を磧砂版で確認したが、そこに異読はない。これは僧伽跋摩の翻訳ミスというより、彼の用いた梵本がすでに *yo na hartā* という誤った読みになっていたのであろう。Ch-2『六道伽陀經』も同様に、63偈相当の偈（454a16-17）の「雖不盜他財」の句に「不」の否定辞があり、否定を肯定にする必要があるが、そもそもこの經の場合は64偈に相当する漢訳が抜けているので、それだけでもはや四句分別が成立しえない。インドでは早い時期からこの63～66の4偈が四句分別であるということが忘失されて、この偈に否定辞が入り込んでいたのであろう。SGK で不意に出てくるこの四句分別の形式は、梵文 *Karmavibhaṅga* などの「鸚鵡經類」の第二類にも見られるものであり、両者には或る程度の繋がりがあことを示唆する。「鸚鵡經類」の第二類に見られる四句分別については工藤(2008)を参照。

SGK 64 (= SMRAM 21.139) adattam vittam ādāya dānāni ca dadāti yaḥ / sa pretya dravyavān bhūtvā bhūyo bhavati nirdhanaḥ //	Pāli 73 adinnaṃ *vittam ādāya dānāni ca dadāti yo / so pecca dhanavā hutvā puna jāyati niddhano //
Tib. 64 gang zhig rdzas ni ma byin par len cing ¹⁾ sbyin pa sbyin byed pa de ni rdzas dang ldan gyur la phyis ²⁾ nas de ni med par 'gyur	Ch-1, 59 若人盜他財 用已或能施 後墮鬼趣中 隨得隨散失

SGK 64 a) vittam] Mus Ms. Ed.: vitam N.
Pāli 73 a) *vittam] ex conī: cittam BNL.4-5: vattam MV.1: dhanam Feer. d) niddhano] corr. Hazlewood: nidhano Feer.
Tib. 64 1) cing] GHNOPQ: pa D. 2) phyis] DGNP: phyi HOQ.
Ch-2 —
Cf. Ch-3 能廣行布施 而復奪他物 所生常得財 隨得尋復失 448b18-20
Cf. Ch-4 好取他人財 而以為惠施 後雖得財富 猶速亡失之 521c20-21

〔SGK 訳〕 64 譲ったものではない〔他人の〕財を盗み取り、布施を与えるなら、死後に〔人は〕金持ちになってから、さらに財無き者となる。

Note 64 この偈は、人生の前半では幸福であるが後半で不幸になる場合の業因の説明と見なすことも出来る。そうであれば、梵文 *Karmavibhaṅga* にそれにあたる説明がある。Lévi (1932), p. 65 (XXXIII); Kudo (2004), pp. 128-129 を参照。梵文 *Karmavibhaṅga* を含む「鸚鵡經類」第二類の諸テクストでは、「前半は幸福、後半は不幸となる業」「前半は不幸、後半は幸福となる業」「前半にも後半にも幸福になる業」「前半にも後半にも不幸になる業」という四句分別や、「裕福であるが物惜しりする業」「貧乏であるが喜捨を好む業」「貧乏であって物惜しりする業」「裕福であって喜捨を好む業」という四句分別などのケースを説く。工藤 (2008) の370-372頁の表を参照。— なお人が金持ちになった後突然に貧乏になったりする、一回の人生の中に起こる浮き沈みは、業報の「不相殺性」のルールで説明できる。業の「不相殺性」の説明については平岡聡 (2016): 『〈業〉とは何か―行為と道德の仏教思想史』、筑摩選書、108-116頁を参照のこと。

SGK 65 (= SMRAM 21.140) yo na hartā na dātā ca na cātikṛpaṇo naraḥ / kṛcchreṇa mahatā dravyaṃ sthiraṃ sa labhate dhruvam //	Pāli 74 na hārako na dātā yo na h'atikapaṇo jano / kicchena mahatā dabbam thiraṃ so labhate dhuvam //
Tib. 65 l mi gang mi 'phrog ¹⁾ sbyin mi byed l l ha cang 'jungs pa ma yin pa l l de dag tshogs ni chen po yis l l nges par rdzas ni brtan ²⁾ pa thob l	Ch-1, 60 若人於己財 隨分而行施 當獲於富饒 不為他侵損

SGK 65 c) kṛcchreṇa] Mus, confirmed by Pāli (<i>kicchena</i>): kṛtsnena Ms. N Ed., confirmed by Tib. (<i>tshogs</i>).
Pāli 74 b) h'atikapaṇo] Feer: pādhikapaṇo BNL.1-2: hādhikapaṇo Piromanukul.
Tib. 65 1) 'phrog] GHNOPQ: 'phrogs D. 2) brtan] GHNOPQ: brten D.
Ch-2 不盜亦不施 不慳亦不貪 決定得人身 衣食多辛苦 454a18-19
Cf. Ch-3 常不盜他物 時復行少施 方便獲財利 所得恒不失 448b20-22

〔SGK 訳〕 65 甚だしい吝嗇ではない人が、〔他人から〕奪い取らないが、与えもしなかった場合は、必ずや大変な苦勞をもって (kṛcchreṇa) 〔細く長く〕持続する財産を得る。

Note 65 「甚だしい吝嗇ではない人」という条件が付けられているので、「与えもしなかった」とは、全く与えなかったのではなく、喜んで与えなかった、という意味であろう。布施に興味がなく、消極的にしか与えなかった場合の業果であり、それ故、ずっと貧しいままであるが、細く持続する財を得る。

SGK 66 (= SMRAM 21.141) yo na hartā parasvānām tyāgavān vītamatsaraḥ / ahāryam vipulam vittam iṣṭam sa labhate naraḥ //	Pāli 75 hārako na paratthānam cāgavā vītamaccharo / ahāriyam *bahum vittam iṭṭham so labhate naro //
Tib. 66 gang zhig gzhan gyi nor mi 'phrogs ¹⁾ gtong dang ldan zhing ser sna spangs mi de rdzas ni mi 'phrog ²⁾ pa rgya chen yid du 'ong ba 'thob ³⁾	Ch-1, 61 若人以淨財 離慳廣行施 得上妙飲食 所欲皆如意

SGK 66 a) yo na hartā] Mus: na hartā yaḥ Ms. N Ed. c) vittam] Mus Ms. Ed.: citam N.
Pāli 75 c) *bahum] ex conī: bahu Feer (metre!). d) iṭṭham] MV.1-2: iddham M.1 Feer.
Tib. 66 1) 'phrogs] DP: 'phrog GHNOQ. 2) 'phrog] GNP: 'phrogs DHOQ. 3) 'thob] GNP: thob DHOQ.
Ch-2 不盜不貪瞋 守分而安住 454a20
Cf. Ch-3 常不盜他物 兼復廣行施 所生輒大富 得財常不失 448b22-24
Cf. Ch-4 既不取彼物 常自樂布施 累世有財富 得利甚弘廣 521c24-25

〔SGK 訳〕 66 他人の財を奪うことなく、物惜しみなく布施をなした人は、奪われることがない、望んだとおりの大きな財産を得る。

SGK 67 (= SMRAM 21.142) āyurvarṇabalopetaḥ śrīmān rogavivarjitaḥ / sukhī ca sa bhaven nityaṃ yo dadātīha bhojanam //	Pāli 76 āyuvaṇṇabalopeto dhīmā rogavivajjito / sukhī pajāyate niccaṃ yo dadātīha bhojanam //
Tib. 67 gang zhig 'di la zas ¹⁾ sbyin pa tshe dang mdog dang stobs ldan zhing dpal dang ldan zhing nad spangs pa rtag par bde dang ldan par 'gyur	Ch-1, 62 若人以珍饌 淨心而奉施 其所得福報 色力命安隱

SGK 67 c) ca sa] Ms. N Ed.: sa Mus (metre!) bhaven] Lévi, confirmed by pāda d of Tib.: jāyate Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): bhalen Ms.: labhen N Ed.
Pāli 76 a) °balopeto] Pg-ṭīkā.1-2: °balupeto Feer (metre!). d) dadātīha] corr. Hazlewood: dadāti ha Feer.
Tib. 67 1) zas] GHNOPQ: rdzas D.
Ch-2 美味施聖賢 彼得生人世 壽命具色力 吉祥而無病 454a21-22
Cf. Ch-3 若以飲食施 長壽好色力 辯慧多財寶 無病心安樂 448c1-3
Cf. Ch-4 好施飯食者 後生得命色 有力辯達富 無病常安隱 522a1-2
Cf. Ch-5 復次、布施飲食得力、色、命、樂、贍。 T 25 153a1

[SGK 訳] 67 この世で食物を布施する人は、[後に] 長寿・美貌・力をそなえ、榮譽あり、病に罹らず、いつも幸せな者になるだろう。

Note 67 本偈以降、67偈から77偈までは、具体的に何を布施した時に、どのような果があるかを SGK は説明する。このような具体的な布施の物品ごとの業報の説明は、梵文 *Karmavibhaṅga* の 64節～76節でも見られる。Lévi (1932), pp. 85 ff.; Kudo (2004), pp. 182 ff. を参照。梵文 *Karmavibhaṅga* や『分別善惡報應經』を含む「鸚鵡經類」の第二類では、衣服・履き物・食物・乗物・住居・飲物・灯明・音曲などを布施した場合のそれぞれの功德を述べるが、SGK の67偈から77偈までの布施物の業果の説明は、「鸚鵡經類」の第二類のそれらの説明とつながりがあると考えられる。それらの説明を一覧するには工藤 (2008) の370-372頁の表が便利である。

SGK 68 (= SMRAM 21.143) salajjo rūpavān bhogī succhāyaḥ prāṇinām priyaḥ / sa bhaved vastralābhī ca yo vastrāṇi prayacchati //	Pāli 77 salajjo rūpavā hoti succhāyo janatāpiyo / so bhave vatthalābhī ca yo vatthāni payacchati //
Tib. 68 gang zhig gos ni sbyin byed pa 'dzem ¹⁾ bcas gzugs bzang longs ²⁾ spyod ldan byin can srog chags rnams la sdug gos rnams kyang ni rnyed par 'gyur	Ch-1, 63 若人以衣施 彼得生愛樂 獲色相端嚴 具慚愧衣服

SGK 68 d) vastrāṇi] Mus: vāsāṃsi Ms. N Ed. (also possible).
Pāli 77 b) suchāyo] corr. Hazlewood (cf. Mus p. 265): suchāyo Feer. c) °lābhī] corr. Hazlewood Piromanukul: °labhī Feer.
Tib. 68 1) 'dzem] DGHOPQ: 'dzems N. 2) longs] DGNOPQ: long H.
Ch-2 恒時行施食 淨信具慚愧 得富貴端嚴 廣饒資畜等 454a23-24
Cf. Ch-3 施衣得慚愧 神儀高勝尊 人相悉具足 覩者莫不欣 其身常安隱 心適恒喜歡 448c3-6
Cf. Ch-4 好施衣被者 失慚好容色 心善人樂見 快樂得所欲 522a3-4
Cf. Ch-5 若布施衣服，得生知慚愧，威德端正，身心安樂 T 25 153a2

〔SGK 訳〕 68 衣を布施するならば、〔後に〕羞恥心をそなえ、見目良く、享樂し、美しく、人々から愛され、衣服を得る者になる。

Note 68 私のSGKの訳ではあちこちの偈で「後に」という語を補って訳したが、多くの場合、それは「死後に」を意味する。SGKは韻律の都合で、「死後に」(pretya)と記したり、記さなかったりする。しかし本文に無いのに、一律に「死後に」という語を補うことを私が避けたわけは、少なくともSGKの『人間の節』における人界の業報においては、死後にその果報があるとは限らず、今世(現法)で後に行為の果報を受けることもありうるからである。『俱舍論』業品(第50頌以下)が説くように、業はその果報を受ける時期によって(1)「順現法受」(dṛṣṭadharma-vedanīya 今世に受けるべきもの)、(2)「順次生受」(upapadya-vedanīya 次世に生まれてから

受けるべきもの)、(3)「順後次受」(aparaparyāya-vedanīya 次世より後の生で受けるべきもの)の三時業(「定業」)、および「不定業」に分けられる。この(1)～(3)の術語は有部に限らず、パーリ上座部でも使用される(例えば *Abhidhammatthasaṅgaha*)。SGK は宿作因論的な考えが特に強い作品であるので、大体は(2)か(3)の「次世に、後世に」の意味で捉えて差し支えないであろうが、一応は(1)のケースも含めたかたちで業報の働きを理解すべきである。

SGK 69 (= SMRAM 21.144) āvāsaṃ yo dadātīha suprasannena cetasā / prāsādāḥ sarvakāmās ca jāyante tasya dehinaḥ //	Pāli 78 āvāsaṃ yo dadātīha vip̐pasannena cetasā / pāsādā sabbakāmidhā jāyante tassa dehino //
Tib. 69 gang zhig 'di la rab dga' ba'i sems *kyis ¹⁾ gnas ni sbyin par byed lus can de la khang bzangs ²⁾ ni 'dod pa kun dang ldan par 'gyur	Ch-1, 64 若人造僧坊 歡喜而用施 感宮殿莊嚴 五欲皆具足

SGK 69 a) āvāsaṃ] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): pravāsaṃ Lévi. b) suprasannena] Ms. N Ed.: suprah̐ṣṭena ex coni Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): sa prahr̐ṣṭena Lévi.
Pāli 78 a) dadātīha] M.1 (cf. Mus p. 266): dadāti ha Feer. c) pāsādā] M.1 (cf. Mus p. 266): pasādā Feer.
Tib. 69 1) *kyis] ex coni: kyi DGHNOPQ. 2) bzangs] DGNP: bzang HOQ.
Ch-2 若施田宅等 及造僧伽藍 令彼心歡喜 於自彼身中 一切隨所欲 454a25-27
Cf. Ch-3 施屋得舍宅 宮殿極嚴麗 寶藏悉盈滿 眾具隨所欲 448c7-8
Cf. Ch-4 施與屋舍者 後世所止安 宮館諸所居 事事嚴具足 522a5-6
Cf. Ch-5 若施房舍，則得種種七寶宮觀，自然而有，五欲自娛。 T 25 153a3-4

[SGK 訳] 69 この世でもし淨い喜びの心をもって住居を布施するなら、[後に] その人にはいくつもの豪邸と一切の欲するもの(欲樂)が生じる。

Note 69 この因果の説明には prasāda (豪邸) と prasanna (淨い喜びの) との言葉遊びがある。このような因と果の間の言葉遊びは SGK であちこちに見られる。例えば55偈の gandhamālā- と gandharva や、56偈の piṣuna と piṣāca や、95偈の parigraha と graha の語のように。 — 作品のあちこちに言葉遊びが散在することによって、SGK が一人の詩人の手によって創造された作品であり、決して他の聖典から偈が抜かれて出来たような性格の作品ではないことがわかる。

SGK 70 (= SMRAM 21.145) upānatsaṃkramādīni ye prayacchanti mānavāḥ / bhavanti sukhino nityaṃ yānāni ca labhanti te //	Pāli 79 upānaṃsaṃkamādīni ye payacchanti mānavā / bhavanti sukhino niccaṃ labhante yānam uttamaṃ //
Tib. 70 mi gang lham dang zam pa la ¹⁾ sogs pa sbyin ²⁾ par byed pa de rtag tu bde dang ldan pa dang bzhon pa dag kyang rnyed par 'gyur	Ch-1, 65 若人建橋梁 及車乘等施 得最上安隱 珍寶之輦輿

SGK 70 —
Pāli 79 a) upānaṃsaṃkamādīni] B (cf. Mus p. 268): upāhanasaṃkamādīni M.2 (hypermetre!): saṅkamopāhanādīni Feer M.1.
Tib. 70 1) la] DGNP: las HOQ. 2) sbyin] DGHNO: byin PQ.
Ch-2 若施於鞋履 供養佛僧等 遊行得安樂 常獲車騎乘 454a27-29
Cf. Ch-3 橋船濟未渡 履屣施徒跣 常得象馬車 是則人中天 448c11-12
Cf. Ch-4 今世好布施 履屣船車橋 象馬亦諸乘 後世得天乘 522a9-10
Cf. Ch-5 若施橋船及諸履屣 生有種種車馬具足。 T 25 153a5-6

[SGK 訳] 70 履き物や橋などを布施した人々は、[後に] いつも快適であり、種々の乗物を得る。

Note 70 履き物や乗物を布施した者の功德については、梵文 *Karmavibhaṅga* の中の *Devatāsūtra* の引用文にも語られるが、その文の調査については工藤 (2014), 493頁を参照。

SGK 71 (= SMRAM 21.146) prapākūpataḍāgādīn kārayitvā jalāśrayān / sukhinas tyaktasamtāpā niṣpipāsā bhavanti te //	Pāli 80 papākūpataḷākādi kārayitvā jalāsaye / sukhino vītasantāpā nippipāsā bhavanti te //
Tib. 71 bsti sa khron pa mtshe'u la sogs rten rnams byed du bcug na ni de dag bde dang ldan pa dang gdung bral skom *dad ¹⁾ med par 'gyur	Ch-1, 66 若人於曠野 施池井泉流 於在所生處 無渴乏熱惱

SGK 71 a) prapākūpa°] Mus Ms., confirmed by Pāli (<i>papākūpa</i> °): vāpīkūpa° Ms.(marg.) N Ed. taḍāgādīn] Mus Ms. Ed.: tagāḍādīn N. c) niṣpipāsā] Mus: niḥpipāsā Ms. N Ed.	
Pāli 80 a) °taḷākādi] BNL.1 MV.1-2: °taḷākāni Feer.	
Tib. 71 1) *dad] ex conī: nad DGHNOPQ.	
Ch-2 若於曠野中 施水作泉井 而復作陰涼 令彼無疲渴 454a29-b2	
Cf. Ch-3 若施井浴池 及與淨水漿 生生無渴乏 所欲常隨意 448c9-10	
Cf. Ch-4 施井設義漿 沐浴蓮華池 後世得不得 所欲一切富 522a7-8	
Cf. Ch-5 若施井池泉水種種好漿，所生則得無飢、無渴，五欲備有。 T 25 153a4-5	

〔SGK 訳〕 71 水飲み場や井戸や池などの給水場を作らせたなら、〔後に〕熱苦をのがれて、快適であり、喉の渇きに苦しめられない。

SGK 72 (= SMRAM 21.147) puṣpair abhyarcitaḥ śrīmāñ charaṇyaḥ sarvadehinām / sadā samṛddhaḥ sa bhaved ārāmaṇ yaḥ prayacchati //	Pāli 81 pupphehi pūjito niccaṃ samiddho sirimā bhava / saraṇaṃ sabbadehināṃ ārāmaṇ yo payacchati //
--	---

Tib. 72 gang zhig kun dga' ra ba 'bul di ni dbur ¹⁾ bkur dpal dang ldan lus can kun gyi skyabs su ²⁾ 'gyur rtag par kun tu 'byor par ³⁾ 'gyur	Ch-1 —
--	-----------

SGK 72 ab) śrīmāñ charaṇyaḥ] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): śrīmāñ śaraṇyaḥ Lévi Ms. N Ed. c) sadā] Mus Ms. N: <i>om.</i> sadā Ed. samṛddhaḥ sa bhaved] Mus (pāda c is Ra-bha Vipulā): samṛddhaḥ sa syād Ms.(ante corr.): samṛddhitaḥ sa syād Ms.(post corr.) N Ed.	
Pāli 81 —	
Tib. 72 1) dbur] HOQ: dbus DGNP. 2) skyabs su] DGOPQ: skyabsu HN. 3) kun tu 'byor par] HOQ: 'byor pa ldan par DGNP.	
Ch-2 當獲於妙花 吉祥廣嚴飾 柔軟身圓滿 454b2-3	
Cf. Ch-3 若以園林施 常獲勝妙果 一切所依蔭 心安無熱惱 眾人所愛樂 眷屬悉具足 448c13-15	
Cf. Ch-4 無怒人愛見 一切所歸仰 後生高長子 其施園樹者 522a11-12	
Cf. Ch-5 若施園林，則得豪尊，為一切依止，受身端政，心樂無憂。 T 25 153a6-7	

[SGK 訳] 72 園林を布施した者は、[後に] 花々で敬意を示され、榮譽をもち、あらゆる人々が帰依し頼りにする人となり、つねに繁栄するだろう。

SGK 73 (= SMRAM 21.148) vidyādānena pāṇḍityaṃ prajñābhyāsenā cāpyate / bhaiṣajyābhayaḍānena rogamuktas tu jāyate //	Pāli 82 vijjādānena paṇḍiccaṃ paññā'bhyāsenā labbhate / bhesajjābhayaḍānena rogamutto tu jāyate //
Tib. 73 rig ¹⁾ pa sbyin dang shes rab la goms ²⁾ pas ³⁾ mkhas pa nyid du 'gyur sman dang mi 'jigs sbyin pa yis ⁴⁾ nad med par ni skye bar 'gyur	Ch-1, 68-69 若人以經教 及世俗文典 能持施於他 感博學大智 若人以醫藥 及以無畏施 彼所得果報 安樂離恐怖

SGK 73	
a) pāṇḍityaṃ] Ms. N Mus: paṇḍityaṃ Ed.	
c) bhaiṣajyābha°] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): bhaiṣajyaṃ bha° Lévi.	
Pāli 82	
b) paññā'bhyāsenā] M.2 (cf. Mus p. 270): paññā vyāsenā M.1: paññā-vyāsenā Feer labbhate]	
M.1 (cf. Mus p. 270): labbhate M.2 Feer.	
Tib. 73	
1) rig] GHNOPQ: rigs D. 2) goms DHOQ: gom GNP.	
3) pas] GHNOPQ: pa D. 4) yis] GHNOPQ: yi D.	
Ch-2 若於傳法人 捨施童子等 後復得為人 聰明多智慧 若施於藥餌 當離一切病 454b4-6	
Cf. Ch-3 若人施醫藥 後生得無病 長壽常安樂 具足色力財 無量百千世 不經疫疾劫 終遇法醫王 永拔生死根 448c16-19	

[SGK 訳] 73 学問を教えることによって、[後に] 高い学識が得られる。反復読誦によって [後に] 智慧が得られる。また薬と安全（無畏）を与えることによって、[後に] 病がない者に生まれる。

SGK 74 (= SMRAM 21.149)	Pāli 83
dīpadānena cakṣuṣmān	cakkhumā dīpadānena
vādyadānena susvaraḥ /	vāḍadānena sussaro /
śayanāsanadānena	sayanāsanadānena
sukhī bhavati mānavaḥ //	sukhaṃ labhati mānava //
Tib. 74	Ch-1, 70-71
l mar me byin ¹⁾ pas mig ldan 'gyur l	若施以燈明 其眼常清淨
l sil snyan byin pas dbyangs snyan 'gyur l	若施以音樂 得其聲美妙
l mal stan dag ni byin pa yis l	若施以臥具 獲安隱快樂
l mi ni ²⁾ bde dang ldan par 'gyur l	若施以僮僕 營從常圍繞

SGK 74 —
Pāli 83
b) vāḍadānena] Feer: vādyāṃ dānena BNL.1-2: taḍadānena BNL.4-5.
Note. vāḍadānena = *vāḍadānena < *vādyadānena (or *vajjadānena) < *vādyadānena.

Tib. 74
1) byin] GHNOPQ: sbyin D. 2) mi ni] HOQ: mi de DGNP.
Ch-2 若施於燈明 眼目長清淨 若施於音樂 口生美妙音 若施臥具等 當感身安樂 454b7-9

〔SGK 訳〕 74 灯明の布施によって〔後に〕人はよい視力をもつ。音楽（あるいは楽器）の布施によって〔後に〕美声をもつ。座臥具の布施によって〔後に〕安楽となる。

Note 74 『マヌ法典』4.229 にも「灯火を与える者は最高の視力を獲得する」とある。

SGK 75 (= SMRAM 21.150) gavādīn yo dadātīha bhojyaṃ kṣīrasamanvitam / balavān varṇavān bhogī dīrghāyuh sa bhaven narah //	Pāli 84 gavādiṃ yo dadātīha bhojjaṃ khīrādisaṃyutaṃ / balavā vaṇṇavā bhogī hoti dīghāyuko ca so //
Tib. 75 gang zhig 'di la ba lang sogs spyad bya'i 'o ma yon tan ldan sbyin byed mi de stobs ldan zhing mdog ldan tshe ring longs spyod ldan	Ch-1, 72 施乳牛等物 得色力壽命 若施以良田 得倉庫盈溢

SGK 75 a) gavādīn] Mus Ms. N: gavādīnn Ed. b) kṣīrasamanvitam] Mus Ms.: rasasamanvitam N Ed.
Pāli 84 a) dadātīha] Mus p. 274: dadāti ha Feer. b) °saṃyutaṃ] corr. Hazlewood (<i>metri causa</i>): °saṃyuttaṃ Feer.
Tib. 75 —
Ch-2 若施傍類食 長壽多色力 454b10

〔SGK 訳〕 75 この世で牛乳（あるいは牛）などを、また乳を入れた食物を施すなら、〔後に〕人は体力あり、容色に恵まれ、〔富財を〕享受し、長生きになる。

SGK 76 (= SMRAM 21.151) kanyādānena kāmānāṃ lābhī syāt parivāravān / dhanadhānyasamṛddhas tu bhūmidānena jāyate //	Pāli 85 kaññādānena kāmānaṃ lābhī ca parivāravā / dhanadhaññasamiddho tu bhūmidānena jāyate //
Tib. 76 bu mo byin pas 'dod rnam s rnyed 'khor rnam dang yang ldan par 'gyur sa gzhi ¹⁾ byin pas nor ldan zhing 'bru rnam 'byor bar ²⁾ skye bar 'gyur	Ch-1, 67 若人以嬖妾 嚴飾而為施 彼所得果報 具欲樂富貴 Cf. Ch-1, 71cd 若施以僮僕 營從常圍繞 72cd 若施以良田 得倉庫盈溢

SGK 76 a) kāmānāṃ] Mus, confirmed by Tib. ('dod rnam s) and Pāli (kāmānaṃ): sammanyānāṃ Ms.: samānyānāṃ N: samānyāṃ Ed.
Pāli 85 b) lābhī] corr. Hazlewood: labhī Feer.
Tib. 76 1) gzhi] DHONPQ: bzhi G. 2) bar] GN: par DP: pa HOQ.
Ch-2 若放女出家 眷屬獲增長 若以田地施 得花菓流泉 454b11-12
Cf. Ch-4 好以奴婢施 加以恭敬意 後得於姓譽 侍使無所乏 522a13-14

[SGK 訳] 76 女子を〔婢として〕布施することによって、〔後に〕従者たちを持ち、感覚的な享楽（欲楽）を獲得するだろう。地所の布施によって、〔後生に〕財や穀物を豊かにそなえた者に生まれる。

Note 76 漢訳『中阿含經』第170『鸚鵡經』に、「沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來・乞者に飲食・衣被・花鬘・塗香・屋舍・床榻・明燈・給使を彼は施與する」（T 1 705c24-25）という文がある。「給使を彼は施與する」の「給使」とは、給侍人・召使いを布施することである。求那跋陀羅訳（実は曇摩難提訳）『鸚鵡經』（大正 No. 79）にもほぼ同じ文があり（890b26-27）、ここでも「給使」の語がある。相当するパーリ中部經典（MN 135）の同じ文には「給使」にあたる語は無いから、有部の伝承はその語を付け足したことになる。当時のインドには奴隷が存在し、少なくとも有部では、阿含聖典の權威によってその布施が認められていたらしいことがわかる。SGK の本偈で、男の奴隷を除外して、「女子」（kanyā）と限定しているのは、多少の配慮

が働いているのかもしれない。しかし女子であろうと、パーリ聖典『沙門果經』では (DN I, 64)、「婦人・少女を受け取ること」「男女の奴隸を受け取ること」は、なすべきではないと説かれている。この「女子もしくは奴隸の布施は許されるか」という問題は恐らく地域の事情によって部派の間で温度差があり、SGK または Ur-SGK の作者が属する部派はその問題を容認する立場を取っていたと思われる。この問題における諸部派の立場はもっと資料を集めて判断する必要がある。また奴隸といっても金で売買される種類とそうでない種類を区別する必要があるだろう。Jātaka 545話 (第100偈) では4種の奴隸が述べられる。— Ch-3『分別業報略經』は本偈にあたる梵文を訳さずに、故意にとぼしたと思われる。恐らく訳者がこの布施の行為に批判的で、危険視したからではないか。Ch-2『六道伽陀經』の「若放女出家」という訳し方も、梵文の直訳を避けて、会通に苦労した訳である。

SGK 77 (= SMRAM 21.152) pattraṃ puṣpaṃ phalaṃ toyam abhayaṃ vacanaṃ priyam / yad yad evepsitaṃ *bhaktyā dātavyaṃ tat tad arthinaḥ //	Pāli 86 pattaṃ pupphaṃ phalaṃ toyam athāpi vāhanaṃ piyaṃ / yaṃ yaṃ yathecchitaṃ bhattiyā dātabbaṃ taṃ tad atthino //
Tib. 77 lo ma me tog 'bras bu dang chu dang mi 'jigs tshig snyan ¹⁾ dang gang gang ji ltar 'dod pa de ²⁾ de 'dod pa la gus par ³⁾ sbyin	Ch-1, 73 如彼彼求者 各各隨所欲 花果及清泉 愛語善安慰

SGK 77 b) abhayaṃ vacanaṃ] Ms. N Ed. (cf. Tib.): abhayavacanaṃ Mus. c) *bhaktyā: ex coni (cf. Pāli <i>bhattiyā</i> , Tib. <i>gus par</i> , or <i>gus *pas</i>): śaktyā Ms. N Ed.: sarvaṃ Mus. d) arthinaḥ] Mus N Ed.: arthine Ms. (also possible).
Pāli 86 b) athāpi] M.1 (cf. Mus p. 274): atthāpi Feer. c) yathecchitaṃ bhattiyā] M.1 (cf. Mus p. 274): yathecchitaṃ bhatya(m) Feer. d) tad atthino] M.1 (cf. Mus p. 274): tadatthinā Feer.
Tib. 77 1) snyan] DGHOPQ: rnyan N. 2) D lacks the pāda c (gang ~ de). 3) gus par] HOQ: gus pa DGNP. (Or read gus *pas!)
Ch-2 —

[SGK 訳] 77 葉・花・果実・水・安全（無畏）・好ましい言葉 [など]、なんでも欲するものを、深い敬いをもって、求める人に与えるべきである。

SGK 78 (= SMRAM 21.153) kleśayitvā dadātīha svargārthaṃ vā bhayena vā / yaśaḥsaukhyābhilāṣād vā kliṣṭaṃ sa labhate phalaṃ //	Pāli 87 kesayitvā dadātīha saggatthaṃ vā bhayena vā / yasatthaṃ vā sukhatthaṃ vā kiliṭṭhaṃ so phalaṃ labhe //
Tib. 78 'di la bskol ¹⁾ nas sbyin byed dam mtho ris ched du'am 'jigs pas sam snyan ²⁾ pa'i bde ba 'dod phyir na de ni 'bras bu nyon mongs 'thob ³⁾	Ch-1, 74-75 復有雖行施 役他而少與 因恐怖發心 及希他讚譽 或求現富貴 生天受快樂 如是等行施 獲福極微少

SGK 78 a) kleśayitvā dadā°] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): kleśayitvā yo dadā° Lévi. b) svargārthaṃ vā] Ms.: svakārthaṃ vā N Ed.: <yah> svargārthaṃ Mus bhayena] Ms. Mus, confirmed by Tib. ('jigs pas): hayena N Ed. c) °bhilāṣād] Ms. Mus: °bhilākhād Ed.: °bhilād N. d) kliṣṭaṃ sa] Mus: sa kliṣṭaṃ Ms. Ed.: kliṣṭaṃ ca N.
Pāli 87 a) dadātīha] corr. Hazlewood: dadāti ha Feer.
Tib. 78 1) bskol] DGNP: bkol HOQ. 2) snyan] GHNOPQ: snyen pa D. 3) 'thob] GHNOPQ: thob D.
Ch-2 若怖於輪迴 親覲於賢聖 所須隨供養 精進常恭敬 善破於煩惱 當得安樂果 454b13-15
Cf. Ch-3 若為生天上 或復求名聞 酬恩及望報 恐怖故行施 獲果不清淨 所受多麤澁 448c23-25

[SGK 訳] 78 この世で天界の〔転生の〕ため、あるいは〔三悪趣への落下の〕恐怖の故に、〔贈与の行為を欲望で〕汚しながら、布施するならば、あるいは〔布施が〕名声や幸福への欲求によるものならば、その者は染汚された果を得る。

Note 78 以下、SGKの78～82偈では、施者が単に何を布施したかではなく、どんな条件下で布施をしたかを問題にしている。78と79偈では布施に際して、たとえ同じ物を布施しても、布施が汚れた心・清らかな心でされたかどうかで、果報が異なるとする。一般に布施が大きな果をむすぶためには、(1) 施の規模が大きい、(2) 福田（布施の受け手）が偉大である、(3) 布施者が清らかな心で行う、の三つのファクターが働くとされるが、SGK では (2) の偉大な福田を選別して布施をせよ、という思想は全く語られないことに注意する必要がある。その思想は仏塔供養を盛んにした原動力であったが、布施が仏塔や一部の高僧に集中するなどの弊害も大きいからである。(3) の清らかな心を重視する考え方、打算や欲望や恐怖の心で布施の行為を汚してはならないという考え方は、大乘の「三輪清浄」（trimaṇḍala-pariśuddhi）の布施の思想につながるものである。。 — なお『分別業報略経』・『分別善悪所起経』には SGK には見られない、(2) の福田の思想が表明されている（449a13-17, 522b4-7）。Ur-SGK から『分別業報略経』・『分別善悪所起経』という拡大版の recension を作る時に、(2) の福田の思想がテキストに補われたものであろう。

SGK 79 (= SMRAM 21.154) svakārthanirapekṣeṇa kṛpāviṣṭeṇa cetasā / parārthaṃ yo dadātīha so 'kliṣṭaṃ phalaṃ aśnute //	Pāli 88 sakatthanirapekkhena dayāyuttēna cetasā / paratthaṃ deti yo so yaṃ akiliṭṭhaṃ phalaṃ labhe //
Tib. 79 rang gi don la mi bltos ¹⁾ shing snying rjes non pa'i sems kyis ni gzhan gyi don du 'dir byin na ²⁾ de yi 'bras bu mthar thug yin	Ch-1, 76 若樂行利他 不惜於身命 常懷悲愍心 聖果不難得

SGK 79 a) svakārtha°] corr. (cf. Pāli sakattha-): svakārthaṃ Mus: svakārya° Ms. N: svakāryaṃ Ed. Lévi: Tib. <i>rang gi don la</i> °nirapekṣeṇa] Ms. N Ed.: anapekṣyaiva Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): anepékṣva Lévi. b) kṛpāviṣṭeṇa] Ms. N Ed., confirmed by Tib. (<i>snying rjes non pa'i</i>): kriyāviṣṭeṇa Mus. Cf. de Jong p. 236.	
Pāli 88 —	
Tib. 79 1) bltos] GHNOPQ: ltos D. 2) na] DHOQ: la GNP.	

[SGK 訳] 79 自分の利益 [を求める心] を捨てて、憐れみに満ちた心で、この世で他者のために布施するならば、その者は染汚されない果を得る。

SGK 80 (= SMRAM 21.155) yat kiṃcid dīyate 'nyasmai yathākālaṃ yathāvidhi / tena tena prakāreṇa tat sarvaṃ upatiṣṭhate //	Pāli 89 yaṃ kiñci dīyate 'ññassa yathākālaṃ yathāvidhi / tena tena pakāreṇa taṃ sabbam upatiṭṭhati //
Tib. 80 dus dang tshul ni ji bzhin du gang ci ¹⁾ gzhan la sbyin byed na rnam pa de dang de lta bur de kun nye bar gnas par 'gyur	Ch-1, 77 諸有來乞者 依時而給與 令彼生忻悅 感果得如意

SGK 80 b) yathāvidhi] Mus: yathāvidhim Ms. N Ed.	
Pāli 89 —	
Tib. 80 1) ci] GHNOPQ: spyi D.	
Ch-2 如彼四時中 隨時行布施 崇重具儀式 當獲一切福 454b18-19	
Cf. Ch-3 隨所應惠施 其心常歡喜 生得如意財 以道而受用 449a20-21	
Cf. Ch-4 施與恣所有 修德無所諍 後獲所愛喜 法德利具足 522b10-11	

[SGK 訳] 80 もし他者のために、適した時に正しいやり方で、何らかの物が布施されたなら、[後に] そのすべてのものが、同じ仕方で [自分に] 与えられる。

SGK 81 (= SMRAM 21.156) parān anupahatyaiva yathākālaṃ yathepsitam / akleśayitvā dātavyaṃ hitam dharmāvirodhi yat //	Pāli 90 pare abādhayitvāna sayam kāle yathecchitam / akesayitvā dātabbam tam hi dhammāvirodhitam //
--	---

Tib. 81 gzhan la gnod pa med pa nyid rang gi don du ci 'dod pa chos dang mi 'gal gang phan pa mi bskol¹⁾ bar ni sbyin par bya	Ch-1, 78 施彼若艱難 受報時亦爾 輟已惠於他 最上安樂法
---	---

SGK 81 a) anupahatyaiva] Mus, confirmed by Tib. (<i>gnod ba med pa nyed</i>): anvapahaty evaṃ Ms. N Ed. b) yathākālaṃ] Mus.: sarvakālaṃ] Ms. N Ed. Cf. Tib. <i>rang gi don du</i>, Pāli <i>sayam kāle</i>. Note: pāda c is Ra-ma Vipulā.	
Pāli 90 c) taṃ hi] M.1 Feer. Read *hitam? (ex con)	
Tib. 81 1) bskol] DGNP: bkol HOQ.	
Ch-2 偷盜他財物 自己作所須 違背於真空 煩惱不捨離 454b20-21	

[SGK 訳] 81 時に応じて、望まれたとおりに、他の者たちに害を及ぼすことなく、
[施与を欲望で] 汚すことなく、法を破ることなく、利益を与えるべきである。

SGK 82 (= SMRAM 21.157) evaṃ hi dīyamānasya dānasyaiva phalodayaḥ / dānaṃ hi sarvasaukhyānām ananyat kāraṇaṃ matam //	Pāli 91 evaṃ pi dīyamānassa dānass'eva phalubbhavo / dānaṃ sabbasukhānaṃ hi paramaṃ kāraṇaṃ matam //
Tib. 82 de ltar sbyin pa sbyin byed na de lta bu yi 'bras bu 'byung bde ba dag ni thams cad kyi¹⁾ rgyu yi²⁾ gtso bo sbyin pa nyid	Ch-1, 79 施為諸樂本 如種生其果 慳彼來希求 隨與無空返

SGK 82 b) phalodayaḥ] Ms., confirmed by Tib. (<i>'bras bu 'byung</i>): phalādayaḥ N Ed.: phalodbhavaḥ ex con) Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): phalo dhruvam Lévi. d) ananyat kāraṇaṃ] Ms. N Ed.: nānyat tat kāraṇaṃ Mus.	
--	--

Pāli 91 a) <i>diyamānassa</i>] corr.: <i>diyamānassa</i> Feer.
Tib. 82 1) <i>kyi</i>] GHNOPQ: <i>kyis</i> D. 2) <i>yi</i>] HOQ: <i>ba'i</i> DGNP.
Ch-2 不作有相心 依如行布施 如是布施果 無為大安樂 454b22-23

[SGK 訳] 82 なぜならそのように与えられた布施に対してのみ、果の出現があるから。布施はあらゆる幸福にとっての、他ならぬ唯一の原因であると見なされる。

Note 82 本偈をもって施論が終わり、次の83偈から戒論に入る。戒論が終わると SGK は95偈から生天論に入る。つまり天界に生まれるための業を説く。「施論、戒論、生天論」という順序は、仏教教団における古くからの在家者向けの説法の伝統的な順序である。

SGK 83 (= SMRAM 21.158) virataḥ paradārebhyo dārān iṣṭān avāpnuyāt / svebhyo 'py adeśakālau ca varjayan puṁstvam ṛcchati //	Pāli 92 virato yo paradārehi dāre so sundare labhe / sehi'pp'adesakālādi vajjanto puriso bhave //
Tib. 83 gzhan gyi bud med rnamz spangs ¹⁾ na bud med sdug gu ²⁾ rnyed par 'gyur yul dang dus min rang gi yang spangs ³⁾ na skyes pa nyid thob 'gyur	Ch-1, 80 慎勿侵外色 視之如己子 設復於自妻 舉心即令止

SGK 83 a) <i>virataḥ</i>] Ms. Ed.: <i>virajāḥ</i> Ed.: <i>viraja</i> N. c) <i>svebhyo 'py adeśakālau ca</i>] Ms. Ed. (cf. Pāli <i>sehi'pp'adesakālādi</i>): <i>svebhyopadeśakālau ca</i> N: <i>adeśakālaṃ svebhyo 'pi</i> Mus. d) <i>varjayan</i>] Mus (cf. Pāli <i>vajjanto</i>): <i>varjayet</i> Ms. N Ed. <i>ṛcchati</i>] Mus.: <i>archati</i> Ms. N Ed.
Pāli 92 c) <i>sehi'pp'adesakālādi</i>] corr. Hazlewood: <i>snehappadesakālādi</i> Feer.
Tib. 83 1) <i>spangs</i>] D: <i>spong</i> HNOPQ: <i>spongs</i> G. 2) <i>sdug gu</i>] GHNOPQ: <i>sdu gu</i> D. 3) <i>spangs</i>] D: <i>spong</i> GHNPQ: <i>spang</i> Q.
Ch-2 如人離婬慾 童男等不生 遠出至他方 無思無罣礙 454b24-25

Cf. Ch-3 若人修淨行 遠離他所愛 生得賢良妻 容德悉具足 慧者常遠離 非處非時行 心安身無過 具足丈夫法 449a26-29
Cf. Ch-4 修身以自守 不好犯人婦 後得所愛欲 貞良有戒德 婦人有非時 智士能自絕 後為人無怨 受性大清淨 522b16-19

[SGK 訳] 83 他人の妻（姦通）から身を遠ざける者は、[後生に] 美しい妻を得る。不適切な場所・時に自分の[妻]も避けるなら、[後生に] 男性たることを得る。

SGK 84 (= SMRAM 21.159) paradāreṣu saṃsaktam cittam yo na niyacchati / anaṅgeṣu ca rajyeta sa pumān strītvam ṛcchati //	Pāli 93 paradāresu saṃsaṭṭham yo na vāreti mānaṣam / sārajjati c'anaṅgesu nārīttam yāti so pumā //
Tib. 84 gang zhig gzhan gyi chung ma la chags pa'i sems ni mi sel dang yan lag min la chags byed pa skyes pa ¹⁾ de ni bud med 'gyur	Ch-1, 81 若人於欲境 繫心而樂著 後生於世間 定受女身報

SGK 84 a) saṃsaktam] Ms. N Ed., confirmed by Tib.: saṃsaktas Mus. c) ca rajyeta] Ms.: ca rajyate Mus (metre!): cakṣyeta N Ed. d) pumān] corr.: pumāṃ Ms. N Ed. ṛcchati] Mus.: archati Ms. Ed.: achati N.
Pāli 93 a) saṃsaṭṭham] Feer. Read *saṃsattam? (ex con) c) sārajjati] Feer: sarajjati Piromanukul: surajjati Pg-ṭīkā.1-2.
Tib. 84 1) pa] GHNOPQ: na D.
Ch-2 若人著姪慾 心行無返復 狂亂自耽著 永墮於三塗 454b26-27
Cf. Ch-3 若人於今世 愛欲心熾然 身口及諸根 盡習婦人法 後常受女身 多欲不聰慧 449c22-24
Cf. Ch-4 思姪若熾火 身根心口犯 專行求女人 後生為黃門 522c25-26

[SGK 訳] 84 他人の妻に執着した心を抑制しない者が、もし [彼女らとの] 性愛の行為を楽しむなら、その男は [後生に] 女性たることを得る。

Note 84 姦通を行った者がその業によって後世に女性に生まれることは *Upāsakajanālaṃkāra* でも説かれている。浪花 (1987), 275-277頁を参照。

SGK 85 (= SMRAM 21.160) śrītvam jugupsate yā tu suśīlā mandarāgiṇī / puṃstvam ākāṅkṣate nityam sā nārī naratām vrajet //	Pāli 94 yā jigucchati nārittaṃ suśīlā mandarāgiṇī / niccaṃ pattheti puṃbhāvaṃ sā nārī narattaṃ vaje //
Tib. 85 gang zhig bud med smod byed cing khrims btsun 'dod chags chung byed la rtag tu skyes par 'gyur 'dod ¹⁾ pa ²⁾ mi mo de ni skyes par 'gyur	Ch-1, 82 若人厭女身 捨欲持淨戒 發生堅固心 轉身作男子

SGK 85 a) śrītvam] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): Lévi śrītvam. b) suśīlā] Mus: suśīla- Ms. N Ed.	
Pāli 94 a) nārittaṃ] corr. Hazlewood (cf. Pañca-g 93d): narattaṃ Feer.	
Tib. 85 1) 'gyur 'dod] DHOQ: 'dod byed GNP. 2) pa] DGNP: la HOQ.	
Ch-2 嫌棄於女人 修戒薄癡愛 復至命終時 猶如破毒氣 454b28-29	

[SGK 訳] 85 女であることを嫌悪し、性質が善良で、愛欲に関心が薄く、男であることを願うなら、その女性は [後生に] つねに男性となる。

SGK 86 (= SMRAM 21.161) yas tu samyañ nirātaṅkaṃ brahmacaryaṃ niṣevate / tejasvī sadguṇaḥ śrīmān devair api *sa pūjyate //	Pāli 95 yo tu sammā nirātaṅkaṃ brahmacariyaṃ nisevati / tejassī suguṇo bhogī devehi pi *sa pūjito //
--	--

Tib. 86 gang zhig yang dag skyon med par tshangs par spyod la brten pa de gzi ldan yang dag don dang ldan dpal ldan lha rnam kyis kyang bkur	Ch-1, 83 若人修梵行 則無諸損惱 具福德威神 天人常恭敬
---	---

SGK 86 a) samyañ] Mus: samyag Ms. N Ed. b) niṣevate] Ms. N Ed.: niṣevati Mus. d) *sa pūjyate] ex coni Mus (corrigenda, p. xxx), confirmed by Tib. (<i>de</i> [...] <i>bkur</i>): saṃpūjyate Mus (metre!); sa lakṣyate Ms. N Ed.	
Pāli 95 a) nirātaṅkaṃ] M.1 (cf. Mus p. 278): nivātaṅkaṃ Feer. b) nisevati] ex coni (cf. SGK, niṣevate): nivesati M.1 Feer. d) *sa pūjito] ex coni: saṃpūjito Feer (metre!).	
Tib. 86 —	
Ch-2 若行正等因 不捨於梵行 精進得吉祥 天人恒供養 454c1-2	
Cf. Ch-3 清淨修梵行 賢聖所稱讚 受身常鮮潔 令聞遠流布 眾人所瞻仰 諸天咸供養 449b1-3	
Cf. Ch-4 若修清淨行 所行無論議 後生有威譽 為天所供養 522b20-21	

[SGK 訳] 86 [心に] 煩いがなく、正しく、梵行（純潔の生活）を実践するなら、
[後生に] 善い徳性を具えて、輝かしく、栄誉ある者となり、神々からも敬われる。

Note 86 83偈と84偈は在家の男性の性的節操・不節操の行為を語り、その業果も対になっている。次の85偈は愛欲を離れんとする女性の行為が対象である。その次の86偈は梵行者（出家者など）の性的禁欲行を対象とする。これら83～86の4偈は十善業道（または五戒）の「不邪淫」をテーマとしたものと見なそうる。

SGK 87 (= SMRAM 21.162) ḍḍhasmṛtir asaṃmūḍho madyapānāniṣevaṇāt / jāyate satyavādī ca yaśaḥsaukhyānvitaḥ pumān //	Pāli 96 daḥhassati asaṃmūḍho virato majjapānato / jāyate saccavādī ca yasassī sukhasaṃyuto //
--	--

Tib. 87 chang 'thung ¹⁾ ba ni mi bsten ²⁾ pas mi de dran pa brtan ³⁾ pa dang rmongs med bden par smra ba dang snyan pa'i bde dang ldan par skye	Ch-1, 84 若人不飲酒 安住於正念 常出真實言 現獲於安隱
--	--

SGK 87 a) dṛḍhasmṛtir] Ms. N Ed. Mus (corrigenda, p. xxx): dṛḍhasmṛty Mus (p. 278). b) madyapānā°] Ms. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): madyamānā° Lévi: maghavāno N Ed.	
Pāli 96 d) °saṃyutto] corr. Hazlewood (<i>metri causa</i>): °saṃyutto Feer BNL.3: °saṃsatto Piromanukul.	
Tib. 87 1) 'thung] DGNP: thung HOQ. 2) bsten] DGNP: sten HOQ. 3) brtan] GHNOPQ: brten D.	
Ch-2 堅固不迷亂 無飲酒妄言 出語常真實 獲名聞安樂 454c3-4	
Cf. Ch-3 若人於此世 遠酒離迷亂 強志不忘誤 義辯得無異 若人不妄語 至誠不 虛欺 受身悉具足 不染惡名稱 449b4-7	
Cf. Ch-4 去離於醉酒 修行常清淨 後識不迷惛 得利內明慧 為身若人故 終而不 妄語 後生身中適 莫得說其短 522b22-25	

〔SGK 訳〕 87 飲酒をしないなら、〔後に〕堅固に記憶を保ち、意識の迷乱がない者となる。真実を語る者であるなら、〔後に〕名声と幸せが具わった人となる。

Note 87 この偈は、前半が不飲酒を、後半が不妄語を内容としている。本偈で不飲酒の業果の説明が、前偈の不邪淫の次に来るのは、この箇所が十善業道だけでなく五戒（不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒）の説明を兼ねているからであろう。

SGK 88 (= SMRAM 21.163) bhinnānām api sattvānām bhedaṃ naiva karoti yaḥ / abhedyparivāro 'sau jāyate sthiramānasah //	Pāli 97 bhinnānam api sattānam bhedaṃ n'eva karoti yo / abhejjaparivāro so jāyate thiramānaso //
---	--

Tib. 88 gang zhig sems can¹⁾ 'byed par yang *'byed²⁾ pa 'di ni mi byed pa³⁾ de yi 'khor rnams mi phyed⁴⁾ cing brtan⁵⁾ pa'i bde dang ldan par skye	Ch-1, 85 若見他相違 勸喻令和悅 感眷屬廣多 無別離苦惱
---	---

SGK 88
b) yah] Ms. N Ed.: yo Mus.
Pāli 97 —
Tib. 88 1) can] HOQ: dang DGNP. 2) *'byed] ex coni: byed DGHNOPQ. 3) pa] DHONPQ: par G. 4) mi phyed] GHNOP: ma phyed Q: mi byed D. 5) brtan] GHNOPQ: bstan D.
Ch-2 種種造飲食 供養和合眾 當感善眷屬 同生不動國 454c5-6
Cf. Ch-3 若人不兩舌 方便善和諍 生為人中尊 眷屬常不壞 449b8-9
Cf. Ch-4 友諍輒和解 不好妄傳說 後親不別離 身常為人雄 522b26-27

〔SGK 訳〕 88 人々が分かれている時に、〔彼らを〕対立させない（不和にすることをしない）者は、〔後世に〕分裂のない（結束した）従属者たちを有する、心がいつも安定した者として生まれる。

Note 88 この88偈は十善業道の「不兩舌」の業果を示すものである。『分別業報略経』ではこの88偈に相当する、不兩舌を内容とする偈（449b8-9）を挟んでその前後に、十善業道の不妄語（449b6-7）ならびに不悪口（449b10-11）・不綺語（449b12-14）・不貪欲（449b15-16）・不瞋恚（449b17-18）・不邪見（449b19-21）の業果の説明を、一偈ずつ丁寧に行っており、その点で、十善業道の全部の項を説明していない SGK とは異なる。

SGK 89 (= SMRAM 21.164) yas tv ājñāṃ kurute nityaṃ gurūṇāṃ hr̥ṣṭamānasah / hitāhitābhidhāyī ca sa syād ādeyavān naraḥ //	Pāli 98 āṇattiṃ kurute niccaṃ gurunāṃ haṭṭhamānaso / hitāhitābhidhāyī ca so ādeyyavacano bhava //
---	--

Tib. 89 gang zhig rtag par¹⁾ yid dga' bas bla ma rnams kyi bka' bzhin byed ²⁾ phan dang mi phan ston pa'i mi de yi tshig ni btsun par 'gyur	Ch-1, 86 於師長教勅 常歡喜聽受 損益更籌量 則具善巧智
---	---

SGK 89 d) ādeyavāṇ naraḥ] Mus (naraḥ is confirmed by Tib. <i>min</i>): ādeyavāk kṛtī Ms. N Ed.	
Pāli 98 a) kurute] corr. Hazlewood: kuruto Feer M.1 (Mus p. 280).	
Tib. 89 1) rtag par] HOQ: rtag pas DGNP. 2) DGNP lack the pāda b (bla ~ byed).	
Ch-2 互相作承事 歡喜意無違 觀察諦理空 不欺不顛倒 苦惱永已盡 安樂而解脫 454c7-9	
Cf. Ch-3 若人於今世 深信具正見 有無真實說 習近善知識 後生天中天 慧光踰日月 449b19-21	

[SGK 訳] 89 いつも師長（グル）たちからの教令を歓びの心で実行し、[人々に] 益と不益を教えるなら、言葉が信頼される人になる。

Note 89 この89偈は十善業道の「不邪見」の業果を示すものと理解できる。

SGK 90 (= SMRAM 21.165) nīcāḥ parāvamānena viparyāsenā codgatāḥ / bhavanti sukhinaḥ saukhyaṃ duḥkhaṃ dattvā ca duḥkhinaḥ //	Pāli 99 nīcā parāvamānena vipallāsenā t'unnatā / bhavanti sukhino datvā sukhaṃ dukkhaṃ ca dukkhino //
Tib. 90 gzhan brnyas pa yis smad par 'gyur ¹⁾ bzlog²⁾ pa yis ni mthon por 'gyur bde ba byin pas bde dang ldan sdug bsngal byin pas sdug bsngal 'gyur	Ch-1, 87 貧窶執役者 好行於捶打 無過而惱他 已苦更加苦

SGK 90	
a) nīcāḥ parāvamānena] Mus: nīcāḥ parāpamānena Ms. (also possible): nīcāḥ parāyamānena N: nīcāparāyamānena Ed. b) codgatāḥ] Ms.: codgataḥ N Ed.: <*connatāḥ> Mus. d) duḥkhaṃ dattvā ca duḥkhinaḥ] Ms. N Ed.: dattvā <duḥkhaṃ ca> duḥkhinaḥ Mus.	
Pāli 99	
c) bhavanti] M.1 (cf. Mus p. 281): bharanti Feer.	
Tib. 90	
1) D lacks the pāda a (gzhan ~ 'gyur). 2) bzlog] DHONPQ: zlog G.	
Ch-2 —	
Cf. Ch-3 若能伏憍慢 轉身生勝族 愚惑自矜高 常生卑賤中 449c9-10	
Cf. Ch-4 不親老則愚 事有道則利 不慢後尊貴 憍慢則卑賤 522c19-20	

[SGK 訳] 90 他人を見下すことで〔後生に〕卑しい者になり、またその逆の〔行為〕によって〔後生に〕身分の高い人になる。幸せを与えれば幸せな人になり、苦しみを与えれば苦しむ人になる。

SGK 91 (= SMRAM 21.166) paraprapañcābhiratāḥ śaṭhās cānṛtavādinaḥ / kubjavāmanatām yānti ye ca rūpābhimāninaḥ	Pāli 100 paravambhanabhiratā saṭhā h'asaccavādino / khujjavāmanattaṃ yanti ye ca rūpābhimānino //
Tib. 91 gzhan la 'drid par dga' ba dang g.yo byed brdzun ¹⁾ ni smra ba dang gang dag gzugs kyi nga rgyal can sgur la lus ni thung bar 'gyur	Ch-1, 88 若人具形色 恃之而起慢 戲弄於他人 當獲矧偃報

SGK 91	
c) °vāmanatām] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): °vāmanām Lévi. Note: pāda a is Ra-bha Vipulā.	
Pāli 100 —	
Tib. 91	
1) brdzun] DHONPQ: rdzun G.	
Ch-2 若好於戲論 歌舞著頑愚 我慢恃端嚴 欺歎於貧賤 當受背偃身 454c10-12	
Cf. Ch-3 諂諛致身曲 訛言形矧陋 449c11	

[SGK 訳] 91 他人を言葉で愚弄する（手玉にとる）ことを楽しむ者、欺し、偽りを話す者、[己の] 容姿に高慢心をもつ者たちは、[後生に] 偃僕や小人となる。

SGK 92 (= SMRAM 21.167) jaḍo vijñānamātsaryād bhaven mūkaḥ priyāpriyaḥ / bādhiryaṃ yāti mūḍhātmā hitavākyābhyasūyakaḥ //	Pāli 101 jaḷo vijjāsu macchero bhava mūgo piyāppiyo / jāyate badhiro mūlho hitavākyabbhusūyako //
Tib. 92 skye bo ¹⁾ bshes ²⁾ gnyen ser sna byed lkugs ³⁾ 'gyur ⁴⁾ kun la mi sdug 'gyur rmongs pa'i rang bzhin phan pa'i tshig mi bzod pa ni 'on par 'gyur	Ch-1, 89 若人性慳鄙 善誘佯不聞 彼極重愚癡 當獲聾瘂報

SGK 92 a) °vijñāna°] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): °vijñāva° Lévi. c) bādhiryaṃ] Mus Ms. Ed. (i.e. Takahata's corr. for A'): bodhiryaṃ A' N. d) °kyābhyasūyakaḥ] Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): °kyābhisūyakaḥ Lévi: °kyāmbusūyakaḥ Ms.(ante corr.): °kyābhigūḍhakaḥ Ms.(post corr. marg.) Ed.: °kyābhimūḍhakaḥ N.
Pāli 101 —
Tib. 92 1) bo] DGHNPQ: ba O. 2) bshes] DGNP: shes HOQ. 3) lkugs] DGNP: lkug HOQ. 4) 'gyur] HOQ: gyur DGNP.
Ch-2 瘖瘂形瘂陋 疾病鎮纏縛 語言而不遜 454c12-13
Cf. Ch-3 見聖心不喜 所生常愚癡 瘖瘂不能言 目盲無所見 尊長師善友 慈心安慰說 厭捨不聽受 所生當聾聵 449c12-14
Cf. Ch-4 師友忠恕言 今世後世厚 忽蔑不承用 後生常聾聵 522c15-16

[SGK 訳] 92 認識（学問的知を得ること）に対して吝嗇であることによって、[後生に] 愚鈍になる。親切[な言葉]に対して不親切な態度[で応じる]ならば、[後生に] 啞になる。愚昧な者が有益な言葉（忠告）に対して立腹するなら、[後生に] 聾になる。

SGK 93 (= SMRAM 21.168) duḥkhaṃ pāpasya puṇyasya sukhaṃ miśrasya miśritam / sarvaṃ sādrśyanisyaṇḍam abhyūhyaṃ karmaṇaḥ phalam // manuṣyakāṇḍaṃ samāptam //	Pāli 102 dukkhaṃ pāpassa puññassa sukhaṃ missassa missakaṃ / ñeyyaṃ sadisaṇissandaṃ kammāṇaṃ sakalaṃ phalaṃ // manussakaṇḍaṃ catutthaṃ //
Tib. 93 sdig pas¹⁾ sdug bsngal bsod nams kyis bde ba'o²⁾ *'dres *pas³⁾ *'dres⁴⁾ ma ste las rnam kyis⁵⁾ ni 'bras bu kun 'dra ba rgyu mthun yin par brtag⁶⁾ mi'i rabs⁷⁾ rdzogs so	Ch-1, 90 行善有餘慶 積惡招苦惱 各成辨彼因 隨業定當受 人趣報竟

SGK 93 a) duḥkhaṃ] Mus Ms. Ed.(corr. by Takahata for A'): duḥkha A' N. c) °nīsyandaṃ] Mus: °niṣsyandaṃ Ms.: °niḥsyandaṃ Ed.(corr. by Takahata for A'): nīpsyandaṃ A' N. d) abhyūhyaṃ] corr.: abhyuhyāṃ Ms. N Ed. (cf. Tib. <i>brtags</i>): abhīkṣyaṃ ex conī Mus. (i.e. Mus's corr. for Lévi): abhyakṣaraṃ Lévi karmaṇaḥ] Ms. N Ed.: karmaṇāṃ ex conī Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): karmaṇaṃ Lévi. manuṣyakāṇḍaṃ] Mus: iti manuṣyakāṇḍaṃ Ms. Ed.	
Pāli 102 —	
Tib. 93 1) sdig pas] HOQ: sdig pa'i DGNP. 2) bde ba'o] HOQ: bde'o DGNP. 3) *'dres *pas] ex conī: 'dren pa'i D: 'dren ma'i GHNOPQ. 4) *'dres] ex conī: 'dren DGHNOPQ. 5) kyis] DHOQ: kyis GNP. 6) brtag] GHNOPQ: brtags D. 7) rabs] DHOQ: rab GNP.	
Ch-2 罪苦轉彌深 無因得安樂 寂靜心恬澹 一切善出生 報應果不虛 速成離苦道 人趣品頌竟 454c14-17	

[SGK 訳] 93 悪業には苦が、福德には楽が、[善悪] 混じった[業] には混じった[果] がある。業のすべての果は、[因と] 相似する結果をもつものと推察される。『人間の節』終わる。

SGK 94 (= SMRAM 21.169) śāṭhyena māyayā nityaṃ caraty akṛtakilbiṣaḥ / kalipriyaḥ pradātā ca sa bhaved asureśvaraḥ // asurakāṇḍaṃ samāptam //	Pāli 68 saṭho māyāviko niccaṃ carate n'aññapāpako / kalippiyo padātā ca so bhavaty'asurissaro //
Tib. 94 rtag tu g.yo dang sgyu ¹⁾ spyod cing sdig pa dag ni ma byas la 'thab la dga' zhing sbyin byed pa de ni lha min dbang phyug 'gyur lha ma yin gyi rabs rdzogs so	Ch-1, 91 常行於諂誑 樂忿恚鬪諍 由昔行施故 而作修羅主 修羅趣竟

SGK 94 a) śāṭhyena] Ms. Mus: śāṭhyena N Ed. asurakāṇḍaṃ samāptam] Mus: iti asurakāṇḍaṃ Ms. N Ed.
Pāli 68 a) saṭho] Feer: satho M.2: sato B. b) carate] Feer: carato B. c) padātā ca] Feer: ca dātā ca Piromanukul.
Tib. 94 1) sgyu] DHOQ: rgyu GNP.
Ch-2 諂誑行毀禁 毒害鬪諍深 廣縱於無明 必墮修羅趣 修羅品頌竟 454c18-20 Cf. Ch-3 若人於今世 志強不隨人 所行多幻偽 亦修諸善法 樂觀他鬪訟 兼行好布施 由斯業緣故 後作阿修羅 450a20-23 Cf. Ch-4 陰以善報讎 終不妄施惡 口諍而心柔 後為阿修羅 523a14-15

[SGK 訳] 94 罪を犯さないが、つねに欺きと幻惑をもって行動し、鬪争を好み、布施をする者であるならば、阿修羅（アスラ）王になるだろう。 『阿修羅の節』 [終わる]。

Note 94 阿修羅に生まれ変わる業についての梵文 *Karmavibhaṅga* の説明は、Lévi (1932), p. 47 (XVIII); Kudo (2004), pp. 76-77 を参照。阿修羅は軽微な罪業をもつ。自尊心が強く、高慢で、誤った慢心をもつ。彼の善行による善根は（天界へではなく）阿修羅の世界に生まれる方向へと向きを変えられた（pariṇāmita）故に、阿修羅に生まれた。阿修羅とは、前世で布施も行い、悪業も

微弱であるため、神に近いが、しかし他を欺く奸知をもち、高慢で闘争心が激しいなどの、不倫理・非道德的な心をかかえた複雑な存在である。『瑜伽師地論』巻四は阿修羅の性格を「意志多く詐幻を懷いて諂誑多し」と表現する (T 30 297c23)。阿修羅たちが住む都城に関しては『世説経』阿須倫品と *Lokapaññatti* の14章の一部 (Denis, I, 129-131) に詳しい説明がある。*Lokapaññatti* のその14章は六道を説明しているが、天界の後に続く餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人界・天界の説明部分は、漢訳『立世阿毘曇論』には存在しない。―― さて SGK はここで『阿修羅の節』と記して、六道の一つとして区分けをしているが、しかしここには1偈頌しかない。この「節」としてのあまりの短さは、私たちに次の様な疑念を抱かせる。本来、この阿修羅を語る1偈頌は、独立した節を作るものではなく、神々の節に属していたのではないか。つまり SGK は、六道説の立場を明示するように編集者が手を加える前の、オリジナルなテキストのかたちでは、『分別業報略経』のように、五道を説くものではなかっただろうか。SGK のオリジナルなテキストは有部系の五道を説く部派で作られ、そのテキストが六道を説く部派グループに伝わった時に、わざわざ『阿修羅の節』がたった1偈頌のために編集者によって加えられ、題名も五道から六道に変えられたのではないだろうか。―― パーリ *Pañca-g* は、五道説の立場に立つため、『阿修羅の節』を設けず、阿修羅を語るこの偈頌を『餓鬼の節』の中の、その最後の位置に移動させる。*Pañca-g* の編集者は阿修羅を天に入れずに、餓鬼の一種と見なす立場に立つわけである。(このような阿修羅たちを基本的に餓鬼に入れるパーリ上座部の教学的立場は *Abhidhammatthasaṅgraha* V, 4 の、註釈書 *Vibhāvanī* の阿修羅に対する説明でも確認することができる。) それに対して六道説の立場に立つ SGK は、『人間の節』が終わり『神々の節』が始まる前の位置に、つまり『餓鬼の節』とはうんと離れた位置に、この『阿修羅の節』を設けている。他方、パーリ *Cha-g* は、六道説の立場である点では SGK に忠実であるものの、『餓鬼の節』が終わり『人間の節』が始まる前の位置に、『阿修羅の節』を置く点で SGK と異なっている。つまり *Cha-g* は、SGK 的配置から *Pañca-g* 的配置に移行する、その途中の過程を示していると理解出来る。―― なお五道説に立つはずのパーリ上座部の聖典文献の中でも例外的に、『餓鬼事』 *Petavatthu* のテキストでは、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人間・神々という順序で、六道を説いている文がある (ed. PTS, p. 66)。その六道の順序は *Cha-g* と同じである。

梵文に相当偈なし No corresponding verse in SGK.	Pāli 69 (<i>additional stanza</i>) tāvatimsesu devesu vepacittāsuraṁ gatā / kāḷakañjāsuraṁ nāma gatā petesu saṅghaṁ // petakaṇḍaṁ tatiyaṁ //
--	--

〔Pāli *Pañca-g* 69偈の訳〕 〔阿修羅王〕 ヴェーパチッティの阿修羅たちは三十三天に包摂され、カーラカンジャの阿修羅と呼ばれる者たちは餓鬼たちに包摂される。

Note このパーリ語の偈の内容は、*Kathāvatthu* 第8品第1章趣論 (*gatikathā*) にある主張に基づく。
 ヴェーパチッティの衆は天界に含まれ、またカーラカンジャカのアスラ（阿修羅）は餓鬼に含まれることが、パーリ上座部にとって五道のほかにアスラ道という別の道 (*gati*) を立てる必要がない理由となる。佐藤密雄・佐藤良智 (1933)、372頁を参照。このヴェーパチッティのアスラに関しては、大毘婆沙論卷百七十二でも、帝釈天が毘摩質怛羅の阿素洛王に「汝は本是れ此処の天なり」と言った、とする經典の文が、そのアスラが天界に属することの聖典的根拠とされる (T 27 868c17-18)。— なおこの、SGK のパーリ語版に後から付加されたと思われるパーリ語の 1 偈のテキストは、Anuruddha 作の *Nāmarūpapariccheda* の437偈 (ed. A.P. Buddhadatta, JPTS, 1913/14, p. 30) と同一である。

SGK 95 (= SMRAM 21.170) nātmanā yaḥ sukhākāṅkṣī na ca hr̥ṣyet parigrahaiḥ / grahāṇām agrāṇīś cāsau mahārājikatām vrajet //	Pāli 103 n'ev'attano sukhāpekkhī na ca haṭṭho pariggahe / gahānaṃ pamukho cāyaṃ mahārājikataṃ vaje //
Tib. 95 gang zhig bdag bde ¹⁾ mi 'dod cing yongs su ²⁾ gzung la ³⁾ mi dga' ba de ni gza' ⁴⁾ rnam dag gi ⁵⁾ mchog rgyal chen bzhi pa nyid du ⁶⁾ 'gyur	Ch-1, 92 樂修十善因 於他無損害 諸天常護持 得生四王天

SGK 95 a) nātmanā] Ms. N Ed. (cf. Pāli <i>n'ev'attano</i>): ātmano Mus. b) hr̥ṣyet] Mus: kṛṣyeta Ms.: kṛvyeta N Ed. c) agrāṇīś] Mus: agrāṇī Ms. N Ed. d) mahārājikatām] Ms. N Ed.: mahārājakatām Mus.
Pāli 103 c) gahānaṃ pamukho cāyaṃ] corr. Hazlewood: gahānaṃ pamukho vāyaṃ M.1 Feer: gahapadānaṃ so hoti M.2: gahappatānaṃ so yāti B. d) vaje] M.1 Feer: gato B M.2.
Tib. 95 1) bde] HOQ: med DGNP. 2) yongs su] DGOPQ: yongsu HN. 3) gzung la] DHOQ: bzung la <u>GP</u> : bzung ba la N. 4) gza'] GHNOPQ: bza' D. 5) gi] DGHNO: gis PQ. 6) nyid du] HOQ: dag tu <u>DGNP</u> .
Ch-2 棄名利歡樂 遠離於親眷 持禁中下品 生彼四王天 454c21-22

Cf. Ch-3 若人慕名聞 及求生天樂 依憑善師學 身口意清淨 所有諸財物 愛樂加守護 由斯業緣故 後生四王家 450a16-19
Cf. Ch-4 如有見善道 具足以睹正 後得生天上 曜若日之光 523a16-17
Cf. Ch-5 若人布施修作福德，不好有為作業生活，則得生四天王處。 T 25 153a9

〔SGK 訳〕 95 自ら進んで安樂を願い求めることなく、また所有財によって心悦ぶことがないなら、その者は〔後生に〕惑星たち（九曜の神々）の首長としての、マハーラージカ天（四天王）になる。

Note 95 SGK の95～100偈は欲界の各天界に生まれる業を説明する。五道の立場に立つ『分別業報略経』では四天王（四大王天）と三十三天の偈の間の位置に阿修羅の偈（450a20-23）を置く。ところが同じ作品の異訳であるはずの『分別善惡所起経』では四天王の偈の前の位置に阿修羅の偈（523a14-15）を置いている。後者の経の阿修羅の位置づけは、天界から阿修羅を別立する SGK の立場に近い。もし『分別業報略経』の立場の方が古いと見なすなら、『分別善惡所起経』は六道説にも配慮した、SGK の形への過渡的な立場であることになる。

SGK 96 (= SMRAM 21.171) mātāpitṛkulajyeṣṭha- pūjakas tyāgavān kṣamī / *hr̥ṣyate yo na kalahais tridaśeṣu sa jāyate //	Pāli 104 mātāpitukulejett̐ha- pūjako cāgavā khamī / tussati yo na kalahe tāvatimsesu so bhavē //
Tib. 96 pha ma pha tshan gtso bo la bkur byed gtong ¹⁾ ldan bzod par byed ²⁾ 'thab mo la ni dga' ba gang ³⁾ de ni sum cu rtso gsum skye	Ch-1, 93 於父母三寶 恭敬隨能施 具忍辱柔和 得生忉利天

SGK 96 b) °kas tyāgavān] Mus Ms. N: °kasyāgavān Ed. kṣamī] Mus, confirmed by Tib. (<i>bzod par byed</i>): kṛtī Ms. N Ed. c) *hr̥ṣyate yo na kalahais] ex con: hr̥ṣyame yo na kalahais Ms. N Ed.: na hr̥ṣyati yaḥ kalahe Mus. — This pāda c is Na Vipulā.
Pāli 104 —
Tib. 96 1) gtong] HOQ: stong DGNP. 2) byed] D: ldan GHNOPQ. 3) gang] GHNOPQ: dang D.

Ch-2 父母親族等 種種作供養 遠靜奉律儀 獲生忉利天 454c23-24
Cf. Ch-3 孝順淨供養 父母諸尊長 忍辱少瞋恨 不樂觀鬭訟 由斯業緣故 後生忉利天 450a24-26
Cf. Ch-4 善孝事父母 後生貴姓家 不靜不好怒 食福忉利天 523a18-19
Cf. Ch-5 若人布施，加以供養父母，及諸伯叔兄弟姊妹，無瞋無恨，不好靜訟，又不喜見靜訟之人，得生忉利天上、焰摩、兜術、化自在、他化自在。 T 25 153a10-13

[SGK 訳] 96 父母と一族の長老たちを大切にし、喜捨をなし、よく堪忍し、静いに喜悅することがないなら、三十三天に生まれる。

Note 96 Jātaka 541話「ニミ王前生物語」の第148-162偈 (*Jātakatthavaṇṇanā*, Fausbøll ed., vol. 6, pp. 125-127) は三十三天の世界を描写しながら、その天に生まれるための業を説いている。

SGK 97 (= SMRAM 21.172) na vīgrahe ratā naiva kalahe hr̥ṣṭamānasāḥ / ekāntakuśalodyuktā ye ca yāmopagās tu te //	Pāli 105 na vīgahe ratā n'eva kalahe haṭṭhamānasā / ekantakusale yuttā ye te yāmopagā narā //
Tib. 97 rtsod ¹⁾ la ²⁾ mi dga' 'thab ³⁾ mo la yid ni dga' bar mi byed la gcig tu dge la brtson pa gang de dag 'thab bral nyid du 'gro	Ch-1, 94 自不樂忿靜 勸他令和順 純善修淨因 得生焰摩天

SGK 97 a) ratā] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): rato Lévi. d) ca yāmopagās] Ms.: ca māyāpagās N: ca moyāpagās Ed.: suyāmopagās ex conī Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): tu yāmupagās Lévi.	
Pāli 105 a) vīgahe] B: vīgahe M.1 M.2 Feer. d) ye te yāmopagā narā] M.1 Feer: ye te yāmupagā narā M.2 Pg-ṭikā.1-2: cutā yāmañ ca bhavanam B.	
Tib. 97 1) rtsod] DGHNPQ: rcad O. 2) la] DGHOPQ: pa N. 3) 'thab] DGNP: thab HOQ.	
Ch-2 慈喜無傷殺 和顏離愛憎 純善守尸羅 得生夜摩界 454c25-26	

Cf. Ch-3	若人自不鬪 亦不觀他諍 精勤修善法 得作夜摩天 450a27-28
Cf. Ch-4	無所與言諍 亦不參鬪訟 守善心修德 後生豔天上 523a20-21

[SGK 訳] 97 鬪争を楽しまず、諍いに喜ぶ心をもたず、ひたすら善に専心して努力する者たちは、ヤーマ（夜摩）天に至る。

SGK 98 (= SMRAM 21.173) bahuśrutā dharmadharāḥ suprajñā mokṣakāṅkṣiṇaḥ / guṇair ye parihr̥ṣṇās ca narās te tuṣitopagāḥ //	Pāli 106 bahussutā dhammadharā supaññā mokkhakaṅkhino / guṇehi parituttḥā ye narā te tusitopagā //
Tib. 98 thos pa mang dang chos 'dzin dang shes rab ldan zhing thar pa 'dod yon tan rnams la dga' ba'i mi de dag dga' ldan nye bar 'gro	Ch-1, 95 樂多聞正法 專修解脫惠 喜讚他功德 得生兜率天

SGK 98 b) suprajñā mokṣakāṅkṣiṇaḥ] Ms. N Ed., confirmed by pāda b of Pāli: prajñā mokṣasya kāṅkṣiṇaḥ Mus. — Note: pāda a is Ra-bha Vipulā.
Pāli 106 d) tusitopagā] corr. Hazlewood: tussitopagā Feer.
Tib. 98 —
Ch-2 多聞持法教 修慧求解脫 積德具威儀 獲生於觀史 454c27-28
Cf. Ch-3 於身善觀察 好學集多聞 專精思惟義 樂修淨功德 由斯業緣故 後生兜率天 450a29-b2
Cf. Ch-4 多聞安思惟 好利而求脫 念善德以善 後生兜術天 523a22-23

[SGK 訳] 98 多くを聞いて学び、教えを堅持し、すぐれた智慧をもち、解脱を求め、諸々の徳性によって大いに喜ぶ人々は、トゥシタ（兜率）天に至る。

SGK 99 (= SMRAM 21.174) śīlapradānavinaye pravṛttā ye svayaṃ narāḥ / mahotsāhās ca te 'vaśyaṃ nirmāṇaratigāmināḥ //	Pāli 107 sīlappadānavinaye pavattā ye sayāṃ narā / mahussāhā ca te 'vassaṃ nimmānaratigāmino //
Tib. 99 mi gang rang nyid dul ba la zhugs shing tshul khrims 'bogs ¹⁾ pa la spro ba che ²⁾ dang ldan pa de ³⁾ gdon mi za bar 'phrul ⁴⁾ dgar ⁵⁾ 'gro	Ch-1, 96 於施戒諸行 自性常愛樂 起精進勇猛 得生變化天

SGK 99 c) °sāhās ca te] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): °sāhās te Lévi. d) nirmāṇarati°] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): nirmāṇagati° Lévi. Note: pāda a is Na Vipulā.	
Pāli 107 a) sīlappadāna-] Feer: sīlappadānaṃ BNL.1-3 Pg-ṭīkā.1-2. c) 'vassaṃ] corr. Hazlewood (cf. Pañca-g 61c, 'vassaṃ): vassaṃ Feer.	
Tib. 99 1) 'bogs] DHOQ: 'bog GNP. 2) che] DGHONQ: tshe P. 3) de DHOQ: ste GNP. 4) 'phrul] GHNOPQ: 'brul D. 5) dgar] DGNP: dga' HOQ.	
Ch-2 若人自出家 布施堅持戒 令彼大安樂 得生變化天 454c29-a1	
Cf. Ch-3 修習勝布施 樂誦諸經典 方便行善法 自力不由他 慍懃精進故 後生化樂天 450b3-5	
Cf. Ch-4 守戒常禪思 依法無所恃 亦勸彼令然 生不驕樂天 523a24-25	

[SGK 訳] 99 自ら進んで戒行・布施・[行動を] 律することに専念し、大きな努力をする人々は、必ずニルマーナ・ラティ（化樂）天に行く。

SGK 100 (= SMRAM 21.175) adīnasattvā ye śreṣṭhāḥ pradānadamasamyamaiḥ / guṇādhikāś ca ye yānti paranirmitatāṃ dhruvam //	Pāli 108 alīnamānasā sattā padhānadamasaññame / guṇādhikā ca te honti paranimittavattino //
--	---

Tib. 100 sems can gang zhig dman min mchog sbyin dang dul dang yang dag sdom ¹⁾ phul byung yon tan lhag ²⁾ gyur des ³⁾ nges par gzhan 'phrul dbang byed 'gro ⁴⁾	Ch-1, 97 是最上有情 具沙門梵行 增長解脫因 得生他化天
---	--

SGK 100 a) ye] Ms. Mus: me N Ed. — Note: pāda a is Ra-ma Vipulā. b) pradānadamasamṣamāiḥ] Ms. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): pradānādasamamṣasaiḥ Lévi: pradāne damasamṣamāiḥ N Ed. c) yānti] Ms. N Ed.: yanti Mus. (<i>yanti</i> is also possible, but <i>yānti</i> is used 6 times in SGK.)	
Pāli 108 c) ca te honti] Pg-ṭīkā.1-2: ca honti te Feer (metre!). d) paranimmittavattino] corr. Hazlewood: parinimmittavattino Feer.	
Tib. 100 1) sdom] GHNOPQ: bsdoms D. 2) lhag] DGNP: ldan HOQ. 3) des] HOQ: te DGNP. 4) 'gro] GHNOPQ: do D.	
Ch-2 上根有情類 持戒亦最上 功德超越前 生他化自在 455a2-3	
Cf. Ch-3 修行勝布施 善攝護諸根 精勤不退轉 欣樂他功德 由斯業緣故 後生他化天 450b6-8	
Cf. Ch-4 自守好最施 不逆不自稱 平均愛有道 生彼尼密天 523a26-27	

〔SGK 訳〕100 気高い有情であり、布施と克己と自制によって徳性が抜きん出た最高の者たちは、確実にパラ・ニルミタ（他化自在）天に行く。

Note 100 欲界の天界に生まれ変わる業についての梵文 *Karmavibhaṅga* の説明は、Lévi (1932), p. 47 (XX); Kudo (2004), pp. 78-79 を参照。梵文 *Karmavibhaṅga* を含む「鸚鵡經類」第二類は、SGK のように欲界の天界で説明を終えずに、更に色界・無色界の各天界に生まれる業までも説明するが、その点で『分別業報略經』・『仏説分別善惡所起經』韻文と、形が共通する。

SGK 101 (= SMRAM 21.176) śīlena svargam āpnoti dhyānena ca viśeṣataḥ / yathābhūtaparijñānāt paryante cāpunarbhavaḥ //	Pāli 109 sīlena saggam āyanti jhānena brahmasampadam / yathābhūtapariññāṇā nibbānam adhigacchanti //
---	--

Tib. 101 tshul khrims kyis ni¹⁾ mtho ris 'thob²⁾ bsam gtan gyis ni khyad par 'gyur yang dag ji bzhin yongs shes pas mthar ni yang srid med par 'gyur	Ch-1, 98 以戒定熏修 普資於願力 生天上人間 達真如實際
---	---

SGK 101 d) cāpunarbhavaḥ] Ms., confirmed by Tib. (<i>yang srid med par 'gyur</i>): vo punarbhavaḥ N Ed.: ca pravartanam Mus.	
Pāli 109 a) saggam āyanti] corr.: saggam āyanti B M.2 (Mus p. 288) Pg-tīkā.1-2: tidivaṃ yāti M.1 Feer. c) °pariññāṇā] B M.2 (cf. Mus p. 288): °pariññāṇaṃ Feer: °pariññāṇaṃ Piromanukul: °parimāṇā BNL.4-5. d) °gacchanti] B M.2: °gacchati Feer.	
Tib. 101 1) kyis ni] DGNOPQ: kyis H. 2) 'thob] HOQ: thob DGNP.	
Ch-2 持戒生天上 禪定亦如是 智慧若薰修 牽引復生慧 455a4-5	

[SGK 訳] 101 戒によって天界を得る。禪定によって殊更に[それを得る]。終には如実智によって、再生しないことを得る。

Note 101 本偈では戒・定・慧の三学が説かれる。持戒によって天界が、禪定の位階に従って各禪天が、そして慧の完成によって涅槃が得られる。

SGK 102 (= SMRAM 21.177) śubhāsubhaphalaṃ karma yad etat kathitaṃ sphuṭaṃ / śubhena labhyate saukhyaṃ duḥkhaṃ tv aśubhasaṃbhavam //	Pāli 110 subhāsubhaphalaṃ kammaṃ may'etaṃ kathitaṃ puna / subhena labbhate sokhyaṃ dukkhañ cāsubhasambhavam //
Tib. 102 mi dge bas ni bde mi 'thob¹⁾ dge ba yis ni bde ba 'thob de ltar dge dang mi dge ba'i las kyi 'bras bu gsal bar bstan	Ch-1, 99 如是善惡報 已分明顯示 作善招人天 造惡繫極苦

SGK 102 d) duḥkhaṃ tv aśu°] Mus Ms. Ed.: duḥkhatvaṃ śu° N.
Pāli 110 a) subhāsubhaphalaṃ kammaṃ] Mus p. 291: subhāsubhaṃ phalaṃ kammaṃ Pg-ṭikā.1-2: subhāsubhaṃ kammaphalaṃ Feer. b) puna] B (cf. Mus p. 291): phalaṃ M.1 Feer: bhūtaṃ M.2 Pg-ṭikā.1-2. – Instead of puna, read *phuṭaṃ (= Skt. sphuṭaṃ)? c) subhena labbhate sokhyaṃ] B (cf. Mus p. 291): subhen'eva sukhaṃ yāti M.1 Feer: sukhaṃ kusalasambhūtaṃ M.2 Pg-ṭikā.1-2.
Tib. 102 1) 'thob] GHNOPQ: thob D.
Ch-2 善惡業果報 我說無虛謬 由善得安樂 作惡獲苦惱 455a6-7

[SGK 訳] 102 [以上により] 行為（業）は善果か悪果をもつものであることが明瞭に語られた。善行により楽が得られる。また苦は不善行から生じるものである。

SGK 103 (= SMRAM 21.178) mṛtyur vyādhir jarā caiva cintanīyam idaṃ trayam / viprayogaḥ priyaiḥ sārdaṃ karmanāṃ ca svakaṃ phalaṃ //	Pāli 111 maccurogajarā tv'eva cintanīyam idaṃ tayaṃ / vippayogo piyehāsi kammano tassa taṃ phalaṃ //
Tib. 103 sdug pa dang ni bral ba dang mi sdug pa dang phrad pa dang las rnams rang gi 'bras bur bcas 'chi dang rga dang na ba nyid gsum po 'di dag ¹⁾ bsam par bya	Ch-1, 100 老病死未至 勤思求正法 自果報一來 所愛皆離別

SGK 103 178a) caiva] Mus Ed. (eva is confirmed by Tib. <i>nyid</i>): caivaṃ Ms. N. 178c) viprayogaḥ] Ms.: viprayogā N Ed.: viprayogaṃ Mus.
Pāli 111 —
Tib. 103 1) dag] D: la GHNOPQ.
Ch-2 老病死輪轉 果報自如是 審觀此三種 勿愛須棄捨 455a8-9

[SGK 訳] 103 この三つ一組のもの、死・病・老いを、よく思惟すべきである。愛しい者たちとの別れも、もろもろの業による自らの〔得た〕果である。

Note 103 本偈では三苦のほかに愛別離苦を挙げる。蔵訳では、この偈は 1 pāda 増えて 5 pāda より成るが、それは愛別離苦の次に怨憎会苦が付け加わったためである。

SGK 104 (= SMRAM 21.179) evaṃ virāgaṃ āpnoti virakṭaḥ puṇyaṃ ṛcchati / pāpaṃ ca varjayaty evaṃ tac ca saṃkṣepataḥ śṛṇu //	Pāli 112 pappoty'evaṃ virāgaṃ yo viratto puññaṃ icchati / pāpañ ca vajjayaty'evaṃ taṃ suṇātha samāsato //
Tib. 104 de lta na ni chags bral 'thob ¹⁾ chags dang bral na ²⁾ bsod nams 'dod de bzhin sdig pa spong bar byed de dag nyid kyang mdor nyon cig	Ch-1, 101 彼貪等過失 深可生厭患 智者善思惟 是故當遠離

SGK 104 b) virakṭaḥ] Mus, confirmed by Pāli (<i>viratto</i>) and Tib. (<i>chags dang bral na</i>): vivikṭaḥ Ms. Ed. ṛcchati] Mus: archati Ms. Ed.: achati N. c) varjayaty] Mus, confirmed by Pāli (<i>vajjayaty</i>) and Tib. (<i>spong bar byed</i>): nārjayed Ed.: nārj- jayed Ms.: nājamed N.
Pāli 112 —
Tib. 104 1) 'thob] HOQ: thob DGNP. 2) na] DGNP: ba HOQ.
Ch-2 —

[SGK 訳] 104 このようにして離貪を得るのであり、離貪した者は福德を得る。このようにして罪惡を遠離する。まとめるなら、この〔言葉〕を聞きなさい。

SGK 105 (= SMRAM 21.180) samyakparārthakaraṇaṃ parānarthavivarjanam / puṇyaṃ viparyayāt pāpam uktam etad mahātmanā // devakāṇḍaṃ samāptam //	Pāli 113 sammāparatthakaraṇaṃ parānatthavivajjanaṃ / puññaṃ pāpaṃ vipallāsā vuttam etaṃ mahesinā //
Tib. 105 bdag dang gzhan gyi don byed dang gzhan la gnod byed spong ba ni bsod nams bzlog pa sdig yin par bdag nyid chen pos ¹⁾ de skad gsungs lha'i rabs rdzogs so	Ch-1, 102 若常行利他 則無諸障惱 罪福定無差 略說宜諦聽 六趣輪迴經

SGK 105 b) parānarthavivarjanam] Ms. N Ed. Mus (i.e. Mus's corr. for Lévi): parārthaś ca vivarjanam Lévi. cd) pāpam uktam] Mus Ms. N: pāpabhuktam Ed. d) etad mahātmanā] Mus (p. 292), confirmed by Tib. (<i>bdag nyid chen pos de skad</i>): eva munīśvaraiḥ Ms. N Ed. — Note: pāda a is Na Vipulā. devakāṇḍaṃ] Mus: iti devakāṇḍaṃ Ms. N Ed.
Pāli 113 c) puññaṃ pāpaṃ] corr. Hazlewood: puññaṃpāpa- Feer vipallāsā] M.1 (Mus p. 292): vipallāso Feer.
Tib. 105 1) pos] DGNP: po HOQ.
Ch-2 求福遠離罪 了絕於色聲 通達真實義 必至大解脫 佛說六道伽陀經 455a10-12

[SGK 訳] 105 「他者を害することを避けて、正しく他者の益のために行為することが、福德である。罪惡はその逆である。」このことが牟尼の王（仏陀）によって説かれた。『神々の節』終わる。

Note 105 この105偈の最後に、『神々の節』終わる (devakāṇḍaṃ samāptam)、と記されるが、それはむしろ100偈の最後に記すべきであつたろう。そもそも、このような『～の節』終わる、という文が Ur-SGK (原 SGK) の段階からあつたと思える必要はないかもしれない。Ur-SGK を五道から六道の形式に変えようとする時に、後の時代の編集者が写字生によって書き込まれた可

能性がある。 — この「『神々の節』終わる」の文に相当する文は、『六趣輪廻經』と『佛說六道伽陀經』には欠落している。

梵文に相当偈なし No corresponding verse in SGK.	Pāli 114 (<i>additional stanza</i>) devā c'eva manussā ca tisso pāpāyā bhūmiyo / gatiyo pañca niddiṭṭhā buddhen'eva tayo bhavā // devakaṇḍaṃ pancamaṃ //
--	--

[Pāli Pañca-g 114偈の訳] 天と人間と三悪趣が、五道であり、三有（＝欲界・色界・無色界）であると、仏に説かれた。 『神々の節』終わる。

SGK Colophon (only in Lévi's manuscript) āryasaddharmasmṛtyupasthāna- mahāyānasūtrāntāt samākṛṣṭā mahāpaṇḍitāśvagoṣeṇa ṣaḍgatikārikāḥ samāptāḥ // (Mus p. 292)	Pāli Colophon (B:) chagatidīpanī samattā // (M.2:) pañcagatidīpanī samattā // (Feer:) pañcagatidīpanaṃ samattam //
Tib. l dam pa'i chos dran pa nye bar gzhag pa'i 'gro ba ¹⁾ drug gi tshig le'ur byas pa l slob dpon btsun pa chos ldan rab 'byor dbyangs kyis mdzad pa rdzogs so ²⁾ l rgya gar gyi mkhan po dharmā ka ra dang l l zhu ³⁾ chen gyi lo tsā ba gtsang ⁴⁾ de ben tra rakṣitas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o 1) ba] DHOQ: om. ba GNP. 2) OQ lack the next sentence, rgya gar [...] pa'o. 3) zhu] DGNP: zhus H. 4) gtsang] D: rtsangs GHNP.	Ch-1 六趣輪廻經 馬鳴菩薩集 西 天譯經三藏朝散大夫試鴻臚少卿宣梵大師賜紫沙 門臣 日稱等奉詔譯 Ch-2 佛說六道伽陀經 西天中印度摩 伽陀國那爛陀寺三藏傳教大師賜紫沙門臣 法天 奉詔譯 Ch-3 分別業報略經 大勇菩薩 撰 宋天竺三藏 僧伽跋摩譯 Ch-4 佛說分別善惡所起經 後漢安 息國三藏 安世高譯 Ch-5 大智度論 後秦 鳩摩羅什譯

以上の第Ⅱ部で、SGK 梵文の和訳を偈ごとにばらばらに提示する形を採ったが、通読用に SGK 全偈の和訳を一箇所にまとめたものもあると便利であろうから、それは次

年度の『南アジア古典学』に発表予定の SMRAM 21章 Pāñcālarājavadāna の和訳に組み込んで、示す予定である。

Appendix 1

分別業報略経の内容

(Analysis of Contents of the *Fēn bié yè bào lüè jīng*)

『分別業報略経』は以下のように (a) ～ (j) の順序で業を説明する。

SGK と比べて、作品の骨格（基本的な内容構造）はほぼ同じであるが、『分別業報略経』の (b) と (i) に相当するものが SGK には無い。

(a) 帰敬頌の後、作品の目的（仏の教えに従って、業報分別を要約して説くこと）と仏教の業報輪廻説の基本的な立場（主宰神・無因・本性・時などを輪廻界の因として認めない立場）を説く

大正 No. 723, 17巻 446b26-c18

(b) 『天使経』を踏まえた文により地獄の説明への導入を行う

446c19-28

(c) 八大地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く

446c29-447b5

(d) 増地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く

447b6-27

(e) 畜生の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く

447b28-c21

(f) 餓鬼の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く

447c21-448b6

(f 1) 本来的な餓鬼類のグループの説明 447c21-448a17

(f 2) 妖怪的な存在のグループの説明 448a17-b6

(g) 人間に生まれて幸・不幸の様々な状態になった前世の業を説く

448b6-450a15

(h) 阿修羅と六欲天のそれぞれに生まれるための善業を説く

（分別業報では阿修羅界は天界の中にあり四天王天の上に置かれる）

450a16-b8

(i) 六欲天より上の天界に生まれるための善業を説く

450b9-26

(j) 結びの語として、煩惱によって生死が起こるのでそれを捨てよと勧める

450b27-c5

なお上記の (g) の中を細かく分けると、(g 0) ～ (g 9) となる：

(g 0) 善趣（天・人）の業因と果報を以下に説くことを告げる

448b6-10

(g 1) 人界で短命と病氣を得る因となる業を説明

448b10-16

(g 2) 貧富の状態をもたらす盗みと施の業因の四句分別

448b16-24

(g 3) 斎戒および親・祖先への供養によりどんな果を得るかを説明

448b24-c1

(g 4) 具体的にどんな物を布施すると人界でどんな果を得るかを説明

448c1-22

(g 5) 施の業報に関する特殊なルール、業の様々な働き方を説明

（布施する人の心構えや布施のしかたによって果が異なることを説く）

448c23-449a25

(g 6) 戒論として種々の善行（ほぼ十善業道と重なる善行）の業果を説明⁵⁷⁾

449a26-b25

(g 7) 白黒混じった業では果が時間的にどう現れて来るのかを説明

449b26-c4

(g 8) 更に種々の悪行と善行はどんな業果を得るかを細かく説明

449c05-450a15

なお『分別善惡所起經』の内容も、この Appendix 1 の内容・順序とほぼ同一である。

57 『分別業報略經』ではこの (g 6) の箇所において、不邪淫の業果の説明（449a26-b3）の後、不飲酒（449b4-5）の業果、その次に十善業道の不妄語（449b6-7）・不兩舌（449b8-9）・不惡口（449b10-11）・不綺語（449b12-14）・不食欲（449b15-16）・不瞋恚（449b17-18）・不邪見（449b19-21）それぞれの善行の業果を説く。ただし十善業道の第一の不殺生の説明は (g 1) で、第二の不偷盜の説明は (g 2) で既に行っているため、この (g 6) では行わない。また十善業道ではない不飲酒の項が不邪淫と不妄語の間に入っているのは、この箇所が五戒（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒）の説明を兼ねているからであろう。

Appendix 2

分別業報略経の中に見られる SGK に相当する偈

(Comparative Table of SGK and the *Fēn bié yè bào lüè jīng*)

以下、『分別業報略経』の中で SGK に相当していると思われる箇所を、例えば 446b26-27 のように、大正蔵の頁段行で示す。そして SGK での相当する偈の番号を、(≒ SGK 1) のように示す。また☆の印は特に『分別業報略経』と SGK の両者が酷似することが感じられる偈であることを示す。

分別業報略経 (大正 No. 723, 17巻)

(a) 帰敬頌の後、作品の目的（仏の教えに従って、業報分別を要約して説くこと）と仏教の業報輪廻説の基本的な立場（創造神・無因・本性・時などを輪廻界の因として認めない立場）を説く (446b26-446c18)

446b26-27 最勝無上尊 ～ 及法應眞僧 (4句) (≒ SGK 1)

446c7-8 無上人中尊 ～ 煩惱及諸業 (4句) (≒ SGK 3)

446c9-12 種種相煩惱 ～ 慧者當受持 (8句) (≒ SGK 4)

446c13-16 非自在所作 ～ 當知彼非因 (8句) (≒ SGK 2)

(b) 『天使経』を踏まえた文により地獄の説明への導入を行う (446c19-28)

SGKに相当する偈なし。

(c) 八大地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く (446c29-447b5)⁽⁵⁸⁾

447a8-9 等活死復生 ～ 互相傷害故 (4句) (≒ SGK 6)

☆ 447a10-11 陷人以非道 ～ 死墮黒繩獄 (4句) (≒ SGK 7)

447a12-13 屠捕及餘殺 ～ 身碎血髓流 (4句) (≒ SGK 13)

447a22-23 逼迫多人衆 ～ 舉身常洞燃 (4句) (≒ SGK 15)

447a24-25 斗秤欺誑人 ～ 入大叫呼獄 (4句) (≒ SGK 17)

58 八大地獄の説明を行う (c) の箇所だけに限定していえば、それらの偈は『分別業報略経』や『分別善惡所起経』の相当文と SGK の偈とを比較すると、文面がよく合致するとはいえない場合のほうが多い。(c) で ☆ の印のついた偈が少ないことがそのことを示している。むしろ『分別業報略経』や『分別善惡所起経』での八大地獄の箇所の諸偈は、『較量寿命経』にある相当偈のほうに、より近さを感じさせることがある。

- 447a28-b1 非法言是法 ～ 死入無擇獄 (6句) (≒ SGK 19)
 447b2-3 父母賢善人 ～ 死入熱地獄 (4句) (≒ SGK 9)
 447b4-5 父母賢善人 ～ 死入大熱獄 (4句) (≒ SGK 11)

(d) 増地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く (447b6-27)

- ☆ 447b6-7 出家修淨行 ～ 死入熱土獄 (4句) (≒ SGK 33)
 ☆ 447b8-9 越禁捨正命 ～ 毒虫貫骨髓 (4句) (≒ SGK 34)
 447b10-11 田獵焚林澤 ～ 燒剥斷支節 (4句) (≒ SGK 29)
 ☆ 447b12-13 誘取諸衆生 ～ 競來食其肉 (4句) (≒ SGK 25)
 ☆ 447b14-15 毀壞正法橋 ～ 截足斷肌骨 (4句) (≒ SGK 31)
 ☆ 447b16-17 長身百足虫 ～ 由彼邪姪故 (4句) (≒ SGK 24)
 ☆ 447b18-19 於他婦女身 ～ 往還貫身體 (4句) (≒ SGK 23)
 ☆ 447b20-21 種種設方便 ～ 舉身悉糜爛 (4句) (≒ SGK 28)
 ☆ 447b22-23 吞食熱鐵丸 ～ 盜竊他財故 (4句) (≒ SGK 26)
 ☆ 447b26-27 恚憎不善行 ～ 死作閻羅卒 (4句) (≒ SGK 36)

(e) 畜生の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く (447b28-c21)

- 447c1-2 身三口四過 ～ 死墮畜生趣 (4句) (≒ SGK 44)
 ☆ 447c3-4 多欲生鵝鶩 ～ 蛆蟻飛蛾等 (4句) (≒ SGK 38)
 ☆ 447c5-6 無智好打縛 ～ 羴鹿諸野獸 (4句) (≒ SGK 41)
 ☆ 447c7-11 瞋恨作𧈧蛇 ～ 猪狗驢狐狼 (8句) (≒ SGK 39)
 ☆ 447c11-15 慳吝不惠施 ～ 後受烏鳥身 (8句) (≒ SGK 40)
 ☆ 447c15-17 邪貪無厭足 ～ 或作熊羆身 (4句) (≒ SGK 42)
 ☆ 447c17-21 修行大布施 ～ 大力金翅鳥 (8句) (≒ SGK 43)

(f) 餓鬼の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く (447c21-448b6)

(f 1) 本来的な餓鬼類のグループ (447c21-448a17)

- ☆ 447c21-23 劫盜賢善人 ～ 食糞及死屍 (4句) (≒ SGK 45)
 ☆ 447c23-25 欺怖愚狂劣 ～ 常食諸胎網 (4句) (≒ SGK 46)
 ☆ 447c25-27 顰蹙鄙陋行 ～ 形體甚黑瘦 (4句) (≒ SGK 47)
 ☆ 447c27-29 慳貪不布施 ～ 唯饕膿涕唾 (4句) (≒ SGK 50)
 ☆ 448a7-9 龜言觸惱人 ～ 生焰口餓鬼 (4句) (≒ SGK 51)
 ☆ 448a9-12 熾然他鬪訟 ～ 舉身皆火然 (6句) (≒ SGK 52)
 ☆ 448a12-14 抑止他人施 ～ 腹大咽如針 (4句) (≒ SGK 48)
 ☆ 448a14-17 不施不自食 ～ 因是得信食 (6句) (≒ SGK 49)

(f 2) 妖怪的な存在のグループ (448a17-b6)

- ☆ 448a17-19 若爲聚落主 ～ 飲食常隨意 (4句) (≡ SGK 53)
- ☆ 448a19-21 若多殺衆生 ～ 常得衆美食 (4句) (≡ SGK 54)
- ☆ 448a21-24 微患少憂感 ～ 爲天執樂神 (6句) (≡ SGK 55)
- ☆ 448a24-27 爲利而行施 ～ 利爪長牙齒 (6句) (≡ SGK 56)
- ☆ 448a27-29 遍他取財物 ～ 生爲負多鬼 (4句) (≡ SGK 57)
- ☆ 448a29-b2 多瞋性難滿 ～ 後生作地神 (4句) (≡ SGK 58)
- ☆ 448b2-4 興乘獻父母 ～ 生作遊空神 (4句) (≡ SGK 59)

(g) 人間に生まれて幸・不幸の様々な状態になった前世の業を説く (448b6-450a15)

(g 0) 善趣 (天・人) の業因と果報を以下に説くことを告げる (448b6-10)

SGKに相当する偈なし。

(g 1) 人界で短命と病氣を得る因となる業を説明 (448b10-16)

- 448b10-14 天人阿修羅 ～ 慧者應當知 (4句) (≡ SGK 61)
- ☆ 448b14-16 於諸群生類 ～ 所生常無病 (4句) (≡ SGK 62)

(g 2) 貧富の状態をもたらす盗みと施の業因の四句分別 (448b16-24)

- ☆ 448b16-18 未曾修布施 ～ 多求而少獲 (4句) (≡ SGK 63)
- ☆ 448b18-20 能廣行布施 ～ 隨得尋復失 (4句) (≡ SGK 64)
- ☆ 448b20-22 常不盜他物 ～ 所得恒不失 (4句) (≡ SGK 65)
- ☆ 448b22-24 常不盜他物 ～ 得財常不失 (4句) (≡ SGK 66)

(g 3) 齋戒および親・祖先への供養によりどんな果を得るかを説明 (448b24-c1)

SGKに相当する偈なし。

(g 4) 具体的にどんな物を布施すると人界でどんな果を得るかを説明 (448c1-22)

- ☆ 448c1-3 若以飲食施 ～ 無病心安樂 (4句) (≡ SGK 67 (cf. 75))
- ☆ 448c3-6 施衣得慚愧 ～ 心適恒喜歡 (6句) (≡ SGK 68)
- ☆ 448c7-8 施屋得舍宅 ～ 衆具隨所欲 (4句) (≡ SGK 69)
- ☆ 448c9-10 若施井浴池 ～ 所欲常隨意 (4句) (≡ SGK 71)
- ☆ 448c11-12 橋船濟未渡 ～ 是則人中天 (4句) (≡ SGK 70)
- ☆ 448c13-15 若以園林施 ～ 眷屬悉具足 (6句) (≡ SGK 72)
- 448c16-19 若人施醫藥 ～ 永拔生死根 (8句) (≡ SGK 73)

(g 5) 施の業報に関する特殊なルール、業の様々な働き方を説明 (448c23-449a25)

- ☆ 448c23-25 若爲生天上 ～ 所受多饒澁 (6句) (≒ SGK 78)
- 449a20-21 隨所應惠施 ～ 以道而受用 (4句) (≒ SGK 80)

(g 6) 戒論として種々の善行 (ほぼ十善業道と重なる善行) の業果を説明 (449a26-b25)

- ☆ 449a26-29 若人修淨行 ～ 具足丈夫法 (8句) (≒ SGK 83)
- ☆ 449b1-3 清淨修梵行 ～ 諸天咸供養 (6句) (≒ SGK 86)
- ☆ 449b4-7 若人於此世 ～ 不染惡名稱 (8句) (≒ SGK 87)
- ☆ 449b8-9 若人不兩舌 ～ 眷屬常不壞 (4句) (≒ SGK 88)
- 449b19-21 若人於今世 ～ 慧光踰日月 (6句) (≒ SGK 89)

(g 7) 白黒混じった業では果が時間的にどう現れて来るのかを説明 (449b26-c4)
SGKに相当する偈なし。

(g 8) 更に種々の悪行と善行はどんな業果を得るかを細かく説明 (449c5-450a15)

- ☆ 449c9-10 若能伏憍慢 ～ 常生卑賤中 (4句) (≒ SGK 90)
- ☆ 449c11 諂諛致身曲 訛言形矬陋 (2句) (≒ SGK 91)
- 449c12-14 見聖心不喜 ～ 目盲無所見 (4句) (≒ SGK 92)
- ☆ 449c22-24 若人於今世 ～ 多欲不聰慧 (6句) (≒ SGK 84)
- 449c25-27 若人施燈燭 ～ 明徹無障礙 (6句) (≒ SGK 74)

(h) 阿修羅と六欲天のそれぞれに生まれるための善業を説く (450a16-b8)

- ☆ 450a16-19 若人慕名聞 ～ 後生四王家 (8句) (≒ SGK 95)
- ☆ 450a20-23 若人於今世 ～ 後作阿修羅 (8句) (≒ SGK 94)
- ☆ 450a24-26 孝順淨供養 ～ 後生忉利天 (6句) (≒ SGK 96)
- ☆ 450a27-28 若人自不鬪 ～ 得作夜摩天 (4句) (≒ SGK 97)
- ☆ 450a29-b2 於身善觀察 ～ 後生兜率天 (6句) (≒ SGK 98)
- ☆ 450b3-5 修習勝布施 ～ 後生化樂天 (6句) (≒ SGK 99)
- ☆ 450b6-8 修行勝布施 ～ 後生他化天 (6句) (≒ SGK 100)

(i) 六欲天より上の天界に生まれるための善業を説く (450b9-26)

SGKに相当する偈なし。

(j) 結びの語として、煩惱によって生死が起こるのでそれを捨てよと勧める (450b27-c5)

SGKに相当する偈なし。

(SGKは独自の終結の語をもつ。SGK 101-105)

Appendix 3

SGK・分別業報略経・分別善惡所起経 対照表

(Comparative Table of SGK, the *Fēn bié yè bào lüè jīng*

and the *Fó shuō fēn bié shàn è suǒ qǐ jīng*)

【以下の表の見方】

表中の略号として、業報は、『分別業報略経』（大正蔵17巻での頁・段・行を示す）。

善惡所は、『分別善惡所起経』（大正蔵17巻での頁・段・行を示す）。

≡ は、「対応する」を意味する。例えば、≡ 善惡は、前の行にある業報の訳文に対応する善惡の訳文であることを意味する。

(SGK 1) とあるのは、SGKの1偈に対応することを意味する。

— は、「対応が無い」(deest)を意味する。例えば、(SGK —) は、SGKの中に相当偈が見当たらないことを意味する。また、≡ 善惡所：— は、その前の行にある業報の訳文に相当する善惡所の訳文が無いことを意味する。

☆は、「漢訳が SGK とよく合致、酷似する」を意味する。例えば、☆ (SGK 7) は、SGKの7偈が業報等の相当文と酷似することを意味する。

(a) 帰敬頌の後、作品の目的（仏の教えに従って、業報分別を要約して説くこと）と仏教の業報輪廻説の基本的な立場（創造神・無因・本性・時などを輪廻界の因として認めない立場）を説く（業報 446b26-446c18、善惡所 520a1-26）

(SGK 1) 業報：446b26-27 最勝無上尊 ～ 及法應眞僧（4句）

≡ 善惡所：520a1-2 佛尊覺第一 ～ 恩德若江海（4句）⁽⁵⁹⁾

(SGK —) 業報：446b28-29 我今撰安住 ～ 由淨不淨業（4句）

≡ 善惡所：520a3-4 是以吾演説 ～ 所行有善惡（4句）

(SGK —) 業報：446c1-2 普爲諸世間 ～ 分別業果報（4句）

59 善惡所 519c7-29の韻文箇所は、帰敬偈（520a1-2）が始まる前に置かれている韻文であり、それらは SGK と業報に相当文が見当たらない。形式的に、元の梵文で作品の帰敬偈の前にそれらの韻文が置かれるとは考えにくいので、それらの韻文は中国で補われ、付加されたものか。善惡所の前半の散文部分が接合される時に、帰敬偈から始まる後半部分との接合の違和感を緩和するためにそれらが置かれた可能性がある。

- ≡ 善惡所：520a5-6 廣採以撰立 ～ 所作殃福事 (4句)
- (SGK —) 業報：446c3-4 佛以法自覺 ～ 演暢眞諦義 (4句)
- ≡ 善惡所：520a7-8 佛已自覺法 ～ 至要難見聞 (4句)
- (SGK —) 業報：446c5-6 謂苦及苦因 ～ 盡苦清淨道 (4句)
- ≡ 善惡所：520a9-10 苦從苦因緣 ～ 苦滅是爲淨 (4句)
- (SGK 3) 業報：446c7-8 無上人中尊 ～ 煩惱及諸業 (4句)
- ≡ 善惡所：520a11-12 從行有苦果 ～ 勞行從是有 (4句)
- (SGK 4) 業報：446c9-12 種種相煩惱 ～ 慧者當受持 (8句)
- ≡ 善惡所：520a13-16 衆勞除愈者 ～ 智者所宜取 (8句)
- (SGK 2) 業報：446c13-16 非自在所作 ～ 當知彼非因 (8句)
- ≡ 善惡所：520a17-18 亦非神所化 ～ 其實非無行 (8句)
- (SGK —) 業報：446c17-18 無知生煩惱 ～ 今當說差別 (4句)
- ≡ 善惡所：520a21-22 從癡致有勞 ～ 聽此非一輩 (4句)
- (SGK —) 業報：—
- ≡ 善惡所：520a23-26 鈔綴經妙旨 ～ 當可不識此 (2偈 4句)

(b)『天使經』を踏まえた文により地獄の説明への導入を行う (業報 446c19-28、善惡所 520a27-b15)

- (SGK —) 業報：446c19-20 造諸不善業 ～ 閻王慈哀說 (4句)
- ≡ 善惡所：520a27-28 已作不義行 ～ 王哀便繫束 (4句)
- (SGK —) 業報：446c21-22 生老病死苦 ～ 何不生勝覺 (4句)
- ≡ 善惡所：520a29-b1 嬰兒老病死 ～ 何爲不修德 (4句)
- (SGK —) 業報：446c23-24 惠施清淨戒 ～ 而不發上願 (4句)
- ≡ 善惡所：520b2-3 身口意所行 ～ 而能不爲善 (4句)
- (SGK —) 業報：—
- ≡ 善惡所：520b4-5 是時有罪人 ～ 入怖而對曰 (4句)
- (SGK —) 業報：446c25-26 不幸遇惡友 ～ 何由起淨業 (4句)
- ≡ 善惡所：520b6-7 但以親惡友 ～ 不能修德善 (4句)
- (SGK —) 業報：446c27-28 汝曾不修善 ～ 今來入地獄 (4句)
- ≡ 善惡所：520b8-9 王曰人難得 ～ 冤造泥犁行 (4句)
- (SGK —) 業報：—
- ≡ 善惡所：520b10-15 汝本興斯惡 ～ 默而不與語 (3偈 4句)

(c)八大地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く (業報 446c29-447b5、善惡所 520b16-c16)

- (SGK 一) 業報：446c29-447a1 爾時諸獄卒 ～ 恐怖身毛豎 (4句)
 ≡ 善惡所：520b16-17 爾乃錄罪入 ～ 見惡甚惶懼 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a2-3 等活若黑繩 ～ 燒熱及大熱 (4句)
 ≡ 善惡所：520b18-19 始入黑繩獄 ～ 熾火燒其形 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a4-5 土海及糞池 ～ 灰河鐵鑊獄 (4句)
 ≡ 善惡所：520b20-21 蹈棘跂熱土 ～ 自到刀葉樹 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a6-7 造諸惡業者 ～ 苦報差別相 (4句)
 ≡ 善惡所：520b22-23 爲人犯惡故 ～ 次現所應受 (4句)
- (SGK 6) 業報：447a8-9 等活死復生 ～ 互相傷害故 (4句)
 ≡ 善惡所：520b24-25 至于千億歲 ～ 賊害賢人雄 (4句)
- ☆ (SGK 7) 業報：447a10-11 陷人以非道 ～ 死墮黑繩獄 (4句)
 ≡ 善惡所：520b26-27 生妄挈無過 ～ 死入黑繩獄 (4句)
- (SGK 13) 業報：447a12-13 屠捕及餘殺 ～ 身碎血髓流 (4句)
 ≡ 善惡所：520c1-2 爲人好殺生 ～ 亦更山機迕 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a14-15 爲政無慈惻 ～ 種種加楚毒 (4句)
 ≡ 善惡所：—
- (SGK 一) 業報：447a16-17 亦入衆合獄 ～ 鐵石所磨擣 (4句)
 ≡ 善惡所：520b28-29 有持多詐便 ～ 擣之以鐵杵 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a18-19 隨貪恚癡怖 ～ 鐵輪斷其身 (4句)
 ≡ 善惡所：520c3-4 癡貪懷怯弱 ～ 鐵輪轢其軀 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a20-21 自恃強力勢 ～ 黑象競來踐 (4句)
 ≡ 善惡所：520c5-6 恃量以力教 ～ 常爲象所蹋 (4句)
- (SGK 15) 業報：447a22-23 逼迫多人衆 ～ 舉身常洞燃 (4句)
 ≡ 善惡所：520c11-12 迫脅從受取 ～ 喚呼獨痛呻 (4句)
- (SGK 17) 業報：447a24-25 斗秤欺誑人 ～ 入大叫呼獄 (4句)
 ≡ 善惡所：520c13-14 侵人以益己 ～ 大呼無誰救 (4句)
- (SGK 一) 業報：447a26-27 呼哉大呼獄 ～ 寄付不還故
 ≡ 善惡所：—
- (SGK 19) 業報：447a28-b1 非法言是法 ～ 死入無擇獄 (6句)
 ≡ 善惡所：520c15-16 非法言是法 ～ 後生阿鼻獄 (4句)
- (SGK 9) 業報：447b2-3 父母賢善人 ～ 死入熱地獄 (4句)
 ≡ 善惡所：520c7-8 今生惱父母 ～ 後身被熱炙 (4句)
- (SGK 11) 業報：447b4-5 父母賢善人 ～ 死入大熱獄 (4句)
 ≡ 善惡所：520c9-10 或邁擊父母 ～ 後世更煮治 (4句)

(d) 増地獄のそれぞれに生まれる因となった前世の業を説く (業報 447b6-27、善惡所 520c17-521a9)

- ☆ (SGK 33) 業報：447b6-7 出家修淨行 ～ 死入熱土獄 (4句)
≡ 善惡所：520c17-18 學居廟堂淨 ～ 從是入深獄 (4句)
- ☆ (SGK 34) 業報：447b8-9 越禁捨正命 ～ 毒虫貫骨髓 (4句)
≡ 善惡所：520c19-20 棄捐正善業 ～ 啖溷蟲爲食 (4句)
- (SGK —) 業報：447b10-11 田獵焚林澤 ～ 燒剥斷支節 (4句)
≡ 善惡所：520c21-22 放火燔草野 ～ 燒之如野火 (4句)
- ☆ (SGK 25) 業報：447b12-13 誘取諸衆生 ～ 競來食其肉 (4句)
≡ 善惡所：520c23-24 陰賊親厚者 ～ 宛轉共食之 (4句)
- ☆ (SGK 31) 業報：447b14-15 毀壞正法橋 ～ 截足斷肌骨 (4句)
≡ 善惡所：520c25-26 若有壞法橋 ～ 履刀刃之道 (4句)
- ☆ (SGK 24) 業報：447b16-17 長身百足虫 ～ 由彼邪婬故 (4句)
≡ 善惡所：520c27-28 犯人婦女者 ～ 與友便攫之 (4句)
- ☆ (SGK 23) 業報：447b18-19 於他婦女身 ～ 往還貫身體 (4句)
≡ 善惡所：520c29-521a1 好樂於婬佚 ～ 身攀抱刺樹 (4句)
- ☆ (SGK 28) 業報：447b20-21 種種設方便 ～ 舉身悉糜爛 (4句)
≡ 善惡所：521a2-3 若爲諸巧便 ～ 灰河之中生 (4句)
- ☆ (SGK 26) 業報：447b22-23 吞食熱鐵丸 ～ 盜竊他財故 (4句)
≡ 善惡所：521a4-5 借貸不歸者 ～ 洋銅以飲之 (4句)
- (SGK —) 業報：447b24-25 増上十不善 ～ 餘則入餓鬼 (4句)
≡ 善惡所：521a8-9 生作不善行 ～ 一切但有苦 (4句)
- ☆ (SGK 36) 業報：447b26-27 恚憎不善行 ～ 死作閻羅卒 (4句)
≡ 善惡所：521a6-7 懷恨意忿怒 ～ 死爲閻獄鬼 (4句)

(e) 畜生の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く (業報 447b28-c21、善惡所 521a10-27)

- (SGK —) 業報：447b28-29 已說諸業行 ～ 餓鬼業果報 (4句)
≡ 善惡所：521a10-11 如是已具說 ～ 餓鬼及鬼神 (4句)
- (SGK 44) 業報：447c1-2 身三口四過 ～ 死墮畜生趣 (4句)
≡ 善惡所：521a12-13 身意各有三 ～ 死墮畜生中 (4句)
- ☆ (SGK 38) 業報：447c3-4 多欲生鵝鶩 ～ 蛆蟻飛蛾等 (4句)
≡ 善惡所：521a14-15 若多婬欲態 ～ 孔雀亦蜚蛾 (4句)
- ☆ (SGK 41) 業報：447c5-6 無智好打縛 ～ 聲鹿諸野獸 (4句)
≡ 善惡所：521a16-17 喜縛撾捶者 ～ 瞋恚死成蛇 (4句)

- ☆ (SGK 39) 業報：447c7-11 瞋恨作虵蛇 ～ 猪狗驢狐狼 (8句)
 ≡ 善惡所：521a18-19 憍傲常慢人 ～ 爲猪犬狐驢 (4句)
- ☆ (SGK 40) 業報：447c11-15 慳慳不惠施 ～ 後受烏鳥身 (8句)
 ≡ 善惡所：521a20-21 常內懷嫉妬 ～ 強面目成鳥 (4句)
- ☆ (SGK 42) 業報：447c15-17 邪貪無厭足 ～ 或作熊羆身 (4句)
 ≡ 善惡所：521a22-23 慳貪而邪誑 ～ 虎狼肉食獸 (4句)
- ☆ (SGK 43) 業報：447c17-21 修行大布施 ～ 大力金翅鳥 (8句)
 ≡ 善惡所：521a24-27 布施多瞋怒 ～ 致有大威猛 (8句)

(f) 餓鬼の様々な種類に生まれる因となった前世の業を説く (業報 447c21-448b6、善惡所 521a28-c7)

(f 1) 本来的な餓鬼類のグループ (業報 447c21-448a17、善惡所 521a28-b18)

- ☆ (SGK 45) 業報：447c21-23 劫盜賢善人 ～ 食糞及死屍 (4句)
 ≡ 善惡所：521a28-29 身自食甘美 ～ 常食臭中蟲 (4句)
- ☆ (SGK 46) 業報：447c23-25 欺怖愚尪劣 ～ 常食諸胎網 (4句)
 ≡ 善惡所：521b1-2 好調嬈老小 ～ 食產乳惡露 (4句)
- ☆ (SGK 47) 業報：447c25-27 顰蹙鄙陋行 ～ 形體甚黑瘦 (4句)
 ≡ 善惡所：521b3-4 雖與心慳悔 ～ 從下掣得食 (4句)
- ☆ (SGK 50) 業報：447c27-29 慳貪不布施 ～ 唯饑膿涕唾 (4句)
 ≡ 善惡所：521b5-6 謂施爲無福 ～ 主食人所吐 (4句)
- (SGK —) 業報：447c29-448a3 自不修福慧 ～ 恒食諸不淨 (6句)
 ≡ 善惡所：521b7-8 不與追謗施 ～ 恒食人歔唾 (4句)
- (SGK —) 業報：448a3-5 常希他人物 ～ 死墮瞋餓鬼 (4句)
 ≡ 善惡所：521b9-10 自有既不與 ～ 所欲不能得 (4句)
- (SGK —) 業報：448a5-7 好發他陰私 ～ 常食人精氣 (4句)
 ≡ 善惡所：521b11-12 喜陰識彼短 ～ 主食死人肝 (4句)
- ☆ (SGK 51) 業報：448a7-9 麁言觸惱人 ～ 生焰口餓鬼 (4句)
 ≡ 善惡所：521b13-14 麁言以惱彼 ～ 常吞食火烟 (4句)
- ☆ (SGK 52) 業報：448a9-12 熾然他鬪訟 ～ 舉身皆火然 (6句)
 ≡ 善惡所：521b15-16 勸訟好會鬪 ～ 食於蜚蛾蟲 (4句)
- ☆ (SGK 48) 業報：448a12-14 抑止他人施 ～ 腹大咽如針 (4句)
 ≡ 善惡所：521b17-18 禁止人布施 ～ 其口若針鼻 (4句)
- ☆ (SGK 49) 業報：448a14-17 不施不自食 ～ 因是得信食 (6句)
 ≡ 善惡所：521b19-20 擁財以遺子 ～ 子祭乃得食 (4句)

(f 2) 妖怪的な存在のグループ (業報 448a17-b6、善惡所 521b21-c7)

- ☆ (SGK 53) 業報：448a17-19 若爲聚落主 ～ 飲食常隨意 (4句)
≡ 善惡所：521b21-22 生爲隘陬長 ～ 所欲終不得 (4句)
(SGK —) 業報：—
≡ 善惡所：521b23-24 語言常欺調 ～ 終生鬼神中 (4句)
- ☆ (SGK 54) 業報：448a19-21 若多殺衆生 ～ 常得衆美食 (4句)
≡ 善惡所：521b25-26 殺蟲以爲餌 ～ 後世爲魅魍 (4句)
- ☆ (SGK 55) 業報：448a21-24 微恚少憂感 ～ 爲天執樂神 (6句)
≡ 善惡所：521c6-7 好欲而懈怠 ～ 遊戲自恣心 (4句)
- ☆ (SGK 56) 業報：448a24-27 爲利而行施 ～ 利爪長牙齒 (6句)
≡ 善惡所：521b27-28 布施望其後 ～ 顏貌極醜惡 (4句)
- ☆ (SGK 57) 業報：448a27-29 逼他取財物 ～ 生爲負多鬼 (4句)
≡ 善惡所：—
- ☆ (SGK 58) 業報：448a29-b2 多瞋性難滿 ～ 後生作地神 (4句)
≡ 善惡所：521b29-c1 既以恚且貪 ～ 死爲守地神 (4句)
- ☆ (SGK 59) 業報：448b2-4 興乘獻父母 ～ 生作遊空神 (4句)
≡ 善惡所：521c2-3 於家内外親 ～ 乘雲風而行 (4句)
(SGK —) 業報：448b4-6 宅舍乘飲食 ～ 常與宮殿俱 (4句)
≡ 善惡所：521c4-5 布施屋室乘 ～ 廬舍隨其飛 (4句)

(g) 人間に生まれて幸・不幸の様々な状態になった前世の業を説く (業報 448b6-450a15、善惡所 521c8-523a13)

(g 0) 善趣 (天・人) の業因と果報を以下に説くことを告げる (業報 448b6-10、善惡所 521c8-11)

- (SGK —) 業報：448b6-8 我已略分別 ～ 善道人天果 (4句)
≡ 善惡所：521c8-9 於是畜生行 ～ 又復聽善因 (4句)
- (SGK —) 業報：448b8-10 修種種淨行 ～ 今當如實説 (4句)
≡ 善惡所：521c10-11 至於爲所行 ～ 今爲如事説 (4句)

(g 1) 人界で短命と病氣を得る因となる業を説明 (業報 448b10-16、善惡所 521c12-15)

- (SGK 61) 業報：448b10-12 天人阿修羅 ～ 慧者應當知 (4句)
≡ 善惡所：521c12-13 天人阿須羅 ～ 無害一切生 (4句)
- (SGK —) 業報：448b12-14 慈愍不害生 ～ 所生離諸難 (4句)
≡ 善惡所：521c16-17 不殺好恩徳 ～ 爲人常仁賢 (4句)

- ☆ (SGK 62) 業報：448b14-16 於諸群生類 ～ 所生常無病 (4句)
≡ 善惡所：521c14-15 若以不施勞 ～ 爲人則無病 (4句)

(g 2) 貧富の状態をもたらす盗みと施の業因の四句分別 (業報 448b16-24、善惡所 521c18-25)

- ☆ (SGK 63) 業報：448b16-18 未曾修布施 ～ 多求而少獲 (4句)
≡ 善惡所：521c18-19 未嘗有少施 ～ 求少得或不 (4句)
- ☆ (SGK 64) 業報：448b18-20 能廣行布施 ～ 隨得尋復失 (4句)
≡ 善惡所：521c20-21 好取他人財 ～ 猶速亡失之 (4句)
- ☆ (SGK 65) 業報：448b20-22 常不盜他物 ～ 所得恒不失 (4句)
≡ 善惡所：521c22-23 不妄取非物 ～ 後傳世得財 (4句)
- ☆ (SGK 66) 業報：448b22-24 常不盜他物 ～ 得財常不失 (4句)
≡ 善惡所：521c24-25 既不取彼物 ～ 得利甚弘廣 (4句)

(g 3) 齋戒および親・祖先への供養によりどんな果を得るかを説明 (業報 448b24-c1、善惡所 521c26-29)

- (SGK —) 業報：448b24-28 決定修齋戒 ～ 質直修正行 (8句)
≡ 善惡所：521c26-27 自好持戒齋 ～ 足賢意端正 (4句)
- (SGK —) 業報：448b28-448c1 欲報所生恩 ～ 常得父餘財 (4句)
≡ 善惡所：521c28-29 子善供養父 ～ 後所之得食 (4句)

(g 4) 具体的にどんな物を布施すると人界でどんな果を得るかを説明 (業報 448c1-22、善惡所 522a1-14)

- ☆ (SGK 67) 業報：448c1-3 若以飲食施 ～ 無病心安樂 (4句)
≡ 善惡所：522a1-2 好施飯食者 ～ 無病常安隱 (4句)
- ☆ (SGK 68) 業報：448c3-6 施衣得慚愧 ～ 心適恒喜歡 (6句)
≡ 善惡所：522a3-4 好施衣被者 ～ 快樂得所欲 (4句)
- ☆ (SGK 69) 業報：448c7-8 施屋得舍宅 ～ 衆具隨所欲 (4句)
≡ 善惡所：522a5-6 施與屋舍者 ～ 事事嚴具足 (4句)
- ☆ (SGK 71) 業報：448c9-10 若施井浴池 ～ 所欲常隨意 (4句)
≡ 善惡所：522a7-8 施井設義漿 ～ 所欲一切富 (4句)
- ☆ (SGK 70) 業報：448c11-12 橋船濟未渡 ～ 是則人中天 (4句)
≡ 善惡所：522a9-10 今世好布施 ～ 後世得天乘 (4句)
- ☆ (SGK 72) 業報：448c13-15 若以園林施 ～ 眷屬悉具足 (6句)
≡ 善惡所：522a11-12 無怒人愛見 ～ 其施園樹者 (4句)
- (SGK 73) 業報：448c16-19 若人施醫藥 ～ 永拔生死根 (8句)

≡ 善惡所：—

(SGK —) 業報：448c20-22 造厠除衆穢 ～ 究竟獲大安 (6句)

≡ 善惡所：—

(SGK 76) 業報：—

≡ 善惡所：522a13-14 好以奴婢施 ～ 侍使無所乏 (4句)

(g 5) 施の業報に関する特殊なルール、業の様々な働き方を説明 (業報 448c23-449a25、善惡所 522a15-b15)

☆ (SGK 78) 業報：448c23-25 若爲生天上 ～ 所受多麁澁 (6句)

≡ 善惡所：—

(SGK —) 業報：448c26-27 祖先建立施 ～ 無量餘財寶 (4句)

≡ 善惡所：522a15-16 先祖大布施 ～ 輒得父餘財 (4句)

(SGK —) 業報：448c28-29 常歎施功德 ～ 所生恒貧匱 (3句)

≡ 善惡所：522a17-18 好稱布施德 ～ 生於貧狹家 (4句)

(SGK —) 業報：448c29-449a2 欲施無財物 ～ 所生得大富 (4句)

≡ 善惡所：522a19-20 謗施謂無益 ～ 猶生富財家 (4句)

(SGK —) 業報：449a2-4 不樂修福業 ～ 貧窶無財產 (4句)

≡ 善惡所：522a21-22 心常樂智慧 ～ 生於貧窶家 (4句)

(SGK —) 業報：449a5-6 唯樂行布施 ～ 愚闇無知見 (4句)

≡ 善惡所：522a23-24 常好喜布施 ～ 生於大富家 (4句)

(SGK —) 業報：449a7-8 施慧二俱修 ～ 長夜處貧闇 (4句)

≡ 善惡所：522a25-26 設兼行施智 ～ 亦兩無所得 (4句)

(SGK —) 業報：—

≡ 善惡所：522a27-28 施與望姓譽 ～ 斯爲食惱苦 (4句)

(SGK —) 業報：449a9-10 布施無正信 ～ 其心常樂著 (4句)

≡ 善惡所：522a29-b1 布施雖無信 ～ 後意頗有喜 (4句)

(SGK —) 業報：449a11-12 深信行施惠 ～ 其心常愛樂 (4句)

≡ 善惡所：522b2-3 布施如有信 ～ 其意甚歡悅 (4句)

(SGK —) 業報：449a13-14 善知良福田 ～ 俱受安樂報 (4句)

≡ 善惡所：522b4-5 如侍敬有德 ～ 既得最殊勝 (4句)

(SGK —) 業報：449a15-17 心常輕布施 ～ 衆所不敬慕 (6句)

≡ 善惡所：522b6-7 常以輕易意 ～ 安時不得食 (4句)

(SGK —) 業報：449a18-19 心不輕布施 ～ 親族悉宗敬 (4句)

≡ 善惡所：522b8-9 布施欲安人 ～ 親屬靡不敬 (4句)

(SGK 80) 業報：449a20-21 隨所應惠施 ～ 以道而受用 (4句)

- ≡ 善惡所：522b10-11 施與恣所有 ～ 法德利具足（4句）
- （SGK —） 業報：449a22-23 乘理獲財物 ～ 所得皆不失（4句）
- ≡ 善惡所：522b12-13 施與有點眼 ～ 累世常保財（4句）
- （SGK —） 業報：449a24-25 時施無留難 ～ 常得應時物（4句）
- ≡ 善惡所：522b14-15 慧人行布施 ～ 食福時自恣（4句）

（g 6）戒論として種々の善行（ほぼ十善業道と重なる善行）の業果を説明 （業報 449a26-b25、善惡所 522b16-c8）

- ☆（SGK 83） 業報：449a26-29 若人修淨行 ～ 具足丈夫法（8句）
 - ≡ 善惡所：522b16-19 修身以自守 ～ 受性大清淨（8句）
- ☆（SGK 86） 業報：449b1-3 清淨修梵行 ～ 諸天咸供養（6句）
 - ≡ 善惡所：522b20-21 若修清淨行 ～ 爲天所供養（4句）
- ☆（SGK 87） 業報：449b4-7 若人於此世 ～ 不染惡名稱（8句）
 - ≡ 善惡所：522b22-25 去離於醉酒 ～ 莫得說其短（8句）
- ☆（SGK 88） 業報：449b8-9 若人不兩舌 ～ 眷屬常不壞（4句）
 - ≡ 善惡所：522b26-27 友諍輒和解 ～ 身常爲人雄（4句）
- （SGK —） 業報：449b10-11 若人不惡口 ～ 宣揚勝妙法（4句）
 - ≡ 善惡所：522b28-29 恒以柔軟言 ～ 聞者莫不愛（4句）
- （SGK —） 業報：449b12-14 若人於此世 ～ 聞者樂信行（4句）
 - ≡ 善惡所：522c1-2 集會坐論議 ～ 語時人樂聽（4句）
- （SGK —） 業報：449b15 若不貪他物 ～ 常得天勝財（4句）
 - ≡ 善惡所：522c3-4 一切彼所有 ～ 終無忘遺憂（4句）
- （SGK —） 業報：449b17-18 若不起瞋恚 ～ 後生昇梵天（4句）
 - ≡ 善惡所：—
- （SGK 89） 業報：449b19-21 若人於今世 ～ 慧光踰日月（6句）
 - ≡ 善惡所：—
- （SGK —） 業報：449b22-23 如上所宣說 ～ 世間種種報（4句）
 - ≡ 善惡所：522c5-6 已知事事思 ～ 食福果甚多（4句）
- （SGK —） 業報：449b24-25 若欲求大利 ～ 當勤修德本（4句）
 - ≡ 善惡所：522c7-8 常欲利成就 ～ 心必思修德（4句）

（g 7）白黒混じった業では果が時間的にどう現れて来るのかを説明 （業報 449b26-c4、善惡所 522c9-c14）

- （SGK —） 業報：449b26-27 作淨不淨業 ～ 雜受黑白報（4句）
 - ≡ 善惡所：522c9-10 好惡信在行 ～ 在白不白中（4句）

- (SGK —) 業報：449b28-29 童子及盛壯 ～ 迭受苦樂報 (4句)
 ≡ 善惡所：522c11-12 少壯或長老 ～ 苦樂各應本 (4句)
- (SGK —) 業報：449c1-2 諸業作已增 ～ 久乃獲果報 (4句)
 ≡ 善惡所：—
- (SGK —) 業報：449c3-4 若人施不恒 ～ 富樂無窮已 (4句)
 ≡ 善惡所：522c13-14 暫行若長行 ～ 長作12乃長得 (4句)

(g 8) 更に種々の悪行と善行はどんな業果を得るかを細かく説明 (業報 449c5-450a15、善惡所 522c15-523a13)

- (SGK —) 業報：449c5-6 若人多瞋恚 ～ 受身常端正 (4句)
 ≡ 善惡所：522c21-22 布施後則富 ～ 不怒後好色 (4句)
- (SGK —) 業報：449c7-8 若人不修慧 ～ 明哲遇賢聖 (4句)
 ≡ 善惡所：—
- ☆ (SGK 90) 業報：449c9-10 若能伏憍慢 ～ 常生卑賤中 (4句)
 ≡ 善惡所：522c19-20 不親老則愚 ～ 憍慢則卑賤 (4句)
- ☆ (SGK 91) 業報：449c11 諂諛致身曲 訛言形姪陋 (2句)
 ≡ 善惡所：522c17-18 詐爲欺慢者 ～ 族姓莫欲見 (4句)
- (SGK 92) 業報：449c12-16 見聖心不喜 ～ 所生當聾聵 (8句)
 ≡ 善惡所：522c15-16 師友忠恕言 ～ 後生常聾聵 (4句)
- (SGK —) 業報：449c16-19 洗浴諸有德 ～ 汚所不應汚 (7句)
 ≡ 善惡所：522c29-523a1 喜以好衣服 ～ 光潤色若金 (4句)
- (SGK —) 業報：449c20-21 邪行犯非處 ～ 由斯受閹身 (3句)
 ≡ 善惡所：522c23-24 好姦不男女 ～ 後生爲黃門 (4句)
- ☆ (SGK 84) 業報：449c22-24 若人於今世 ～ 多欲不聰慧 (6句)
 ≡ 善惡所：522c25-26 思姪若熾火 ～ 後生爲黃門 (4句)
- (SGK —) 業報：449c25-27 若人施燈燭 ～ 明徹無障礙 (6句)
 ≡ 善惡所：522c27-28 說布施善道 ～ 後生有三眼 (4句)
- (SGK —) 業報：449c27-29 子愛視衆生 ～ 慈母乳嬰兒 (5句)
 ≡ 善惡所：523a2-3 視人如赤子 ～ 皦若星中月 (4句)
- (SGK —) 業報：450a1-4 奉齋修淨行 ～ 猶如天帝釋 (7句)
 ≡ 善惡所：523a4-5 不干奉齋戒 ～ 犯者有干謗 (4句)
- (SGK —) 業報：450a4-6 愛敬禮父母 ～ 身體極柔軟 (4句)
 ≡ 善惡所：523a6-7 禮敬汎愛衆 ～ 得敬如大山 (4句)
- (SGK —) 業報：450a6-8 若人於今世 ～ 猶如雪山王 (4句)
 ≡ 善惡所：—

- (SGK 一) 業報：450a8-12 若人於今世 ～ 如海珍寶渚 (8句)
 ≡ 善惡所：523a8-9 不問訊使伶 ～ 有財聚若海 (4句)
- (SGK 一) 業報：—
 ≡ 善惡所：523a10-11 有德蒙上天 ～ 生爲帝王種 (4句)
- (SGK 一) 業報：450a12-15 身口意清淨 ～ 後生鬻單越 (6句)
 ≡ 善惡所：523a12-13 身口恒習善 ～ 受樂生北方 (4句)

(h) 阿修羅と六欲天のそれぞれに生まれるための善業を説く (業報 450a16-b8、善惡所 523a14-27)

- ☆ (SGK 95) 業報：450a16-19 若人慕名聞 ～ 後生四王家 (8句)
 ≡ 善惡所：523a16-17 如有見善道 ～ 曜若日之光 (4句)
- ☆ (SGK 94) 業報：450a20-23 若人於今世 ～ 後作阿修羅 (8句)
 ≡ 善惡所：523a14-15 陰以善報讎 ～ 後爲阿修羅 (4句)
- ☆ (SGK 96) 業報：450a24-26 孝順淨供養 ～ 後生忉利天 (6句)
 ≡ 善惡所：523a18-19 善孝事父母 ～ 食福忉利天 (4句)
- ☆ (SGK 97) 業報：450a27-28 若人自不鬪 ～ 得作夜摩天 (4句)
 ≡ 善惡所：523a20-21 無所與言諍 ～ 後生豔天上 (4句)
- ☆ (SGK 98) 業報：450a29-b2 於身善觀察 ～ 後生兜率天 (6句)
 ≡ 善惡所：523a22-23 多聞安思惟 ～ 後生兜術天 (4句)
- ☆ (SGK 99) 業報：450b3-5 修習勝布施 ～ 後生化樂天 (6句)
 ≡ 善惡所：523a24-25 守戒常禪思 ～ 生不驕樂天 (4句)
- ☆ (SGK 100) 業報：450b6-8 修行勝布施 ～ 後生他化天 (6句)
 ≡ 善惡所：523a26-27 自守好最施 ～ 生彼尼密天 (4句)

(i) 六欲天より上の天界に生まれるための善業を説く (業報 450b9-26、善惡所 523a28-b18)

- (SGK 一) 業報：450b9-10 捨離熾然欲 ～ 轉身生梵宮 (4句)
 ≡ 善惡所：523a28-29 鞭杖繩之惱 ～ 食福於梵天 (4句)
- (SGK 一) 業報：450b11-12 又離覺觀心 ～ 上生光音天 (4句)
 ≡ 善惡所：523b3-4 念行常如齋 ～ 生阿波蘇天 (4句)
- (SGK 一) 業報：450b13-14 離定生喜樂 ～ 生彼遍淨天 (4句)
 ≡ 善惡所：523b5-6 定心棄愛女 ～ 得生遍淨天 (4句)
- (SGK 一) 業報：450b15-16 悉已度苦樂 ～ 得生廣果天 (4句)
 ≡ 善惡所：523b7-8 苦樂計非常 ～ 生墮苛頗天 (4句)
- (SGK 一) 業報：450b17-18 覺知離想過 ～ 生彼無想天 (4句)
 ≡ 善惡所：523b9-10 曉了不淨想 ～ 生無有想天 (4句)

- (SGK —) 業報：450b19-20 世俗及無漏 ～ 生五淨居天 (4句)
 ≡ 善惡所：523b11-12 無倚有微倚 ～ 生五淨天中 (4句)
- (SGK —) 業報：450b21-22 修習軟中品 ～ 次生三淨天 (4句)
 ≡ 善惡所：—
- (SGK —) 業報：450b23 如是次第上 乃至色究竟 (2句)
 ≡ 善惡所：523b13-14 柔軟意殊勝 ～ 生阿迦膩天 (4句)
- (SGK —) 業報：450b24 依色無常想 超修無量空 (2句)
 ≡ 善惡所：523b15-16 解色猗無常 ～ 思惟得出生 (4句)
- (SGK —) 業報：450b25-26 次觀無量識 ～ 乃至非非想 (4句)
 ≡ 善惡所：523b17-18 已離諸情識 ～ 欲無想而想 (4句)

(j) 結びの語として、煩惱によって生死が起こるのでそれを捨てよと勧める (業報 450b27-c5、善惡所 523b19-26)

- (SGK —) 業報：450b27-29 我已說生死 ～ 離苦疾受樂 (6句)
 ≡ 善惡所：523b19-20 雖決猶復生 ～ 知善行可作 (4句)
- (SGK —) 業報：450c1-3 已說諸生死 ～ 唯從煩惱起 (6句)
 ≡ 善惡所：523b21-22 是法有特異 ～ 所受從自作 (4句)
- (SGK —) 業報：450c4-5 觀彼有無常 ～ 永到安隱處 (4句)
 ≡ 善惡所：523b23-26 生非常可觀 ～ 是樂最第一 (8句)

※本研究は科研費（17K02217）の助成を受けたものである。

<キーワード> 六道頌、馬鳴、法善現、六趣輪迴經、佛說六道伽陀經、分別業報略經、佛說分別善惡所起經、大智度論、提謂經、Śaḍgatikārikāḥ, Pañcagatidīpanī, Chagatidīpanī, Ratnāvadānatattva, SMRAM, Pāñcālarājāvadāna, Aśvaghōṣa, Dhārmikasubhūtiḥ, Dharmasubhūti

(九州大学大学院教授, Ph.D.)